浄土の本

極楽の彼岸へ誘う阿弥陀如来の秘力

目次

「もし我れ仏と成らんに、十方の衆生、我が名号を称ふること、下十声に至るまで、もし生ぜずば正覚を取らじ」

——阿弥陀如来（第十八誓願）

【カラー・ピクトリアル】

極楽浄土への道

苦悩に満ちた現世から人々を救う、本当の教えとはいかなるものか。
時代の無常さと、己の心の底にある闇を、切実なるまなざしで見つめ続けた宗教者たちは、
やがて、西方の極楽浄土に坐す、阿弥陀仏の本願に出会う――。
われわれ日本人は、浄土教の教えの何に魂を揺さぶられ、救いを見出したのだろうか。

闇を照らし往生へ導く 南無阿弥陀仏の救済

写真＝見返り阿弥陀像。（禅林寺蔵）

農民と交わり念仏を広めた親鸞の、御田植の旧跡。（茨城県水戸市）

必要なことはただひとつ。それは「人間を救うこと」であった。
悟りや知恵を得ることではなく、ましてや国を護るといった目的とは無縁だった。
法然は、その明晰な頭脳で思索を重ね、膨大な経典の中から一条の光を見出そうとした。
親鸞は、煩悩にまみれた己の魂を見つめ続け、苦悩を癒す真の光明を追い求めた。
一遍は、人と仏の垣根を取り払い、人々を始源の法悦へと誘う、念仏の体現者たろうとした。
彼らが究めようとした真理は、時代の波に打ち捨てられた民衆の情念と響き合った。
彼らの苦悩は民衆の苦悩であり、彼らの救いは民衆の救いとなった。
こうして、阿弥陀仏の本願に全面的に帰依し、その御名を称えるという、
これ以上ないほど凝縮された「民の宗教」が日本で生まれ、多くの民衆を導いたのである。

親鸞が隠棲した常陸国のゆかりの地、茨城県那珂郡美和村・照願寺の境内にある親鸞聖人見返りの桜像。（撮影＝富山靖生）

真実の救済とは何か

己を打ち捨て称える念仏

行為によって何かを獲得する——自力の発想。
何かを捨てて行為が残る——他力の発想。
法然は「知」を捨て、親鸞は「僧」であることを捨て、
一遍は「家」を捨て路上の聖となった。
そして、残ったものは「南無阿弥陀仏」。

一念に専心して称える。「A」と「M」の音の
連続は、宗教的な鎮静をもたらすという。
いつの間にか目的と行為が一体化し、
念仏のために念仏を称えるようになる。
念仏を称える自分自身すら、
消滅してしまったかのようにも思える——。

法然は
知をもって到達しようとする
自力のはからいを完全否定し、
「ただ申すなり」とだけ言った。
他力念仏の始まりである。

自力門の禅宗は、厳しい修行の後、
己の執着を断とうと試みる。
しかし、他力門は、
くり返しの念仏によって
自然に己を捨てるのだ。

⬅大念珠をくり、称える百万遍念仏（知恩寺）。

写真＝大谷祖廟（東大谷）にて行われる万灯会。（撮影＝中田昭）

無尽の光明を放つ阿弥陀仏

阿弥陀仏と二十五菩薩が、飛雲に乗って切り立った山の彼方から降りてくる。まばゆいほどの光を放ち、厳かでかつ慈しみに満ちた表情をたたえた弥陀と、蓮華を差しのべ、合掌し、楽器を奏でながら迎接する菩薩たち。
――絵に描かれ、演じられる「阿弥陀の来迎」ほど、温かく慈悲深く、日本人の情緒に訴えかけるシーンは珍しい。
阿弥陀の来迎が、なぜ日本人の心をとらえて離さないのか。その問いは、弥陀と人間との関係の本質にせまる。
弥陀は、いかなる者をも無条件に救うべく修行をし、すでにその誓いを成就させて衆生を見守っている。
そして人は、母親の許に何のためらいもなく飛びこむかのように、弥陀の慈悲に対して己の一切を任せきる。
無条件かつ絶対的な救済――極楽浄土へ往くこととは、ほかならぬ生まれる以前の母胎へ、本来の故郷へ還ることなのかもしれない。

写真1 阿弥陀仏と二十五菩薩の来迎を演じる當麻寺練供養にて、合掌し迎接する観音菩薩。（撮影・[illegible]）

絶対他力の深淵

いつの時代も、世は悪徳がはびこる末世で、
現世は、汚濁にまみれた穢土である。
そして、人は、己の力の無力さを知る。
己の小ささを思い知らされる。
しかし、己が無限に小さくなることは、
己に非ざるものが無限に大きくなることでもある。
だれよりも煩悩の苦に喘いだ親鸞は、
心の闇の中に、永遠の生命の光を見出した。
闇を見つめてこそ、まばゆいほどの光を知る。
その光の正体こそ弥陀の本体なのだ――。

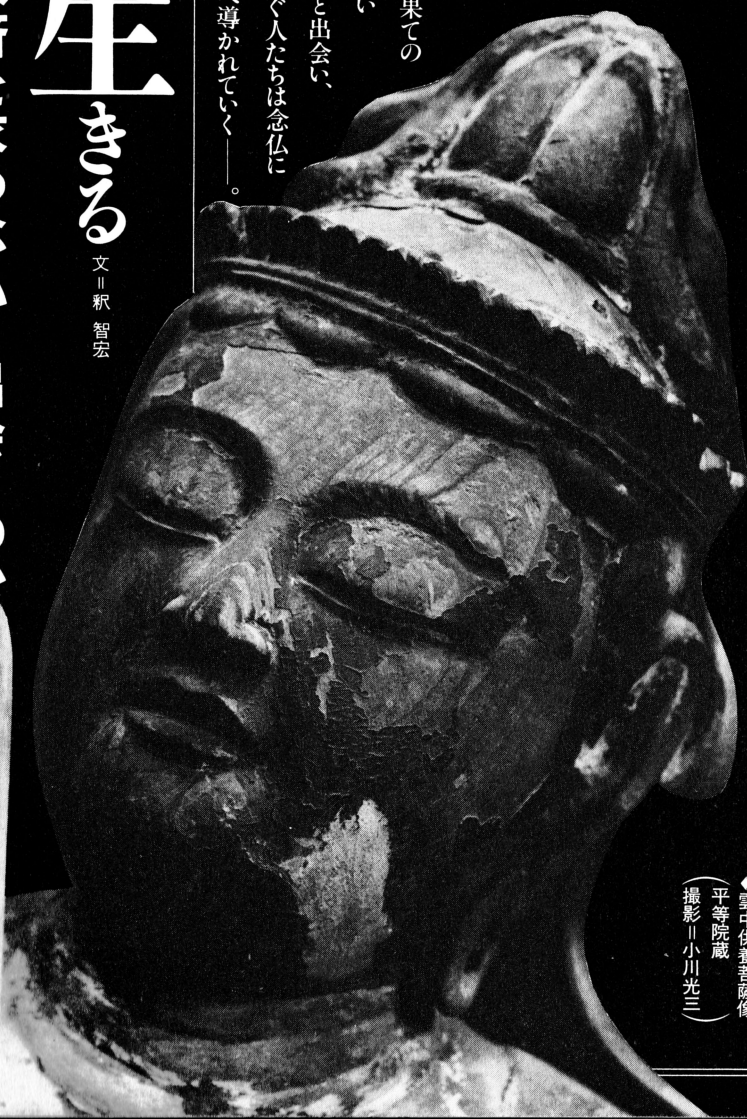
写真＝親鸞の墓所のある、元大谷安養寺裏の石仏。（撮影＝小澤正朗）

阿弥陀仏の衆生に向けた誓いが、東の果ての島国に伝えられたとき、救いようのないとされていた衆生は、初めて仏の慈悲と出会い、往生を約束された。末世の苦悩にあえぐ人たちは念仏に己の後生を託し、口で称え、魂の救済へ導かれていく——。

念仏に生きる

人はいかにして救済を求め念仏と出会うのか

文＝釈 智宏

南無阿弥陀仏…本願…往生と極楽…平等…悪人…煩悩…絶対他力…妙好人

⬅雲中供養菩薩像。（平等院蔵 撮影＝小川光三）

南無阿弥陀仏

苦渋と、悔恨と、疲弊と、——あきらめと。
人々は「苦」という大海に喘ぎつつ日々を生きている。
ほとけに呼びかけ、ほとけと語り、ほとけを見いだす。
そしてまた　あみだぶつ
奥の奥にある
雨であり　水である　あみだぶつ
わたくしは　そのように唱えるつもりが
なぜか　なむなみだぶつ　と唱えてしまって
その不思議に泣いてしまった

（『自己への旅』山尾三省著・聖文社刊）

「南無阿弥陀仏……南無阿弥陀仏……南無阿弥陀仏」
繰り返しの響きが、深い安らぎと静けさをもたらす。石清水が流れ落ちるように念仏は心に注がれていく。
「南無」は、帰依を表す。信頼する、崇拝する、尊敬するといいかえてもいい。「阿弥陀仏」の語源は、無量の光明と、無限の寿命にある。

発想の原点に、「太陽」があったことは間違いない。さらに、宇宙的な「生命の真理」へも遡れるはずだ。

つまり、「南無阿弥陀仏」を口にすると、自分は無限の光と無限の命をもたらす、「宇宙的真理」に帰依するという決意を表す。有限なる個人が無限の存在に向かって合掌し、拝み敬うことになるのである。
だが、浄土門では「宇宙的真理」を他方からの恵みとして享受するよりも、一体となることが要求される。
「称ふれば　仏もわれもなかりけり　南無阿弥陀仏の声ばかりして」
禅宗の法燈国師の問いに対して、のちの時宗の祖・一遍はそう詠んだ。が、国師は「悟りに徹していない」

↓『一遍上人絵伝』より。（京都・歓喜光寺、神奈川・清浄光寺蔵。以下同じ）

と批判する。すると直ちに、一遍はこう詠んで返した。

「称ふれば　仏もわれもなかりけり　南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏」

そこには信仰への意志すらなく自他の別もない——。

南無阿弥陀仏と称えることで、人は無限の存在と溶け合う。

⬅蓮如真筆『虎斑の名号』。（滋賀・法蔵寺蔵）

本願

「おろかなる　身こそなかなかうれしけれ　弥陀の誓いにあうと思えば」

「不可思議の　弥陀の誓いのなかりせば　何をこの世の思い出にせむ」

越後の豪商の長男に生まれるが、出家して号を大愚。純粋にして枯淡の境地を表した書、詩、和歌は、天衣無縫なまでの広がりと暖かさを見せる……。

そう、かの良寛である。本来、曹洞宗の僧であり、『法華経』などへの傾倒で知られるこの人物が、晩年には「阿弥陀仏の本願」をこうまで詠っているのである。

経典には、こう語られている。

――遙か遠い昔に、世自在王という仏が教えの手を差し伸べていたとき、一人の王が出家して、法蔵と名のった。世のなかすべての民衆を苦しみから救いたいという思いからだった。彼は、「誓願」を立てた。

最も象徴的なのは、その18番目のもの。

「あらゆる世界の人々が、私の建てる極楽という国に生まれたいと願って私の名前を称えたとき、それがかなえられなかったならば、私は仏とはならない」

法蔵は、長い修行のすえ、ついに仏となった。

名を改めて、阿弥陀仏。ここに「阿弥陀仏の本願」が完全に達成された。阿弥陀仏の名を称えたとき、極楽に生まれることは、仏の「誓願」という崇高にして無上な真理の許に実証されているのである――。

このいかにも〝インド的〟な壮大な発想と、絶妙のレトリックに共感を抱けるかどうかが、浄土思想を理解するうえでのポイントになる。たとえそれが、想像上の神話的なものであっても、人と人をつなぐ、あるいは人と宇宙を結ぶ「法と真理」を包含していることを認識したときに「信仰」が生まれるのである。

法然は「本願」に出会ったときの喜びをこう記した。

「高声に唱えて、感悦、髄に徹り、落涙千行なりき」

法蔵菩薩の誓いは、極楽行きの証。

⬆京都・知恩院阿弥陀堂本尊の阿弥陀仏像。(撮影＝小澤正朗)

往生と極楽

「人間には、死後の世界があるか？」

平成元年に行われた意識調査（読売新聞社）での、この質問に対する答えは、「ある」＝24・9％だった。

数字上は、4分の1にすぎない。だが、多くの人々は、やはり、その潜在意識の中で、往生と極楽を渇望しているのではないか。

芥川龍之介に『蜘蛛の糸』という作品がある。

極楽の蓮池のふちを歩いていたお釈迦さまが、地獄の底を覗いてみると、犍陀多という男が、他の罪人と一緒に苦しみもがいていた。

この男は多くの悪事を働いた人間だったが、たったひとつ良い行いをしたことがある。蜘蛛の命を助けたことがあったのだ。釈迦はそれに報いるために、地獄へ向けて1本の蜘蛛の糸を下ろす。

犍陀多は、喜び勇んで糸に飛びついて昇り出した。ところが、ふと気づくと、数限りない罪人が自分のあとから昇ってくるではないか。

「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちはいったい誰に尋いて、のぼってきた。下りろ下りろ」

そのとたん、今まで何ともなかった蜘蛛の糸は、急に、犍陀多のぶら下がっている所から切れてしまった。あっという間に、また、地獄へ堕ちていく犍陀多……。

⬅親鸞が常陸で最初に落ち着いた、小島草庵跡に建つ五輪塔。（撮影＝富山靖生）

死から逃れられぬがゆえに、往生と極楽は求められる。

自分だけが地獄からぬけ出そうとする無慈悲な〝あさましさ〟から罰を受けるという結末になる。

だが、その〝あさましさ〟は、だれもが抱く〝欲と願い〟の表れである。人は苦楽を彷徨い、塵埃にまみれた世を厭いつつも、どうしようもない妄執にかられている——。

だからこそ、1本の糸を求めるように救済を願う。〝極楽浄土へ往生できる〟という教えが、死にゆくすべての人間に無上の慰めと安心をもたらすのだ。

「君がある　西の方よりしみじみと　あわれむごとく夕陽さすとき」
（与謝野晶子）

平等

「臨終のとき、阿弥陀仏などがお迎えに来られても、不浄の者がいると帰ってしまうというのは本当でしょうか」

――そのようなことは、ありません。仏がお迎えにいらっしゃるほどの場合に、不浄の者がいたからといって、どうしてお帰りになるでしょうか。仏は浄不浄など問題にしません。見ようによって清く見えたり汚く見えたりするのです。ただ、念仏をするのがよいことなのです。

「疫病にかかった末に死ぬ者や、子を産んで死ぬ者は、罪があるといいますが、どうなのでしょうか」

――そのようなことは、ありません。念仏を称えれば往生することができます。

「父母よりも先に死ぬことは、罪が深いといいますが、どうなのでしょうか」

➡『一遍上人絵伝』より、衆生を済度する一遍。（京都・歓喜光寺、神奈川・清浄光寺蔵）

阿弥陀仏をたのむものは、差別なき光明を受ける。

――この末法の世では、そうしたこともありがちです。死の順序は、人間の力ではおよばないことなのです。

「髪を剃らずに、伸ばしたまま、男女が死んだ場合は、どうなのでしょうか」

――髪によるのでは、ありません。ただ、念仏を称えたかどうかが問題になるのです。

「にら、ねぎ、にんにくや肉を食べて、その臭いが消えなくても、念仏を称えていいのでしょうか」

――念仏には、何のさしさわりもありません。

「寝ても覚めても、いつも、口を洗わずに念仏をするのはどうでしょうか」

――念仏には、何のさしさわりもありません。

（法然『百四十五箇条問答』）

法然は、問いかける女性たちに対して、繰り返し答える。

「念仏にさしさわりはありません。ただ、気のすむように、やりやすいようにするのがいいでしょう」

不浄の身、宿業に苛まれる身、持戒できぬ身、そして女性である身……これまで〝救いようもない〟とされてきた者たちは、法然の言葉をどう受け止めたか――。

ただしそこに、確かな救いがあったのは事実である。

⬆宇治・平等院鳳凰堂。藤原頼通が往生を願い建てた阿弥陀堂だ。きらびやかではあるが、そこに民衆救済への〝平等〟な視点はない。

悪人

讃岐の国の源大夫は、人殺しを生業とする凶暴な男で、その傍若無人ぶりを近在で知らない者はなかった。

ある日の狩の帰り、寺を通ると仏供養があり、僧が説教をしていた。割り入った源大夫は、僧を脅していった。

「お前は、何を説こうとしているのだ」

僧は、怯えながらも、阿弥陀仏の誓願、極楽の楽しみ、この世の苦しみを語った。

「その仏は、俺のような極悪人でも分け隔てなく救うというのか」

「もちろんです。心をこめて仏の名を呼べば必ず応えてくれます。区別はしませんが、特に仏の弟子になれば一層目をかけてくださるでしょう」

「仏の弟子になるとは、どうすればいいのか」

「頭を剃ればいいのです」

それを聞くと驚いたことに、源大夫は頭を剃って、僧になるという。その場で戒を授けられ袈裟を着た。

「俺はここから西へ向かって阿弥陀仏の名を呼びながら、どこまでも歩くのだ」

野を越え、山を越え、歩き続けた源大夫は、やがて海へ出た。その断崖に突き出た木の上に登り叫んだ。

「おーーい、阿弥陀仏よ、おーーい」

すると、海の中から妙なる声が響いたのだった。

「ここにおるぞよ」

七日後に人が訪ねてみると、源大夫は木の枝のところで、西に向かって息が絶えていた。口からは、一本の美しい蓮華が生えていた――。

『今昔物語集』などに収録された、この「讃岐の源大夫」の話は、念仏の功徳を謳った代表的説話である。

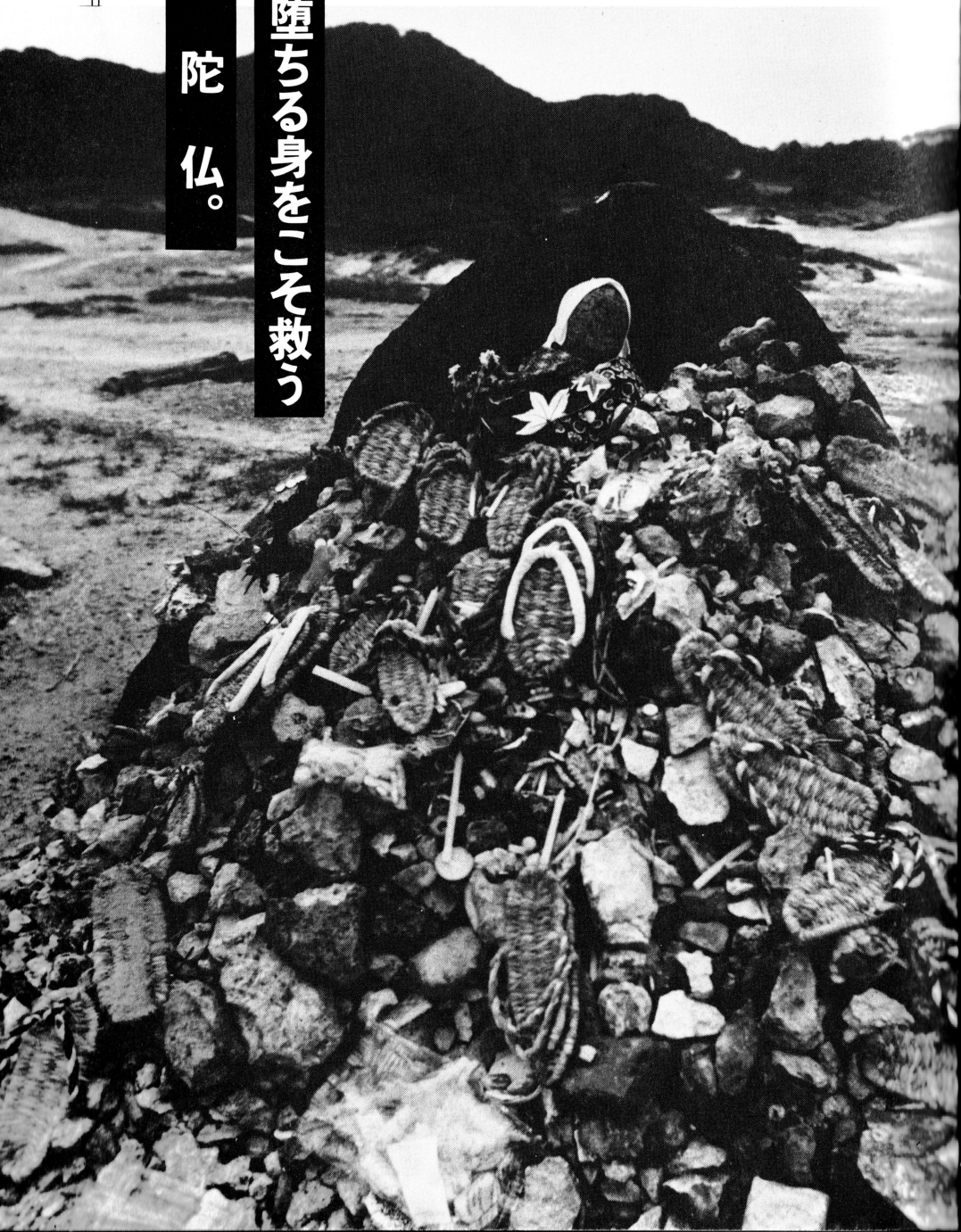
しかしここに、本質が隠されていないか。

源大夫は、一切を捨てて阿弥陀仏に身を委ね、己の行為と念仏を同一化し、ただひたすらに称えた。

親鸞はいう。「善人ですら化土に往生できる。まして悪人なら絶対他力に任せるのだから、往生しないことがあろうか」（『歎異抄』）

⬅日本三大霊場の一つ、青森・恐山の賽の河原にて。

地獄に堕ちる身をこそ救う阿弥陀仏。

煩悩

坊さんになった男が、本堂で朝の念仏を称えている。

「なむあみだぶ、なむあみだぶ……、しばらく酒ェ飲まねぇなア、飲みてえなア、酒の味も忘れたよ……。なむあみだぶ、なむあみだぶ……、女の子のそばへも行かねぇしなア。なむあみだぶ、なむあみだぶ……、四畳半とくるといいからなア、女の子と差し向かいでもって、小さな盃でやったりとられたり、酔いの回ったところで『あたしが弾くから歌いなさいよ』三味線を膝へ抱えてもらってよ……てとんててとん、つととんとくらあ、いやア……（と、急に調子を張って、伸ばした声が次第に下がっていつとはなく）なむあみだぶ、なむあみだぶ……おい、ここの和尚はずいぶん金ェ持ってそうだな。どうだい、和尚を絞め殺して、有り金持ってずらかっちまおうか」

煩悩に悩み苦しみながらも
煩悩とともに歩む。

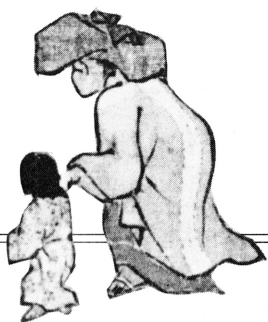
「万金丹」という落語の一節である。時を経るにしたがって世俗化された念仏が茶化されて語られているが、決して逃れられないわれわれの「煩悩」の姿でもある。「ただ念仏を申すばかり」——といったのは法然だった。しかし、無心に、まっ白な状態で念仏を行うのはたやすいことではない。たとえできたとしても、次の瞬間にはもう、俗世の執着にからめとられてしまっている。それがわれわれ人間の性であろう。

けれども、ひとたび救いを求める心境になったとき、とたんに人は惑い、苦悶し、自らの無力さを痛感することになる。聖人といわれた高僧とて同じことである。

「悲しきかな、愚禿鸞よ、愛欲の広大な海に沈没し、名利の深高な山に迷いこんで、仏と成ることが約束された正定聚の仲間に入ることを喜ばず、真実の覚りを証する道に近づくことを快く思わないとは。恥ずべきである。傷むべきである」（親鸞『教行信証』）

はなはだ逆説的ながら、救いようのない己を見定めた瞬間から、救いの門が開かれるのである。

写真＝青森・恐山の賽の河原にて。
（撮影＝萩原秀三郎）

すべてを投げ出す念仏に、
凡夫の救われる道はある。

絶対他力

かつて国会で防衛問題が論議されたとき、ある議員が「親鸞の他力本願ではいかん」と発言して大きな問題になった。このように〝他力〟は安易な手段として誤解される傾向にある。だが、実は〝絶対他力〟の立場は壮絶なまでの厳しい覚悟の表明なのである。

明治38年、大阪堀江の遊廓で血の凍るような事件が勃発した。逆上した男が凶刃を振るい、5人の芸妓を殺害、1人の両腕を斬り落とした。生き残った女は、その後、見世物の旅芸人として身をさらすのである。

やがて結婚して出産するも離縁となり、子供を連れて路頭にさ迷う。折から関東大震災に巻き込まれる。

「血の海となみだの川におぼれつつ、今日ここまではたどりきつれど」と詠んだ歌があまりに凄まじい……。

そんな彼女だが、身障者の世話をしつつ尼僧を志す。すべてを阿弥陀仏の前に投げ出し、信仰に生きたのだ。

「たなごころ合わせむすべもなき身には　ただ南無仏ととなえのみこそ」

この大石順教尼を信奉する人は現在も多いという。

一方で、現代の念仏者、榎本栄一のような例もある。榎本は幼少のころより病弱ではあったが、特に人の目を引くような出来事もなく、ささやかな商売を営んで一家を養った。そして、60歳ごろより念仏の奥にある世界をぽつぽつと詩に表現するようになる。

「こころのなかの　井戸を　こつこつと　掘り下げていったら　底から　阿弥陀仏が　出てきた」

病気がちな日々を歩みながら、徐々に育んでいった念仏の信仰が、老齢にいたって、ごく自然な形で開花していった様子がわかる。

「波瀾万丈のようなれど　ふりかえれば　なにごともなかったように　ただ　ほのぼのと光だけ」（榎本栄一）

『無手の法悦』を著した大石順教尼と、榎本栄一。信仰の果てに行きついた〝安心〟は驚くほど共通している。

⬆福井・誠照寺上野別院にて。阿弥陀仏に向かい、ひたすら念仏する。（撮影＝岸田森之助）

妙好人

あらゆる生命を尊重し、謙虚と感謝報恩を忘れず、鋭い自己洞察をもって日々の暮らしに向き合った人々。彼らを称して「妙好人」という。ひたすらに阿弥陀仏とともに生きてきた最高の「白蓮華」たちである。

＊　＊　＊

母親から「芋を掘ってきてくれ」といわれた源左が自分の畑へ行くと、見知らぬ男が掘っている。芋泥棒だ。源左は、帰って母親にいった。
「どうやら、今日はおらの家の掘らん番だいのう」
また、あるとき自分の家の柿の木にイバラがつけてあった。子供のいたずらの防ぎである。それを見ると、
「他人の子に怪我をさしたら、どがあするんだらや」
といって外すと、代わりに梯子をかけたのだった。

（因幡の源左）

おそのは、あるとき誤って落とし瓶にはまってしまった。すぐに人が来て「気の毒に……」と引きあげると、
「私は、今まで地獄へ落ちることを知らずにうかうか暮らしていたので（弥陀の）お慈悲のお知らせにあずかったのですよ」
と涙を流して喜んだ。

（三河のおその）

清九郎が留守をしている間に、盗人が入って銀7匁を持ち去った。この災難を村人らが慰めると
「盗みをするとは、さぞ不自由だったのだろう。ちょうどよく、銀7匁があるときに入ってくれたものよ。少しでも盗られるものがあって、盗人の手間が無駄にならずに、ああよかった。うれしいことだよ」
村人らは、盗まれてうれしいとは何ごとかといった。
「盗まれた自分も同じ凡夫。今はお慈悲によって盗みたいという心が起きないだけ。ありがたいことよ」

（大和の清九郎）

⬅光徳寺妙業大施無畏尊図（棟方志功作）。棟方が一時期疎開した光徳寺の本尊をもとにしたもの。豊かな色彩と生命力あふれる筆致で、妙好人にも通じる日常生活に根ざした信仰の力強さを表現する。（富山・光徳寺蔵）

念仏のみに生きる人は、白蓮華のように美しい。

⬆墓石に刻まれた、六字の名号。（撮影＝岸田森之助）

「あさくらく　物音ひとつせぬここで　小便さらさら
天地さまの　いのち流れるなか」
「百年たてば　自分の子や孫もなくなり　泥まみれの
私の生涯を　知る人もなくなるだろう　しかしそこに
草が繁り　虫が生きていたら　私はうれしいな」
（榎本栄一）
「才市や何処におる　浄土貰うて娑婆におる　これが
よろこび　なむあみだぶつ」
「ええなあ　世界虚空がみなほとけ　わしもそのなか
なむあみだぶつ」
（浅原才市）

――光輝く無限の「平穏と安心」が彼らの許を訪れて、静かに微笑んでいる。

もはやそこには、人も仏もない。南無阿弥陀仏の名号だけが、ぽっかりと浮かんでいる。

念仏者の系譜

極楽往生の地平へ人々を導いた聖者たち

日本における念仏の修行は、日本仏教の母山ともいうべき、比叡山から始まった。
そして、そこにあった高き頂のごとき権威と荘厳と方法論を、野に引きずり降ろし、
聖者たちは、かつてない信仰を生み出した。宗派の別を超え、時代と彼らの歩みを
追ってみるとき、われわれは衆生の救済に向けた日本仏教の一本の大河に出会う——。

文＝豊島泰国
吉田邦博

空也…源信…良忍…法然…親鸞…善鸞…一遍…蓮如…顕如…妙好人の群像…近代に生きた念仏者

➡念仏修行の発祥地、比叡山・西塔の常行堂。

空也（くうや）

諸国を遊歴した民間浄土教の元祖

●空也（903〜972）。出身地不明。平安中期の天台宗僧侶にして日本浄土教の祖。諸国を巡歴して、道路や橋梁を補修造営し、水利を通ずるなど、民間ボランティア活動を中心に展開。世俗に身を置きつつ、一般民衆への念仏の普及浸透に挺身した。

➡空也上人像。（六波羅蜜寺蔵）

◉不思議を具現化する異界の聖者

浄土信仰に立脚した民間布教の先駆者として、歴史に大きな足跡を残しているのが、空也である。のちに述べる法然、親鸞、一遍などが日本浄土教の精華であるとすれば、空也こそは、それらの大輪を咲かせるための、たぐい稀なる土壌ともいうべき存在であった。

　空也といえば、六波羅蜜寺に現存する空也上人像（康勝作）が、あまりにも有名である。文殊菩薩の化身とされた空也が、南無阿弥陀仏の名号を称えるたびに、その口から小さな仏が次々と飛び出してくるのが見えたという奇瑞をもとに彫像されたものである。

　恍惚めいた異形な容貌、その半開きの口から、ほとばしる念仏の結晶。当時の民衆にとって、空也は不思議を具現化する者として、人間ならぬ異界の聖者として、強烈にイメージされたに違いない。

　そうした伝説的な存在である空也とはいったい、どういう人物であったのか。

　空也の出自は、皇胤説もあるが、出自に限らず、本人が書いたものはいっさいない。そこで『空也誄』（源為憲）などの史料を適宜、取捨選択しながら述べていくことにする。

　若くして優婆塞（仏教系山岳修行者）となり、五畿七道をめぐり、名山霊窟を訪ねたというから、雑密や修験なども踏まえていたようだ。諸国巡歴の途次、危険な箇所があれば、道をならして広げたり、川には橋を掛け、水のないところには水脈を占って井戸を掘り、打ち捨てられた死骸があれば、それを一か所に集めて焼き、念仏を称えて手厚く回向するのが常であった。

　行動的な仏教者としてのあり方は、終生変わることがなかったが、あえて類例をあげれば、奈良時代の行基にその原型を認めることも可能であろう。

◉民衆のための念仏を唱和

　史料によれば、延長2年（924）、尾張国（愛知県）の国分寺で剃髪、空也と号して国家認定の沙弥（少年僧）となった。そして、播磨国（兵庫県）峯合寺で一切経論を数年間にわたり研鑽。

　その後、四国の阿波と土佐の間の湯島という霊地で苦行。観世音菩薩の前で17日間連続で穀を断ち、腕の上で香を炷きながら、不眠不休の行を積むという苛酷なものであった。この苦修練行後、念仏布教僧としての空也の真骨頂が発揮されていくといってよい。

　仏教がほとんど未開教の陸奥など東国を行脚、化導したあと、空也は、天慶元年（938）に入京し、人々の集まる市場で阿弥陀仏の名号を称えた。その風貌は異様きわまりなく、衆人の注目を一身に集めた。すなわち、鹿革の衣を着け、首には金鼓を掛け、それを打

ち叩きながら、名号を称えるというものであった。同時にそこで乞食をして得たものを貧民や病人に施したのである。

当時、仏教界のオーソリティたる天台宗の念仏による儀式ばった常行三昧は、一般庶民とは別の高みにあった。念仏は支配者層の葬送や追善供養が主体であり、しかも出家者が称えるもので、在家者は、せいぜいそれを聞く立場にしか置かれていなかったのだ。つまり、在家者は出家者と一緒に念仏を称えることは不可能であり、なおかつ、出家者の念仏を聞くことができるのは、裕福な貴族階級に限られていたのである。

仏法は万人の救いでなければならない。万人が救われてこそ、真の仏教である。万人救済の仏法は、結局、難行苦行とは別の、念仏の称名にある。長い自力による苦行の末に、そのように認識した空也は敢然、天台宗の荘厳された念仏信仰を民衆レベルに引き下ろし、それを実践したのである。

そして民衆と一緒になって念仏を唱和し躍動する運動体を組織、形成していった。人々は空也を称して阿弥陀聖とか、市聖などと呼んだ。

◉比叡山で受戒後、ふたたび市井に

空也の活躍ぶりを窺わせる史料がある。空也と同時代の慶滋保胤が著した『日本往生極楽記』である。

「道場、聚落で念仏三昧を修するものは希有なり。いかに況んや小人愚女多くこれを忌む。上人（空也）来るのち、みずから唱え、他をしてこれを唱えしむ。爾後世を挙げて念仏を事とするは、まことにこれ上人の化度衆生の力なり」とある。

当時は、天台座主円仁が比叡山で常行三昧堂を建立し、念仏三昧を行じてから1世紀を経ていたものの、京都では念仏者は稀で、浄土教は流行からほど遠い状態にあったようである。だが、空也の出現後、いかにその念仏が一般に受け入れられ、浸透したかがわかる。

さて、天暦2年（948）、空也は天台座主延昌の勧めに応じて比叡山に上り、出家受戒して、光勝という戒名を授かった。

市井にあった空也は、なぜそうしたのか。

結果的にいえるのは、当時、上流貴族が中枢の権力を握っていた延暦寺にあって、空也は、その貴族をも外護者とし、のちに彼らから布施を仰いでいる。比叡山の側からみれば、一般民衆に支持の篤い空也を自派の系統に位置づけるのは、宗教的権力を誇示するうえで得策であった。おたがいの思惑が、ここで一致する。

ただ、この点は強調しておきたい。空也は、政治的な臭いのまとわりついたものなど、何の価値もないことを痛感していた。なぜなら、受戒後も以前の名のまま、〝空也〟を名のり続けていたからだ。そして、比叡

『空也上人絵詞伝』より、極楽院歓喜踊躍念仏遊行の図。（空也堂極楽院蔵）

山にこもることなく、ただちに市井に戻っている。

◉万人救済のヴァイタルな方法論

その時期には疫病が蔓延した。病死者のために、十一面観音、梵天、帝釈、四天王などの尊像を造立して京都西光寺（のちの六波羅蜜寺）に安置している。

応和3年（963）には、念願であった『金泥大般若経』の書写が完成、賀茂川の河原で大供養会を盛大に営んだ。それと並行して西光寺では、昼は『法華経』を、夜は念仏を修したが、老若男女貴賤を問わず、結縁するものは数万人におよんだという。

また、念仏信仰といっても空也の場合、『法華経』も併修するなど、純行よりは雑行が中心であったが、それは歴史の制約でありこそすれ、空也の価値を貶めるものでは決してない。専修念仏の骨組みを提示したのは源信以降であり、それを純化させるには、さらに法然や親鸞の出現を待たねばならなかった。

ともあれ、空也は踊り念仏という、あらゆるものを巻き込むヴァイタルな呪術的方法論によって、これまでの特権階級中心の閉鎖的な極楽往生の枠組みを解体し、万人の救済へと組み換えていった。

良忍、一遍など、のちの声明念仏や踊り念仏の系譜を導き出す原点のみならず、空也をもって日本浄土教の本格的展開の嚆矢とする意味がここにある。

源信（げんしん）

『往生要集』を著し、日本の浄土観、地獄観を確立する

◉地獄を鮮やかに描写した代表的古典

『往生要集』——約１６０の仏教経巻から、極楽往生に関する要点を選び、漢文の問答体で説いた、仏教文学書。ダンテの『神曲』との対比で語られることもある、日本が誇る代表的古典——この筆者こそが、恵心僧都こと、源信である。

燃えさかる業火。迫り来る炎熱感。どす黒く淀んだ血の海。無数の人間たちに果てしなく繰り返される、極限の苦痛。異形の鬼。立ちこめる腐臭。絶叫。

それまでの日本には、記紀神話に伝わる薄暗くじめじめとした、黄泉の国に代表される他界観と、わずかに伝わる、仏教の地下世界があったに過ぎなかった。

こうした、古代インドに発する原色の地獄模様をきわめて視覚的に描写し、当時の日本人に衝撃を与え、のちに描かれる地獄絵などの美術や、多くの文学作品のモチーフとなったのが、『往生要集』なのである。

源信をこの書の執筆に駆り立てたのは何か。

それは、地獄さながらの現世の有様であり、その時代の人々の心を覆った深い無常感であった。そして、死後の世界にて仏となれるか否か、いかにして仏国土へ往生するかという、源信自身の救済への希求だった。

◉求道する学僧としての若き日々

源信の俗姓は卜部氏で、大和国葛城郡當麻郷の出身と伝えられる。父はさほどでもなかったが、母の仏道に対する情熱は強く、のちに出家して往生の行を修したほどであった。この母親の影響であろう、夫妻には源信のほかに4人の娘があったが、その3人までもが母と同じく出家し、西方の行を修している。

縁と必然に導かれるようにして、源信は、15歳に満たない年齢のときに比叡山で出家受戒し、慈恵大師良

源（天台宗中興の祖・通称元三大師）の弟子となる。

比叡山で修行を開始した源信は、その才を発揮し、天台教学の研鑽につとめ、またたく間に頭角を現した。

その評判は朝廷にも聞こえ、召し出された源信は、朝廷主催の論議に参加する。この出来事は、若き日の源信にとって得意の極みだったにちがいない。賜った記念品を自慢気に母の許に送りつけた。が、母はこれを嘆き、このように告げたという。

「自分の願いは、子が僧侶として出世栄達することではなく、遁世してでも仏道に精進することなのです」

こうして、源信は世間との交わりを断ち、当時荒れ果てていた比叡山・横川の恵心院に隠棲し、往生のための諸行と著述三昧の日々を送ることになる。念仏は2億遍、読んだ大乗経典は5万5500巻、念じた大呪は100万遍……修行は壮絶をきわめた。

◉浄土に往生するための方法論とは

源信に影響を与えた人物をあげるとすれば、師の良源と市聖として名を馳せた空也があげられる。良源からは、「すべての修行者に成仏の門は開かれている」という教えを受け、空也からは、「浄土を願う心があれば、往生はかなう」という教示を授かった。狂おしいまでの情熱に駆られて修行をつづける源信にとって、空也との邂逅は無上の喜びだった。

かくして、『往生要集』が生まれる。大略をいえば、この世をけがれた世界として厭い離れ、浄土への往生を願うことの重要性を、具体的に記し、その方法論として、阿弥陀仏の相好を観察する観想念仏の諸法と、口で称する称名念仏の本義を説く。そして、臨終の際の作法をこと細かに紹介する——源信によって、往生への希望は確かな枠組みを得るのである。

●源信（942〜1017）。天台宗僧侶。大和国葛城郡當麻郷に生まれる。古伝によれば、9歳で出家。比叡山延暦寺に上り、慈恵僧正（良源）に師事した、と伝えられる。比叡山横川の恵心院の学僧であったことから、恵心僧都、横川僧都とも呼ばれる。師良源の立場をさらに発展させ、44歳のとき『往生要集』を著す。この書は日本浄土教史に多大な影響をおよぼし、その名声は中国仏教界にも知れわたった。

➡恵心僧都像。（西教寺蔵）

良忍(りょうにん)

●良忍(1072〜1132)。融通念佛宗の宗祖。諡号・聖応大師。尾張国(愛知県)知多郡富田に生まれる。比叡山延暦寺、園城寺、仁和寺に学び、顕密二教を修め、円頓戒を復興。京都大原に来迎院を創建、45歳で阿弥陀仏の示現により融通念仏を感得した。大原魚山流声明の中興の祖。摂津国(大阪)住吉に大念佛寺を開基。60歳で入滅。

⬅良忍像。(比叡山大講堂蔵)

念仏の歓喜を体現させた融通念佛宗の開祖

◉一人の行は万人のための行

良忍が、京都の大原で弟子たちと念仏三昧を行っていると、突如、夢現の恍惚状態になった。すると、どうであろう。良忍の眼前に阿弥陀仏が現れ、極楽往生のための教え＝融通念仏を親しく説いたという。

融通念仏とは何か。端的にいえば、速疾往生の方法。

つまり、一人往生すれば、衆人も必ず往生する。一人の行はすべての行に通じ、すべての行は一人の行に通ずるというものである。重要なことは、良忍は阿弥陀仏に往生を保証された一人であり、往生のための行とは、融通念仏の口称につきるということであった。

高僧が何らかの悟りを得る場合、夢が契機となる場合が往々にしてあるが、良忍は自らの確信を阿弥陀仏の示現という霊夢に仮託したに相違ない。

融通念仏の考え方は、一念三千や一即一切の円具を説く天台念仏の流れを組むものであることは見やすい道理であろう。

だが、その本質的な発想は、集団の口称念仏という一種のジャムセッション（即興演奏）のクライマックスにおける、自他融通無礙の相互触発作用に起因したものではなかったか、と筆者は愚考する。

良忍は弟子たちと口称念仏中に強烈な歓喜を得た。その歓喜は自分一人の歓喜であると同時に、その場全員の歓喜でなければならなかった。逆に全員の歓喜は自分の歓喜でもあった。

それはまさに口称念仏による融通無礙の絶対境そのものであった。換言すれば、禅の悟りの境地のようなものだったのではあるまいか。それを念仏の功徳、あるいは不可思議解脱と称してもよい。良忍は自他融通無礙の念仏の感動を生涯にわたって説き続けたのだ。

良忍は、もともと比叡山・常行堂の堂僧出身者であった。常行堂の堂僧といえば、不断念仏を称え続ける修行が中心だった。その後、良忍は、京都大原へ隠遁し、日本音楽の源流のひとつ、魚山流声明を大成したが、融通念仏の基盤は常行堂での原体験に負うところが大きいと思われる。

◉はげしい修行の末の念仏

『後拾遺往生伝』によると、大原隠棲後、かなり激しい修行を行っていたことが書かれている。すなわち、往生を願い、日課として『法華経』1部を読誦し、念仏を6万遍称えた。のみならず、『如法経』6部を書写し、自らの手足の指を切って焚き、仏に供養するといった尋常ならざる行を修していたとある。

そうした激烈な苦行を経て、冒頭に記した融通念仏の真髄に触れたわけである。

良忍は60歳で死去した。『三外往生記』には、屍は光明を放ち、鴻毛の如く軽かったこと、また、その死後、大原律師覚厳の夢に良忍が現れ、融通念仏の功徳のおかげで極楽往生できたと告げたことが記されている。

結局、良忍は当時の天台宗の常行念仏では、自分も一般衆生も救われ難いとし、前述のように口称念仏が、あらゆる行に通じる真の救済であるという新境地を開いた。それはこれまで固執していた自力観念の念仏から、他力称名への転換であった。

良忍は、一方では、空也系の念仏聖などと共振連動する勧進念仏集団の組織者であるとともに、他方では、浄土宗や浄土真宗を導く先駆的な役割の担い手であったともいえよう。

法然（ほうねん）

雑行を捨て、念仏行のみを選択した鎌倉浄土教の先駆者

◉"大原問答"と呼ばれる事件

のちに天台座主となる顕真は、あるとき、出離解脱について深慮することがあり、思いたって学僧として名高い法然（源空）に問答を申し込む。

顕真が、生死を超え解脱する方策を尋ねると、法然は、成仏は難しいが往生はやさしい、聖道門の教法は優れているが、道綽、善導によれば、わたしのような頑愚の凡夫は、阿弥陀の本願による専修念仏の一行によってのみ往生がかなうのだ、と答えた。

顕真はこのことによって、法然の学識は認めるが、いささか偏執的である、と批判すると、伝え聞いた法然は、人は浅学ゆえに疑心を起こすものだ、と語る。

その言を恥じた顕真があらためて宗議を申し込み、文治2年（1186）、大原勝林院の丈六堂で行われたのが、大原問答と呼ばれる宗学会である。

そこには名のある碩学の僧と300人の聴衆が集まり、等しく法然の教説を聞いた。その後徹底した質疑が1日1晩繰り返され、ついにその場にいた全員が法然に帰依したと伝えられている。ついには、3日3晩にわたって念仏を声高に称え続けたという。

このことをきっかけに、法然の名声と専修念仏の方法論が燎原の火のごとく浸透していくのである。

◉平安の末期に現れた宗教革新の巨人

12世紀の終わり、世は一大変革期を迎えていた。それまでの貴族中心の王朝社会には陰りが見えはじめ、代わる武家勢力の台頭は新たな時代を予感させるものだった。こうした大きな潮流のなかで、これまでの既成概念、社会の構造そのものが変革を求めたのは、時代の必然であった。

そのころはすでに、前代の国家に奉仕するためのみ

に存在した仏教は、著しく形骸化していた。

こうした既成仏教の限界を痛感し、敢然と決別を宣言した巨人が、世に法然と呼ばれる鎌倉新仏教の先駆者である。

法然の説く教説は、きわめて革新的なもので、既成仏教の方法論のことごとくを破棄、否定するものだった。そこには専修念仏という、全く新しい救済論に基づいた独自性と確信が満ちていた。そのために、法然は「仏法の怨敵」と断じられ、ついには流罪、死後はその墓所をも暴かれることになるのである。

●法然（1133〜1212）。浄土宗開祖。諱は源空。法然は房号である。美作国久米南条稲岡荘に、押領師漆間時国の子として生まれる。13歳のとき比叡山に上る。持戒の清僧として名高い。数千巻の経・論を繙くうち、善導の『観経疏』の一文に触れ、43歳のとき念仏至上主義の革新的な一宗をうち立てる。のちに、この独自の宗教的な立場は浄土宗と名づけられた。主著に『選択集』がある。諡号は圓光大師。

➡法然像。（二尊院蔵）

⬆吉水のほとりにて浄土宗開宗を宣する法然。（『法然上人行状絵巻』當麻寺奥院蔵）

⬆若き日の法然が25年間修行の拠点とした、比叡山黒谷の青龍寺。

◉俊英の青年僧、求道の萌芽

保延7年（1141）、美作国（現在の岡山県）の押領使であった漆間時国は、権力闘争の果てに非業の最期を遂げる。

このとき、母とともに残された9歳の少年が、のちの法然である。

少年はしばらくして、母の弟である叔父の観覚のもとに預けられ、多くのことを学んだ。少年の習熟は目ざましく、15歳（一説には13歳）のとき観覚は、少年を出家者として大成させるべく、旧友である比叡山の持宝房源光のもとに預けるのである。

源光もその俊才ぶりに感嘆し、少年のさらなる飛躍を功徳院皇円に託すこととなるのである。皇円は『扶桑略記』の著書として知られる学僧である。少年はここで剃髪出家し、智顗（538〜97）の『天台三大部』（『法華玄義』『摩訶止観』『法華文句』の総称。天台宗学の中要）を、わずか3年で読破している。

◉黒谷別所への隠遁、求道への邁進

限界は求道する者のひとつの極みに必ず待ち構えている。

18歳にして多くの知識を得、学問を究めるまでに昇りつめた青年僧には、自らのたどってきた道が、決して自身と万人のための本質的な救済論ではないことを思い知るのである。一学僧は政治的な成功者になることを拒む。そして強く決意するのだ。——何ものにも囚われることなく求道の思索に身を委ねることを。

そのころ、比叡山の西塔にある黒谷の別所には無冠の聖が集っていた。青年僧はそこの中心的指導者、慈眼房叡空の門を叩き、これまでの求道遍歴を伝えて、遁世の求道者となることを求めるのであった。

叡空は「若くして出離の心をおこす、法然道理の聖である」と喜び、青年僧を法然房源空と名づける。法然18歳の秋である。

時は動乱を予感させ、比叡山は世俗の垢にまみれて

☗漁民夫妻らを教化する法然。(『法然上人行状絵巻』當麻寺奥院蔵)

いた。学問は栄達の手段と化し、僧兵は虚しい権力闘争を繰り返していた。

そんななか、わずかに黒谷のみが、静けさのなかに厳しく熱い、求道者の息吹を伝えていた。

法然の探究と精進は以前にも増して激しく、徹底したものであったと、数々の上人伝は伝える。『知恩講私記』には、「『一切経』律論の鑚仰に眠りを忘れ、自他宗の章疏の巻舒倦むことなし」とある。法然はここで、融通念仏を修めた師の叡空から天台密教や『往生要集』を学んでいる。

黒谷に遁世して数年が経った。

24歳になった法然は、求道成就の祈願をするため、当時民間仏教の中心的祈禱所として篤い信仰を集めていた、嵯峨の釈迦堂を訪れている。

ともに釈迦堂に参籠し、苦しみ悩む衆民の様を見て、法然はすべての人々が等しく救済されるべきが、真の仏法であり、それこそが自らの求めてやまない一筋の道であることに気づくのであった。

この参籠がきっかけとなり、法然の内省教学を中心とした学問は、広く、生きた民衆の信仰に還元されうる、万人救済の道を模索する学問へと軌道修正され、のちの道程を決定づけたといっても過言ではない。

●善導との邂逅、阿弥陀の本願を解す

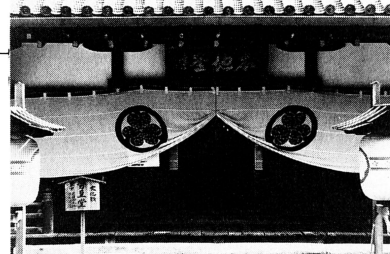
求める道は定まった。

法然の思索と教学は確かな方向性を得て、加速度を増していく。『経論疏』はもちろん、既成仏教の方法論にはない、万人のための全く新しい救済論を求めて、求道の先人たちの伝記にも目を通していった。

黒谷に移ってすでに二十数年の月日が経過していた。このころになると、すでに『一切経』は5度にわたってくまなく読破されていた。

そんななか、源信の『往生要集』は法然にとって特別の意味合いをもつものになっていく。

法然は、『往生要集』に引証された唐代の浄土教の大成者、善導に深く心を奪われ、その著『観経疏』の「散善義」の一文に注目した。

そこには、極楽への往生をひたすら願い、一心に阿弥陀の御名を称え、日々刻々、決して口から念仏を捨てないのが往生を決する正定の業であり、阿弥陀仏はこの行をつとめる者すべてを救うことを本願の誓いとされているのである——と、論じられていた。

➡法然上人入滅の地、知恩院境内の勢至堂。

最初期の浄土宗では自ら善導宗と呼ぶほど、法然の善導に対する心服は徹底したものだった。法然の言葉によれば「ひとえに善導に依り、たちどころに余行を捨てて、念仏に帰」したのである。

法然はこの一私論によって称名の念仏こそが、ほかならぬ阿弥陀の本願に発した行であり、万人をひとりの落伍者もなく救いとることのできる唯一の方法論であることを確信したのだった。それは、あくまでも行者（人間）側の都合を超えた阿弥陀の本願に根ざす、絶対性を持つ結論であった。

善導は、曇鸞、道綽とつづく中国浄土教の系譜の中に身を置き、長安を拠点として活躍した僧で、自らを罪深い愚衆と断じ、キリスト教の原罪概念にも似た懺悔の思考を生涯もちつづけた、特異な思想家である。

その信仰の根底には、観想の念仏による神秘体験があった。善導は、釈迦仏、阿弥陀仏をはじめ、諸仏、諸尊に観想と称名の念仏を称え、夢中にて解答を得る願をかけ、毎夜極楽浄土のヴィジョンを得ながら、『観経疏』を完成させたと伝えられている。

口称念仏を打ち出した法然も、実は善導と同じく、観想念仏による神秘体験を得ていた。このことは、生存中は封印されていた『三昧発得記』によって明らかである。善導への帰依の底には体験の共有があったのだ。

そのことに対して、矛盾はなかった。むしろ、善導と同じ法悦を得てわが意を強くした。法然は、念仏のエクスタシーに、〝知〟によって到達する〝自力〟のはからいを超える境地を見出したのではなかろうか——。

法然43歳、黒谷に遁世してから25年が経っていた。

◉〝選択〟という名の確信

さらにその後も、善導の釈義によりながら浄土経典の研鑽を深め、既成仏教に一線を設けた自らの宗教的立場から、浄土宗を表明するのである。

法然の信仰思想の中枢である、選択本願義が明確に示されるのは立教から十数年を経た、東大寺における『浄土三部経』講釈の場であった。

この〝選択〟は、これまでの仏教の諸行（聖道門）のすべてを排除し、浄土門たる念仏を一向専修する極

⬆法然上人は慈覚大師の袈裟をかけ摂益文を唱えて往生した。(『法然上人行状絵巻』當麻寺奥院蔵)

論でもあった。その過激さから、顕密諸宗からの誹謗と迫害は激しく、「偏執の義」と断じられるのである。

また、阿弥陀信仰以外の仏教諸派を否定することは同時に、それまでの仏教を厚く擁護してきた国家をも否定することにつながる、まぎれもない危険思想であった。さらに、教団組織が拡大し、最底辺の衆生こそが阿弥陀の本願にかなう人々である、と言いおよぶにいたっては時の権力が放置できる範疇を超えていた。

そのため、最晩年、弟子の行状を口実に数年間、四国へ流罪され、命を縮めることになる。

法然はこうした諸々の弾圧や非難を一身に受け続けながらも信念を貫き、屈することはなかった。

そんな法然のより具体的な人柄を、称名念仏の理論的根拠を示した著作から捉えることはきわめて困難である。ただ、わずかに残された柔和な肖像から、衆民の救済を生涯求めつづけた、寛容で慈しみ深い性格を憶測することができるのみである。

建暦2年(1212)正月25日、数人の門弟に見守られながら、この時代の狭間を橋渡した学僧は、「智者のふるまひせずして只一向に念仏すべし」(『一枚起請文』)の遺告を残し、清涼にして革新的な80年の生涯に幕を閉じる。

その後、法然によって大きな一歩を踏み出した念仏信仰は、弟子の親鸞らによってより深化の度を増す。

親鸞（しんらん）

⬇親鸞像。（奈良国立博物館蔵）

絶対他力、悪人正機を唱え浄土真宗を開宗

●親鸞（1173〜1262）。鎌倉初期の僧。浄土真宗の開祖。絶対他力、悪人正機の説を打ち出す。諡号は見真大師。著書に『教行信証』、『浄土和讃』、『高僧和讃』、『愚禿鈔』、『一念多念文意』などがある。

◉新時代の念仏思想家

貴族政権が崩壊し、武家が主導権を握った鎌倉時代は、法然をはじめ、栄西、道元、日蓮、一遍など新仏教の開祖を次々と輩出するなど、まさに信仰の種々相が噴出した時代でもあった。新仏教の開祖に共通する

特徴は、諸行併修が中心の旧仏教を、それぞれの立場で筋道立てて純化していったことにある。

浄土真宗の開祖たる親鸞も、そのひとりとして、法然の他力念仏を徹底的に深化させることにより、絶対他力という新概念を開示した最高レベルの宗教思想家という高い評価を得ている。

親鸞が到達した絶対他力の念仏は、易行中の易行とされるように、表面上は呆気ないまでにだれでも即実行可能であるが、そのために、親鸞は諸経典を踏まえ、難解な他力救済論の抽象哲学に没頭するという、ある意味では矛盾に満ちた壮絶な人生を送った。それはほかでもない、自分の救済の確信＝安心を得るためであったが、同時に、とりわけ後世の知識人に思想家・哲学者としての親鸞を再認識させる結果となっている。

だが、親鸞ほどその生涯に不明なところが多い宗教者も稀である。そのため、明治時代に東大の重野安繹教授によって、その存在自体を抹殺されたことがある。まったく驚くべき話だが、洞院公定の『尊卑分脈』や虎関師錬の『元亨釈書』に親鸞の名が見えないこと、念仏信仰をあれほど罵倒した日蓮が奇妙にも親鸞には一言も言及していないことなどの理由によって架空の人物とされたのである。

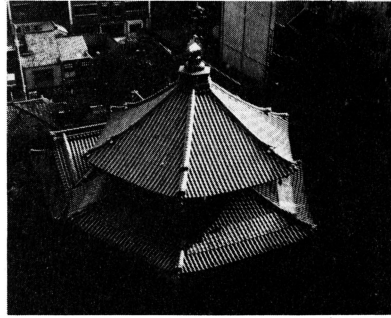
もちろん、架空人物説は、誤謬としてその後完全に否定されたが、これが本気で論じられた背景には、親鸞が自分の生涯についてほとんど語らなかったことのほかに、同時代の動きのなかで、その存在がきわめてマイナーであったことが挙げられよう。

親鸞は承安3年（1173）、公卿・日野一族の日野有範の長男として生まれた。9歳で慈円の自坊・青蓮院で得度出家したのち、比叡山に上り、常行三昧堂の堂僧となった。だが、仏教界の頂点にあった比叡山は、熾烈な派閥抗争に加えて、乱暴狼藉の僧兵などが幅をきかせる、きわめて生臭いところでもあった。

彼はそうした雑音を避け、約20年間、念仏修行に専念する。だが、真剣にやればやるほど、仏にはなれないという絶望感に苛まれる。そして結局、山を下りるのである。それはエリートからはずれることであり、そうとうの覚悟がいることでもあった。

ともあれ、親鸞は、今後の人生の指針を聖徳太子ゆかりの救世観音に委ねることになる。そして29歳で聖徳太子の創建とされる京都の六角堂に百日間参籠、95日目の払暁、救世観音から次の夢告を得るのである。

「お前が宿報により女犯の罪を犯すときは、私が妻となって犯されよう。一生の間、お前の身の飾りとなり、臨終には極楽へ導こう」

夢告の信憑性は別として、たしかに自分の妻となるものは観音の化身だと考えれば、女犯の罪から逃れることができる。それはセックスの問題に悩む凡夫たる

➡親鸞が観世音菩薩の夢告を受けた京都・六角堂。

自分を見据え、ぎりぎりに追いつめた地点で得られた夢告であった。同時に、結婚し、世俗の中にあっても、往生の道は開けるという発想の転換をもたらしたのである。

◉非僧非俗の宗教者として

そのころ、京都では法然の画期的な専修念仏がものすごい勢いで広まっていた。法然は専修信仰によって、一般民衆にも平等に救済の扉を開き、旧仏教の枠組みを再編しつつあった。自力修行の落伍者たる親鸞には、専修念仏こそ、自分が救われる道だとひらめくものがあった。親鸞は法然のもとに走り、弟子となる。

「たとえ、法然上人にすかされまいらせて（だまされて）、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず」（『歎異抄』）というほど、親鸞は心服した。

ところが、延暦寺と興福寺が相次いで法然の専修念仏を非難、念仏停止を迫るという事件が起こるなどして、親鸞も僧名の綽空を剥奪され、俗人の藤井善信として越後へ流罪となった。時に親鸞35歳であった。

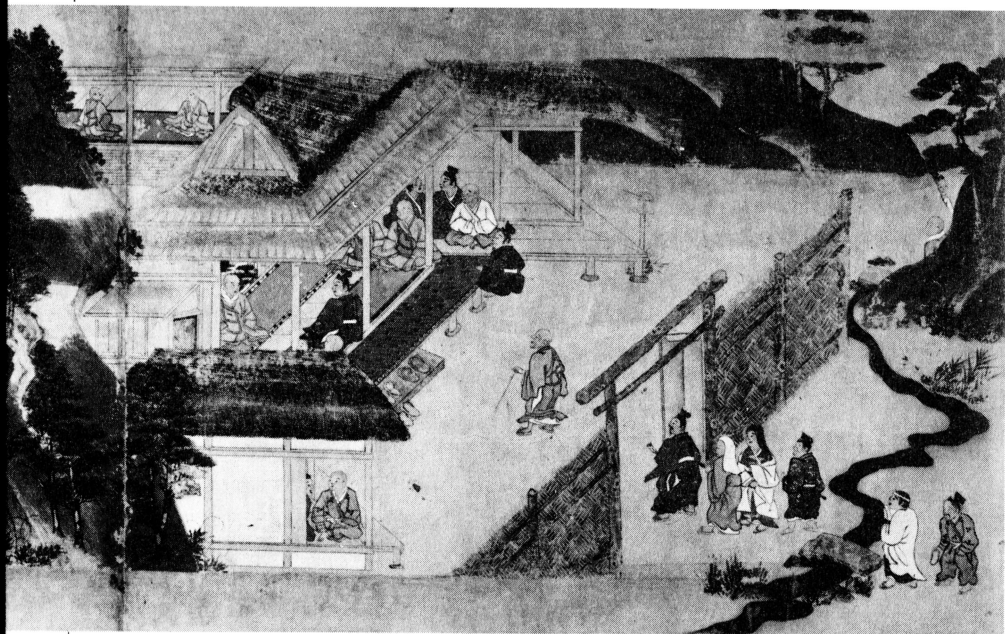
この流刑地で親鸞は、豪族三善為教の娘とされる恵信尼と結婚している。恵信尼こそ、親鸞が夢告で示された「観音の化身」であった。

ここで強調しておきたいのは、親鸞は日本で初めて妻帯を公然と行った僧だということである。これは当時の仏教界からすれば、完全な〝破戒僧〟宣言であり、大変なスキャンダルであった。

そして妻帯による世襲問題の萌芽もまた実はここに兆していたといえるのである（のちの蓮如の相続問題、教如と准如の東西両本願寺の分裂、東本願寺の現在の後任門首問題など、血脈にからむ骨肉の争い）。

だが、既成仏教界にしても、親鸞を破戒僧として糾弾できる道理はないに等しかった。隠れて妻帯している僧が少なからずいたし、稚児を囲っていた僧もいたからだ。とくに女犯が表向き御法度であったため、男色が黙認される風潮があった。

明治維新以降、肉食妻帯は勝手たるべしという政府の方針に、既成仏教界は一部例外を残して、こぞってそれに従った。肉食妻帯という一点において、全仏教界は結果的に浄土真宗化（僧侶の在家主義化と世襲化）したのである。親鸞自身は、自らの愛欲の業に悩まされつづけたが、はからずも、親鸞こそは、自力や他力の問題は別にして、現代の日本の僧侶の基本的システムの先駆的実践者でもあったのだ。

ともあれ、私事についてはほとんど沈黙を守った親鸞も、越後流罪に対しては怒りが収まらなかったようで、『教行信証』で次のように明記している。

常陸国に流された親鸞とその草庵をたずねる信者たち。（『親鸞上人絵伝』照願寺蔵）

「爾れば已に僧に非ず俗に非ず。是の故に禿の字を以て姓とす」

筆者はこの「非僧非俗」に親鸞の思想の特質というか、根底に触れる思いを禁じえないのだ。

たしかに、親鸞の非僧非俗の立場は「出家教団の秩序を破壊したのみではなくて、在家教団の基本的義務さえも踏みにじってしまった」（渡辺照宏『日本の仏教』）という厳しい見方もある。

だが、親鸞のいう「非僧非俗」とは、限りなくアナーキーな新仏教者宣言ではなかったか。つまり、既成仏教界が堕落している以上、本物の僧は皆無といっても過言ではなく、彼らは僧のふりをした俗人にすぎない。では自分の場合はどうか。正しい僧ではない。それでは俗人かといえば、単なる俗人でもない。それは僧も俗人も超え、教法を奉じ、仏道に励む者、すなわち我こそは本当の意味での〈僧〉にほかならない——と。

◉徹底した他力思想の追究

建暦元年（1211）、親鸞は流罪を許されるが、師の法然が死去したこともあって、京都へ帰ることを断念し、「辺鄙の群類を化せん」と、関東へ教化伝道の旅に出る。その途次、上野国（群馬県）佐貫で『浄土三部経』一千部を読経発願したが、それは自力の信心以外のなにものでもないことを痛感し、慌てるのである。

⬆親鸞上人入滅の図。（『親鸞上人絵伝』照願寺蔵）

捨てたはずの自力の功徳に頼ろうとしたあさましさ。まだまだ本物ではないという自覚。そのことは彼の信心の大きな転機、回心となった。

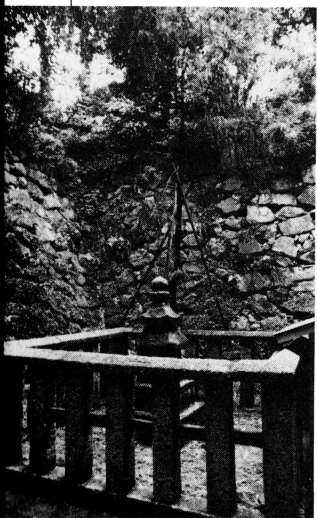
それがきっかけとなって「他力のなかの他力」の念仏、すなわち絶対他力の念仏を獲得するにいたるのだ。

師の法然は口称念仏、つまり念仏を称え続けることによって善根が積まれて救われるとしたが、親鸞はさらにそれを徹底化させ、阿弥陀仏を信じるという一念があれば、もはや救いが保証されており、極楽往生できるというものであった。そのあとの念仏は阿弥陀仏に対する感謝報恩のためであり、そこには呪術的な意味合いや功徳はまったくないとした。それゆえ、彼は卜占祭祀、吉凶判断などはいっさい認めていない。

また、親鸞の思想の特徴は悪人正機説に顕著である。従来の戒律重視の、あるいは徳を積むことを強調する救済システムの枠組みからはずれた地平にある、最低レベルの貧しい衆生こそ、阿弥陀仏の慈悲力によって誰よりも先に救われる存在であるとみたのである。

さて、常陸国（茨城県）稲田に移り住んだ親鸞は、そこを拠点として、以後、約20年にわたり、念仏生活を送り、『教行信証』の著述に専念しながら、精力的に布教活動を行う。下野国、下総国、武蔵国など関東一円から、奥州までも足跡を残している。

次第に弟子も増え、農民を中心とする浄土真宗の初

☗親鸞が『教行信証』を執筆した西念寺（茨城県）。

☗親鸞の元の墓所。（京都・元大谷崇泰院、知恩院塔頭）

期教団が形成されていく。ちなみに、『歎異抄』によれば、親鸞は「弟子一人も持たず」といい、教団設立の意志はなかったが、実情は親鸞を師と仰ぐ弟子がおり、また信仰者組織＝教団の原型ができていた。

◉最終的にたどりついた自然法爾の境地

60歳過ぎに、親鸞は突如、本拠地の関東を離れて京都に帰る。具体的な年号は明らかではないが、親鸞は妻子を越後に帰し、末娘の覚信尼と一緒に京都で生活を送る。その理由は関東の門弟から師匠扱いされるのを嫌ったためとも、ライフワークの『教行信証』の完成のためともいわれるが、実情は不明である。

京都にあって親鸞は関東の門弟からの依頼に応じて手紙で教化していた。だが、関東で親鸞の他力信仰を曲解した異端的な動きが相次いで起こる。それがもとで念仏が禁止されるなど、由々しい事態となった。

その解決策として、当時84歳の親鸞は子息の善鸞を送りこんだが、これがまったく裏目に出て、善鸞を義絶するにいたる善鸞事件が勃発する。

こうした内外のさまざまな苦難を乗り越えて、親鸞は、信仰と教化の道を歩みつづけ、最晩年に自然法爾の境地に到達する。これは、衆生の救済はすべて阿弥陀仏のはからいにあるから、自分のはからいである是非善悪の判断すら、まったく不要であるとするものであった。それはまさに他力の極致にほかならなかった。

そして弘長2年（1262）11月28日、娘の覚信尼らに看取られて、90歳の紆余曲折に満ちた生涯を終えた。遺言は「某閉眼せば賀茂川に入れて魚に与ふべし」というものだった。いわゆる高僧の死には紫雲がたなびき、花が降り、芳香がただようといった奇瑞がつきもので、覚信尼も密かにそれを期待していたらしいが、親鸞の死は、普通の老人の死と何ら変わることがなかったという。煩悩具足の自覚者・親鸞の最期を飾るにふさわしいエピソードである。

善鸞（ぜんらん）

●善鸞。生没年不明。異端念仏の祖。親鸞の長男とされる。幼名は宮内卿公。比叡山で修行後、遁世し慈信房と称する。善鸞は法名。親鸞の特命により関東に派遣されたが、異解を宣布したとされ、義絶される。その後、巫覡集団を率いるなど呪術系宗教者として活躍。

父 親鸞に義絶された異流・秘事法門の祖

◉浄土真宗の地下水脈

親鸞の念仏信仰は、それまでの念仏に纏綿していた密教的呪術的要素を徹底的に削ぎ落とすところから出発していた。ところが、その念仏を逆に秘教化したのが、親鸞の子息・善鸞であった。善鸞は、秘事法門とよばれる真宗系異端法脈の祖として活躍した。秘事法門とは、真宗教理を秘密裡に伝授することである。

むろん、真宗には密教的要素が介入する余地はなく、その観点からすれば、善鸞は、まがうかたなき異端者、異安心の首謀として断罪されるべき対象であった。

当初、善鸞は親鸞の意向により、関東地域の真宗教

➡善鸞像。（『慕帰絵詞』より、西本願寺蔵）

団の教勢確立という重責をになって派遣された。

同地では、すでに親鸞の門弟らがそれぞれ精力的に布教に励み、信者も増えつつあったが、阿弥陀仏さえ尊信していれば他の神仏を冒瀆してもかまわないという神仏軽侮説や、念仏によって救済されている以上、悪行三昧をしてもかまわないという造悪無礙説など、親鸞の説いた教えを曲解する動きもあった。

そうした動きは、親鸞の本意にかなっていないばかりか、幕府の弾圧を招きかねないものであり、それを糺すために善鸞に白羽の矢がたてられたのである。

しかし、容易にはいかなかった。善鸞は、苦慮の末、秘策を練り、実行に移すのである。

善鸞は、「自分のみが夜中ひそかに親鸞から深秘の教説、極楽往生の秘儀を得た」などと教示したという。また、阿弥陀仏の本願をしぼんだ花にたとえたとも、悪を廃して善を行う専修賢善的な念仏を説いたともいわれている。

●呪術的要素の濃い秘教念仏

日本の精神風土の特色のひとつは、呪術に代表される現世利益信仰にある。善鸞はその状況を踏まえて、関東に育ちつつあった念仏信仰者を再編し、新たな信仰形態を打ちたてようとしていたのではあるまいか。

というのも善鸞は、叔父の尋有の縁で比叡山延暦寺で修行しており、密教や修験道など、さまざまな祈禱修法を修していたことが確実視されているからである。

善鸞の教説の影響は大きかった。とりわけ常陸（茨城県）、下総（千葉県）の信者間に深刻な動揺が起こり、騒然となった。信者の多くが善鸞のもとへ奔ったため、善鸞は指導的位置を占めるようになり、親鸞の門弟たちとの間で熾烈な争いにまで発展していった。

門弟らの訴えによって、84歳という高齢の身であった親鸞は、実情を知り、康元元年（1256）5月、善鸞に義絶状を送りつけ、絶縁処分としたのである。

義絶によって追放された善鸞は、関東を中心に、念仏に秘教的な修行をミックスした呪教的要素のきわめて濃い秘事法門の基盤を確立した。その一方で、巫覡集団を組織、陰陽道系の卜占や祈禱祭祀などを行っていたことを、本願寺3世覚如が伝えている。

善鸞の血脈は如信を経て大網願入寺の歴代門跡に伝承されている。善鸞の秘事法門は、覚如とつながりのあった如導に継承されたという。秘事法門の系統は、さまざま派生しているが、本願寺を中興した8世蓮如によって徹底的に攻撃され、地下に潜ることになる。

ともあれ、親鸞は善鸞を義絶することによって、その存在を消去したように見える。だが、「善鸞」という記号には、正統と異端、念仏と呪術、血脈と法脈など、複雑な問題が内包されつづけているのも事実である。

一遍（いっぺん）

遊行聖として独自の念仏行を実践した時宗の祖

●一遍（1239〜1289）。時宗の宗祖。伊予国（愛媛県）松山に生まれた。父は豪族河野通広。遊行僧として念仏札や踊り念仏を一般民衆に勧めた。法系は法然の門弟・証空の孫弟子にあたる。神仏習合の日本風土に根ざした独自の阿弥陀仏思想を展開。その生涯は『一遍上人絵伝』『一遍聖絵』に詳しい。

◉市井の念仏者を結集

鉦を激しく連打させながら、僧俗貴賤が入り乱れて大声で念仏や和讃を合唱し、踊りまくる。熱狂とも、狂乱ともつかない、踊躍歓喜。エネルギーとエクスタシーの爆発。その強烈な心身のダイナミズムは、死者のための供養の表現であり、同時に、民衆の救いの、はかりしれない法悦の表現であった——。

鎌倉後期の末法の世にあって、不安と苦悩に喘いでいた民衆に極楽往生を保証し、その情念を踊り念仏に転位、昇華させた遊行僧が、一遍である。彼は全国を遊行しながら、遠きは空也、近きは良忍という先人が

➡一遍上人像。（神奈川県立博物館蔵）

仕掛けた芸能的布教方法を引き継ぎ、念仏聖や勧進聖らを結集、踊り念仏の巨大ネットワークを形成した。

一遍は日本浄土教の系譜の上でもひときわ突き抜けた個性であった。その面魂、魁偉な容貌からしても、骨太な逞しさ、精神の強靱さがにじみでている。

それも故なしとしない。父方は水軍を率いた武家の豪族であった。一遍は母の死が機縁となり、10歳で出家。その後、九州に赴き、証空の門弟・聖達に師事した。証空といえば、法然の高弟で、西山義を樹立した浄土宗西山派（現在の西山浄土宗）の祖である。

西山義とは、念仏だけが極楽に往生するための方法であり、それ以外の方法では往生不可能という教えである。実父の通広は、大番役として京都在住中、証空から学んだことがあり、一遍の仏門帰依は父の影響もあったであろう。弘長3年5月、父が死去。跡目相続のため、帰郷し、還俗。在家の武士となった。

ところが、縁者が所領地の相続問題をめぐり、一遍を殺そうとする事件が起こった。一遍は再度出家する。

文永8年（1271）、信濃の善光寺に参籠後、帰国。窪寺の草庵で二河白道の絵図を本尊として専修念仏の生活に入った。そして3年後、「十一不二の偈」を感得する。十一不二の偈とは、簡単にいえば、すべての人が必ず極楽往生できるという意味である。

その後、遊行の旅に出た。同行者は、妻の超一、娘の超二、下女の念仏房。一行は摂津国の四天王寺を皮切りに、高野山を経て、熊野神社の証誠殿に参籠した。

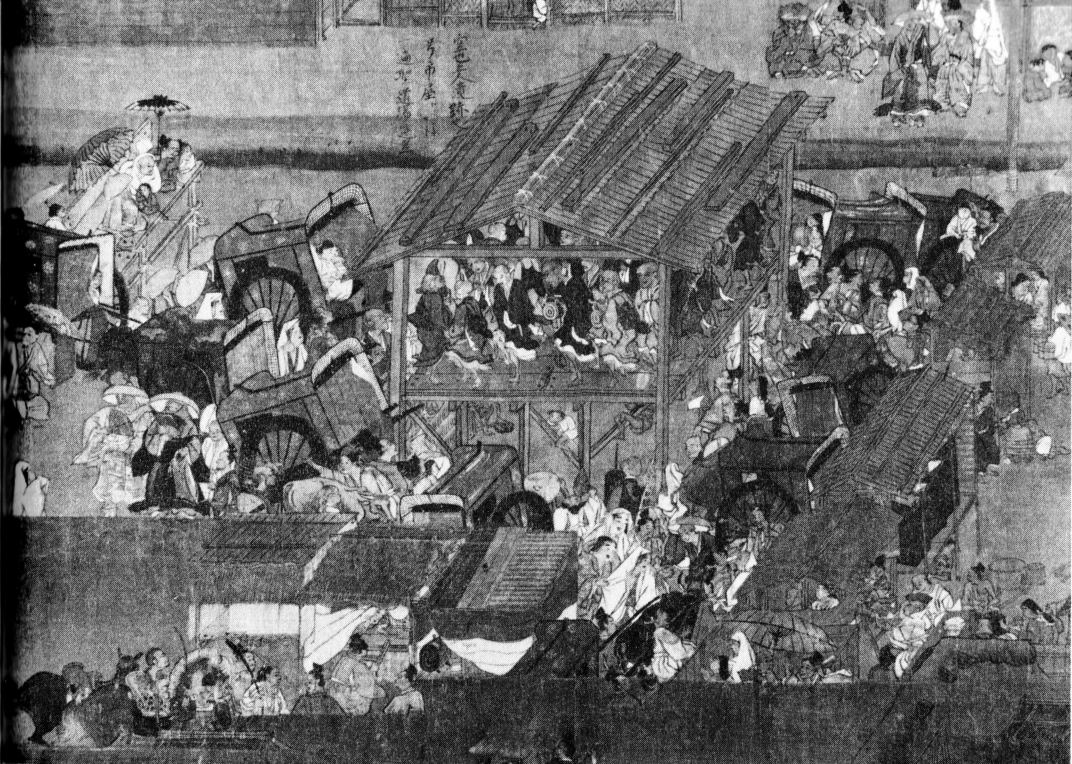
◉念仏札を配る特異な布教法

熊野は当時、弥陀の浄土に最も近い霊地とされていた。そこで一遍は熊野権現から次の神勅を得たという。

「御坊（一遍）の勧めによりて、一切衆生はじめて往生すべきにあらず。阿弥陀仏の十劫正覚に、一切衆生の往生は南無阿弥陀仏と決定するところなり。信不信を選ばず、浄不浄を嫌わず、その札を配るべし」

「その札」とは「南無阿弥陀仏　決定往生六十万人」と書かれた、往生を保証する念仏札で、一般民衆に根強い護符に対する信仰習俗を活用して一遍が考案したもの。また「六十万人」とは衆生全体のことである。

一遍は熊野への道中、念仏を称えてくれる人にのみ、その念仏札を配布していた。ところが、それは自分の思い上がりであり、分け隔てなく配るべきであるという意味づけを感得したのである。

つまり、誰でも阿弥陀仏によって往生が決定されているのであるから、阿弥陀仏を信じようが、信じまいが、そんなことはかまわない。また、相手が清浄の身であろうが、不浄であろうが、関係ない。いや、たとえ信を起こさずとも、もうすでに救われているのだからという、突き抜けた確信を得たのである。

⬆櫓の上で念仏踊りを行う時衆の出家者たちとそれを見守る民衆。（『一遍聖絵』東京国立博物館蔵）

とにかく、一遍は神道の神々に対しても、阿弥陀仏が仮の姿をとって現れたものとして熱心に崇敬した。一遍にあっては、神仏は完全に融合していたのである。

一遍はその心境を偈にして残している。

六字名号一遍法　十界依正一遍体
万行離念一遍証　人中上々妙好華

みずからの号たる「一遍」もここに由来する。あとの生涯は、遊行を重ねて、賦算（念仏札を配ること）することだけであった。

◉一所不在の諸国行脚

これ以降、一遍の歩みは、旅から旅への遊行に終始、北は奥羽国江刺（岩手）から南は大隅国（鹿児島）まで、日本のほぼ全土におよぶが、それは釈迦の成道後の旅と妙に重なって見えはしないだろうか。

さて、熊野下山後、一遍は京都、西海道を経て九州に行き、のちに時宗を組織して第二祖となる弟子の真教を得た。一遍は生前、教団をつくるという考えはなく、寺を造らなかった。

時代は蒙古来襲という未曾有の国難に直面していた。現実的にも国防のための厳戒体制が敷かれ、人々の間には末法思想が流行するなど、危機的な状況にあった。そうした時代背景と相まって、一遍のもとに参ずる出家や信者が飛躍的に増え始めた。

⬅一遍上人臨終の図。（『一遍聖絵』歓喜光寺、清浄光寺蔵）

驚くべきことだが、一度に280人以上の者が一遍について出家したこともあるという。一遍に帰依する者は、行動をともにする出家の道時衆と、在俗生活のまま念仏に励む俗時衆の2系統があり、さらに活動資金を提供したり、宿舎の手配を行うスポンサー兼マネージャー役の結縁衆がいた。一遍を聖と仰ぐ者たちは、時衆と称された。

弘安2年（1279）、信濃の善光寺に参詣後、佐久郡伴野の在家宅で、冒頭で述べた踊り念仏を初めて行ったという。踊り念仏はすでに空也系のものがあったが、時衆の正式な行儀として採り入れられると、圧倒的な勢いで全国に広まっていった。

なかでも、弘安7年の京都での踊り念仏は、大反響を巻き起こす。一遍は生き仏さながらのカリスマ的な人物として絶頂期にあった。人々が押し寄せるため、まったく身動きできないほどだった。

当時の記録には「貴賤上下群をなして、人はかえりみることあたわず。車はめぐらすことをえざりき」とある。一遍は弟子に肩車されながら、賦算したという。念仏札とは、まさに極楽浄土への往生を絶対保証する、空くじなしの当たり券にほかならなかった。

このように、現世利益の濃厚な賦算と念仏踊りを中心とした、一遍の底辺からの独特の布教活動は、浄土宗や浄土真宗などはまったく相手にならないほどに流行し、猖獗をきわめたのである。

さて、一所不在の諸国行脚を精力的に行っていた一遍も、さすがに長年の疲労の色は隠せなくなっていた。

それでも遊行に徹するという信念は変わらない。故郷の伊予国に帰り、菅生の岩屋に巡礼したのち、繁多寺に『浄土三部経』を奉納している。さらに讃岐国（香川県）から阿波国（徳島県）に遊行したが、体力の衰えは判然としていた。

一遍の最後の遊行の地は、兵庫・和田岬の観音堂。死期を悟ったのであろうか、「一代の聖教みな尽きて南無阿弥陀仏になりはてぬ」といい、所持していた書物をすべて焼き捨てた。

その後、弟子たちに心ゆくまで踊り念仏をさせると、身を清め、阿弥衣を着て静かに死を待った。その間、依頼に応じて西宮神社の神主に十念を授け、さらに播磨国淡河殿の女房に念仏札を与えている。

「わが亡骸は野に捨て獣に施すべし」と遺言した一遍は、正応2年8月23日、眠るように往生した。享年51歳。遊行を発願してから15年の歳月が経っていた。

蓮如（れんにょ）

巨大なる本願寺教団を組織した浄土真宗中興の祖

●浄土真宗の基本構造を築く

本願寺教団の中興の祖が蓮如である。彼なしには、今日の東西本願寺の隆盛はありえなかったとされる。

生涯で5度の結婚をし子供の数が27人。平均寿命が50歳そこそこの当時にあって85歳まで生き、ほぼ半世紀にわたって法主職に君臨。一向一揆を組織して宗教コミューンを導き、寂れはてていた本願寺教団を日本宗教界の最大規模にまで大成させた。その異常なまでのエネルギーとヴァイタリティは、類例を見ない。

しかるに、蓮如に対して、本願寺教団の大功績者であるとする半面、親鸞の精神を汚して教団を太らすことにのみ汲々とした化け物的な俗物という見方がある。毀誉褒貶がつきまとう蓮如だが、親鸞と同じ尺度で見ようとしても、彼の本質はつかめない。

教団運営と人心掌握術に抜群の才覚をもったカリスマ的人物である蓮如は、根っからの職業的宗教者であり、その宗教的資質は「弟子一人ももたず」「寺は小棟をむね」とする親鸞と対蹠的な地点にあるのは、当然なのである。

要するに、本願寺教団の強みは、親鸞と蓮如という2人の資質の異なる宗教的天才を抱え持ったところにあった。図式的にいえば、個人主義者の親鸞がおり、大衆主義者の蓮如がいた。その矛盾する2人を矛盾のまま連結して発展したのが本願寺教団であり、その構造は今も不変である。そして、あえて強調するが、その基本構造を造った男こそ、蓮如なのであった。

●跡目争いの末、第8世法主へ

蓮如は応永22年（1415）、本願寺第7世の父存如とその侍女（名前は不詳）の間に誕生した。存如20歳のときの長男である。その後、存如が正妻を娶ること

になった。それを知った蓮如の実母は、当時6歳の蓮如に鹿子の小袖を着せて、絵師にその肖像画を描かせたあと、本願寺から姿を消す。

当時の本願寺は「人せき絶えて、参詣の人ひとりも

●蓮如（1415〜1499）。室町時代の浄土真宗の僧。本願寺第8世にして本願寺中興の祖。諱は兼寿。信証院。諡号は慧燈大師。1465年、比叡衆徒の襲撃に遭い、京都から近江に逃れ、その後、越前に吉崎御坊を創設。晩年、京都山科に本願寺を再建後、大坂石山本願寺の基礎を築く。著書に『御文』『正信偈大意』など。

➡蓮如像。（西法寺蔵）

見えさせ給わず、さびさび」とした窮乏状態にあった。

蓮如はそうした苦境のなか、43歳まで部屋住みの生活を送りつつ、親鸞の遺著を中心に教義の研鑽を深めた。

長禄元年（1457）、実父が死去。蓮如は実父の正妻の子との間で、血縁の一家衆を巻き込む壮絶な跡目争いの末、本願寺第8世を継ぐ。

庶子の蓮如には形勢不利な戦いだったが、叔父の如乗との連携による猛烈な政治工作によって反対勢力を粉砕、その地位を勝ち取るのである。

さて、蓮如は27歳での結婚以来、27人（13男14女）の父となるが、子供をすべて政治的に利用して本願寺教団の拡張の布石ないし要とした。

結果的には、本願寺第9世を五男の実如に継がせ、他の12男を重要地点に配置し、娘を既存の有力寺院や新たに帰属した寺院に嫁がせるなど、己の血族を介在として本願寺中心の絶対専制主義の基礎を固めていく。まさに戦国武将の方法論である。

蓮如の布教は果敢であった。法主就任後、真宗では仏光寺派がもっと

⬆北陸での蓮如が本願寺教団の礎を築いた吉崎御坊跡。付近には東西両本願寺の別院があり、今なお篤い信仰の跡を留めている。

も繁栄していたが、同派は名帳に名を記せば、往生が決定されるという名帳絵系図による布教方法をとっていた。蓮如はそれを親鸞の教えに反する邪義異説であるとして徹底的に攻撃し排除した。

仏光寺派に限らず、真宗他派も同様の異端が蔓延していた。彼は奮然と排斥し、仏壇の本尊や名号に自ら裏書きを付して、精力的に布教した。同時に御文（御文章）とよばれる独自の文書伝道を行った。御文は他力念仏の真意をわかりやすく示した消息（手紙）形式の法語で、読む者に不惜身命の念仏者を自覚させるアジテーション的な効果をもっていた。

◉講を中心とした農民たちを組織

蓮如の努力で本願寺教団の勢力が強化され、各地に門徒が組織化されるに従い、比叡山衆徒は本願寺を既成仏教の敵と見なすようになった。寛正6年（1465）、比叡山衆徒が京都大谷本願寺を襲撃、蓮如は近江に逃げのび、以後、各地を巡錫することになる。

布教の拠所として農民たちを中心とした講がすでにつくられていたが、蓮如の布教とともに単なる宗教結社の枠を超え、自治単位となり、やがて一向一揆の組織的基盤となっていった。

来世の往生が約束されている彼らにとって死は恐れるに足らず、仏法を守るために徹底的に戦う決意があった。つまり武装蜂起すれば、強力な即戦力となるわけで、一向一揆の無敵の強さの秘密もそこにあった。

文明3年（1471）、北陸へ進出した蓮如は越前国河口庄の吉崎に坊舎（御坊）を建立。北陸地方は真宗高田派の地盤で、天台系の諸行を採り入れ、いわば異端的な要素があった。そこへ蓮如はあえて乗り込んだのだ。

両者は衝突し、結局、本願寺側が勝利して高田派は同地から一掃された。そこを拠点として蓮如は周辺地域を本願寺勢力で固めていった。

◉真宗王国の精神的支柱

歴史上、記録に残る大規模な一向一揆が勃発したのが、北陸進出後、17年目であった。蓮如を事実上、最

☗『蓮如上人絵巻』より荼毘の段。（本法寺蔵）

高責任者とする農民部隊の一向一揆は、小領主や土豪僧と連合しながら、加賀守護家の富樫政親と決戦し、完全な勝利をおさめたのである。まさに真宗王国の成立であった。以後、加賀は「百姓の持ちたる国」として1世紀にわたり門徒農民中心の自治国となる。

蓮如の真面目は、まさにここにあった。混沌たる戦乱の世にあって、搾取の対象としか見られることのなかった貧しい農民ら一般民衆の土壌に、本願寺教団という浄土往生の絶対保証機関、精神的支柱を骨肉化させ、彼らに生きる意味と力を与えたのである。

その秘訣は、蓮如その人のはかりしれない魅力にあった。法主でありながら、決して気取らず、豪放磊落。親鸞の難解な思想を咀嚼し、それをシンプルかつ熱っぽく何時間でも語り、相手を知と情の両面から念仏信仰でからみとってしまう強力な浸透力をもっていた。「救われようもない凡夫」としてうっちゃっておかれている者こそ、わが同朋であるとして、蓮如は心血を注いで働きかけた。その蓮如であればこそ、彼らもその教えを全面的に信じきったのだ。

一向一揆について詳述する余裕はないが、その歴史の生成と展開は、蓮如の歩み、すなわち本願寺教団の発展と軌を一にしている。一向一揆の影響は各地に波及し、それが絶項をきわめるのは、別項で述べる本願寺第11世顕如の石山戦争である。

晩年の事業として、蓮如は文明10年（1478）、京都山科に本願寺を再建した。その見事な荘厳は「仏国の如し」と称されたほどであった。その後、明応6年（1497）には、大阪のほぼ中央、戦略的にも重要地点の摂津国（大阪府）東成郡生玉庄に石山御坊（石山本願寺の前身）を建立する。

布教宣伝、教化拡大、権力維持に粉骨砕身し、大教団を造り上げた蓮如は、明応7年（1498）、病に倒れた。薬の服用を拒み、念仏を称えつつ、翌年85歳で往生。まさに完全燃焼の生涯であった。

顕如（けんにょ）

本願寺教団全盛期に君臨し信長と交戦した本願寺11世

←顕如御影。（西本願寺蔵）

●顕如（1543〜1592）。安土桃山時代の浄土真宗の僧。本願寺第11世。諱は光佐。本願寺初の門跡となり、本願寺教団史上、絶頂をきわめた。石山本願寺を拠点に織田信長と11年間戦ったあと、和睦。以後、本願寺は下降線をたどり、顕如の息子の代に東西両本願寺に分裂する。

●巨大なる真宗王国の頂点

「本願寺は日本の最大宗派で、庶民の圧倒的多数が信者である。宗派の代表者は妻帯し、その地位は世襲制である。信者は代表者を尊敬してやまず、その姿を見ただけで感涙にむせぶ。信者は多額の金銭を寄進するため、日本の富の大部分はこの僧が所有する。毎年、大法会を行う。参詣のため集まった信者らは、門で待ち受け、開門と同時に競って入ろうとするので、常に多くの死者が出る。このとき、死ぬことを幸福と考え、わざと門内に倒れて圧死しようとする者すらいた」

こう書いているのは、キリスト教の宣教

師ガスパル・ビレラである。ここに報告された宗派の代表者とは、法主就任後、7年目の顕如であった。

当時、本願寺は日本最大の宗派として宗教界の頂点にあり、しかも日本第一の肉山（裕福な寺）であったことがわかる。しかも、狂的に死を希求する信徒も少なからずいた。そうした命知らずの信徒の群れは、抜群の結束力と破壊力をもった一向一揆の原動力であったが、その頂点に顕如は君臨していたのである。

大坂石山本願寺で生まれた顕如は、父証如の死によって12歳で法務を継ぎ、永禄2年（１５４３）には正親町天皇の勅命によって門跡となった。門跡とは、日本の最高の寺格僧位のことである。経済的に困窮していた朝廷は、即位の式典を行うことができず、それゆえ、顕如を門跡に任命するかわりに、式典費用を提供してもらう政治的取引を行ったのであった。

そのころ、破竹の勢いで勢力を拡張していたのが、織田信長である。信長にとって一向一揆のエネルギーは、天下統一の大きな障害だった。信長は地方の一向一揆を弾圧しつつ、顕如に対しても執拗な圧迫を繰り返した。そしてついに対立が決定的になり、元亀元年（１５７０）、信長は数万におよぶ兵を率いて石山本願寺を攻撃、顕如も総力を結集し、一向一揆を率いて応戦した。以後、約10年にわたって石山戦争が続く。

この間、顕如は安芸の毛利氏など反織田勢力の諸大名と結ぶ一方で、伊勢や長島をはじめ、加賀や越前、紀伊や雑賀などの一向一揆を率いて奮闘した。石山本願寺は、広い寺域を有し、強固な防衛設備が整っていたため、信長も攻めあぐねていたのである。

だが、各地の一向一揆が信長に平定され、諸大名が次々と敗退を重ねるにつれて、石山本願寺は孤立化し、敗退は時間の問題となっていった。

和議を結ぶか、徹底抗戦するかで、内部的にも紛糾をきわめたが、結局、顕如は和議を決意した。徹底抗戦派であった長男の教如は、最後まで和議に反対したため、顕如に義絶された（信長死後、義絶を許される）。

顕如は正親町天皇に和議の仲介を依頼、石山本願寺を明け渡し、紀伊国鷺森に退去した。石山本願寺の敗退は、宗教勢力の政治的軍事的敗退であるとともに、念仏者の連帯運動の敗退でもあった。

顕如は鷺森を経て、泉州貝塚、大坂天満などを転々としたのち、文禄元年（１５９２）、豊臣秀吉により京都堀川七条の地を寄進され、そこに本願寺を再興（現在の西本願寺）した。それを見とどけたあと、顕如は脳溢血で50歳の波瀾の生涯を閉じた。

その後、本願寺は相続問題にからむお家騒動がもとで、秀吉や徳川家康の介入を招き、西本願寺（顕如三男准如）と、東本願寺（教如）の二派に分かれ、今日にいたっている。

妙好人の群像

◉庶民の世界から出た念仏世界の具現者たち

念仏世界を体得した在家の求道者、それを妙好人と呼ぶ。妙好人には本来「優れた人」という意味がある。それがとりわけ浄土真宗の篤信者という特別の意味をもつようになったのは、石見国の浄泉寺の仰誓が文政元年（1818）編纂した『妙好人伝』以降である。彼らのほとんどは、平凡かつ無学な一介の凡夫である。だが、純粋な信仰心の高さにおいてはとびぬけたレベルにあるといえよう。

土に還った親鸞の他力思想。そこから芽をふいた蓮華が妙好人なのである。

赤尾の道宗

妙好人の元祖。蓮如に帰依しその侍者をしていた伝説的人物

◎赤尾の道宗。生没年不詳。俗名は弥七。越中赤尾（富山県東礪波郡上平村字赤尾）に生まれる。

まず、ここで紹介するのは、道宗である。蓮如に熱烈に帰依し、その侍者をつとめるほどの篤信者だった。道宗はいう。善知識（蓮如）の仰せで不可能なことでも不可能と思うな。この凡夫の身が仏になるのだから、不可能なことがあるはずがない。近江の湖を一人で埋めよとおっしゃれば、それも引きうけよう――と。

家にいるときはいつも48本の割木を並べて、そのうえに寝ていた。理由は阿弥陀仏の四十八誓願をつねに忘れないようにしておくためであったという。

寝にくいときは、阿弥陀仏が衆生のために幾劫かの苦行を積んだということを思い起こした。それに比べれば自分の寝苦しさなど、月とスッポンであると考え、いつしか眠りにつくのであった。

⬆『道宗像』棟方志功作。（行徳寺蔵）

ともあれ、道宗は村の尊崇を一身に集めることになった。だが、近くに住む天台宗楢谷寺の和尚が、あんなものはニセモノだと考えた。道宗が屈み込んで草取りをしているところを、後ろから蹴飛ばしたのである。

すると、道宗はそのまま突っ伏して倒

れこんだが、何ということもなく、また、草取りを続ける。和尚は再び蹴飛ばした。だが、同じことであった。

和尚はたまりかねて「お前さんは蹴飛ばされても怒らないが、どうしてだ」と聞いた。

道宗は「前生の借金払いだ。まだまだあるかも知れん…」というばかりであった。

讃岐の庄松

近世妙好人の代表。鋭い機智に富む、無邪気なる聖者

図版＝『庄松ありのままの記』永田文昌堂刊より

◎讃岐の庄松（1798?〜1871）。讃岐国（香川県）大川郡丹生村土居で農業を行っていた。明治4年。73歳で死去。

「庄松はつねに縄を編み、あるいは草履を作り等致し居て、ふと、阿弥陀仏の御慈悲のことを思い出すと、所作を抛ち、座上に飛び上がり立ちながら、仏壇の御障子を押し開き、御本尊（阿弥陀仏）に向かって、曰く『バーアバーア』」。

『庄松ありのままの記』の一節である。

無学な貧乏人であった庄松は、子供が親に甘えるように、御本尊に甘えているのである。無邪気というか、純粋無垢というか、何とも名状しがたい信仰ぶりではあるまいか。

蒸し暑い夏の日のこと、庄松は田圃から帰るなり、仏壇から本尊を持ち出して、それを青竹の先に結びつけて、軒先に垂らし、そこで念仏を称えていた。

それを見た同行（門徒の仲間）が何をし

↑庄松、御本尊に向かって「バーア」の図。

ていうのかと聞くと、「親様（阿弥陀仏）もこれで涼しかろう…」と平然と答える庄松であった。彼には、ほかの妙好人にもいえることであるが、世間一般の常識は通用しなかった。世間の目とか、習慣とは関係のない、ありのままの、生一本の時空軸のなかに生きていたのである。

住職との問答でも峻烈である。「うちの御堂の御本尊様は生きてござろうか」と住職が聞くと、庄松は、「生きておられるとも」という。「でも、ものをいわれぬではないか」と畳みかけると、「ものを仰せられたら、お前らは一時もここに生きておられぬぞ」と返してくる。

機鋒が鋭すぎて、住職のかなう相手ではないのだ。

庄松が臨終の床についた。庄松は生涯独身であったため、一人で寝ていたが、そこへ同行の市蔵が見舞いにやってきた。市蔵は庄松に「同行らと相談したんだが、お前が死んだら、墓を建ててやるから、あとのことは心配するなよ」といった。

すると、庄松は「おれは石の下にはおらぬぞ」と答えた。

阿弥陀仏に救われている身なので、葬儀はもとより、墓なども一切不要の境地にあったのである。

物種吉兵衛

はげしい気性をもつ変わり種。田畑を売ってまで求道に専心

写真＝『妙好人物種吉兵衛語録』より

◎物種吉兵衛（1803〜1880）。享和3年、大阪府泉北郡浜寺町大字船尾村（堺市浜寺船尾町）に生まれる。明治13年、77歳で死去。

妙好人といえば、一般に好々爺然としたイメージがあるが、物種吉兵衛は気性が激しいタイプであった。

村相撲では一番というほどの堂々たる体軀で、中流の農家であったが、「死」の問題に煩悶し、田畑を売ってまで求道した経歴を持つ。

ある年の5月のこと。日を決めて蒔いた種の上に土を盛りかける「とりこみ」という農作業がある。それをしないと、その年の収穫はひじょうに不作になるといわれる。ある村人が「とりこみ」に行こうとして、ちょうど吉兵衛とばったり出くわした。

吉兵衛は「お前どこへ行くのか」

その村人は「とりこみや。これは今やり損なったら取り返しがつかないことになるのでなあ。あなたはどこへ行きなさる」

「寺詣りに行くのや。これも今やり損なったら万劫も取り返しがつかぬでなあ」

また、吉兵衛は同行に食べさせるものがあれば、何でも心を込めて味がよいようにして食べさせたという。

清次郎という同行にいうには「私がこのようにして食べてもらうのは見栄や伊達じゃない。これが本当に最後やと思うと、おいしく食べてもらいたいわや」

物種吉兵衛はいう。「今日の日はわが生

涯にもう一遍暮らし直しができぬ、またとない大事な日であると思うて、味おうて暮らしておくれ。朝が昼となり、昼が晩となり、片時も同じところにじっとしておられぬ。一息一息放り出されているのや」

一期一会という言葉があるが、物種吉兵衛にあっては、いつも「これが最後」という立場で貫かれていた。それは生を豊かにするための極意であり、そうした生を与えて下さっている阿弥陀仏への報謝の表現にほかならなかったのである。

因幡の源左

柳宗悦ら知識人によって高く評価された自然法爾の人

写真提供＝願正寺

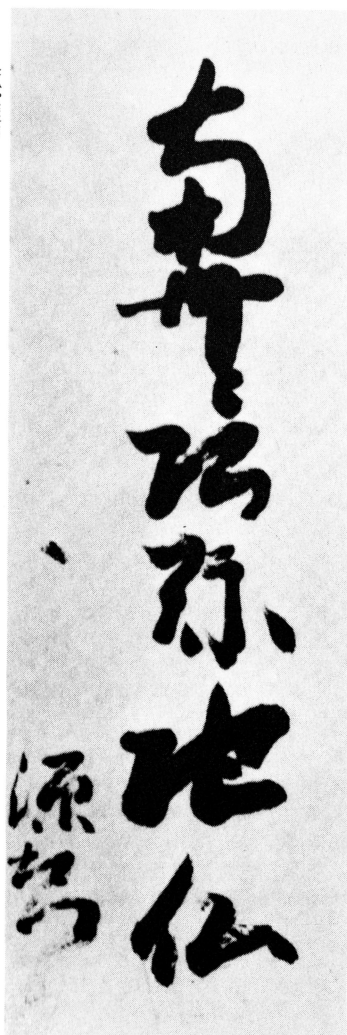
◎因幡の源左（1842〜1930）。本名は足利喜三郎。鳥取県気高郡山根村（青谷町山根）に生まれた。家業は紙漉。昭和5年89歳で死去。

➡源左自筆名号。

因幡の源左は、一灯園の灯主・西田天香や美術評論家の柳宗悦などが敬い慕った人物として知られる。

源左は同行と本山に詣でたことがある。同行が土下座して拝むのを見て、源左は「親さんの膝元だげなあ、なにもそげに頭を下げでもええだがのう」

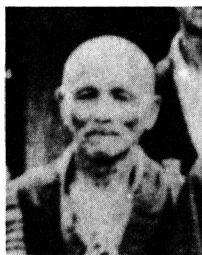
また、源左は仏壇の前でよく居眠りをしていたが、行儀が悪いと注意する人に対して「親さんの前だげな、なんともない……」と超然としたものだった。

源左が土砂降りの夕立にあって、びしょぬれになって寺にきたことがあった。願正寺の和上が「爺さん、ようぬれたのう」と声をかけると、源左は「有り難う

ござんす。御院家さん。鼻が下むいとるで有り難いぞなあ」

たしかに鼻の孔は下についているから、雨水は入らない。だが、普通では、考えつかない言いようである。それが、自然の発露のように、ふっと出る。つまり、作為的ではないのである。自然のまま、自然法爾、それが妙好人たる源左の特徴でもあった。

村役場の職員が源左に「お前は有名な人じゃで、何か記憶していることがあればいうてくれ。書き留めておくから」と聞くと、源左は「覚えているものがあるけ、書いときたけりゃあ、『南無阿弥陀仏』と書いてごしなはれ」といった。

「南無阿弥陀仏」、それは昭和5年2月、89歳で死去した源左のすべてであった。源左は自身を称して「底下の泥凡夫」といっていたが、泥土から生えきたったものこそ、ほかならぬ蓮華であった。

妙好人の妙好とは、白い清浄な蓮華のこと。「底下の泥凡夫」は妙好人となり、その遺薫は、今も馥郁として漂っているのである。

浅原才市

妙好人中の妙好人と称された、信仰が産んだ念仏の詩人

写真提供＝安楽寺

◎浅原才市（1850～1933）。嘉永3年、石見国邇摩郡大浜村大字小浜（島根県邇摩郡温泉津町小浜）に生まれる。昭和8年、83歳で死去。

世界も愚痴でわしも愚痴で
阿弥陀も愚痴で
どうでも助ける愚痴の親さま
なむあみだぶつ

わしが阿弥陀になるじゃない
阿弥陀の方からわしになる
なむあみだぶつ

妙好人が詩をつくったらどうなるか。才市はその希有な実例である。才市の詩は技巧や彫琢を超えたところにある。自然のままであって、宗教的に奥深く、一種の妙技としかいいようのないものだ。

才市は58歳ごろまでは船大工、その後は下駄作りを行っていた。暮らしぶりは慎ましく、儲けたお金は、津波や冷害などの罹災地への見舞金として送ったり、本山の西本願寺へ布施をしたという。

才市が詩をつくり始めたのは、いつごろからだったのかは判然としない。

一説には、30歳で九州の博多に出稼ぎに行き、「今親鸞」とも称せられた高僧、七里恒順から直接教化されたことがもとになったといわれる。

詩は木を削る仕事の合間に鉋クズなどに書きつけられた。それ以外にも、散歩の途中や、仏前での勤めなど、行住坐臥の折々に、あたかも滾々と湧き出る泉のように、口を衝いて出た。詩興が浮かぶと、忘れないように、自分の腕や手の甲

にも書いたこともあったという。

そうした詩をノートに丹念に清書するようになるのは、大正2年、老境に入った64歳以降である。生涯に残したノートは100冊ほどにものぼる。書かれた文字は、彼独特の当て字や符牒のようなものが多く、字面を見れば、文字の読み書きが満足にできなかったように見える。

そのため、才市は無学だったとか、いやそうではなかったという議論がある。だが、そうした論議はこの際、関係ない。なぜなら、詩の真実がすべてを語っているのだから。自分独り用の覚書から出発した才市の詩は、きわめて個人的なものでありながら、同時に普遍的なものになっているのである。それゆえ、万人の心を打ちつづけてやまないのだ。

ともあれ、才市が有名になったのは、戦後、鈴木大拙が内外に紹介したことが大きい。大拙は才市について「実に妙好人中の妙好人である」と絶賛している。

わしの　お礼は　あなたと　話し
話しすること　なむあみだぶつ

⬆ノートに書かれた才市の口あい（即興的にうたわれた詩）。

*　　　*　　　*

なむあみだぶつ　なむあみだぶつ
をも（思）われて　をもひとられ（思い摂られ）て　なむあみだぶつ
○りん十わ（臨終は）　ここ二（に）ある　なむあみだぶの
いきのかよい（息の通い）で　なむあみだぶつ　なむあみだぶつ
○なんまんだぶ　なんまんだぶ　なんまんだぶわ（は）ふしぎ
なをしひ（お慈悲）　め二も（目にも）　みゑの（見えぬ）　こゑ（声）でしらせて
なんまんだぶ　なんまんだぶ　なんまんだぶ

近代に生きた念仏者

◉近代化の苦悩の中で新たな信仰世界を提示した巨人たち

写真提供＝朝日新聞社

清沢満之

親鸞教学に西欧哲学的見地から
アプローチした明治宗門改革運動の旗手

◎清沢満之（1863〜1903）。真宗**大谷派の僧。初代の真宗大学学監**（大谷**大学学長）。著書に『宗教哲学骸骨』『臘扇記』**など。

維新後、廃仏毀釈の激動を経て、ほとんどすべての宗門は、信仰を国家主義体制の従属機構として自派の維持運営をはかっていた。そうした宗門の状況、なかでも自ら属する真宗大谷派のそれに、異議申し立てを行い、親鸞の原点への回帰を強調した精神主義を打ち出すなど、宗門改革運動の旗手として活躍したのが、清沢満之であった。

清沢が最後に到達した精神主義の地平は「（阿弥陀）如来の奴隷となれ。其の他のものの奴隷となること勿れ」（明治36年日記）というラディカリズムそのものであった。だが、その軌跡は一朝一夕になされたものではなかった。

幕末期、尾張徳川家の足軽組頭の家に生まれた清沢は、幼少時から神童と謳われるほど優秀であった。明治維新の余波で家は逼迫し、僧籍があれば、東本願寺育英教校で学べるという話を聞き、16歳で得度、同校に入学する。

その後、東大哲学科に入り、フェノロサから哲学を学ぶ。さらに東大大学院を卒え、明治21年、わずか26歳で、本願寺が京都府から委託経営していた京都尋常中学校の校長に就任した。まさにエリート街道まっしぐらの、前途洋々たる人生が開けていた。

ところが、求道精神が頭をもたげ、校長職を退任。自己の宗教的自覚の確立を目指し、厳格きわまりない禁欲的な修行生活を敢行しつつ、親鸞の研究に没頭した。宗門の勧学寮の伝統教学を無視し、西洋哲学的な見地から学問的にアプローチしていったのである。

当時の宗門は政争渦巻く魔窟であった。封建時代そのままの寺檀制度と葬式仏教のうえに胡座をかき、近代化への改革などはないに等しかった。そこへ原理主義的な宗門改革運動を起こしたものだから、当然、宗門当局と激しく対立した。

←清沢満之（中列中央）と浩々洞の若者たち。明治33年真宗大学の学監となったおり、満之は彼を慕う若者たちと共同生活を始め、その宿舎を浩々洞と名づけた。

だが、宗門内の知識人に支持を得たものの、全国の門徒（信者）からはほとんど相手にされず、いったん運動を退き、紆余曲折を経て、東京へ行く。

清沢はそこで「予の三部経」の研鑽に没頭する。それは『阿含経』『エピクテタス語録』『歎異抄』であった。『浄土三部経』も『教行信証』も『御文』もあえてあげないところに清沢の面目躍如たるものがある。宗門で第二義的に見られていた『歎異抄』は、清沢満之によって再発見され、重視されるようになったのである。

清沢満之は肺結核のため、明治36年、41歳の若さで没したが、晩年の4年間で自らの運動体の核を造り上げていた。その運動体からは、錚々たる弟子たち、たとえば、暁烏敏、佐々木月樵、多田鼎、高光大船、金子大栄、曽我量深などが輩出した。

彼らは、清沢が提示したフォーマットを更新させ、発展させていくことになる。そして結果的に、その運動体の精神が、今日の宗門の教学の中枢を担うにいたっている。その影響はいまだ衰えていないのである。

清沢満之の精神主義は、一宗派の枠内にとどまるものではなく、宗門の内外に反響を及ぼした。

例をあげれば、宗外における親鸞の再評価の動きである。親鸞は、道元などと並んで日本を代表する宗教思想家のひとりとして宗派を超えて研究対象になっているが、世界的視座に立ってその道をつくったのが清沢であった。それまで親鸞は、対外的には「愚民の宗祖」としてまともに扱われることなく、埋もれていたのである。

大谷光瑞

親鸞の血脈を引く行動的門主。
生来の行動力で仏教東漸の経路を踏査

写真提供＝朝日新聞社、甲南学園

◎大谷光瑞（1876～1947）浄土真宗本願寺派第22世門主。中央アジアを探検踏査。終戦を旧満洲の大連で迎え、昭和22年引き揚げるが、翌23年死去。享年73歳。

大谷探検隊を組織して中央アジアを探検し、「一代の寵児」ともてはやされた異色の門主が、大谷光瑞である。中央アジア探検は明治35年から大正3年にかけて3度行われたが、その目的は未知の仏跡と経典を探し求めつつ、仏教東漸の経路を踏査することにあった。

第1回の探検のみ簡略に記せば、次のようになる。明治35年、ロンドンを出発、ベルリン、モスクワを経て、中央アジアに入った。阿育王の碑を調査したのち、鹿野苑、ブッダガヤ、王舎城、霊鷲山などを巡拝。だが、カルカッタで父・光尊の死を知らせる電報を受け取り、急遽帰国。西本願寺第22世の法灯を継いだ。

探検とは別に建築にも凝った。自ら設計した二楽荘は、神戸六甲山に建てられたが、完成するなり、誰もが驚いた。それも道理で、インドのアクバル大帝の居城を模したという突飛な外見をしていたからだ。

光瑞のやることは、すべて大胆不敵であった。思い立ったが吉日、金に糸目をつけず、どんな困難なことでも、不退転の一大勇猛心で断行、邁進した。未来先取り指向が強く、過去を振り返らない。それが彼の持ち味であったが、彼が勢い込めば込むほど、現実指向の宗門人と乖離し、その溝は深まるばかりであった。

そして大正3年、西本願寺執行部を巻き込む疑獄事件が発生、事態は一変する。

光瑞は責任をとり、すべての地位と肩書を辞して海外放浪の旅に出る。結局、彼が手掛けたものは、すべて中絶。畢竟すれば、未完の大器であった。徳富蘇峰は、「天は彼に凡ゆる物を与えた。ただ不幸にも彼には、厳師と争友とを恵むことを忘れた。……彼にいかなる欠点があったとしても、我等は彼の長所美点のために、殆どこれを看過せしむるに至った」と締めくくっている。

⬇大谷光瑞が建てた二楽荘。奇抜な外観は人々を驚かせるには十分であった。

写真＝『村田静照言行録』百華苑刊より

村田静照

異安心に問われた近代の大念仏者

◎村田静照（1855〜1932）。真宗高田派の僧。三重県津市一身田町の明覚寺住職を務めた。

明治の念仏僧のなかでもたぐい稀なる異僧が、村田静照である。真宗系の著名な僧侶は圧倒的に理論家や思想家が多いが、それに対して村田静照は高声念仏で名をなした。博多が生んだ近代の傑僧・七里恒順を師匠に持つ静照は、文字通りの最後の大念仏者だった。

その特徴は、破鐘のような大音声を発して念仏を延々と称え続けるところにある。一日3回、朝は8時から12時、昼は2時から5時、夜は8時から12時まで、延べ11時間、獅子吼咆哮するのである。怒鳴るように念仏を称えるのは法然のころからあったが、それにしても静照の念仏は超絶的であった。

その静照が異安心に問われたことがあった。彼が大声で唱導する高声念仏もさることながら、それに唱和する信者の念仏があまりに喧騒をきわめ、異端視されたのである。信者のなかには「ナーナー」「ダーダー」「ナンナン」「イーセイーセ」と称える者もおり、とても六字（念仏）に聞こえないということもあった。

また、静照が高声念仏の合間に思い浮かんだ感想を話したりすることも異解とみられたようである。

だが、静照は頓着しない。「念仏は南無阿弥陀仏の事。南無阿弥陀仏とは御阿弥陀様の事。御阿弥陀様とは我々を助けて下さる事。その御礼御報謝に念仏申す事。是だけでよろしいなあ……」

とうてい異安心が入りこむ隙などない。また、こうもいう。「われわれは這い児でその這い児が道理や理屈をこねまわすことはいらんことで……南無阿弥陀仏」。小賢しい教説は、すっぽりと切り捨てた。

晩年、伊勢に村田静照ありという評判が高くなった。東京から講演依頼も来るようになった。しかし静照は「話を聞きたければ、わしのところへこい」と自坊を離れることはなかったという。

柳宗悦

美学的見地から、他力思想や妙好人を研究・紹介した民芸運動推進者

写真提供＝日本民芸館、毎日新聞社

◎柳宗悦（1889〜1961）。日本民芸館創設者。美術評論家。思想家。著書に『妙好人』『南無阿弥陀仏』などがある。「美醜を越えたその仏性に帰れ、この本

然の性を離れて真実の美はない。かく教えるのが美の宗教である」

民衆の生活に深く根ざしたところにこそ、本当の美の顕現があるとして、はば広い民芸運動を展開した柳宗悦が、その著『美の法門』で述べた「美の一宗」の宣言文である。

「美の一宗」は、柳によれば、『浄土三部経』のひとつ、『大無量寿経』に示された阿弥陀如来の四十八願のうちの第四願に由来するものであった。

すなわち「もし私が仏となるとき、私の国の人たちの形や色が同じでなく好き者と醜き者とがあるなら、私は仏になりませぬ」

この誓願に触発された柳は、上記の「美の一宗」を唱導するにいたったのである。それはとりもなおさず、自身の他力念仏信仰を表明するものであった。

昭和23年、柳が『美の法門』と題した講演を終えると、全身を紅潮させた男が、柳のもとに駆け寄ってくるなり、抱きついてきた。

その男こそ、版画家の棟方志功であった。棟方は柳の講演に感激のあまり、溢れ出る涙をぬぐおうともせず、「先生、有り難いことです……」といって、むしゃぶりついてきたのである。

これにはさすがの柳も感きわまり、あたり憚ることなく、抱き合いながら号泣したという。

棟方志功は、柳宗悦と出会うことによって、「美の一宗」の信徒となり、仏教的主題に縄文的ともいわれる力強さを加えた、前人未踏の美的境地へと一路邁進する。

⬆制作中の棟方志功(1903～1975)。青森県に生まれ、小学校卒業後、家業の鍛冶職を手伝い、裁判所の給仕を勤めるかたわら画家を志す。上京後木版画を手がけ、柳宗悦らとの出会いにより仏教的世界に開眼。第2次大戦後には日本板画院を創立。1956年にはベネチアビアンナーレ展で国際版画大賞を受賞。

⬅閻魔王。（六波羅蜜寺蔵）

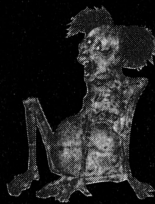
地獄の章

人間の宿業が織りなす現世の地獄模様

文＝花咲一成

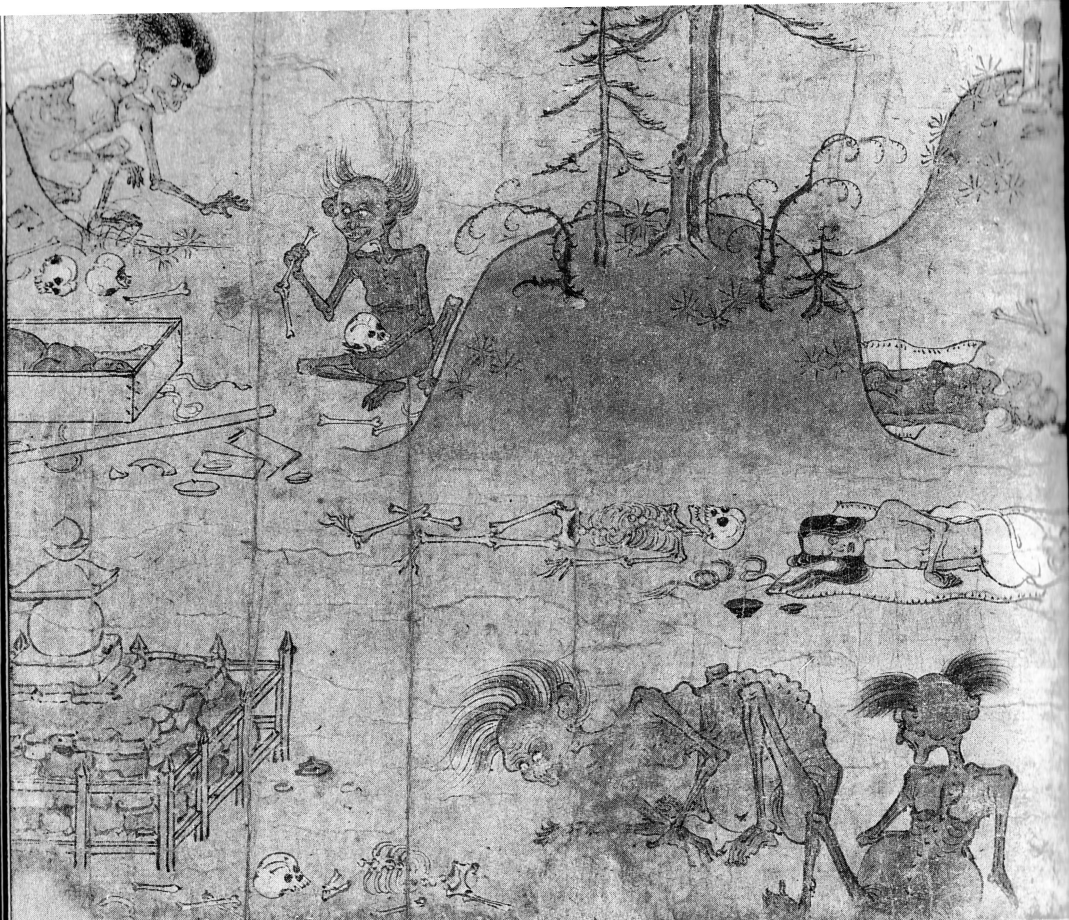
仏教の地獄観が浸透していった背景には、荒廃と阿鼻叫喚と死臭に満たされて、無数の地獄絵と化した現実の生者たちの世界があった。そこには、閻魔大王のような公正なる審判者は存在せず、理不尽で救い難い苦しみだけが、人々を襲っていたのである。

末法という地獄

仏の教えといえども永遠ではなく、やがて滅びる。仏法者自身によるこの予言を、人々は混乱の世と重ね合わせた。行く手には破滅のみが待つと確信したとき、世相はいよいよ救いがなく、凄味を帯びて目に映ったのである。

宗教の堕落……世俗化し腐敗する僧侶

●仏法が消滅に向かう暗黒の世

末法とは、ブッダの開いた仏法の教えが空しく滅び去る時期をいう。それが具体的にいつの〝時〟を指すかについては、定説はない。

中国仏教の影響下にあった日本では、釈迦の入滅後1000年間はブッダの教えが正しく受け継がれ、成道する仏弟子

⬆墓場の疾行餓鬼。病人の食物を横取りした者などの、来世の姿とされる。(『餓鬼草紙』東京国立博物館蔵)

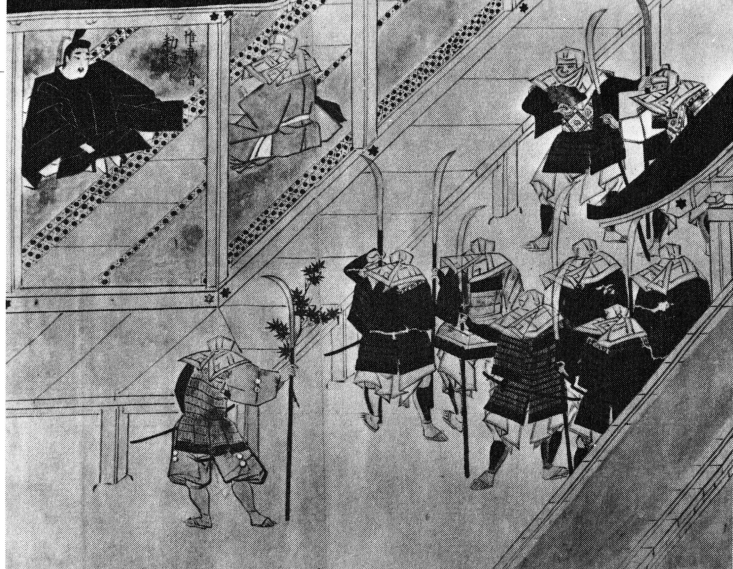
も出る「正法」の時代、それから1000年は、形だけを真似た修行が行われるが、内実がともなわないため、成道するものの出ない「像法」時代、それから以後が、形ばかりの法すら滅びていく「末法」時代で、さらに完全な「法滅」へと続くと理解され、その末法突入は永承7年(1052)と考えられていた。

では、像法、末法の時代には、どんなことが起こるのか。僧侶にかぎって見ていくと、まず像法時代の僧侶について『涅槃経』はこう記す。

「形は戒律を保っているようで、わずかに経典も読むが、その実、飲食を貪って我が身を養い、袈裟を着てはいるが、猟師が獲物を狙い、猫が鼠を捕ろうと様子を探っているようなものだ。他人に対しては『私は悟りを得た』と高言し、賢人や善人を装うが、内心には貪りと妬み心がうずまいている」(大意)

末法の僧にいたると、堕落はいっそう激しくなる。

「僧侶は(出家の証である剃髪すら行わず)髪や髭を蓄え、爪を長く伸ばす(奢

P.78の図=『餓鬼草紙』より部分。(東京国立博物館蔵)

⬆天皇からの使者に対して強訴する、興福寺の僧兵たち。(『天狗草紙』模本より部分、東京国立博物館蔵)

侈・遊興を意味する)。もろもろの教えも忘れ去られるが、このとき虚空に大声があって、大地震が地上を襲い、解脱のための経論もことごとく消え去るだろう」(『大集経』、なおこの経では末法という表現ではなく「闘諍堅固」という表現になっている)

古人は、こうした経文を、たんなる比喩や御伽話の類いとは受け取らなかった。というのも、現実は、まさしく経文に描かれたとおりに推移していたからである。

◉僧の質の低下

仏教の唯一最大の目的は、衆生済度にある。が、日本の仏教の目的は、受容の当初から国家鎮護(=王家守護)に置かれており、奈良、平安を通じて、仏教はパトロンである天皇・公家と密着することによって、権勢を拡大していった。

僧侶が力をもち得た理由は、3つあった。第1は宗教的な権威、第2は豊かな布施や荘園などに裏づけられた比類のない経済力、第3は僧籍をもつ多数の有力者や子弟の存在がそれである。

それなりの家の出でなければ僧としての出世は難しいとはいえ、農民の出でも僧侶にはなれた。そして、僧になれば食いっぱぐれはなかった。出産や、病気、葬式、日照り、飢饉、戦争などがあるたびに、僧には祈禱・占いなどの出番があり、布施が入る。おまけに彼らには、租税免除の特典があった。

だからこそ、極貧の境遇にあえぐ農民など下層民は僧侶にあこがれ、出家を切望した。もともとは厳しい修行期間と国家試験を経たうえでなければ僧侶になれない規則だったものが、東大寺などの大寺が続々と造立され、その維持に多くの僧侶が必要になるなどの理由から、規制がゆるんだ。

さらに9世紀にいたって、寺院ごとに毎年一定数の者を出家させる制度(年分度者の制)が定められると、寺側は好き勝手に僧侶を濫造することが可能になった。そのため、課役から逃れるために勝手に髪を落とす農民らが相次ぎ、僧侶の質はいよいよ低下した。三善清行によると「天下の人民の3分の2は坊主頭だ。僧侶はみな妻子を蓄え、僧侶なら口にで

きない生ぐさものを食らい、形は仏教修行者でも心は人でなしにほかならない」という状況が出現していったのである。

●僧兵による強訴と殺戮

これはまさしく、経文にある像法末から末法にかけての僧の姿そのものだった。それを一層きわだたせたのが、僧侶による横紙破りの強訴である。

先にも述べたように、僧には宗教的な“権威”と王侯貴族をもしのぐ“財力”、そして“人脈”があった。

が、さらに彼らは“武力”までも我がものとした。下級僧侶や寺の使用人らで組織する「僧兵」がそれである。

彼らは自分の寺の鎮守神の神木や神輿をその先頭にふりかざして入洛し、朝廷を脅して自己の主張を通そうとした。

この強訴は、院政期から南北朝時代の間に、実に百数十回も行われたといわれるが、神木を持ち込んでの強訴の初めは1093年。興福寺の僧兵らがこれを行い、神輿をかついでの強訴は、1095年に延暦寺が行ったのを初めとする。

これら僧兵は、宗教的な修行とは何のかかわりもない寺院の権利を守る用心棒であり、ゴロツキであった。

彼らが行ったのは強訴だけではない。しばしば仏門同士で戦い、火を放ち、血で血を洗う修羅場を演じ続けた。当時、日本仏教の中枢として権勢を誇っていた延暦寺が、最もラディカルな僧兵の巣窟だったのだから、仏教がいかなる状態だったかはおのずと察しがつくだろう。

永久元年(1113)に起こった「永久の強訴」の対応に苦慮した朝廷が、石清水八幡宮の神に救いを求めた際の祈願の宣命には、こう述べられている。

「このところ、僧侶は貪婪を本として、公私の田地を横領したり、上下の財物を掠め取っている。……(彼らは)ただ人民を滅ぼすだけではなく、同じ仏に仕える者同士で果てしなく戦い合う。(本来行うべき)学問を投げ捨てて武器や兵士を蓄え、袈裟は脱ぎ捨てられて甲冑姿。……(出家でありながら)弓矢を友とし、矢を射たり石を投じることをもって朝夕の遊びとしている。そのために学問の場は戦場と化し、修行の場は戦のための陣地になっている」

これが古代末期から中世初頭にかけての僧侶の実態であり、仏教の現実であった。仏法は、まさに地に堕ち、滅しようとしていた。しかし、地獄はこれだけではなかった。

浄土教を知るキーワード①

【往生】

念仏の功徳により、死後に阿弥陀仏の浄土である西方極楽浄土に往き生まれること。浄土教における究極の目的である。もとは、他の仏の浄土もあわせた諸々の浄土に生まれることを指したが、阿弥陀浄土信仰の隆盛にともない、西方浄土往生のみを指すようになった。換言すれば、往生すなわち六道の迷いの世界を離れることであり、生死を超越した絶対永遠の生を意味する。

上図＝『餓鬼草紙』より部分。（京都国立博物館蔵）

政治の混迷……おごる貴族と台頭する武士

●貴族の欲望の果てにあった浄土

権力は己の栄耀栄華を永遠なものにしたいと願う。これはいつの時代でもかわらぬ権力の生理といっていい。

藤原道長が自分の娘を次々と天皇家に嫁がせたのも、己が築きあげた一門の繁栄を不動のものにしたいという願いからだったが、こうした欲望がさらに募ると、死後の世界までも生前同様、あるいはそれ以上のものにしたいと考えはじめる。

浄土思想が多くの平安貴族を魅了した背景には、こうした動機がまちがいなく存在していた。華麗な極楽浄土は、ごく一握りの権力者の栄耀栄華を霊界へ移写したものにほかならなかったのである。

「この世をば　我が世とぞ思う望月の
欠けたることも　無しと思えば」

と歌った道長が、胸の病に苦しみ、己の人生の先行きに不安を覚え出してから阿弥陀信仰にのめりこんでいった動機も、ここにあった。

道長はその権力をフルに活用して壮麗無比な法成寺を造立し、臨終の際には仏の手と結んだ蓮の糸を握って極楽往生を願いながら冥土へと旅立っていったが、それからわずか31年後の康平元年（1058）には、道長の栄華の象徴ともいうべき法成寺の一切が灰燼に帰した。

古代・中世人が末法の始まりと考えた永承7年（1052）から、わずかに6年後のことである。

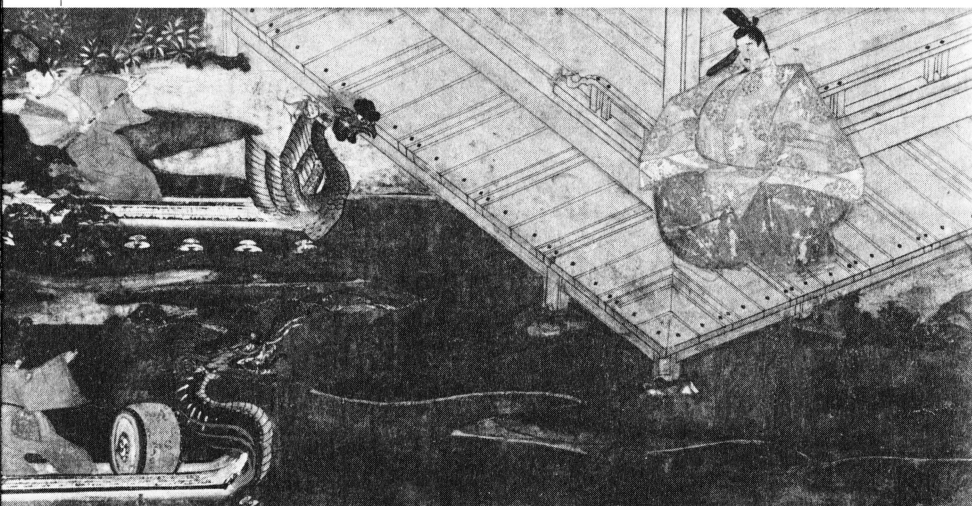
●武力による政権争いの激化

現世における栄耀栄華は、いつかは消え去る。壮大な伽藍も、繁栄を極めた王城も、ついには瓦礫と化す。にもかかわらず、権力はそれを必死に押しとどめようとし、己だけでも変わらぬ栄華を維持しようと心を砕く。

とりわけ、天皇、公家という伝統的な勢力に、新たに台頭し始めた武家、および、武力と財力を誇って既得権の維持とさらなる拡大を画策する仏教勢力が拮抗した院政期以降、権力内部での覇権争いは陰湿・熾烈を極めた。

院政期は、通常、白河上皇が院として実権を握った1086年から、平家が滅亡した1185年までを指すとされる。

この間に、骨肉あいはむ王家の内紛、保元・平治の乱が相次いで勃発。崇徳上皇が讃岐に流され、平家と源氏も2派に分かれて合戦し、息子が父や弟の首をはねるといった地獄絵図がいたるところで展開された。

鳥羽上皇の死を契機として起こったこの内紛を、『愚管抄』は「鳥羽院失せさせ給て後、日本国の乱逆ということは起こりて後、むさ（武者）の世になりけるなり」と嘆いたが、その武者のうち、最初に覇権を握った平家も源氏に倒されて滅亡、権力の中心は、猫の目のようにめまぐるしく変わっていった。これらのこ

⬆饗応のために造らせた龍頭鷁首の船を見る藤原道長。（『紫式部日記絵巻』藤田美術館蔵）

とが、院政期100年の間に、次から次へと起こっていったのである。

琵琶法師が哀調を帯びた調子で「諸行無常の響きあり」と謡う『平家物語』の栄枯盛衰は、けっして文学の世界の話ではない。それはだれもが目の当たりにしている現実であった。

藤原道長が阿弥陀浄土への往生を願って彼岸へと旅立っていったように、源平の合戦で敗れた平家一門は、「南無阿弥陀仏」と記された無数の旗印とともに、壇ノ浦に沈んでいった。そのなかには、8歳の安徳天皇や二位の尼（清盛未亡人）、建礼門院（安徳天皇生母）の姿もあった。

死に臨んで阿弥陀の慈悲による往生を願った平氏や、保元・平治の乱の敗者、その他、有名無名の亡者たちは、はたして往生したのだろうか。

人々はそうは考えなかった。これら亡者は、その無念を晴らすために地獄の鬼神の眷属となり、あの世から地上に干渉してくる——人々はそう想像し、怨霊の脅威にうち震えた。

人殺しをなりわいとする武者が実権を握る現実は、鬼が炎の剣や槍で罪人を責めさいなむ地獄の姿と重なった。度重なる都の炎上も、地獄の業火と変わらなかった。地獄と現世は地続きになった。

かくして、末法の闇は、ますます深まってゆく——。

浄土教を知るキーワード②

【浄土門】

中国浄土五祖のひとり道綽が、釈尊の教えを2つに分類したうちのひとつ。往生浄土門・他力門ともいう。阿弥陀仏の本願を信じてすがり、極楽浄土に生まれ、浄土にて悟りを得ようとする教えと実践のこと。浄土教の依って立つ原理である。この世で難行を積み、自力で悟りを得ようとする「聖道門」（天台宗・真言宗・華厳宗・禅宗など）と対比される。

P.82の図＝『餓鬼草紙』より部分。（京都国立博物館蔵）

徘徊する鬼神……災厄と結びつく亡者

⬆『崇徳上皇像』。江戸末期から明治にかけて活躍した画家・菊池容斎の作。鬼気迫る崇徳上皇の姿をリアルに描いている。（金刀比羅宮蔵）

●怨霊になった崇徳上皇

鬼は、もともと都を徘徊していた。桓武天皇以来の平安京と怨霊・鬼神は、切っても切れない関係にあった。

なかでも、古代から中世にかけて最も恐れられたのが、父である鳥羽上皇と終生憎みあい、上皇の死後の権力争い・保元の乱で讃岐に流された崇徳上皇の怨霊であった。

生前、崇徳は都への帰還を切望していた。亡き父・鳥羽上皇の菩提を弔うために、己の血で書き写した五部大乗経（華厳・大集・般若・法華・涅槃経）を都の寺に納めようとしたのも、そうした望郷の念の表れであった。

が、朝廷は崇徳の願いを退ける。讃岐に流されて9年目の長寛2年（1164）、崇徳は時の朝廷を憎悪しながら、46年の短い生涯を終えた。

「もはや往生は願わない。五部大乗経を3年がかりで血書して得た功力を地獄・餓鬼・畜生の三悪道に投げ込み、その力で、我は日本国の大魔縁になって遺恨を晴らしてくれよう。身分の上下をひっく

りかえしてみせよう」――『保元物語』や『源平盛衰記』などの中世文学は、このときの崇徳の無念・怨念を、このように描写している。

崇徳が実際にそう考えたのかどうかは、ここでは問題ではない。問題は、当時の人々がそう理解する以外ないほどに混迷の度を深めていた現実のほうにあった。

権力内部は醜い権謀術数と嫉妬と疑心暗鬼のとりことなり、世情は新興勢力である武家の台頭によって騒然として、現世は、あたかも地獄・餓鬼・畜生の三悪道に投げ込まれたかのような様相を呈していたのである。

●魔に翻弄される現世

『保元物語』で「大魔縁」に連なったものと想像された崇徳は、『太平記』においては、さらにすさまじい「悪魔王の棟梁」にまで出世する。

その子分には、権力争いに巻き込まれ、あるいは加担して憤死した代々の皇族、源氏の猛将・源為朝、そして天台や真言の高僧がずらりと居並び、「天下をいかに乱すかの評定を行っている」と、『太平記』作者は述べる。

古代末期から中世にかけての人々の想像力の中では、現世は、常にこうした魔縁の干渉にさらされていた。

そこにあるのは救いがたい混迷であり、戦争、旱魃、飢餓、火災などの天災・人災の背後には、常にこの世をまるごと悪趣に投げ込もうとしている魔縁の影があった。

「国土が乱れるときは、まず鬼神が乱れる。鬼神が乱れるがゆえに、万民が乱れる。賊がやってきて国を脅かし、人民は逃亡し、王侯貴族、百官は互いに争いあうだろう」(『仁王経』)

「(末法では)国に3つの災いが起こる。一は飢饉、二は兵乱、三に疫病である。一切の善神が国をことごとく見捨てれば、王がいかに命令を発しても従う者はなく、常に隣国からの侵略にあうであろう。火と風雨と水の災いが人々を襲い、親族縁者は骨肉の争いを演じあうだろう。王はほどなく重病に陥り、寿命は短い。死んでも成仏することはなく、彼は大地獄に生まれ変わるだろう。他の王族、高官、武人とて同じ運命である……」(『大集経』大意)

日本で古くから読みつがれてきた仏教経典には、末法の様がこう描かれている。そして、時は、まさに末法。現実の相は、経文と寸分も異ならないと、心ある修行僧や一部知識人の目には映った。

かくして末法衆生救済のための新仏教――法然・親鸞の浄土教、日蓮の法華宗などの鎌倉新仏教が生まれ、それらが燎原の火のように日本を席巻しはじめる。

浄土教を知るキーワード③

【易行道】

易行とは、仏をひたすら信じ、頼り切って悟りを目指す修行を指す。誰でも安易に行えるのでこの名があり、海上の航行にたとえられる。一方の難行道は陸上の歩行にたとえられ、自力での悟りを目指す苦しい修行だ。八宗の祖といわれるインドの僧・龍樹が唱えた分類法で、後の他力と自力、浄土門と聖道門の分類につながった。

P.84の図＝『餓鬼草紙』より部分。(京都国立博物館蔵)

心という地獄

何人も自分の心からは逃れられない。しかもそれが時代や因果によってあらかじめ穢され、解脱不能の烙印を押された心だったとしたら――まさに現世の地獄ではなかろうか。法然は苦しみ、親鸞は悶えた。絶望はやがて、絶対他力思想へと昇華する。………

法然と末法意識……己の内部の闇に絶望

●念仏にすべてを託した源信

寛和2年（986）、比叡山横川に「二十五三昧会」という名の、奇妙な〝死の結社〟が結成された。

毎月15日に集まって「浄土の業」すなわち念仏三昧を行い、だれかが臨終の時を迎えたら、一同がその人物の念仏を助けて、極楽往生させる。また、あの世に入った者は、夢でも、幻でも、白昼夢でもよいから、自分が往生したなら「往生した」、地獄・餓鬼・畜生道に堕ちたのなら「堕ちた」と伝える――。

これが結社の目的であり、約束事であった。

彼らの願いは、もちろん往生の一事にあった。この厭うべき現世から抜け出すこと以上に価値あることはなく、現世での生は、ただ、往生して死ぬためだけに存在した。

このメンバーには、当時を代表する学識豊かな僧侶や、花山法皇のような皇族などが加わっていたが、その中に『往生要集』の筆者、恵心僧都・源信（942〜1017年）がいた。結社の指導原理は、まさしくこの『往生要集』だったのである。

⬆「嫁威肉附面」。伝説によればこの鬼面は、嫁を脅した老婆の顔に貼りつき、改心して念仏を称えるまで外れなかったという。ゆがんだ恐ろしい鬼形は、心の中の悪そのものだ。(願慶寺蔵)

P.86の図＝『餓鬼草紙』より部分。(東京国立博物館蔵)

同書は、人間が迷いに迷って転生をくりかえす輪廻世界、とりわけ地獄の壮絶な描写で知られる。

源信にとって、人間界は、「不浄」と「苦」と「無常」の世界以外のなにものでもなかった。人の一生は、ゆるやかな死への道行きにほかならず、しかも死んだからといって輪廻から解放されるわけではなかった。

ブッダは、この輪廻世界から抜け出る法を説いたが、人々の心がさまざまな煩悩と罪悪にまみれ、心身ともに悟りを得るための素質が劣悪になる「濁世末代」（末法）になると、いかに徹底して戒律を守り、厳しい修行に明け暮れても、それで成道できるという保証はまったくない。

こうした時代にあって救いの可能性があるのは、唯一、念仏あるのみ——、と源信は唱え、「二十五三昧会」に参画したのである。

●戦乱の世を背景とした自己洞察

『往生要集』は、以後の僧侶・知識人に絶大な影響を与えた。中でも最大の影響は、法然（1133〜1212年）に与えたそれであった。

法然はこの書によって、末法を見据え、さらに己を見据える方向へと歩を進めた。

世間からは「知恵第一の法然房」と称えられても、心には少しの安心もない。あらゆる面で劣悪な素質しかもち得ない末法の世に生を享けた自分には、自力で学び、自力で修して解脱することなどとうてい不可能だということを、法然は、『往生要集』、およびその導きによって出会った『観無量寿経疏』（中国浄土宗の大成者・善導の書）によって忽然と悟った。ここに、絶対他力、一向専修念仏の浄土門が開けるのである。

ここでわれわれは、法然が、先の章で触れた保元・平治の乱と同時代を生き、さらに平家の台頭と滅亡から、源氏による鎌倉幕府の成立までの未曾有の混迷期を生き抜いた人物だということを意識しておく必要がある。

法然に深く帰依していた九条兼実が、しばしば「わが国滅亡の時至れるか」「物騒乱世の至り」「仏法、滅尽し了れるか」とその日記『玉葉』で嘆いていたように、末法意識は、この時代の意識そのものであった。

比叡山黒谷に籠もった法然もまた、そうした世相をつぶさに見、末法を肌で感じていたが、たとえばこれも同時代人の鴨長明が観照的・情緒的に末法の無常をとらえたのに対し、法然は、末法という時代に生まれ合わせた「罪悪深重の凡夫」としての己をリアルに直視するという方向で、信仰を深めていった。

若き日の法然には、叡山の学匠にも、伝統的な奈良仏教の学匠にも、学問知識では一歩も引けをとらないという自負心があったが、いかに学問を積み上げたところで、生死を離れ、安心立命を得たい

⬆四国配流の途上で、遊女に念仏を説く法然。罪障が深いとされた女性もまた、阿弥陀の救済を待つ存在だった。（『法然上人行状絵巻』當麻寺奥院蔵）

という願望は少しも満たされない。心は常に餓鬼のように飢え、不安と焦燥に駆り立てられている――。

　この、いわば〝心の地獄〟で踏み惑っている自分を子細に見つめ直したとき、法然は、自力で悟りを得ようとあがき、ときには慢心し、それと気づかずに罪悪を犯して恥じない末法衆生の境遇を、骨身に徹して悟った。

●自力を捨てて他力に開眼

　幾多の経論は、「末法では、人は自力で解脱などできない。劣悪な素質しかもちえない末法衆生が、いかにあがいたところで、往生・解脱にいたらない」と述べている。

　現に40年もひたすら生死の境を離れようとして修行と学問を重ねてきた自分にしても、一念一念の中に巣くう妄念・煩悩の魔から脱却することもできずに苦悩し続けているではないか――。

　この哀れな末法衆生を浄土に掬い上げると誓って、それを成し遂げた仏は、阿弥陀仏以外にはない。

　阿弥陀に全託する以外、生死を離れて往生する道はないのだと法然が頓悟したとき、絶対他力、無条件で阿弥陀を信じ切ることによって成り立つ日本の浄土門が開かれた。

「魔界というものは、衆生をたぶらかすものだ。自力で往生しようとする心の隙に魔が忍び寄る。念仏の行者は、己が罪悪にまみれ、輪廻から逃れられない凡夫（罪悪生死の凡夫）だと自覚しているから、自分が、という心がない。ただ、弥陀の願力に乗せてもらって往生しようという願いがあるばかりで、魔縁にまとわりつかれることはない」（『西方指南鈔』）

浄土教を知るキーワード④

【厭離穢土】

　現世を苦界（穢土）とし、そこから厭い離れようとすること。「欣求浄土」（理想的な安楽世界である浄土を願い求めること）と対になる。源信は『往生要集』の中で、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天の六道について、それぞれの苦しみを描き、どれもが不浄であると説いた。それを正しく認識することが、浄土への第一ステップとなる。

P.88の図＝『地獄草紙』より部分。（東京国立博物館蔵）

大意）

こうして法然は、浄土門以外の、すべての宗派を否定するにいたる。

世間も堕地獄、心も堕地獄。ならば仏門に入って修行すれば救われるかといえば、そこにもすでに見てきたように、餓鬼界と何ら選ぶところはない。自力に頼っているかぎり、人は六道を輪廻して生死をくりかえしつつ、完全な世界の破滅の時を迎えるしかないというのが、法然の考えであった。

像法1000年の後の末法1万年。さらに一切の法が滅び去る法滅尽の時代が100年で、そこで世界は壊滅する。

が、法然は、法滅尽の100年の間も、唯一『無量寿経』すなわち念仏の法門のみは滅尽せずに残ると説く（『選択集』）。

「経道が滅尽する時に及んでも、我は慈悲哀愍をもって、ただこの『無量寿経』のみを、法滅尽100年の間、世間に止め置く」——。

『無量寿経』に説かれた釈迦のこの言葉を真実絶対の予言として、法然は受け入れた。

弥陀の願力によらないかぎり、人は「つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなし」。自力では何事もなし得ないという、この深く徹底した法然の絶望感が、新たな信の道を押し開かせた。親鸞が、それを受け継ぐ。

親鸞と宿業……業の深さに対する覚悟と受容

●師・法然との気質の相違

法然は末法を内面化し、「罪悪深重の凡夫」という心の地獄を見据えることによって、一気に他力一途の信の世界に入っていき、弟子の親鸞は、この罪障観を、さらに極限まで推し進め、そこを突き抜けることによって、己の信仰世界を確立した。

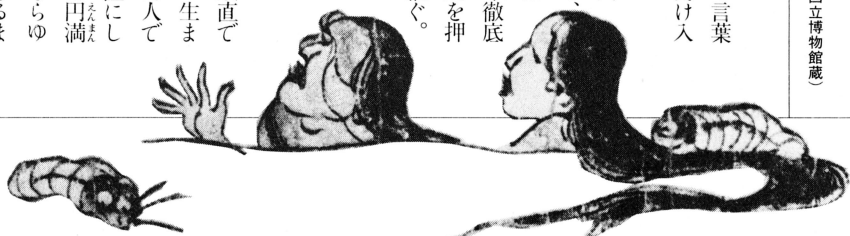
親鸞自身が、自分はただ法然の教えを守り伝えているのみだと述べているように、両者の信仰は、その大筋において寸分違わない。

が、己を直視するという一点において、親鸞ははるかに深いレベルにまで突き進んだように、われわれには思われる。

この差はどこからくるのか。

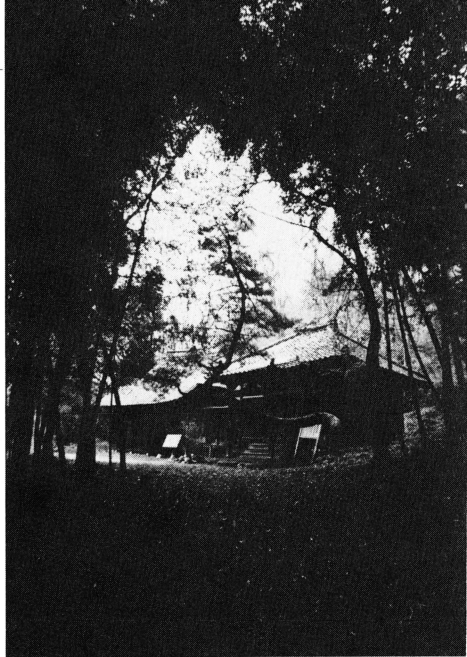
名著『法然と親鸞の信仰』の中で、倉田百三は、両者のキャラクターの違いを次のように巧みに言い表している。

「法然は（略）性格も清涼にして順直であり、これを親鸞に比較する時は、生まれながらの徳のそなわった恵まれた人であったと思われる。その性格の素直にして、涼しく、安らかな智恵に満ちた円満無碍という感じでは恐らく日本のあらゆる高僧の中で法然の右に出る者はあるまい。（略）親鸞は一生貧しく、世に知られず、心情も障り多く、その信仰、思想も円満というより、徹底驀直であって、

下図＝『地獄草紙』より部分。（奈良国立博物館蔵）

浄土教を知るキーワード⑤

【専修念仏】

他のいっさいの行を捨てて、念仏のみを称えること。ただ専修ともいう。専修とは、様々な行をまじえて修める雑修に対する言葉で、五正行を修める意味にも使う。また、五正行とは、阿弥陀仏のみに対する行で、読誦・観察・礼拝・称名・讃嘆供養の5種である。法然はその中から、ただひとつ称名（念仏）を選びとったのだった。

➡「人道不浄相」。美女の死体が腐敗する過程を描き、人間の不浄さを示している。（『六道絵』聖衆来迎寺蔵）

⬆常陸国（茨城県）三谷に今も残る、親鸞の草庵跡。越後配流の後、親鸞は関東各地で布教活動を行った。

危険性を帯びている。その境遇も行持も法然のように清涼でなく、煩いと暗さとを含んでいる」

迫害など悲惨な体験を経てきたとはいえ、法然の生涯は弥陀の手の上にあり、法悦にくるまれたようなまどかなところがあった。

それは「素直にして、涼しく、安らかな智恵に満ちた円満無碍」な法然の恵まれた人柄がおのずと招き寄せた果報であったが、親鸞の場合は、そうした果報につながるような善業のもち合わせは自分にはないという厳しい自覚があった。それが彼の「清涼でなく、煩いと暗さとを含んだ」個性となって現れたのである。

●自分の忌わしい心性を自覚

同じく心という地獄を直視するといっても、生死を重ねてくる間に積もりに積もった宿業は、人によって異なる。

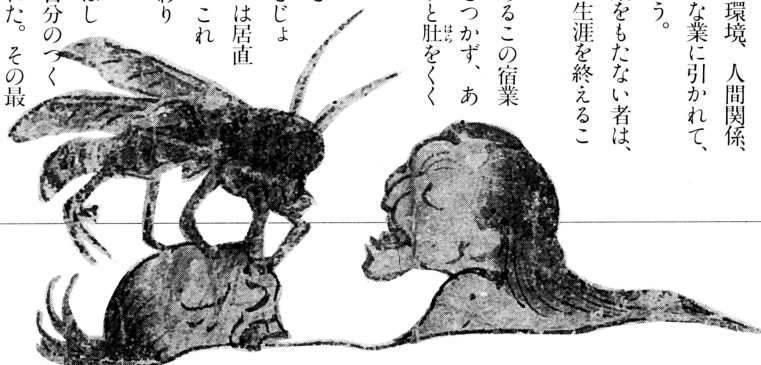
親鸞の場合、自身のつくりなしてきた宿業の重みは決定的であり、法然が自分のことを愚痴の凡夫というのと、愚痴の度合いが違っていた。罪悪・煩悩で凝り固まった宿業にまみれている心のありようを、親鸞は率直に「蛇蝎」と呼んだ。

生まれながらに罪を犯す業を背負ってきた者は、業に引かれて罪のほうへと歩まざるをえない。仕事、環境、人間関係、心のもちようなどが、みな業に引かれて、そちらへと向かってしまう。

ところがそうした宿業をもたない者は、その罪とは無縁のまま、生涯を終えることができるのだ。

親鸞は、自身の中にあるこの宿業を直視した。自分に嘘をつかず、ありのままに受け入れようと肚をくくった。

世間一般でいう僧侶とは、自分を偽り、人を偽って、この醜い自己をじょうずに覆い隠し、あるいは居直って恥じない者をいう。これは現今の僧侶と何ら変わりがない。

しかし、親鸞はそうはしなかった。彼は宿業を自分のつくったものとして受け入れた。その最大の表れが、3度にもわたるといわれる結婚、妻帯である。

●汚泥に咲いた純白なる信心

親鸞が終生敬仰し続けた法然は、妻子をもつことはなかった。が、師は親鸞に、

「一人では念仏できないというのなら、妻帯して念仏申しなさい。僧では念仏できないというなら、俗のまま念仏申せばよく、俗ではできないというのなら僧になって念仏申せばよい」

と教え、親鸞は、それに従った。というより、抑えても抑えても鎌首をもたげてくる愛欲の炎が自分の中に存在するという事実を認め、目をそむけることなく受け入れたのである。

しかし、妻子をもてばもったで、夫として、親としての煩悩・苦悩が新たに生じてくる。

一説によれば、最初の妻とは越後に流罪されたときに別れ、第二の妻とは死別し、第三の恵信尼を得てようやく親鸞の結婚生活は落ち着いたが、しかしあちこちに残した子どもたちや別れた妻の貧窮、妾になる娘に対する心労、親をたばかり、裏切る息子との対立・縁切りなど、親鸞は終生、最も人間臭い煩悩から解放されることはなかったという。

仏教では、しばしば法を泥中の蓮にたとえる。たしかに親鸞の弥陀への信仰は、いかなる蓮より清浄無垢には違いなかったが、同時に片足を突っ込んでいる現実は、いかなる蓮沼の泥にもまして、暗く濁り切っていると思わざるをえなかった。それが宿業の現実であり、生きるということの実態であった。

何事も宿縁にまかせるしかない。あえて苦しもうというのではない。宿縁によって、業の報いによって苦しまざるを得ないような境遇が現れ、愛欲の炎が沸きあがるのだ。

それから目をそむけても、抑圧しても、本当ではない。これら業の報いは、直視する以外にない。

ただ、どのような生活をしようとも、信心には一点の穢れも曇りもない。なぜなら弥陀を信じる心は、自分のものではなく、弥陀のほうから悩み多き衆生に回向し、与えてくれたものだからだ。

親鸞の信は、凡夫・親鸞個人の信ではない。それは弥陀の信なのだ——こうして、親鸞の信仰は研ぎ澄まされていった。

末法や地獄は、奈良・平安の時代には、心の外にあった。ほとんどの宗教家は、それを自己の内面の問題として受けとめる姿勢をもたなかった。それを成し遂げたのは法然であり、さらに肺腑をえぐるほどの徹底した調子でそれを行ったのが親鸞だった。

しかし、この浄土門は、日本仏教の信仰に新たな地平を切り開くと同時に、別の問題を日本の精神文化の中に植えつける役割も果たした。それを次項で見ていくことにする。

浄土教を知る キーワード⑥ 【称名】

仏や菩薩の名を称えることで、それにより災難を避けられるといわれた。浄土教では特に、阿弥陀仏の名号（南無阿弥陀仏）を口で称える行為を指す。称名念仏は、往生につながる唯一最上の行とされる。念仏の意味は本来、仏を思い浮かべることで、称名念仏はそのひとつにすぎなかったが、浄土教で「念仏即称名」という解釈が固まって以来、念仏といえば称名念仏になった。

P.92の図＝『地獄草紙』より部分。（奈良国立博物館蔵）

現世という地獄

ただひたすらに弥陀の名を称え、心静かに往生のときを待つ。それが信者の理想ではなかったろうか。しかし、過酷な現実は、彼らを血みどろの闘争に向かわせた。肥大した権力が、すがるべき念仏の本質をねじ曲げた後に、救済は本当にあったのか。……

一向一揆の勃発……武装蜂起した門徒たち

●圧政に対する反撃の開始

室町から戦国にかけての15～16世紀は「一揆の時代」と呼ばれる。

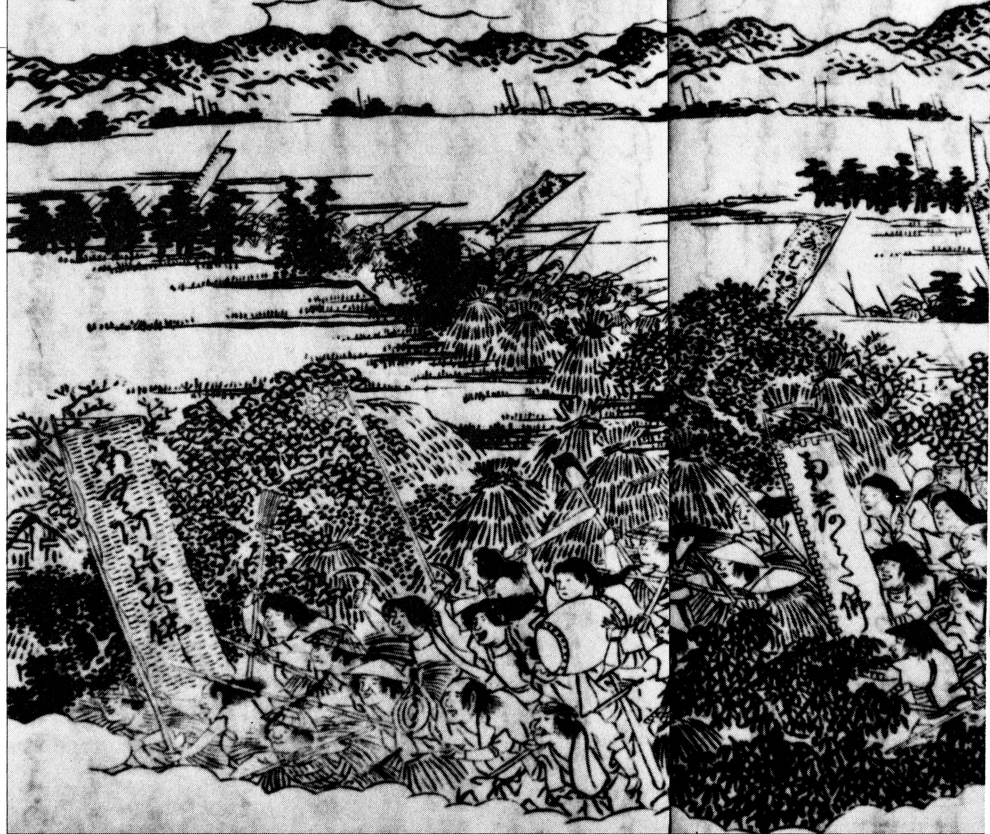
一揆は、まず膨れ上がった借金や、借金のカタに取られた土地の返還などを求めて、農民、土豪、武士、馬借（運送業者）らが、土倉（金融業者）、酒屋などを襲う土一揆（徳政一揆）から始まった。

農村には村落共同体（惣）、商工業者には座が生まれて経済活動が活発化し、市が立ち、流通機構も整いはじめたこの時期、経済の中心は土倉、酒屋が握っていたが、その上前をはねる立場にあったのが、延暦寺や東寺、あるいは室町幕府と結んで栄華を誇っていた禅寺などの巨大寺院である。

寺院は、税金逃れのために農民から寄進された土地に加え、質流れの土地まで集めて巨大荘園領主として君臨していた。

しかし大寺の財源は、それだけではなかった。彼らは、寄進された米銭（祠堂銭）を土倉や酒屋に投下し、「五文子（年利60%）」ないし「六文子（年利72%）」というとてつもない暴利で貸し付けて、銭を貪った。そうして儲けた金の一部を、パトロンである幕府・権力側に上納して

⬆石山戦争の軍旗。「進者往生極楽、退者无（無）間地獄」と墨書されている。門徒はこのスローガンの下に捨て身で戦った。（長善寺蔵）

P.94の図＝『餓鬼草紙』より部分。（東京国立博物館蔵）

⬆江戸時代に描かれた一向一揆の図。みの笠を着け、農具をもつなど、江戸の百姓一揆と同じようにとらえられていて、実際とは異なる。中世は村ごとに武器を備え、武装して一揆に臨んだ。(『画本信長記』より)

巧みに保身をはかる一方、民衆には仏法僧の尊さと仏の慈悲の広大さを説きつつ、自らは悲惨な現実から目を背けて、ひたすら豪奢な暮らしに沈潜していたのである。

それゆえ、幕府・寺院は一体となって土一揆鎮圧に動いたが、日本史上、政治的に最も無能だった室町幕府の力では、到底一揆の圧力を防ぐことはかなわず、一揆衆は、各地で勝利を収めることに成功していた。この一揆勢力の中心が、本願寺教団(一向宗)の門徒になっている場合の一揆のことを、一向一揆と呼ぶ。

◉一向宗の勝利とその犠牲

一向一揆は、寛正6年(1465)の近江の一向一揆に始まる。

当時、念仏の教えは上は皇族・公家から、武士、土豪、農民、下は被差別的境遇に置かれていた最下層の民衆にまで広

がっていたが、本願寺の門徒は数の上では最も劣勢だった。そこに登場してくるのが本願寺8世の蓮如である。

彼の精力的な布教により、京都東山大谷を本拠とする本願寺派は大いに教勢を伸ばした。しかし、いつの時代でも出る杭は打たれる。まず本願寺にかみついたのは延暦寺であった。

同寺西塔の僧らは「本願寺は三宝誹謗の邪道を広めている。あれは仏敵・神敵だ」という名目のもと、本願寺を襲撃して破壊した。これに対抗して立ったのが近江・堅田の門徒らで、これが最初の一向衆の蜂起である。

以後、応仁の大乱以後、16世紀末まで、日本各地に一向一揆の嵐が吹き荒れる。

浄土門の教えには、地上に浄土をつくりあげるといった思想は存在しない。が、一向一揆は、結果として、一種の地上天国、すなわち門徒だけの国づくり運動として機能し、それに対抗するあらゆる権力と対決。加賀のように、一向宗が一国を100年間支配するような大勝利まで手中にした。

けれども、本願寺を絶対支配者とする門徒の宗教王国も、民衆にとっては、新たな地獄でしかなかった。屍を野山にさらすのはいつの場合も門徒であり、蓄えを収奪されるのも門徒であった。

彼らは往生をカタに、自身の生死の権利まで法主に握られた。宿業思想は、差別と結びつき、別種の地獄・餓鬼道が出来していったのである。

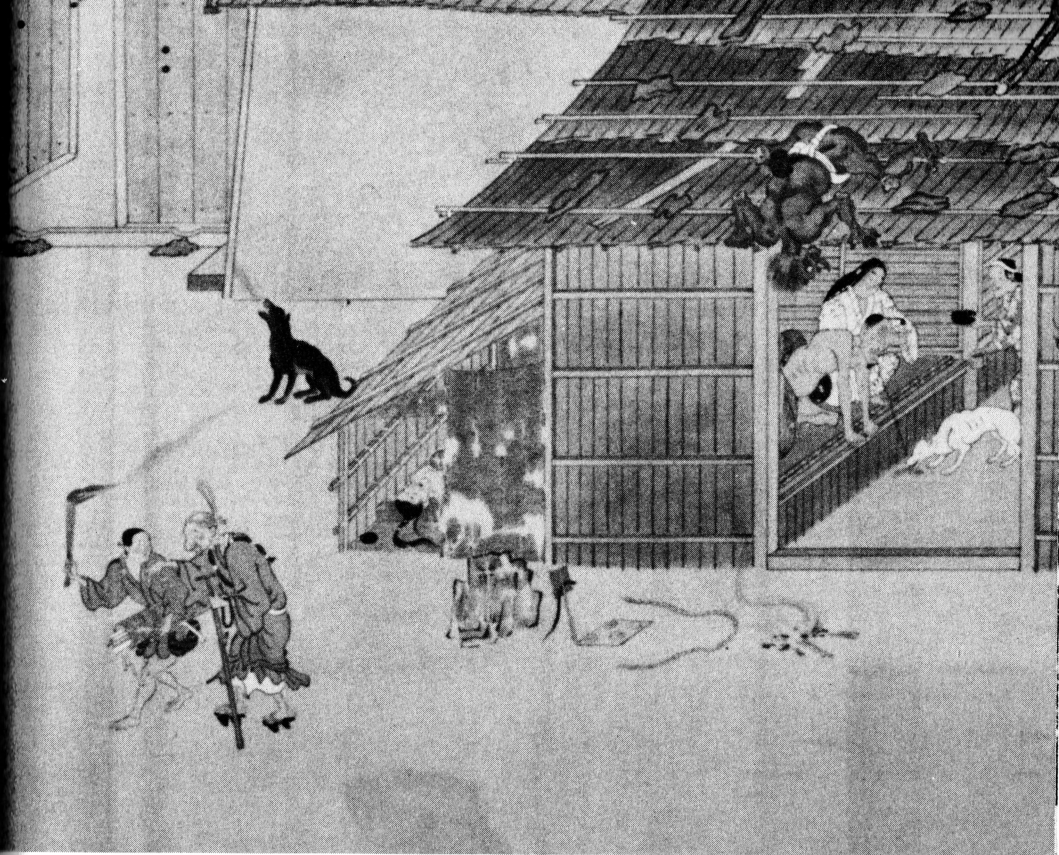
宿業と堕地獄……利用され変質した念仏

◉ゆがめられた因果応報の思想

宿業という思想は、法然・親鸞以前からあった。しかし、それが民衆に深く浸透していったのは、浄土門が広がって以降といわれる。

悪いことをすれば地獄や餓鬼道に堕ちると、仏教は説く。因果応報である。この考え方に立つなら、現世の悲惨な境遇

←念佛者。（『鶴岡放生会職人歌合絵』より、個人蔵）

P.96の図＝『地獄草紙』より部分。（東京国立博物館蔵）

⬆疫病の蔓延を描いた図。家の屋根には疫病をもたらす鬼がいる。家の前には様々な呪い道具が並ぶ。現実に、数多くの天災・人災が人々を苦しめた。(『春日権現霊験記』模本より、東京国立博物館蔵)

も、すべて前世の報いということになり、農民が現世で飢餓・貧困に苦しむのも、農民よりいっそう悲惨な境遇にある被差別民が、現世という生き地獄の中で苦しまなければならないのも、すべては己が責任、身から出た錆という結論になる。

支配者にとって、これほどつごうのよい考え方はない。あらゆる社会悪や矛盾をすべて個人の責任にしてしまい、自分はそれらから目を背けることができるからである。

こうした宿業思想は、必然的に差別とも結びついた。

たとえば中世の定形句に、「現世には山かたいの身となり、来世には無間大地獄に堕ち」という表現がある。

「山かたい」とはハンセン病のことで、こうした病気にかかるのは前世の悪業の報いであり、来世では堕地獄につながる病気だという考えがそこには表現されているが、こうした考えから、特定の病気の者を集落から遠ざけ、ある種の職業の者を集落から排除するなどの差別が盛んに行われるようになった。これが宿業観

P.99の図＝『地獄草紙』より部分。(東京国立博物館蔵)

のもつ、最も重大な問題であった。

浄土門の教勢の拡大は、この宿業、およびそれと連動している堕地獄に対する恐れの深まりと並行して進む。

業の恐ろしさに打ち震え、何としても悪因縁から抜け出したいと願う民衆に対し、阿弥陀こそ、いかなる罪悪深重の凡夫でも救ってくれる唯一の仏なのだと教えられれば、彼らは飛びつく。

実際、念仏は、「禁裏は悉く以て念仏なり」と興福寺大乗院門跡の尋尊が書いているように、上は没落に脅える皇族・公家から、死と背中合わせの武家、町衆、下は農民、職能民にいたるまでのあらゆる階層に、不安、絶望、恐怖などのネガティヴな感情を媒介として広まった。

●変質していく念仏の信仰

ひとたび弥陀に帰依すると、今度は弥陀に見捨てられたらおしまいだという新たな恐怖が、そこに生まれる。この心理を巧みについて、浄土門の僧侶の新たな支配が生まれてくる。

本来、往生は、弥陀が与えてくれた信心によって、弥陀と一対一で向き合い、念仏に全託するところにこそ成立し、それ以外のいかなる条件も要素も存在しなかった。法然も親鸞も、そう主張し続けたし、それゆえにこそ親鸞は、ともに弥陀に従う念仏者を「同朋・同行の人」と呼び、弟子としては扱わなかった。弥陀の前では、念仏者はすべて平等であった。

ところが、その弟子たちは、弥陀と念仏者の間に割り込み、あたかも往生の媒介者のように振舞い出した。

たとえば真宗仏光寺派では、名帳や絵系図と呼ばれる名簿に名を登録したものだけが往生できると唱えて、門徒から金品を貪った。蓮如はこれを異端として弾劾したが、その本願寺教団も、後述するように、世俗的権威を獲得するや、同じような道を歩んだのである。

法然や親鸞においては、魂の解放であり、法悦の源泉であった念仏は、中世にいたって変質した。

それは堕地獄に対する不安や恐怖からの逃避と結びつき、また他宗に対する排他意識や、差別意識、あるいは選民意識と結びついた。

これら抑圧され、屈折した感情や意識は、悲惨な現実に対する憤激と重なり合って一向一揆のエネルギーに結実したが、門徒は弥陀への信仰を貫くために戦ったというより、現実には、今や生き仏となった法主のために戦ったと見ていい。

ここに一向一揆の悲劇があった。

浄土教を知るキーワード⑦

【来迎】

念仏行者の臨終の際、阿弥陀仏が死者を迎えにやってきて、極楽浄土へ連れていくこと。阿弥陀仏四十八願のうち、第十九願に記されている。つき従うのは、脇士と呼ばれる観音・勢至の二菩薩や、25人の菩薩たちなど。浄土宗では、行者の枕元に聖衆来迎図を掛け、臨終儀式を行うとされている。一方、浄土真宗の場合は臨終来迎を必要としない。浄土宗では「らいこう」と呼ぶ。

一揆、夢と現実……私兵化しつつ浄土を求めた門徒

◉本願寺教団の王国

「外面では霊魂の救済があることを民衆に説きながら、仏僧侶たちの大部分はその胸中で、来世は無く、万物はこの世限りで終わるものと決め、そう信じている。（略）彼らは日本人の心の中に深く入り込み、傾倒されているので、全諸国には多数の特権を有する立派な寺院が造営され、日本人は多額の布施や封禄を僧侶に与えるので、彼らの数は果てしなく増加し、彼らは日本中の最良の場所なり土地を所有し、はなはだ強大な権力を獲得するに至った」

これはイエズス会宣教師ヴァリニャーノの、1583年の報告書の一節である。ここで彼は特定の宗派の名を挙げてはいないが、これがとりわけ本願寺教団を意識して書かれていることは、報告書の前後の脈絡から間違いない。

親鸞の跡を継いだ本願寺は、15〜16世紀にかけて異様に膨張したが、その際、最も天才的な能力を発揮したのが、8代法主・蓮如であった。

蓮如は、最末端の信者組織である寄合や講が道場に、道場は各地の末寺に、末寺は本願寺に帰属し、法主が絶対者として全門徒の上に君臨するというピラミッド形の組織をつくりあげた。

これによって、金も物品も人も、すべてが本願寺に集中してくるシステムが完成され、ヴァリニャーノが書いているように、本願寺は、「はなはだ強大な権力を獲得するに至った」のである。

信仰によって結ばれ、しかもみごとに組織化された一向衆徒は、一揆においては非常な強みを発揮した。

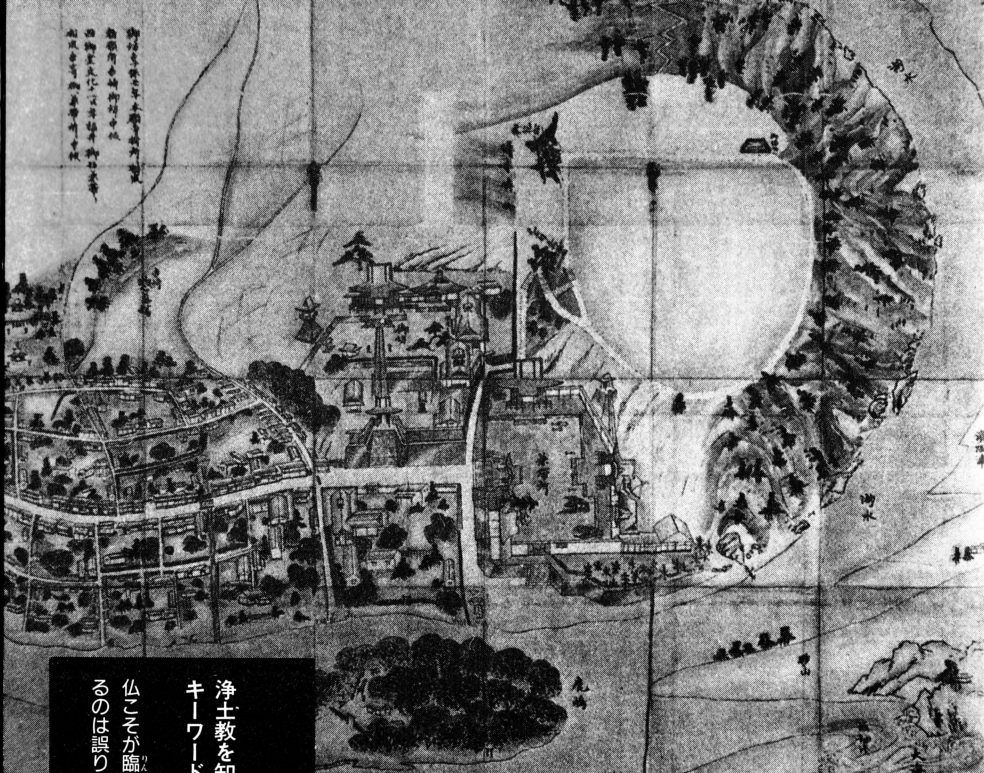
長享2年（1488）、13万ないし20万人の加賀の門徒は、高尾城を取り囲んで守護・富樫政親を自害させ、日本史上初の「百姓ノ持タル国」を現出させた。

これによって加賀一国は、本願寺法王の「法王国」となり、以後、新たな守護は任命されることなく、幕府による通達などは、すべて本願寺を通して一揆側に伝えられるようになった。

宗教的権威と現実の権力が一体化した宗教王国が、一向一揆によって、初めて出現したのである。

◉信長との熾烈な戦い

ただし、この法王国は蓮如の意志から出たものではない。蓮如は門徒に対し、たびたび幕府・守護らに従うよう指示を出しており、現実生活では権力が定めた法（「王法」）を本とし、その上で他力の「仏法」を堅く蓄えるよう指示していた。彼には、権力と戦う意志はなかった。

けれども、社会の底辺で圧し潰されそうな暮らしを余儀なくされている門徒にとっては、一揆は、生き延びるための最後の手段であり、また、命をかけた弥陀への帰依の証でもあった。ここに下層の

⬆吉崎御坊旧絵図。越前吉崎に建てられた蓮如の御坊と寺内町を描く。こうした一向衆徒の町は各地に生まれ、対権力の拠点ともなった。（願慶寺蔵）

門徒と新たに権門化していった本願寺との、当初からの乖離があった。

結果として、本願寺は、組織化された門徒を利用する方向に動いた。門徒は全土をカバーする武力であり、労働力であり、財力そのものであった。

彼らを巧みに支配することで、本願寺は常に政治的に有利に立ち回ることができたから、支配はより巧妙化した。すなわち法主の絶対化がそれである。

門徒たちには、万一、本願寺から破門されれば、一も二もなく地獄に堕ちるという観念が植えつけられた。すなわち浄土往生の独占権を、法主が握った。

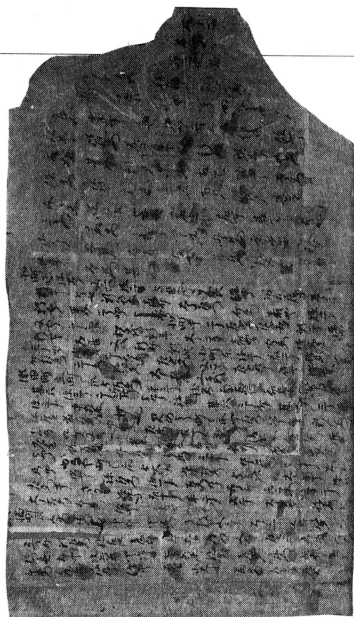
こうした精神的な束縛に加えて、門徒には、さらに社会的な束縛もあった。万一、組織から抜けようとすれば、その者

浄土教を知るキーワード⑧

【一念義】

「多念義」とともに、法然門下で論争を生んだ教義の解釈。一念義は、ただ1回の念仏で往生が決定するという説で、幸西が唱えた。

一方、多念義を唱えたのは隆寛で、多数の念仏こそが臨終往生に結びつくとする。親鸞は『一念多念文意』を著し、どちらかにこだわるのは誤りと指摘した。「行は多念、信は一念」と2つを調和させたのは、聖覚であった。

P.100〜101の図＝『地獄草紙』より部分。（奈良国立博物館蔵）

➡血判阿弥陀如来像。裏表に門徒約120人の連署血判がある。蓮如へ忠誠を誓ったもの。(写真=『小学館日本大百科全書』、浄顕寺蔵)

は共同体から完全に見捨てられ、社会的に抹殺されるという厳しい現実があった。

かくして門徒は、本願寺の私兵と化し、一国を転覆させるほどの武力を握っている本願寺の威勢は、戦国にいたるとさらに強大化した。

こうした宗教的権威に徹底した戦闘を挑んだのが、織田信長である。

本願寺と信長の戦いは陰惨を極めた。旧権力の象徴である比叡山を焼き打ちして以降、天下布武を目指す信長にとって最大の障害は、独自の権力と武力、財力を一手に握る本願寺であり、打倒・本願寺は天下統一の絶対条件であった。

それゆえ信長は、一切の妥協を排して一向宗徒の殲滅をはかり、石山本願寺も、ついには「仏敵・信長」打倒に立ち上がった。

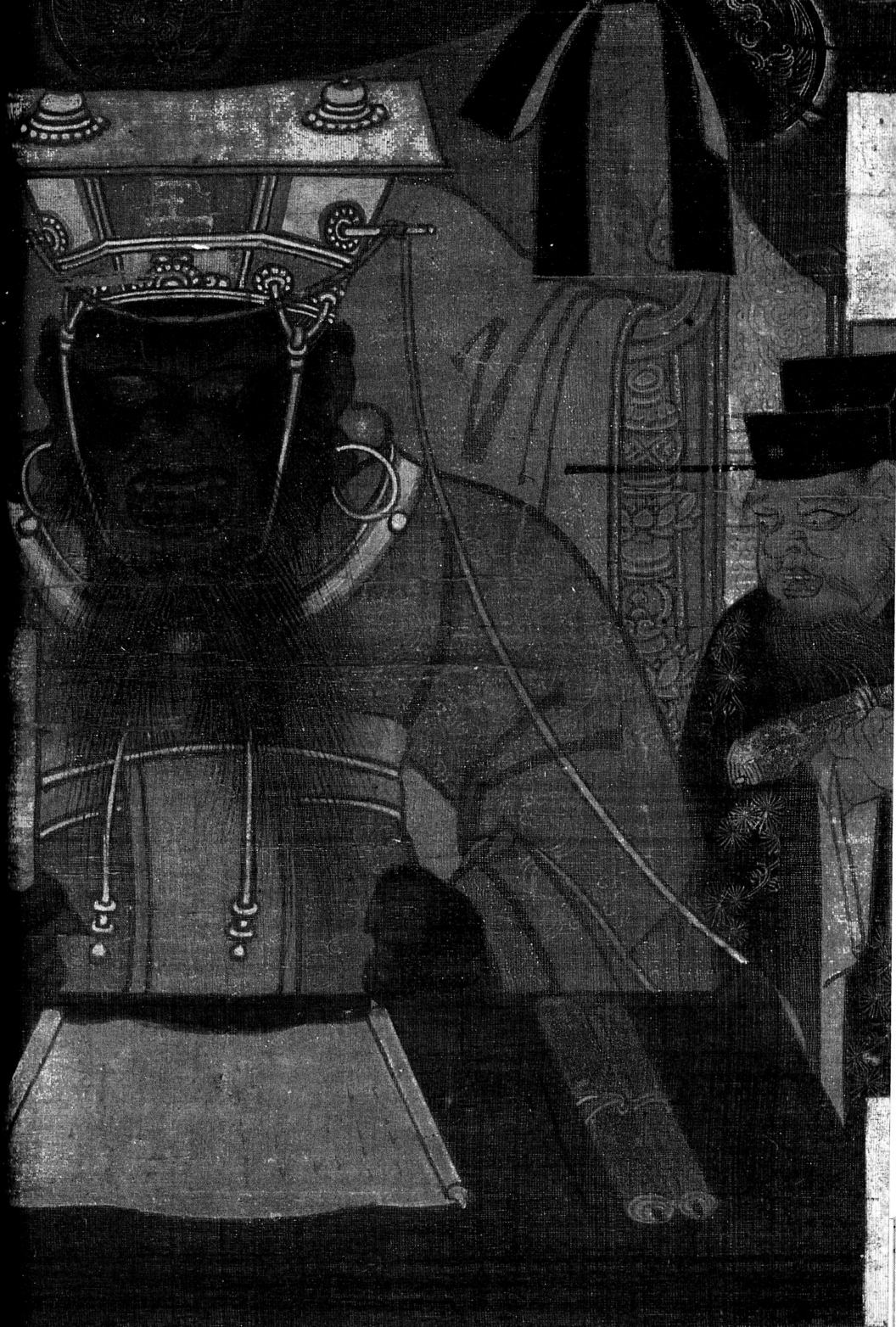
退けば往生という権利は失われ、前進すれば、往生が保証される——「進むは往生極楽、退くは無間地獄」というスローガンのもと、一揆衆は殺されても殺されても立ち上がり、数十万という屍の山を築いて、〝法王の〟教えに殉じた。

信長と本願寺の最終戦争である石山戦争は、天正8年(1580)、本願寺と信長の和睦によって終結する。あとには膨大な死骸の山だけが残った。

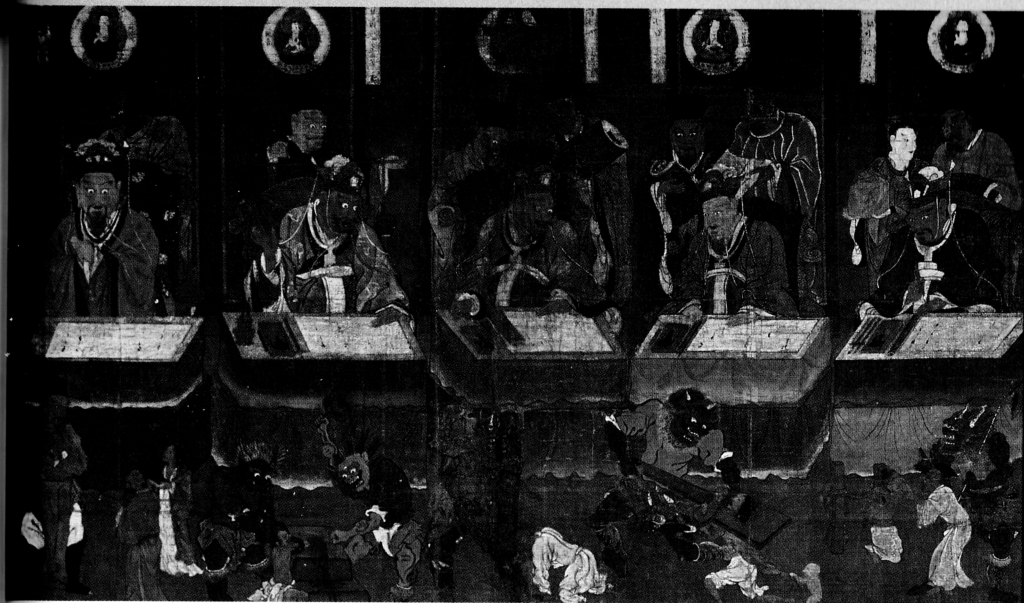
一向一揆は、現実に圧し潰されかかった門徒の見た夢であった。彼らは法王国の向こうに浄土を据えることによって、現実に挑もうとした。が、本願寺が見ていた夢は、はるかに世俗的・現実的なものであった。両者の夢は、同床異夢でしかなかった。

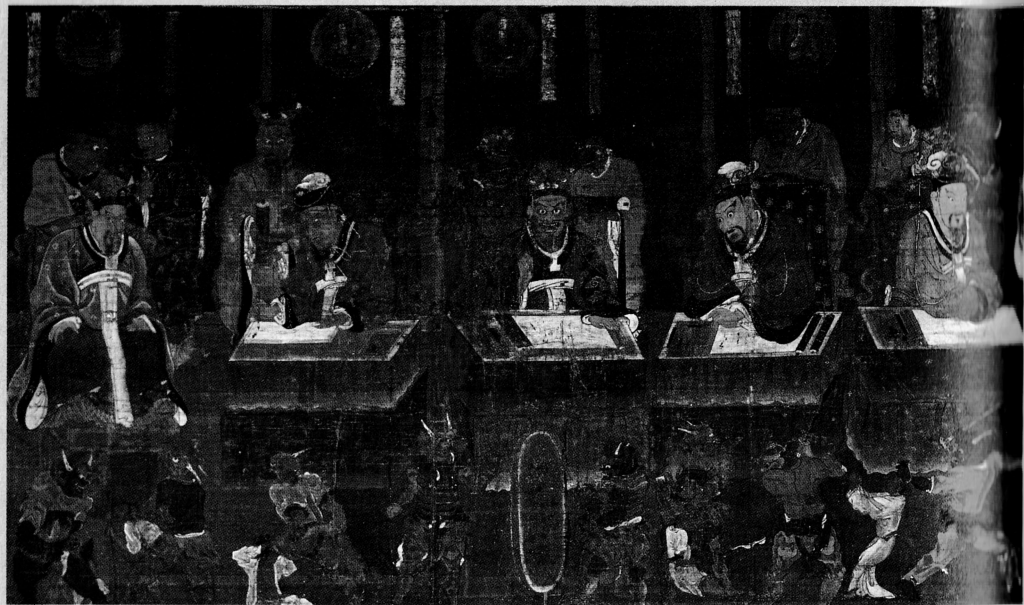
蓮如が執拗に主張していた王法と仏法の調和は、史上最も巧みに宗教の去勢に成功した徳川家康の代になって、現実のものとなる——。

左図=『地獄草紙』より部分。(奈良国立博物館蔵)

地獄・極楽
絵巻
光と闇の
異界宇宙を読み解く

「火の焼くは、これ焼くにあらず。悪業すなわち、これ焼くなり」——罪人を前にして、閻魔はいう。
地獄の業火は、自らがつくったカルマ（業）によって燃える。この認識から、仏教は始まる。
仏教以前には天界にあった閻魔（ヤマ）が司る死者の国を、仏教は地底に移し変えた。
が、実際には、亡者がひしめきあう閻魔王庁は、われわれの現に生活しているこの世界にほかならない。

【閻魔王庁】

生前の善業悪業を吟味し罪の軽重を決定する

人は死ぬと、まず冥土の王庁で生前犯した罪の裁きを受け、その程度に応じて、自分にふさわしい苦界に堕ちていくと信じられた。冥土の裁判官として最も有名なのは閻魔大王で、彼はもとバラモン教の神ヤマ（人類最初の死者）であったが、仏教に取り込まれて後は、餓鬼界の王とも、地獄界の王とも、また地蔵菩薩の化身とも称せられ、さかんに畏怖・崇敬された。十王中では死後35日目の裁きを担当する閻魔王庁の主宰者に配されている。

浄玻璃の鏡

八大地獄

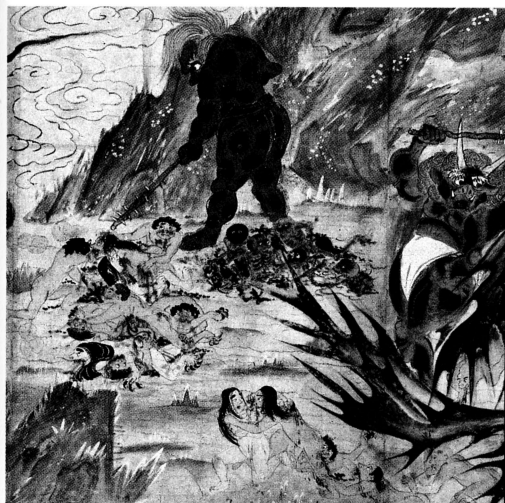
皮膚は真っ赤に焼け爛れて、ぺらぺらとめくれあがり、
五体は分断され、搗かれ、こねられ、ミンチにされる。
地底に広がる炎と極寒の地獄世界で、
生前、おのれがつくりだした妄念の一々が、形となって自分を襲う。
殺されても殺されても生き返り、また殺される。
いつ果てるとも知れぬ、数万、数百万年の悪夢。

⬅付属地獄のひとつ「髪火流」。(『地獄草紙』より、東京国立博物館蔵)

【八大地獄】その❶

鬼と業火が罪人をさいなむ地獄の諸相

閻魔王庁での裁きが終わり、罪ありと定まった者は、その罪の軽重に応じて、自分にふさわしい地獄に堕ちていく。「因果応報」の思想である。地獄の説は必ずしも一定してはいないが、古来、最も多く語られ、信じられてきたのは八熱（八大）・八寒・孤地獄である。このうち、八熱（八大）地獄は地獄の中の地獄で、それぞれ16の付属の地獄（「増」と訳す）をもつ。八寒は火炎（熱）地獄に対する寒冷地獄。おもしろいのは孤地獄で、これは地上に散見する地獄のごとき土地などをいう。

P.110〜111の図版すべて、『北野天神縁起絵巻』より 部分。(北野天満宮蔵)

無間地獄へ

あらゆる地獄の中でも、最も悲惨な地獄・無間（阿鼻）。
そこでは時間はあってなきに等しく、永遠の責め苦が続く。
仏教宇宙論では、世界は生滅を繰り返すと主張する。
崩壊はまず地獄界から始まり、餓鬼、人間界へと波及する。
が、これは亡者の、地獄からの解放を意味しない。
彼らは別の宇宙の地獄界へと転生する。とりわけ、
無間の亡者の転生先は永遠に無間。救いはない――。

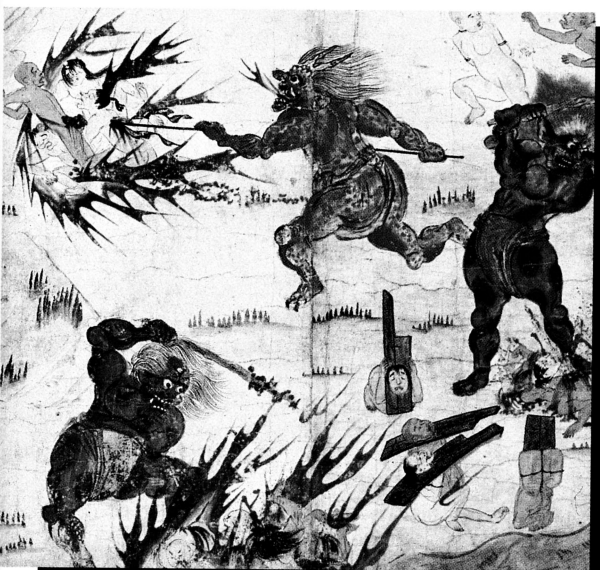
…処（『地獄草紙』より、奈良国立博物館蔵）

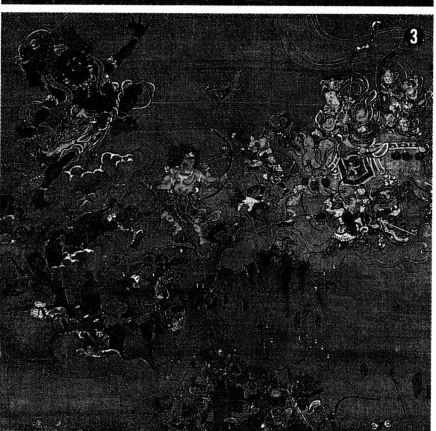
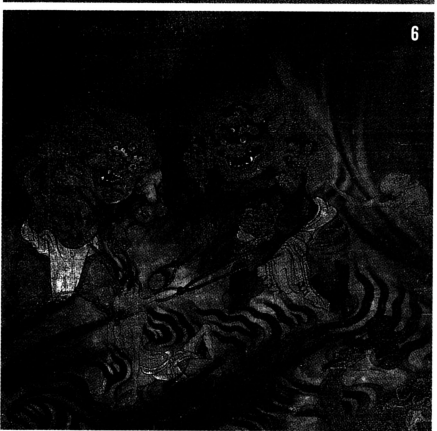
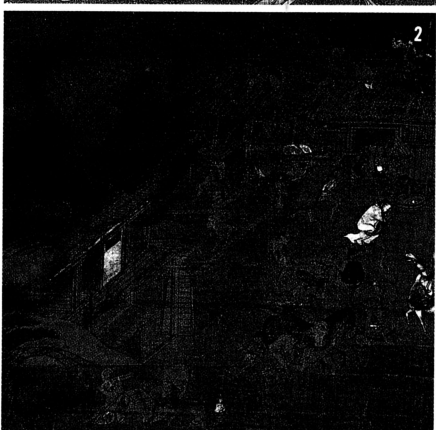
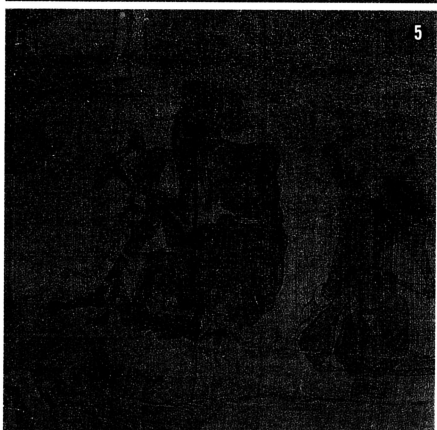
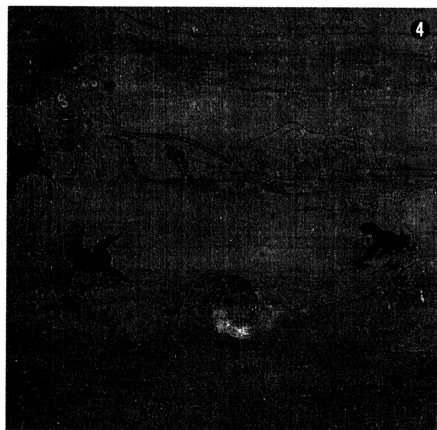
【八大地獄】その❷

凄惨を極めてゆく因果応報の苛責

地獄での責め苦はどれほどの期間、続くのだろう。最も短い等活地獄で、その期間は1250万年。以下の地獄は、順次、前の地獄の8倍の長さになるというのだから気が遠くなる。

こうして地獄での寿命が尽きて転生しても、業をつくればまた堕地獄が待っている。「徒に生まれ、徒に死して、転輪（輪廻転生）して際なし」（『往生要集』）。まさに蟻地獄の生のただ中にあって、民衆は念仏による脱地獄・極楽往生の教えに接した。確かにそこにしか、救いの可能性はなかったのである。

P.114〜115の図版すべて、『北野天神縁起絵巻』より部分。(北野天満宮蔵)

六道輪廻

あらゆる生命は、うたかたの形をもつ。
形は、現れては消え、消えては現れて、とどまることを知らない。
6つの形がある。いわく、天(神)、人間、阿修羅、
畜生、餓鬼、地獄の亡者・鬼神。
万生はこの6つの形の輪の中を、永遠に輪廻する。
ブッダは、そこから抜け出す法を説いた。

上の図版すべて、『六道絵』より部分。(聖衆来迎寺蔵)

【六道輪廻】

衆生が流転する六つの世界

仏教宇宙論では、あらゆる生き物は悟りを開かないかぎり、永遠に6つの世界（六道）を輪廻して回る。先に見た地獄は、この六道の中でも最も悲惨な境涯で、その対極に神々の住む天界がある。そこは人間から見れば夢の楽園のように思われるが、ここにも寿命はあり、苦しみや絶望は存在する。たとえば閻魔王は天界・夜摩天を支配するが、日々悦楽に耽りながらも、昼夜3時に溶けた銅を口中に注がれる。苦からの完全な解脱は、仏の世界に入る以外ないというのが仏教の立場なのである。

❶ 天道（てんどう）

インド土着の神や、高級神霊などの住む境涯で、人間界にはない歓楽、神秘的能力、生殖法（天道に住む神には精液がない）、精神の平安、偉大な体軀と長大な寿命などを享受できる。天道には、物質性を残す欲天・禅天と、物質性から解放された世界があるが、いずれも仏の世界から見ると絶対平安の境地ではないとされる。

❷ 人道（にんどう）

人間界を人道という。天道の住人や阿修羅道の住人、あるいは地獄の鬼神などと比較しても、人間は能力・果報において劣っているが、反面、よく造作する点、最も修行が行いやすい点、および仏陀がこの世界に現れる点で、他の道に勝っている（これを「三事」という）。なお、仏教における人間界は四洲に分かれる（次項参照）。

❸ 阿修羅道（あしゅらどう）

境涯としては人間より低いが、神に等しい超越した能力を誇る鬼神の一種で、「非天」と訳される。住みかは須弥山周辺の海中。日食・月食を起こし、また、常に帝釈天と戦って倦むことがない。瞋（憎悪と怒り）・慢（慢心）・癡（愚痴）の三因によってこの世界に生まれるとされる。

❹ 畜生道（ちくしょうどう）

禽獣魚虫や空想上の動物などがここに含まれる。「傍生」ともいう。他の5道のいたるところに生存するが、本所は海中とされ、そこから陸や空に広がったと説明されているのはおもしろい（『倶舎論』）。生前、悪業（悪い業因）を造り、愚癡の多い人生を送ったものが、畜生道に堕ちるとされる。釈迦もこの段階を経ている。

❺ 餓鬼道（がきどう）

餓鬼の鬼は死者（亡者）を意味する。住居ははるか地底の閻魔王の支配領域。餓鬼道に住む亡者のすべてが飢えているわけではなく、徳のある亡者はけっこう楽しい生活を送り、ときには地上にも遊ぶが、多くは飢えても喉が針のように細くて食べられず、あるいは糞尿や膿しか食えないなど、悲惨な境遇に苦しむ。

❻ 地獄道（じごくどう）

この世界については、すでに前項で見てきたとおり。悪因のうちでも殺生など、とくに罪の重いもの、また、仏法僧に対する罪を犯したものなどが堕ちる（したがってたいがいの僧侶がここに堕ちると、昔からいわれてきた）。なお、六道のうち、天・人・阿修羅道を「善道」、畜生・餓鬼・地獄道を「悪道」と大別することもある。

須弥山宇宙

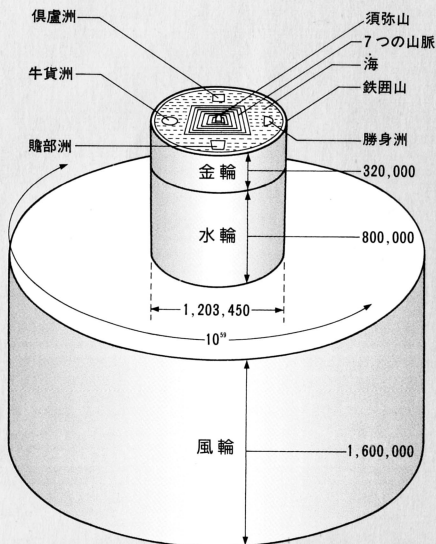
きわめて思惟的で論理好きだったインド人は、
世界の発生論や構造についても、さかんに考えを巡らせた。
そうして編み出された世界モデルを須弥山という。
円形の外周山に取り囲まれて虚空に浮かぶ須弥山世界が
10億集まって、ようやく一人の仏が担当する一宇宙になる。
この壮大な仏教宇宙内を、衆生は輪廻して回るのだという。

図＝『世界大相図』。（存統画、龍谷大学図書館蔵）

【須弥山宇宙】

多層構造を成す無限なる仏教宇宙

六道輪廻の世界を空間的に表すと、須弥山世界になる。これは、須弥山という空想上の超高山を中心とした仏教流の世界モデルだが、注意していただきたいのは、これが全宇宙ではないということだ。一須弥山世界は「一小世界」と呼ばれる。これが千集まると「中千世界」、中千世界が千集まって「大千世界」となり、ここまできてようやく、一人の仏陀が教化する〝小〟宇宙となるのである。ちなみに、われわれはおおむね一小世界内を輪廻するが、ときに別の世界にも転生するという――。

●須弥山概念図………「一小世界」すなわち「一須弥山世界」は虚空に浮かんでいる。まず、最下層に円盤状の風輪がある。風輪の上には水輪、その上に金輪が重なっており、これが世界の土台になる。この金輪の上に展開されている、須弥山および7つの山脈と8つの海、4つの島、世界を取り巻く鉄でできた円形の山（鉄囲山）、および須弥山上空の世界（神および日月の領域）が、狭義の須弥山世界になる。

図＝定方晟「須弥山世界の俯瞰図」（講談社現代新書、1973より参照）

天（てん）

六道輪廻の天道に当たる。膨大な神々が、階層ごとに住み分けている。まず須弥山中腹には四天王の住む「四天王天」があり、須弥山頂上には「三十三天」（ここの主神が帝釈天インドラ）が広がる。この上からは空中の天で、順に「夜摩天」（主神・閻魔）、「兜率天」（覩史多天）（弥勒が下生のときまで待機している）、「楽変化天」、「他化自在天」（第六天魔王がいる）と続く。

以上の6天は愛欲から解放されていないので「欲天」という。この上に愛

須弥山（しゅみせん）

須弥山世界の中心が須弥山という四角い山で、高さ約56万キロメートル。全山、金・銀・瑠璃・玻璃でできた宝の山である。日月は、この山の中腹あたりの空中を運行する。中腹に四天王天、山頂に三十三天が住み、中腹以下は神の眷属の夜叉

四大洲（しだいしゅう）

須弥山および7山脈からなる中央部を取り囲んで海が広がり、その海中に4つの島が浮かぶ。ここが人間の住む世界（人道）で、東にある島を勝身洲、西を牛貨洲、北を倶盧洲、南を贍部洲と呼ぶ。われわれ人

地獄（じごく）

地獄は、古くは世界の果ての日月の光もささない山間にあるとか、須弥山世界の外にあるとかいわれていたが、『倶舎論』では贍部洲の地底に置き、以後、これがポピュラーな説となった。天界

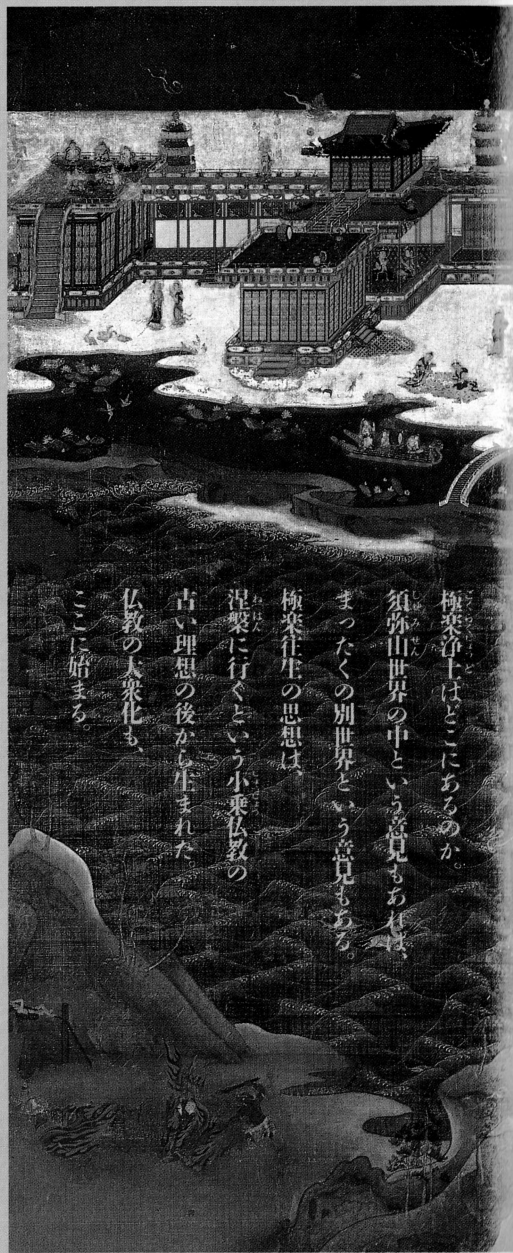
⬆『須弥三界図拓本』。（宗可作、龍谷大学図書館蔵）

欲から離れた4つの禅天が重なるが、一小世界（一須弥山世界）という場合には、四禅天のうちの最初の初禅天以上は含まない。以上が狭義の天である。

らが住む。須弥山全体は、金でできた7つの山脈、および山脈と山脈の間の堀状の海で囲まれている。

類は膽部洲に住むが、他の洲にも、少し様子や寿命の異なった人類が住んでいる。たとえば、牛貨洲の人は顔が円く、倶盧洲の人は四角、**勝身洲**は半月形の顔をしている。

同様、地獄も層状になっており、最下層の阿鼻地獄を基底として、順次、八大地獄が積み重なる構造になっている。

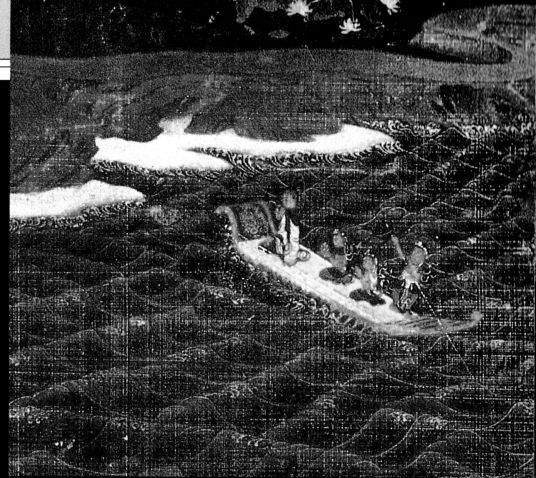
極楽浄土へ

極楽浄土はどこにあるのか。
須弥山世界の中という意見もあれば、
まったくの別世界という意見もある。
極楽往生の思想は、
涅槃に行くという小乗仏教の
古い理想の後から生まれた。
仏教の大衆化も、
ここに始まる。

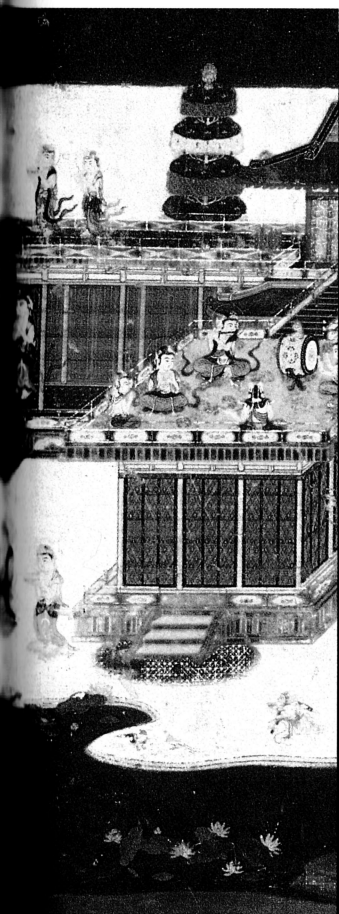
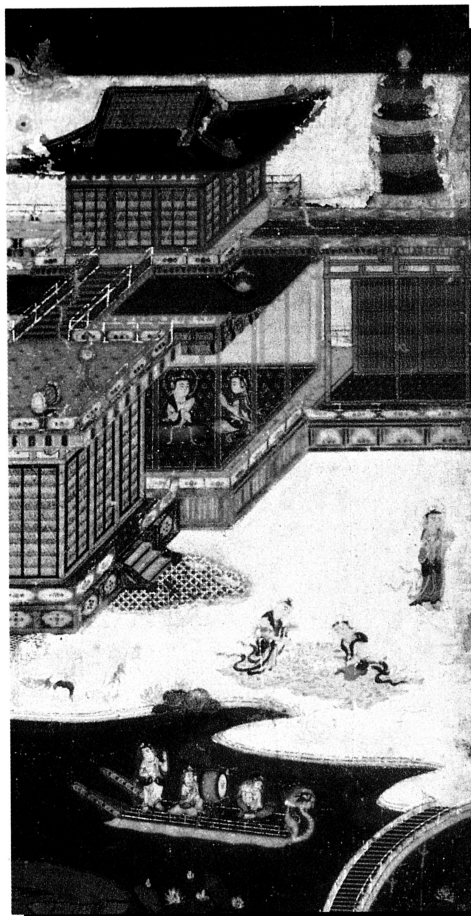
⬆『地獄極楽図屏風』。(金戒光明寺蔵)

【極楽浄土へ】

大海に隔てられた光の楽土

難しい理屈も、実行困難な修行もいらない。ただ阿弥陀如来におのれをまかせ切り、ひたすら「南無阿弥陀仏」と念仏を称えれば、たとえ殺生の大罪を犯したような極悪人でも、六道輪廻の世界から脱して弥陀の浄土に転生していける――。

浄土門の師祖たちは、こう教えた。このときから、広大無辺の仏の慈悲という決まり文句が、絵空事ではなくなった。中世の闇に、仏の光がさしこんだ。

海（うみ） 仏教では、小乗の教えは小さな船、大乗の教えは大きな船というように、救いを乗せる法門をしばしば船にたとえる。ここに描かれた船は大乗の船で、あらゆる困難・障害の海を乗り越えて、衆生を浄土へと運んでくれる。船には、阿弥陀如来と観音・勢至が乗る。その導きがあれば、海の怪物を恐れる必要は少しもない。

極楽（ごくらく） 小乗仏教を代表する論文である『倶舎論』に極楽の記載がないことからもわかるように、地獄に対する極楽という思想は、先の六道や須弥山世界の思想より新しく、後の大乗仏教の中で発展した。中でも最大の極楽が、阿弥陀如来の西方極楽浄土である。この楽土は、西方へ十万億仏国土すぎたところにあるとされ、阿弥陀仏、および阿弥陀につかえる観音・勢至両菩薩を中心とした絢爛たる至福の世界を形づくっている。

娑婆（しゃば） 狭義の娑婆は、われわれの住む世界を指すが、広義の娑婆は前項で述べた大千世界をいう。「恐怖を有する国土」「雑然たる集まり」の意味とされる。穢土・苦界の義である。

地獄

（じごく）　地獄と極楽をひとつの画面に描くことで、浄土思想をわかりやすく絵解きしている。浄土極楽の荘厳と地獄の悲惨、その間に娑婆が広がるという図式である。地獄は、浄土思想の普及とともにポピュラーなものになっていった。

P.126～127の図版すべて、『地獄極楽図屛風』より部分。（金戒光明寺蔵）

阿弥陀仏の来迎

安楽に暮らしている僧侶に教えられるまでもなく、
民衆にとっての現世は、苦界にほかならなかった。
念仏を称えれば、この苦しみだけの現実から出て、
十万億仏国土の彼方、西方極楽浄土からの
阿弥陀仏のお迎えを得ることができる――。
人々はそのときを夢見、ときには死さえ願った。
きらびやかな来迎図は、裏返された地獄絵である。

図『阿弥陀二十五菩薩来迎図』。（知恩院蔵）

【阿弥陀仏の来迎】

往生者を迎え導く荘厳なる救済仏

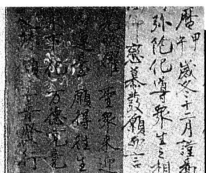
五色の雲に乗った阿弥陀仏が、人の臨終の際に、二十五菩薩を引き連れて迎えにくるという華麗な来迎幻想は、死後もなお現世の享楽を維持したいという貴族や、現世では得られなかった至福の時を得たいと願う民衆の魂を魅了した。彼らは、死に臨んで念仏を称え、図像の阿弥陀の手とおのれの手を糸で結んだ。来迎を待つ者を、親鸞は「いまだ信心を得ぬもの」と否定する。宗教的にはそのとおりであったろう。が、人は夢を見たい――。

来迎（らいごう）

浄土に往生したいというあくなき願いが生み出した来迎図は、『往生要集』の源信から始まったとされる。『無量寿経』によれば、出家して菩薩行を実践し、なおかつ阿弥陀浄土への往生を念願する者のみ、死に臨んで阿弥陀の来迎を得て蓮華の中に化生することができると説かれ、それ以外は、たとえ往生しても500年は会うことも説法を聞くこともできない。

二十五菩薩（にじゅうごぼさつ）

※阿弥陀如来とともに来迎する菩薩（聖衆）は以下の通り。
観世音…大勢至…薬王…薬上…普賢…法自在王…獅子吼…陀羅尼…虚空蔵…宝蔵…徳蔵…金蔵…金剛蔵…山海慧…光明王…華厳…衆宝王…月光王…日照王…三昧王…定自在王…大自在王…白象王…大威徳…無辺身（『十往生経』）

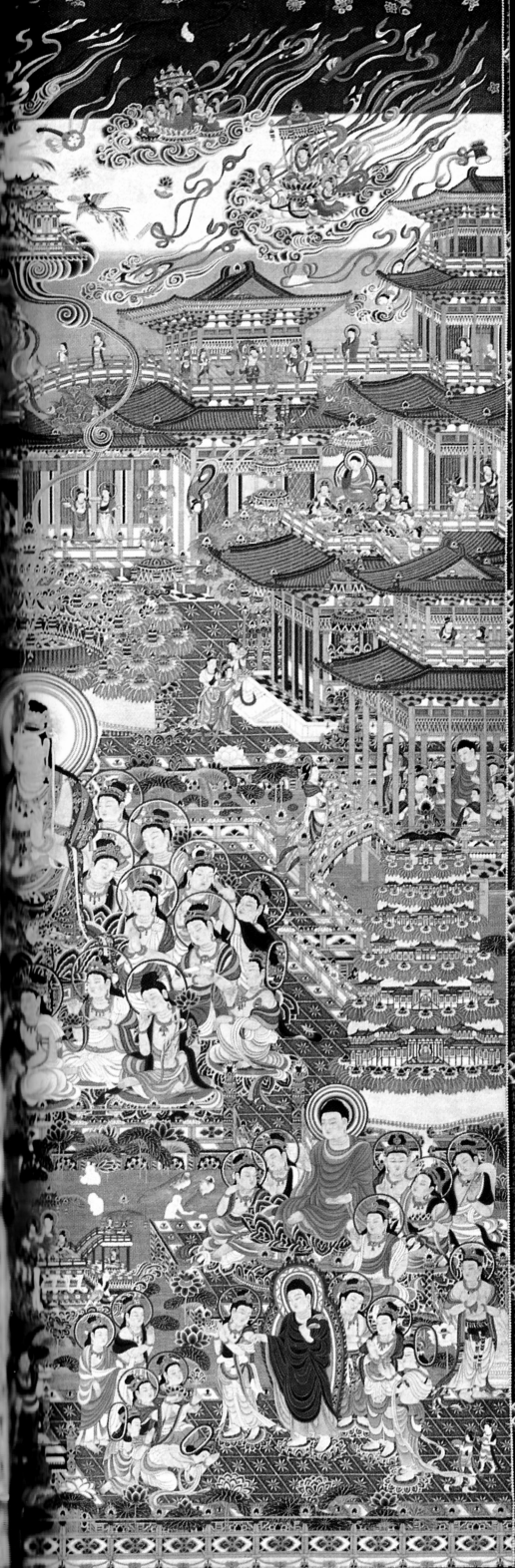
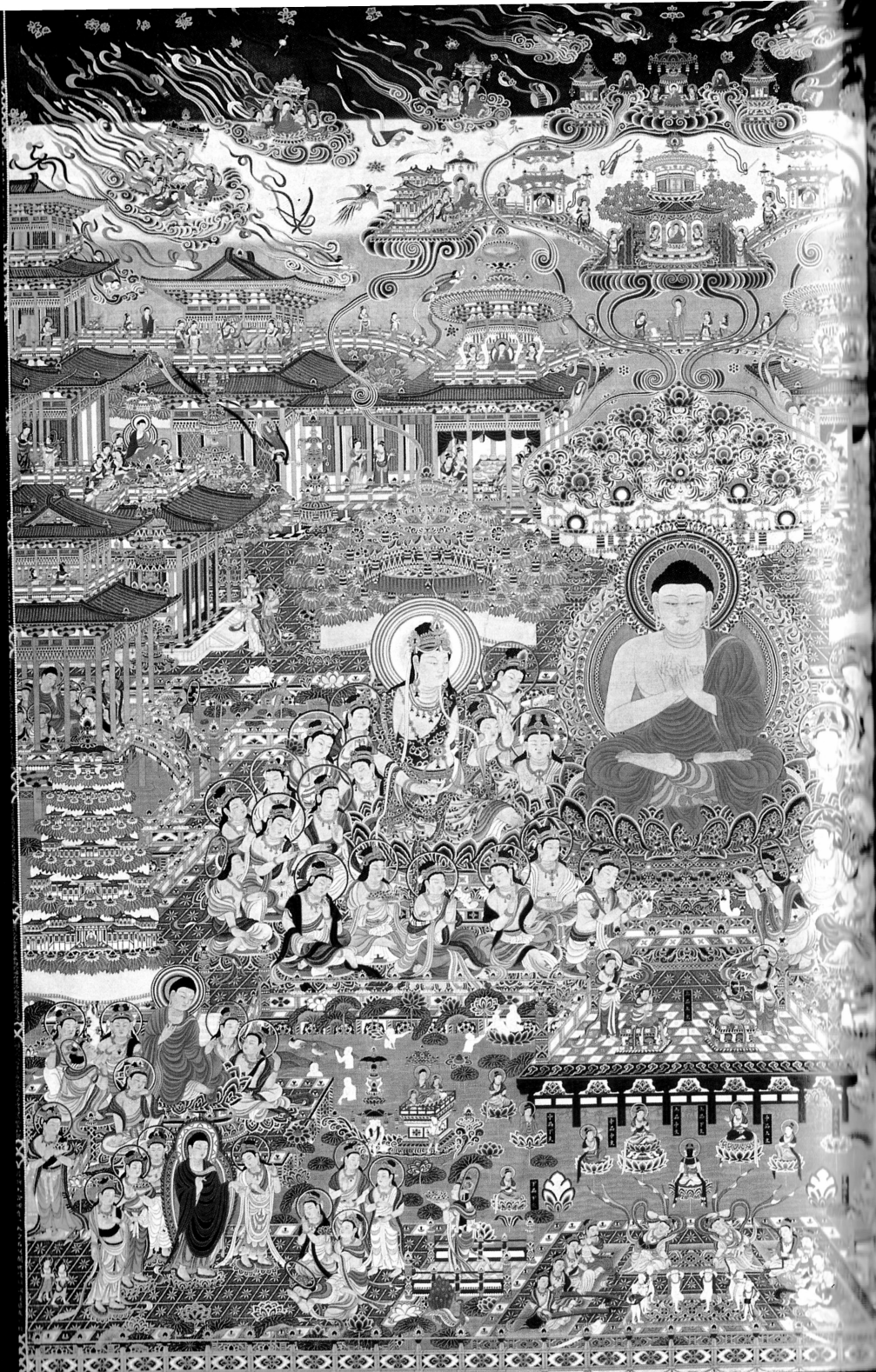
⬆『阿弥陀二十五菩薩来迎図』より部分。（知恩院蔵）

山越阿弥陀と二菩薩（やまごえあみだとにぼさつ）

山あいから顔をのぞかせる阿弥陀如来の図像を「山越阿弥陀」という。これも来迎のヴァリエーションで、やはり源信に始まるとされている。深層心理的には、山と山の間は生と死の境界となる。臨終の迎えとしては、まさに最適のシチュエーションである。

来迎図などで必ず阿弥陀に従っている二菩薩は、大慈大悲を表す観音菩薩と、知恵を表す大勢至菩薩（これを「脇士（脇侍）」という）で、阿弥陀とあわせて「三尊」という。この二菩薩は、いずれも阿弥陀浄土の未来仏で、阿弥陀が入滅した後は観音が仏陀となって仏国土を継ぎ、観音入滅後は大勢至が仏陀となって仏国土を教化教導すると説かれている（『無量寿経』）。

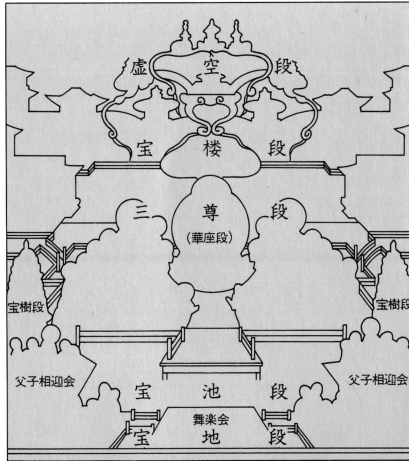
⬆『山越阿弥陀図』。（金戒光明寺蔵）

極楽曼荼羅

花が降り、白鳥や孔雀が歓喜の歌を歌い、天人は楽を奏でる。
ありとあらゆる宝石でできた世界、満ち溢れる光、善意だけの人々——。
極楽のイメージは、なぜ、かくも通俗的で貧困なのか。
極楽曼荼羅はわれわれにこの問いをつきつける。
極楽は〝外〟にあるのか、地獄は〝外〟にあるのか——。

←『当麻曼荼羅図（貞享本）』。（當麻寺蔵）

【極楽曼荼羅】

顕現する美と歓喜の地

浄土は阿弥陀仏の西方極楽浄土だけではない。最も古くから唱えられていた浄土は、阿閦仏の東方妙喜国で、その国は花と香と音楽と光に満たされ、悪人は一人もいない。人々は愛欲から離れて悠々自適の暮らしを楽しみ、悪人がいないから地獄・畜生・餓鬼の三悪道も存在しないという。

ほかにも、聖徳太子が信仰し、往生を願った天寿国、薬師仏の東方浄瑠璃国、観音の補陀落山など数多くの浄土があるが、中でも最も広く信仰されたのが阿弥陀の西方極楽浄土なのである。※

極楽の構造

当麻曼荼羅は三辺に『観無量寿経』の絵解きが配され、中央に阿弥陀三尊を中心とした宝楼閣の景観が描かれる。図は細部に至るまで浄土観想に対応するように構成されており、たとえば宝池の水は七宝よりなり、黄金の溝には60億の蓮華があり、流れる水は法を説く……というように観想していくのである。

※ その世界は、金銀、宝石や霊鳥・霊樹、咲き乱れる花と香りと、歓喜の音楽と光に満たされた至福の楽園として描かれているが、本来の浄土は、仏の教えを親しく受けることができて、より一層修行が進むというところにあった。それが、ともすれば往生だけが眼目の信仰へと変質していったところに、日本的浄土信仰の特色があり、これが浄土門の強みとも、最大の弱点ともなっていったのである。

構造図以外の図版すべて、『当麻曼荼羅図(貞享本)』より部分。(當麻寺蔵)

極楽の章

時代を超えて心に響く念仏安心の思想

文＝釈 智宏

この世に穢れを感じ絶望した者は、来世に清らかな理想境を夢想する。
その願いが〝極楽〟を生み、阿弥陀仏という仏を生んだ。
極楽への生まれ変わりを願う、民衆による念仏の合唱は、
やがて往生の決定を感謝する、阿弥陀仏への讃歌に変わった。
浄土思想の深化と発展は、ついに穢れた現世に極楽浄土を現出させる――。

阿弥陀仏と極楽

インドで発生した「死後の理想境」のイマジネーションが、大乗仏教と結びついたとき、一般衆生を救済する極楽往生の信仰が生まれた。浄土思想の源流から阿弥陀仏の誕生、そしてそれらに託された意味を検証する。……

仏教と西方浄土……万民救済の「易行道」思想

仏教に限らず、ほとんどの宗教、信仰は、この種の〝死後の理想境〟を説く。キリスト教における「エデンの園」も、ヘブライ語の「楽しみを極めた地」から来ているという。国や民族を問わず、現世で悩み苦しんだ一般の人々にとって、〝死後の理想境〟での救済と安穏は、絶対に必要なものなのだろう。

ただし「極楽」の由来と成立については、諸説があって定かではない。

浄土思想の根本経典の成立が、西北インドと見られることから、密接に交流があった西方地域の信仰が組み入れられたとする流れがひとつ。イラン高原での信仰から、エジプト神話、ギリシア神話、さらには「エデンの園」を直接の起源とする学説まである。遥か西の果てに存在するという地域的特色は、こうした西の

●極楽の由来と発生

西へ——、西へ——、西へ——。遥かに西へ——。

無限を思わせる十万億土の西の彼方に、「極楽浄土」は燦然と光り輝くという。

「極楽」は、サンスクリット語の「スカーヴァーティー」の訳で、快楽を極め、苦悩がまったくないことを意味する。

信仰に根ざしていると説明する。
もうひとつは、インドの内部に発生を求める流れ。ヤマ神話、ヴァルナ神話、ヴィシュヌ神話などの古代神話が原型だとする説と、仏教の原始経典から発展したとする説に分かれる。なぜ、西方なのかについては「生命の源である太陽が、東から昇り西に沈むことから生み出されたのではないか」という推測がある。

➡『二河白道図』。娑婆と極楽を隔てる火の河と水の河。その中を貫く1本の白い道を、釈迦の勧め、阿弥陀仏の招きに応じ、信じて渡れば極楽往生できるという。他力念仏による往生の旅をたとえた話をもとに描かれた。(島根・万福寺蔵)

➡龍樹。2世紀半ばから3世紀半ばの、南インドの僧。空の思想を説いた、大乗諸教の祖。

しかし、決定的な検証に成功したものはなく、今後も、あまり期待できそうにはない。

仏教学の立場では詳細な検討にも価値があるだろうが、一応、西北インドでの大乗仏教を思想の基盤として、民衆レベルでの憧憬と共感を考慮して生み出された"死後の理想境"の具体像と理解しておいて大きな間違いはないだろう。

◉仏教世界観の中の浄土

「極楽」が、人間が持つ宿命的な無意識によって創造された概念であるのに対し、「浄土」は、大乗仏教が構築した世界観から成立している。

悟りを開いた仏の力によって完成した仏国土、もしくは悟りを開くために菩薩が修行を重ねる「浄められた聖域」を意味する。仏が主人の場合は、菩薩であったときに立てた誓願が完成したことにより出現したもので、悟りを得たいと願う多くの存在を広く迎えるとされる。この地に往生したものは菩薩となり、将来、仏となるべく修行を重ねるのである。

一般に「浄土」というと「極楽」が結びつきやすいが、大乗仏教の多仏思想からはさまざまな「浄土」が生まれている。東西南北四維十方の世界に諸仏の無数の「浄土」が存在すると考えるのである。たとえば、東方には、薬師仏の浄瑠璃世界と、阿閦仏の妙喜世界が開かれており、観音菩薩の補陀落山、弥勒菩薩の兜率天も、やはり「浄土」なのである。

こうした聖域は、大乗仏教の一般的な世界観・宇宙観である「十界」の最高位に位置づけられている。

「十界」のうち、下の六界は輪廻する迷いの世界で、最下から、地獄界、餓鬼界、畜生界、阿修羅界、人間界、天界の順。上の四界は悟りの世界で、下から、声聞界、縁覚界、菩薩界、仏界となっている。悟りの世界は、輪廻することなく、"永遠の安住"が約束されている。キリスト教の説く「天国」の性格にも

〈九品仏〉『観無量寿経』では、九品往生を説いている。九品往生とは、人間の機根（修行の能力・素質）により、9種類の往生があるというもの。9種類の阿弥陀が9種類の印相をもって来迎するといわれるが、印相の違いに定説はない。ここに紹介するのは、東京都世田谷区、浄真寺の九品仏である。その印相は、上品に定印、中品に説法印、下品に来迎印が用いられ、それぞれに、上生・中生・下生のヴァリエーションがある。（撮影＝清水譲）

➡上品上生

似ている印象を受けるが、浄土思想は究極的には〝永遠の安住〟を否定するという特性を持つ。そうした〝永遠の安住〟は、仮の救いであるという。大乗仏教の根本思想である「利他行」を、あくまでも実践していくならば〝自分だけが悟りの世界に永遠に安住する〟のはおかしいのではないかというのである。

浄土思想という言葉からは、短絡的な「極楽世界」への憧憬だけを思い浮かべがちだが、思想的な構造と変遷は決して単純ではない。浄土思想の布教を担ってきた高僧たち、そして、それを受容した一般民衆の側も、試行錯誤を含め、さまざまな認識方法で「極楽浄土」を見つめ続けてきたのである。

●易行道の登場と浄土思想の発展

ナーガールジュナ。西暦2〜3世紀のインドに生き、漢訳で龍樹、龍猛、龍勝ともいう。この人物こそ、大乗仏教を大成させた意義深い存在であり、すべての宗派が偉大な祖として崇拝している。

浄土思想の原点も、著作『十住毘婆沙論』の中の仏教修行を「難行道」と「易行道」とに分けたところに見いだせる。篤い信仰の心をもって、仏の名を称えることが「易行道」であり、悟りへの有効な手段であると述べている。

浄土思想が発展するにつれ、この指摘を強調して「易行道」こそが最高の仏教実践だとする主張が多くなるが、龍樹は「易行道」を賛美したわけではなかった。「仏教の修行は日夜、全力をもって精進するべきなのだが、そんな力のない劣った人間もいる。そのような人間にさえも悟りへの道はある」――という観点から述べている。つまり、仏の救いは、あらゆる人間に差し伸べられていることをいいたかったにすぎないのである。

では、なぜ「易行道」による「極楽往生」が強いトーンで叫ばれるようになったのか。浄土思想を発展させてきた祖師たちは、なぜ、その道を選んだのか。

日常的な生活に忙殺され、三毒、五欲の煩悩にまみれた行動を余儀なくされている一般衆生への救いは、結局、それ以外には考えられなかったのである。

浄土思想の祖、あるいは発展に貢献したといわれる高僧は、それぞれに理論の構築に苦心を重ね工夫を凝らした。世の中にあふれている迷いの人々に「極楽浄土」に往生するという救済を約束すると同時に、大乗仏教の根本思想である「利他行」を実践させなければならない。そのためには、時代の変化とともに先人の著した指導書の内容を、読み換えたり、解釈し直したりしなければならなかった。なかには、明らかに原典の意図を無視したものさえある。しかし、それこそが、大乗仏教が誇るべき〝生きた人間の知恵〟ともいえるのではないだろうか。

浄土教を知るキーワード⑨

悪人正機（あくにんしょうき）

『歎異抄』に書かれた、阿弥陀仏の本願は、悪人を救済することが目的であり、悪人こそ往生できる素質を持っている――そのことを表す言葉。ここでいう悪人とは、自分の力で善行をなしえない、救いようのない凡夫を指している。親鸞は、このような悪人こそ阿弥陀仏のはかりしれぬ慈悲によって救われるのだとした。

阿弥陀仏の救済
……無量の救いを秘めた四十八願

●法蔵比丘の誓願と阿弥陀誕生

〃無限の寿命〃と〃無量の光明〃を語源とする阿弥陀仏の由来も、またはっきりとはわからない。

「極楽」と同じく、西方地域の信仰にも強く影響されたと見られるが、具体的な系譜の指摘はできない。ゾロアスター教の太陽神である〃光の神〃が直接のヒントだという説もあれば、原始仏教の〃光明思想〃が発展したものだという説もある。

やはり、詳細な検証は仏教学者に任せるとして、ここではその特異な性格と、救済のスタイルについて触れたい。

仏教における阿弥陀仏は、その語源にふさわしく、驚異的に壮大なスケールの物語の主人公として登場する。

簡単に、話の流れを紹介してみる。

——数字では表せないほどの過去に、世自在王仏（ローケーシュバーラ・ラージャ・ブッダ）が仏の道を説いていた。たまたま、この教えを聞いていた一人の王が心から感動し、自分も悟りの境地に到達したいと思って、王位を捨てて出家する。

法蔵比丘（ダルマーカラ・ビクシュ）と名を改めた彼は、どうしたら世の中すべての人々の苦しみをなくすことができるのかを世自在王仏に尋ねた。

世自在王仏は、法蔵比丘に２００億を超す仏国土を見せて、その詳細を語った。

法蔵比丘は、そのいずれよりも優れた浄土を西方に建立することを決意する。同時に、48の誓願を立てて、それがかなわなければ決して自分は仏にはならないと誓った。

そののち、きわめて長い期間の修行の末、ついに法蔵比丘は仏となる。誓願は完成され、すべての人々への救済の道が開けることとなった。そして、その名は、阿弥陀仏と改まった——。

●最上級の慈悲と平等

阿弥陀仏の物語は、歴史的に見れば西北インドの経典作者の創作である。荒唐無稽な〃物語〃と片づけるのもたやすい。

だが、人間が作った〃物語〃から信仰は生まれないのだろうか。

あるキリスト教研究者はこう主張した。

「大乗仏教の経典は、興味深い。しかし、そのほとんどは、単なる作り話にすぎない。そこへいくと『聖書』の語る内容は、すべて事実としての裏づけがある」

この研究者の判断をどう見るかは別として、『聖書』を信じきるところから信仰が生じているのは確かである。重要な

⬅上品中生

『五劫思惟阿弥陀仏坐像』。阿弥陀仏が法蔵菩薩のとき、一切衆生救済のために果てしなく長い時間修行した姿。伸びた髪の毛が、思惟の時間の長さを表す。（奈良・東大寺蔵　写真撮影＝小川光三）

のは、その教義に人生を生きるうえでの真理と救済が包含されているか、普遍性と客観性があるかなのである。

阿弥陀仏信仰の場合は、なによりも、四十八願の性格に、その特徴がある。全体は、内容的に4種に分けられる。

①阿弥陀仏に関するもの。無限の寿命と無量の光明が不変であること。

②極楽浄土に関するもの。この仏国土が最上級に清浄であること。

③往生した者に関するもの。輝きに包まれて、あらゆる苦しみから解脱し、菩薩に特有の超能力が約束されること。

④往生を願う者に関するもの。あらゆる世界のどんな者でも、念仏をすれば必ず迎え入れられること。

ここには、日常に苦悩する者への究極の〝救済〟と〝平等〟と〝慈悲〟がある。信仰を生じさせる心の奥への呼びかけとしては、最上にして最良のものが含まれているといっても過言ではないだろう。

浄土三部経の世界……浄土教の世界観を形成する根本聖典

●極楽の姿と往生の方法とは

阿弥陀仏と極楽浄土に触れている大乗経典は、200を越す。浄土思想が大成された中国へも多くの経典が渡るが、特に重要視されたのが『阿弥陀経』と『無量寿経』と『観無量寿経』の三経である。

日本でも同様で、浄土宗の開祖・法然は、それらを『浄土三部経』と名づけ、中心となる聖典と定めた。

『阿弥陀経』は、三経の中でもっとも短

浄土教を知るキーワード⑩

【非僧非俗（ひそうひぞく）】

念仏弾圧で、親鸞は師・法然らとともに処罰され、僧籍を剥奪された。その後、親鸞は自ら〝愚禿親鸞〟と名のる。『教行信証』には、「しかればすでに僧に非ず、俗に非ず、この故に禿の字をもって姓とす」とある。非僧非俗とは、官許としての僧を拒否しながらも俗を超越した親鸞の、一つの思想的態度である。

く『小無量寿経』『小経』とも呼ばれる。現在、浄土系各宗派の法事などでもよく読誦されるスタンダードな経典である。

極楽の荘厳な様子を紹介し、往生する方法を説き、それが真実であることを証明し、信仰することによる利益を示すという構成になっている。浄土思想の世界観をコンパクトにまとめたという印象を受けるが、経典の名から予想される阿弥陀仏の具体的説明はほとんどない。

『無量寿経』は、『大無量寿経』『大経』とも呼ばれ、構成と内容の豊富さから、根本聖典的な性格を持っている。

本論では、先に述べた阿弥陀仏の四十八願と、その達成の説明が詳細になされ、極楽の様子が壮大に展開していく。往生の方法と、往生した人のすばらしいありさまを語り、それに反して、現世の醜いことを示し、極楽浄土を目指すべきであることが説かれるのである。

『観無量寿経』は、『観経』という別名が示すとおり、極楽浄土を観想する（イマジネーションで心の中に思い浮かべる）方法を説くことが目的の経典である。

劇的な構成も特徴で、呪われた運命のもとに生まれた阿闍世という王子と、その母の韋提希を主人公とするドラマから始まっている。

やがて、16の観想が具体的に述べられる。まず、13のイマジネーションの方法を説き、上輩、中輩、下輩という3種類の人のための往生と観想と続く。その3種を、さらに3種に分け、合わせて9種類の往生と極楽（九品浄土）があることも示されるのである。

●富と栄華の極限にある世俗性

こうした経典を受け入れる一般衆生にとっての最大の関心は、おそらく「極楽浄土」の具体的な様相だろう。

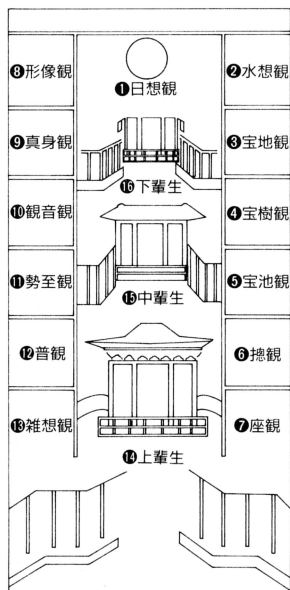
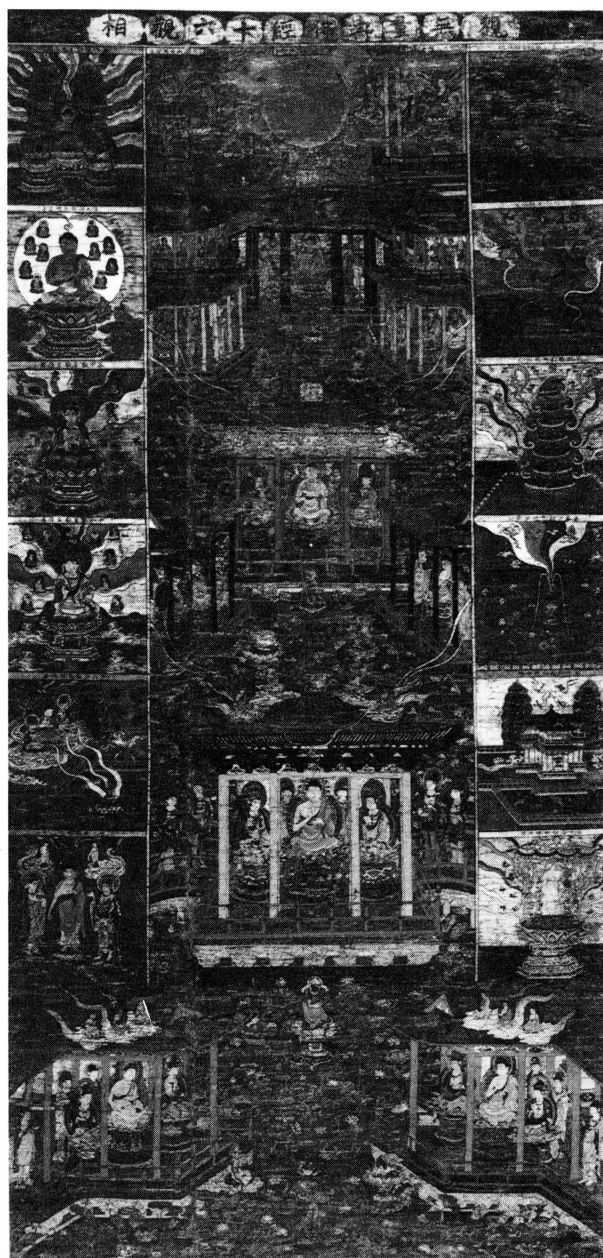
全体を紹介するスペースはとてもないので、共通する要素をごく簡単に紹介してみることにする。

「極楽世界の地面は、金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀・硨磲・瑪瑙といった7種類の宝石からできている。

その広さには限りがなく、しかも、それらの宝石は、俗世には存在しないすばらしさで、無上の輝きに満ちている。この世界は、一年を通して暑くも寒くもなく、きわめて過ごしやすい。7種類の宝石でできた樹木には、金銀でできた花や果実が実り、きらびやかなことは、このうえない。清らかな風が吹くと、妙なる自然の音楽となって響きわたる。また、宮殿や建物も7種類の宝石で飾られており、その周囲には水浴のための池があって、8つの功徳の備わった清浄な水がたたえられている。もし、この地に往生した人が何か食べたいときには、どこからともなく最高の食べ物がもたらされ、食事が終わると、またどこへともなく消え去っていく……」

こういった記述が以下も延々とつづく。そのイメージ世界の壮麗さには、めまいを覚えるほどである。

しかし同時に、これは、きわめて即物

⬅上品下生

⬅『観経十六観変相図』。『観経』に説く、十六観（阿弥陀仏の浄土に往生するために修する16種の観法）を描いたもの。観相念仏でイメージされる世界である。上は、その模式図。（奈良・阿彌陀寺蔵）

的な富と栄華を極限にまで高めて描き出した世界といえなくもない。このあたりに、一般衆生の関心をひくための配慮と工夫が感じられて興味深い。浄土思想が救わなければならなかったのは、やはりそうした現世の枠組みにからめとられている人々だったからである。

来迎思想と極楽

釈迦の教えが消滅し、破滅的な様相を迎える末法の世――深い無常感に包まれ、極楽浄土への生まれ変わりを願う機運が高まっていく。人々は、いかなる方法で往生を遂げうると考え、実行したのだろうか。……

浄土思想の伝来……浄土教の日本での展開

◉追善供養から観想念仏へ

日本で浄土思想の"華"が開いたのは平安時代中期以降だが、経典類はすでに飛鳥時代に渡ってきていた。

小野妹子にともない入隋した高僧が、修学を終えて日本に戻り、『無量寿経』を講義したのは、640年のことだという。

奈良時代になると、平城京に建立された寺院で、阿弥陀仏の浄土図も盛んに製作されるようになった。なかでも、法隆寺金堂の壁画に描かれた阿弥陀三尊を中心とした浄土図は、傑作の名を得て長く信奉されることになる。ただ、この時代のものは、死者の追善供養を主な目的としており、極楽を憧憬するといった傾向は希薄だったようだ。

奈良から平安にかけては、時代的な要請で、永遠の救済を約束してくれる阿弥陀仏よりも、現実世界の利益に霊験があるとされた薬師仏への信仰が篤かった。空海、最澄が開いた平安仏教の寺院の本尊の多くも、初めはこの薬師仏だった。また、来世への願いとしては、弥勒菩薩の兜率天信仰が主だったのである。

もちろん、浄土教的な信仰がまったくなかったわけではない。たとえば、最澄

⬅『山越阿弥陀図』。(京都国立博物館蔵)

⬆『頬焼阿弥陀縁起』より。臨終に際し、阿弥陀像の手につないだ五色の糸を持ち、往生を願う。(神奈川・光触寺蔵)

が伝えて、円仁以降に盛んになった常行三昧もその一つ。90日の間、昼夜を分かたず一心不乱に、口には念仏を称え、心には阿弥陀仏と浄土を観想しながら休みなく歩きつづける行である。ただ自力的な救済の色合いが強く、一部の人間しか達成しえなかったことは確かだろう。

◉人々を引きつけた極楽の「十楽」

時代は下って、10世紀の幕が開く。

権力と密着することによって強大な勢いを得た平安仏教だったが、世俗化が進み、教団としては、もはや信仰の場とはいえない状況を呈するようになる。貴族の子弟の進出などもあって、寺と僧侶は単なる営利追求集団と化してしまった。

ここに、潜在化していた浄土信仰の種が、人々の間にまず芽吹き始めていく。さらに決定的な起爆剤となったのが「末法思想」——。釈迦の死後、正法・像法・末法の三時代があり、末法の時代には、釈迦の教えは消え果てて、破滅的な様相を迎えるという理論が、世の乱れとともに次第に浸透してきたのである。

現実的な動きとしては、まず、空也が京都の町に立って、念仏と極楽往生を勧め、生活に苦しむ中小貴族や一般民衆の心をとらえていった。

そして、源信(恵心僧都)が、寛和元年(985)に『往生要集』を著すにおよんで、浄土信仰は一大潮流となった。知識階級に向けて書かれた同書は、平安仏教の加持祈禱に満足できなくなった上流貴族にも好んで受け入れられ、来迎思想にきわめて熱いまなざしが送られるようになったのである。

なによりも人々に強い憧憬を与えたのは、「浄土の十楽」の列挙であったろう。極楽に往生する願いを心に抱くと、これだけの楽しみと喜びが用意されるという紹介である。

①聖衆来迎の楽。いざ臨終というときには、阿弥陀仏が、観音・勢至の両菩薩をはじめとする極楽の聖衆を連れて、この世まで迎えにきてくれる。

②蓮華初開の楽。極楽に往生するときには、清らかで美しい蓮の華がその人のために咲いてくれ、その中に生まれる。

③身相神通の楽。仏に特有の美しい姿に生まれ、すべてを見通す力、どんな声や音も聞くことができる力、他人の心の動きを知る力、過去のできごとを知る力、

⬅中品上生

どこへでも自在に行ける力が得られる。

④五妙境界の楽。人間が持つ、色・声・香・味・触という5つの感覚がこの上なくすぐれてくる。

⑤快楽無退の楽。極楽で受けるさまざまな楽しみは決して一時的なものではなく、永遠に続く。

⑥引接結縁の楽。自分だけではなく、ゆかりのあった人(家族・友人・恋人など)も極楽に生まれさせることができる。

⑦聖衆倶会の楽。観音・勢至をはじめとする無数の聖者を直接礼拝することができ、友人として交際することができる。

⑧見仏聞法の楽。阿弥陀仏を直接礼拝することができ、教えを聞くこともできる。

⑨随心供仏の楽。極楽浄土に往生した喜びをさまざまに表現することができる。

⑩増進仏道の楽。この世で果たすことができなかった「悟り」への道に到達することができる。

——まさしく、いたれりつくせりの境遇と能力が約束されている。これらは浄土経典から導き出されたもので源信のオリジナルではないのだが、当時の人々にわかりやすく書かれたことで、強い支持を受けることになったと思われる。

●臨終での具体的な手引き

『往生要集』は、10章に分かれており、地獄のすさまじい描写や、称名念仏の勧めに最大の特徴があるとされている。だが、もう一つ、これも源信のオリジナルではないのだが、臨終の手引書的な側面にも大きな魅力があった。

たとえば、第六章の別時念仏の第二にある「臨終の行儀」の一節。まさにこれから死のうとする者へのハウ・トゥがそこには記されている。要点を意訳すると、

「死期が迫ったと判断したら、太陽が沈む方向にある無常院(病室)に移し、世俗を絶つ心構えを持たせなさい。そこには、西に向けた阿弥陀仏の像を安置し、左手に五色の細長いヒモをかけてうしろに垂らす。無常院に入った病人は、阿弥陀仏の背後に横たわり、ひたすら念仏をとなえて来迎を待ちなさい。看病する者は絶えず香をたき、花を散らして病人を快くさせることを心がけなさい。

いよいよ最期のときが近づいたら、死んでいく人間に絶えず質問をしなさい。阿弥陀仏は来たか。地獄の相が見えたかを聞くのです。もし、阿弥陀仏の来迎がありそうだという状況になれば、全員で念仏をともに唱和し、荘厳を怠らないように一心に手助けをして、すばらしい最期を迎えさせてあげるのです」

すべての人間が心安らかな最期を望む。

この『往生要集』が人々の間に受け入れられ、人気を博した理由には、そうした側面もあったのである。

浄土教を知るキーワード⑪ 遊行

一般的に、僧が布教と修行のために諸国を遍歴すること。中世においては、〝念仏聖〟と呼ばれる多くの私度僧が、各地を遍歴して民衆レベルでの念仏信仰を広めた。とくに、諸国を念仏札をくばって歩いた一遍は、〝遊行上人〟と称され、時宗の総本山・清浄光寺は、別名〝遊行寺〟と呼ばれている。

浄土思想の流行……末法の世に広がる極楽への憧憬

●「往生伝」の流行

平安中期の歴史書『栄花物語』は、最高権力者、藤原道長の臨終をこう語る。

「来迎する御仏の姿だけを願って、ほかのものを見ようとは思っておられなかった。往生のことだけを願って、ほかのことは考えておられなかった。手には、阿弥陀仏に結ばれた糸を握り、北枕で、西に向かって横たわっておられた」

3人の天皇の外祖父、3代の中宮の父親となって、まさしく栄耀栄華を極めた人物の最期の様子だが『往生要集』が教えるとおりの方法にすがっている。

源信は『往生要集』を著すとともに、実践的に念仏を推進する集団を結成して浄土思想を意欲的に広めていた。短期間に成果は実り、時の最高権力者までが全面的に帰依するようになったのである。

阿弥陀仏を信仰したことによって、みごと極楽往生をとげた証拠も当然必要になってくる。いうまでもなく、臨終は、絶対的な一方通行であり、極楽に生まれることができたかは、生き残った側にはわからない。その必要に応じて生まれたのが「往生伝」といわれるものである。

慶滋保胤（？～1002）が編集した『日本往生極楽記』、大江匡房（1041～1111）による『続本朝往生伝』、三善為康の『拾遺往生伝』と『後拾遺往生伝』などが有名で、それぞれ数十人の往生物語を載せて、その証明を果たす役目を担った。

念仏によって往生を果たした話だが、最初の『日本往生極楽記』から、この時代の念仏と極楽の理解を見てみよう。

「奈良の元興寺に智光と頼光という2人の僧侶がいた。少年時代から仲よく修行していたのだが、晩年になって頼光が、突然口をきかなくなった。やがて、頼光は死ぬ。智光は夢の中で、頼光の往生した場所へ行くことができた。そこは極楽だった。頼光は往生がかなった理由をこう述べた。

『無言の行の中で、行・住・坐・臥のすべてのときに阿弥陀仏の姿と極楽の様子を観想することに努めて、ようやく極楽往生が叶ったのだ』

そののち、頼光は智光に阿弥陀仏と極楽のありさまを見せた。智光は、夢から覚めると、それを画家に描かせる。それを一生観察して過ごしたので、ついに、極楽往生がかなった」

源信は、称名念仏を勧めたものの、それだけが往生の原動力だとはしなかった。伝統的なものも認め、観想はもちろんのこと、日々のさまざまな善行や功徳行、あるいは当時盛んだった密教的な行も励

←中品中生

⬅『智光曼荼羅図』。『日本往生極楽記』などに見られる智光と頼光のエピソード（本文参照）は、この『智光曼荼羅図』の縁起を述べたものである。智光が夢のなかで阿弥陀仏に示された極楽のありさまを、画工に描かせたものと伝える。

ちなみに、その時の正本は、宝徳3年（1451）の元興寺の火災により焼失してしまった。元興寺には、現在3点の『智光曼荼羅図』が伝えられており、これは室町時代の模本である。（奈良・元興寺蔵）

行したのである。それは、日々の全力をあげての極楽往生への接近だった。

◉現世否定と自殺の流行

しかし、源信の意図とは別に、諸行による往生と臨終儀式への傾倒は、人々の間に厭世的な風潮を作り出していく。

すでに末法に入ったという絶望と諦めに、天災・飢饉・疫病・戦乱による苦悩と疲労が重なって、入水、焼身、縊死などの自殺が流行し始めたのである。四天王寺の西門は、極楽の東門につながると信じられるようになり、貴賤を問わず大勢の人々が押し寄せたが、ここから海に漕ぎ出して入水による極楽往生を目指す者が後を絶たなかったという。

浄土思想の底流には「厭離穢土」という現世否定の主張はあるものの、良質な宗教者は積極的に自殺行為を勧めたりはしない。源信を筆頭に、日本に初期の浄土思想を根づかせた宗教者たちも、自殺が本意では決してなかったはずである。

その風潮に新風を送り、人々に念仏と極楽の意味を問い直させる人物が登場する。法然である。専修念仏というシンプルな手段によって信仰の純化を図ることによって、人々の不安と混迷に救いの手を差し伸べた意味は大きい。また、ここから他方世界だった極楽の概念が、個人の内側に向き始めるのである。

浄土教を知るキーワード⑫

行と信

〝行〟とは「南無阿弥陀仏」と、阿弥陀仏の名を称えること。〝信〟とは仏の教説を信じて疑わない信心のこと。浄土真宗では、行と信とは阿弥陀仏の側から与えられる他力念仏・他力信心であり、凡夫の側から起こすものではないとされる。こうした行や信を、大行・大信という。親鸞は、行と信のうち、信のほうをより重視した。

自然法爾と極楽

貴族の独占物であった仏教は、法然の登場により民衆レベルに引き降ろされた。そして、親鸞により浄土思想は究極に高められる。親鸞が切り開いた自然法爾の地平の向こうに、妙好人という極楽が見えてくる。……

自覚的浄土の発生……新しい極楽浄土の概念

●親鸞の報恩念仏

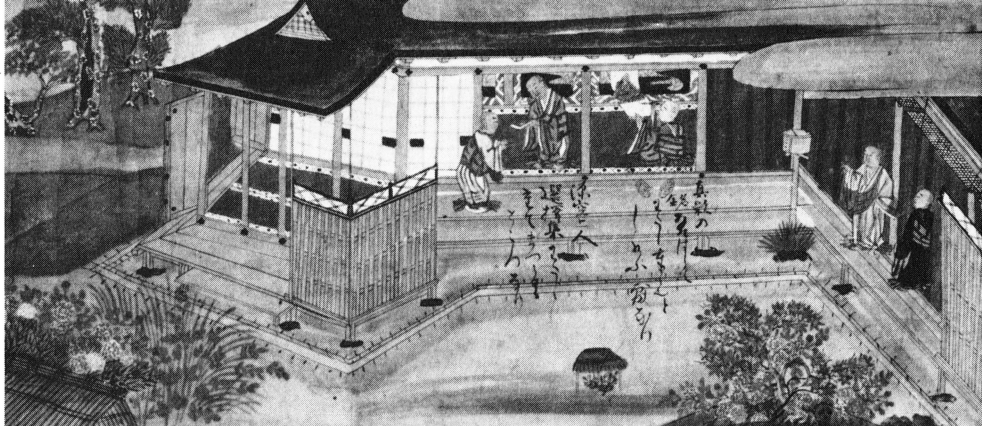
「たとえ法然上人にだまされて地獄に堕ちたとしても、まったく後悔はしない」

まさしく、至上の師として法然に帰依した親鸞だったが、その浄土観は独自なものを切り開いていくことになる。

法然の推奨した専修念仏を、現実の生活のなかで実践していくうちに、まず、念仏の意味が変容し始めた。法然の念仏は、いわば往生するための手段だったのだが、親鸞は阿弥陀仏への感謝の言葉だと信じるようになる。念仏は絶対的存在である阿弥陀仏のはからいによって信仰心が目覚めた証明だというのである。

つまり「南無阿弥陀仏」は「阿弥陀仏よ、どうか極楽に往生させてください」ではなく「阿弥陀仏よ、信仰に目覚めさせていただいてありがとうございます」でなければならないとした。いわゆる、「報恩念仏」、あるいは「念仏為本」の思想の発生である。

法然は、信仰の形態をシンプル化させることで、結果として民衆の迷いを軽減することに成功した。依然として、西方極楽浄土へかけた祈りというものが根強かったかもしれないが、そこには極楽の

⬅青森・恐山にて。大数珠を繰りながら念仏を称える老女。(写真撮影＝萩原秀三郎)

⬆『善信上人親鸞伝絵』より。中央の２人の人物が法然（右）と親鸞（左）。親鸞が法然より『選択本願念仏集』を写すことを許される場面。（東京・報恩寺蔵）

イメージの抽象化が始まりかけていたのではないか。ただ、法然は、肉食妻帯せずに、高潔にして超俗の僧という立場を終始とり続けた。

これに反し、親鸞は、自らの煩悩に苦しみ迷いつつ「非僧非俗」の立場で生きていかざるを得なかった。そこに斬新な念仏の解釈が起動する素地が眠っていたといえるだろう。

当然、極楽浄土の観念もそれまでのものと変わっていく。浄土経典に記された他方世界に限界を感じ、阿弥陀仏という名の絶対的存在が純粋に機能する、抽象的な浄土が想起されてくるのである。

●自力往生と仮の浄土

親鸞は、数多い言葉や手紙を遺しているが、「西方極楽浄土」という記述をことさらに避けている。

仏教には「方便」という考え方があり、真実の悟りにいたらしめるための仮の教えとか、便宜的な手段を意味するが、親鸞の「西方極楽浄土」の理解は、そうした部分で受け取っていたのではないか。

晩年の言葉である『末燈鈔』に、

「自分の心が善ければ、往生できると思ってはいけない。自分の力では、真実の浄土へは行けない。自分の力で行けるのは仮の浄土までだと思いなさい」

とあり、また『歎異抄』に、

「自力の心をひるがえして、他力をたのめば真実の浄土へ往生できる」

とあるが、こうした表現が生まれた思想の裏側には、すでに他方世界としての「西方極楽浄土」は影を薄くしてしまっているといっていい。

親鸞はまた、浄土への往生をひたすら願うという立場もとっていない。

「浄土に急いで行きたいという気持ちはなく、病気でもすると死んでしまうのではないかと心配してしまう」（『歎異抄』）

という言葉を遺している。これは、世の中が、生きがたいまでに不安と混乱に

⬅中品下生

満ちているとはいえ、この世にこだわる一般民衆のいつわらざる気持ちと同じ次元にあると判断できる。

ただ、このすぐあとの表現に「こんな心を抱くのは煩悩ゆえ。この世に執着するのは、それが強いせいだろう」と続けている。親鸞にどれほどの作為があったかは不明だが、こう続けないと浄土思想の根本が揺らいでしまう。極楽浄土への願いを完全に否定しては元も子もなくなってしまうからだ。他方世界を方便の浄土として、真の意味の自覚的な浄土を認識させることは容易ではないのである。

すでに、この指摘自体、教義的に疑問視される向きがあるだろうか。

還相回向と現世往生……光明に身を委ねる絶対他力

●極楽往生の先にあるもの

現在、一般に「回向」の言葉は、葬儀などを営むことによって、死者に冥福をもたらすという意味合いが強いが、本来は「自分の修めた善行の結果が他に振り向けられて及ぶこと」を定義とする。

これは、大乗仏教における〝第一義〟といってさしつかえない。経典類では、「自未得度先度他」とも記す。自分が得度（救われる）する前に他人を先に度す（救う）ということで、そうでなければ仏教の本質に反すると教えるのである。

当然、浄土思想も大乗仏教である以上、大原則の教義を超えることはできない。『十住毘婆沙論』で「易行道」を開示したナーガールジュナ（龍樹）を継ぎ、最初に浄土思想を展開したとされるヴァスバンドゥ（世親）も、その『浄土論』の中で、「礼拝、讃嘆、作願、観察といった行為によって与えられた自分の功徳を、他の人々に振り向けて、共に仏の道を進む」ことが心要だと述べている。だが、このままでは、いかにも自力的な修行という印象が否めない。

しかし、ここで浄土思想は起死回生ともいうべき妙法を立てた。『浄土論』を注釈した中国の曇鸞によるもので、人間のあらゆる功徳の出発点を阿弥陀仏に設定したのである。絶対他者である仏の力によって、自分の功徳が始まったという解釈を曇鸞は行った。

浄土教を知るキーワード⑬

【同朋（同行）】

同じ信仰の道を歩む友のこと。親鸞は、自分と同じ信仰を持つ者を、御同朋・御同行と呼んだ。阿弥陀仏の前では、すべての衆生は平等だということである。そこには、出家・在家の別はない。現在でも浄土真宗では、信者が互いに〝御同朋・御同行〟と呼び合っている。

さらに、極楽に往生（往相回向）したあとに、この世で迷い続ける一般民衆を救うために再び戻ってくる（還相回向）べきだと説いたのである。ここにいたって浄土思想はついに大乗仏教の仲間入りを果たしたことになる。

この解釈が、当初の布教に当たって、どれだけ前面に強く押し出されたかは別としてだが――。

●臨終・来迎も不必要

親鸞も主著『教行信証』の冒頭に、２種の回向について触れているが、主眼を往相回向に置いている。この世にある限り、往生して仏になっていないのだから、当然といえるかもしれないし、また往相回向が成就すれば、必然的に還相回向が始まるという論理も成立するだろう。

だが、現実的にいえば、親鸞のその眼は、あくまでもこの世の方向を見据えていたに違いない。

『末燈鈔』の中に、こんな言葉がある。

「真実の信仰者は、救済が決定的なのだから、正定聚の位につくことができる。よって、臨終を待つことはない。信心が定まったときに、往生も定まる。来迎の儀式を待つ必要もない。信心を得たからには、無上の涅槃にいたることができる」

正定聚というのは、本来は「極楽に往生する身と定まる」ということだが、親鸞は「必ず仏となる身と定まる」と解釈している。

この親鸞の主張によって、一般民衆は死んでから他方世界へ赴く必要がなくなったともいえる。すでにこの世において、還相回向の身となって、大乗仏教の本道を歩めることになったのである。

しかし、親鸞は「自分の力で他人に功徳を施す」という意識を微塵も許さない。あくまでも、自己の存在は、阿弥陀仏の本願の他力によって生かされているのであり、それ以外の力を一切認めようとはしなかった。

そこから、「意識的に他人に善行を施すことは悪いことなのか。してはならないことなのか」という疑問が生じてくる。あるいは、「好んで悪事を行ったほうがいいのか」という推測も起きてくるのだが、もちろん親鸞の意図がそこにあるはずもない。

他者への素朴な共感や具体的な救済も、自分という「カラ」の計算がある限り、欺瞞と独善にすぎないと厳に戒めているにすぎないのである。

『歎異抄』の中で「いかに阿弥陀仏という薬があるといっても、好んで毒を飲む（悪を行う）べきではない」と苦々しくいっていることでも、それはよくわかる。

ならば、親鸞が最終的に獲得した極楽浄土のイメージは何だったのか。

●最後に残された「無限の光」

ひとことでいうならば、それは「無限の光が満ちた世界」。同時に阿弥陀仏も、「不可思議な光が満ちた如来」としている。極言すれば、極楽浄土も阿弥陀仏もただ「無限の光」そのものなのである。

⬅下品上生

その存在に目覚めて信仰することより、自らの内に「無限の光」が惜しみなく降り注がれると、そこには、自覚的な浄土が出現するのである。

ここにもはや「自己」のはからいはなく、ただ「自然」のうちにすべてが起こり、すべてが移り、すべてが終わる。

親鸞は『末燈鈔』に、こう述べる。

「自然の自とは、おのずからである。人間のはからいではない。然は、しからしむるという言葉である。人間のはからいではない。阿弥陀仏の誓願も、人間のはからいではない。人間が善悪を論じないことを自然というのである」

ここで、同様な意味合いで「法爾」という言葉が語られる。合わせて「自然法爾」といい、いかなる人間の分別も思惑も関係ないところで阿弥陀仏の誓願が成就していくのだという。

阿弥陀仏も極楽浄土も、「無限の光」の絶対真理だということは、言葉を換えれば、「生命そのものの輝き」だといえる。つまり、一切の人間的なはからいもない「生命の輝き」を、自分の内的世界に重ね合わせることが、自然法爾の理念だということになる。

さらに、親鸞は、その自然法爾を人間が考えることすら消してしまう。

「阿弥陀仏は、自然という真理を示すために存在する。この道理を心得たのちは自然法爾のことも考えてはいけない。人間が〝はからいを持つまい〟というのもすでにはからいなのである」

ここにいたると、浄土思想はもとより、思想そのものが消滅してしまっているとすらいいうる。これは、親鸞というきわめて真摯にして一切の欺瞞を認めなかった人間が、自分の全生涯をかけて求道に徹した結果の結論といっていい。

「これは、仏の知恵の不思議なのである」という言葉にすべてが収斂され、ただ、「無限の光」以外はなかったのである。

☗親鸞とその妻子の像。
（水戸・信願寺）

浄土教を知る キーワード⑭

安心

仏教信仰により、心が安らぎを得、動ずることのない境地を指す。浄土教では、一般的に阿弥陀仏の救いを信じて往生を願う心のことをいうが、宗派により微妙に解釈が異なる。この安心の要旨に反する説を立てたり曲解する者を異安心者と呼ぶが、浄土真宗ではとくに安心を重んずるため、多くの異安心問題が発生している。

禅の悟りと妙好人……日々を極楽として生きる思想

●真宗は難行中の難行

禅の修行といえば、間違いなく自力であり、その究極にあるという「悟り」と、浄土思想が説く「安心」は基本的に世界が異なるはずである。

ところが、鈴木大拙は、こう記す。

「触れておきたいのは、禅宗のさとりと真宗の〝信心決定〟とは、その実質において、同一の心理的経験であるということである。他力の真宗がいう信心決定は阿弥陀を向こうにまわし、自力の禅はそのさとりを内証の自心に引きかえすのだから、両者は一つにならぬという学者もあることと信ずる。しかし自分としてはこれを心理学的に体験そのものから見て同一とするのが妥当だというのである」（『大拙つれづれ草』）

つづけて、悟りの特徴を「一瞬時に完全であること」、「出発と到着と一時一処」、「自分と信心がひとつになって決定性を持つ」と定める。そして、現象としては「世の中の大波小波に揺られて、少しの休息も安静も得られない中に、大涅槃の平安と静寂を得るという矛盾の自己同一を経験すること」なのだと述べる。

確かにこの自覚は、阿弥陀仏という絶対真理を後ろ盾にした安心決定に、わが身を同一化することと差異はない。

「真宗の人々はこれを〝他力〟と名づけて〝易行道〟だという。誠にその通りである。〝他力〟の中にあることを自覚しないでは、このような消息を味わうわけにはいかないが、これを〝易行道〟とはいわれない。決して易行ではない」

これは、浄土思想の本質や親鸞の浄土観を追ってきたときに、実は、誰もが薄薄とは感じてきたところであろう。

自分にまつわる、ありとあらゆることを自然法爾の流れに任せ、その自然法爾に任せることすらも自覚的であってはならないというのは「易行」のとても及ぶところではない。

「真宗は遇いがたく、信を得ることかたく、難中の難、斯れに過ぎたるはない」

と、大拙が結論づけるのも、やはり〝自然に〟うなずけるところである。

●妙好人が体現する世界

親鸞の教えを実践する浄土真宗のすぐれた信者を「妙好人」という。妙好とは無上の最高を意味する。江戸時代以降に、教団側から民衆へ「生き方」の好例とし

⬅下品中生

⬆蓮如に帰依した妙好人、赤尾の道宗の像。（富山・行徳寺蔵）

て登場させたという色合いが濃い。

妙好人の言動を綴った書物で興味深いのは、大拙のいうように、禅の世界の「悟り」と一致するように見える記述が限りなくあることである。

19世紀の大阪に生きた物種吉兵衛は、

「今度、生死を離れさせて戴くほどの大きな利益はない。良い時ばかりを喜ぶなら、誰でも喜ぶ。どのような難儀なことに遇うても、その難儀の底に掛かっておる仏法ヤ」

といった。生死を離れるというのは、生死の本当の意味をつかむということである。これは、道元による『修証義』の、

「生死の中に仏あれば生死なし。但生死即ち涅槃と心得て、生死として厭うべきもなく、涅槃として欣うべきもなし。是時初めて生死を離るる分あり」

と一致する。同じ物種吉兵衛の問答に、師から「お前には阿弥陀仏の教えが聞こえたか」と尋ねられたときに、「聞こえたともいえません。聞こえなかったともいえません」というのがある。これは、たとえは違うが、禅の公案である犬に仏の心があるかどうかを尋ねた「狗子仏性」につながると見ていいだろう。

また、昭和の初めまで生き、高い評価を受けている浅原才市の詩にも、禅的な〝大宇宙と自己を一体化させた世界観〟が繰り広げられている。一例をあげれば、

「世界の造りが仏法であります
これがなむあみだぶつであります
世界草木がみなこの通りであります
これによって私が生きております
これがなむあみだぶつでありますよ」

詠われている世界は「峰の色渓の響き

浄土教を知るキーワード⑮

【秘事法門】

浄土真宗で異安心（異端）とするもの。夜中の秘事、隠密の釈義などともいう。親鸞の子・善鸞を起源とするといわれるが、一説には、真言密教に念仏信仰が流れこんだものとの見方もある。東北を中心に広まり、民俗信仰として継承されてきた。対外的には一切隠されており、その実像をつかむことは難しい。（176ページ参照）

も皆ながらわが釈迦牟尼の声と姿と」（道元）の境地と分け隔てはまったくない。
禅の修行は、現在に生かされている自分と、その世界が最大のテーマである。同様に、妙好人の理解の中にも、もはや「西方極楽浄土」などという他方世界は実質的にほとんどなく、生かされている自分と、それを包んでくれる壮大にして無限の宇宙があるだけなのである。

☗福井・吉崎御坊跡に建つ、六字名号がかたどられた五輪塔。

●己の心の中に潜む極楽浄土

「月影のいたらぬ里はなかれども眺むる人の心にぞ住む」(法然)

月の光がふり注がない地はないけれど、そのすばらしさを知ることができるのは、眺めようと心がける者だけ——の意味。

他力本願の浄土思想といっても、やはり自覚的出発なしに、救いに気づくことは決してない。救われていると本当に気づくことが至難だとしても、そこに身を置いて、月影を仰ぐほかないのである。

「照らされて
自分の煩悩がみえはじめたら
すこし浄土へ
近づいている証拠です」
（榎本栄一）

苦しみ悩むのもこの世なら、「心の平安と静寂」という願いも、この世を離れてあるはずがない。

思えば、釈迦の浄土は、霊鷲山というこの世だった。釈迦は、あくまでも現実世界の人々に向けて語りかけ、教えを広めようとしたのである。

「怒る、貪る、愚かさ」を避け、心の中に燃え盛るさまざまな欲望の火を吹き消すことを説いた。現実的にいえば、人間には不可能なことだが、いま立ち戻って、この原点からの歩みを考えることは無駄ではないだろう。

その理想を語るキーワードに「知足」という言葉がある。足りることを知る、つまり、ありのままの現実を素直に受け入れることを示す。釈迦は、ここから、すべての救いの道が始まるといった。

結局は、そうした原点からの出発が、「心の内の極楽」につながるということが導き出されてくるのである。

もし、あらゆる苦悩から脱したいと欲するならば、まさに知足を心がけよ。知足の法こそが、即ち「富楽安穏」の処となる。
知足の人は、たとえ地上に臥そうともなお「安楽」の境地にあり。
（釈迦『遺教経』）

⬅下品下生

聖典の章

衆生を導き照らす浄土思想の結晶

文＝吉田邦博

おびただしい数の大乗仏教経典の中から、
法然が「選択」した『浄土三部経』。
それを選ばしめる背景となった『往生要集』。
そして、そこから紡ぎ出された、高僧たちの
他力思想・念仏信仰にかけた言葉の数々。
これら聖典との出会いは、今なお鮮烈である。

➡新潟・居多ケ浜の見真堂に掲げられた経文の名号。

『融通念仏縁起』（清涼寺蔵）より

浄土三部経

『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』

阿弥陀仏と極楽浄土を実証する浄土教の根本聖典群

॥ सुखावतीव्यूहः ॥

विद्याचरणसंपन्नः सुगतो लोकविदनुत्तरः पुरुषदम्यसारथिः शास्ता देवानां च मनुष्याणां च बुद्धो भगवान्। तस्य खलु पुनरानंद लोकेश्वरराजस्य तथागतस्यार्हतः सम्यक्संबुद्धस्य प्रवचने[1] धर्माकरो नाम भिक्षुरभूदधिमात्रं स्मृतिमान्मतिमान्गतिमान्प्रज्ञावानधिमात्रं वीर्यवानुदाराधिमुक्तिकः ॥३॥[2]

अथ खल्वानंद स धर्माकरो भिक्षुरुत्थायासनादेकांसमुत्तरासंगं कृत्वा दक्षिणजानुमंडलं पृथिव्यां प्रतिष्ठाप्य येनासौ भगवाँल्लोकेश्वरराजस्तथागतस्तेनांजलिं प्रणम्य भगवंतं नमस्कृत्य तस्मिन्नेव समये संमुखमाभिर्गाथाभिरभ्यष्टावीत् ॥

अमितप्रभ अनंततुल्यबुद्धे।
न च इह अन्य प्रभा विभाति काचित्।
सूर्यमणिगिरीशचंद्रआभा।
न तपित[3] भोसिषु एभि सर्वलोके ॥१॥
रूपमपि अनंतु[4] सत्त्वसारे।
तथ अपि बुद्धस्वरो अनंतघोषः।
शीलमपि समाधिप्रज्ञवीर्यैः[5]।
सदृशु न तेऽस्तिह लोकि कश्चिदन्यः ॥२॥
गभिरु विपुलु सूक्ष्ममाप्तु धर्मो।
ऽचिंतितु बुद्धवरो यथा समुद्रः।
तेनोन्नमना न चास्ति शास्तुः।

[1] प्रवरणे A. B. [2] From here to ध्यानसमाधिना (p. 8, l. 7) left out in B. [3] तेपि न A. तपित C. तपिन P. [4] अनंद्र P. [5] वीर्यैः C. वीर्यैः P. विर्यैः A.

⬅梵文『無量寿経』。マックス・ミューラー、南条文雄の共同校訂により、明治16年(1883)に出版された。(岩波文庫より転載)

◉中央アジアに発生した浄土世界の思想的根幹

『浄土三部経』とは、阿弥陀仏と西方極楽浄土世界を信じる者たちにとって、最も尊いとされる経典群の総称である。

それらは、5世紀の中国にあって相次いで翻訳された『無量寿経』2巻、『観無量寿経』1巻、『阿弥陀経』1巻の3部4巻の経典を指し、日本に入ってから法然によって浄土教の根本聖典とされ、『浄土三部経』と名づけられた。

法然が教説上、個々の経典に、偏った価値の比重を設けることはなかったが、弟子の親鸞は、『無量寿経』をとくに『大無量寿経』と呼称して、最要の典拠としたし、証空は『観無量寿経』を、その孫弟子の一遍は『阿弥陀経』をそれぞれの重要な経典と定めて教えを説いた。

これらの経典は紀元前後のインドにおける大乗仏教運動のさなか、超人的存在としての「現在仏」(救済仏)思想の定着とともに、次々に創造されたものである。

大乗仏教思想はウパニシャッド哲学や原始仏教の影響を受けながらそれぞれの潮流を形成していった。そうしたなか、浄土経典類成立の過程に影響をおよぼしたのは、自らが修行によってブッダとなることを本質とする原初のオリジナル・ブッディズムとは、異なるものであった。

⬅全編、感覚的荘厳に彩られた『仏説阿弥陀経』。これは後奈良天皇みずからが、紺紙に金泥で書写したもの。（知恩院蔵）

それらは、仏の名を借り、ブッダに仮託した明確な神信仰であり、ヴィシュヌ神やシヴァ神に代表されるヒンドゥー教（インド教）神話にみる救済論にインスパイアされた、「現在仏」への強い救済願望が創り出した新たな神話であった。

◉人間の悲願が生んだ理想世界

崇拝されるべき救済仏には、個々に典拠となる浄土経典が存在する。成立が最も古い、**『阿閦仏国経』**、後述する**『般舟三昧経』**などがそれである。

それらの中で最も重視され、後世に大きな影響力を与え続けているのが、阿弥陀仏の救済思想を中心とした『浄土三部経』である。（以下、成立順）

『無量寿経』（『魏訳の大経』、『大無量寿経』とも呼ばれる。2巻）

序・本論・結語の3部、4章で構成される。異訳に五存七欠十二訳の多種類の異本が存在し、古来から重要な経典であったことが推察される。

久遠の昔、法蔵菩薩が無上なる悟りを得ることを志し、一切の衆生を救済するための本願として四十八願を立てる。長い修行を経て本願を成就させた法蔵は阿弥陀仏となり、西方極楽世界が現出。その荘厳なる世界を描写したうえで、極楽往生を願う人たちに、念仏を中心とした実践法を解き明かしていく――。

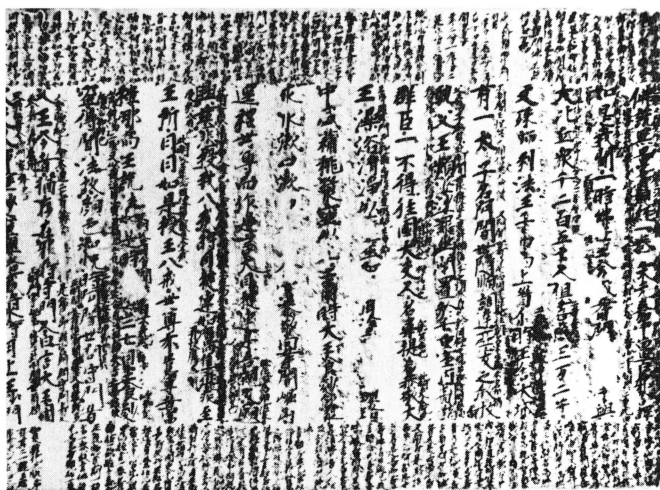
質・量ともに、浄土教信仰をより組織的に説いた経典といえるだろう。

『阿弥陀経』（梵文のタイトルが同じため、『大経』と区別し、『小経』と呼ぶ。1巻）

タイトルにある阿弥陀仏について、直接述べられたものではない。4章からなり、極楽世界の荘厳な様子を詳述している。つづいて、往生浄土の具体的な方法として、阿弥陀仏の名号を一心に念じる念仏が明らかにされ、最終的に念仏による往生浄土の真実性が諸仏によって実証される、という構成になっている。

『観無量寿経』（略して『観経』ともいう。三経のなかでは最後に成立）

一国の王妃がわが身に起こった悲劇に苦悩し、その精神的解決を釈尊に求める

➡親鸞によって詳細な注釈が書き込まれた、『観無量寿経集註』。本書は善導の『観経疏』に準拠している。（西本願寺蔵）

という物語をベースに、極楽浄土に往生するための、より具体的、実践的な方法論がくわしく説かれている。精神統一が可能な者に対しては、13種の観想（の念仏）が説かれ、そうでない者には、ふさわしい実践行としての称名念仏を説く。

◉『浄土三部経』関連の経・論

古ウパニシャッドを中心とするヴェーダ思想の影響を色濃く受けながら、より優れた世界への転生を願う浄土思想は、かなり古い時代からあったようで、『無量寿経』に先立つ紀元前後から1世紀ごろにかけて、観想を説く経典**『般舟三昧経』**が成立する。この経典は浄土経典の先駆けをなすものとして注目される。般舟（対して近く立つを意味する）の三昧を得れば十方の仏（ここでは未だ阿弥陀仏一仏という限定概念はない）が眼前に立つのを見ることができる、と説く。

『十住毘婆沙論』（17巻・龍樹撰？）**第九章《易行品》**は、『華厳経』中の「十地経」の注釈。浄土教思想のなかの「信」概念の典拠となる論書である。

ほかに**『浄土論』**（1巻・世親撰。浄土宗でいう〝三経一論〟の一論）や、**『安楽集』**（2巻・道綽撰。仏教の教説から浄土教に関する要義を抽出したもの。聖道門、浄土門の別は本書の創唱）などがある。

そんななか、**『観経疏』**（『観無量寿経疏』の略。4巻・善導撰）は、とくに重要である。〝疏〟とは解釈、注釈といった意味で、本論書は『観経』すなわち『観無量寿経』を注釈した論書ということになる。

善導はこのなかで、観経の16種の観想を説き、初めの13種を往生浄土のための観想（定善）、残りの3種を凡夫の散心（平常心）で行う諸善根と称名念仏（散善）とに分けた。この分類の概念は『往生要集』に多く引用され、さらに法然によって定着したものとなる。

親鸞の『観無量寿経集註』などは、全面的に本書を下敷きにしたものである。

往生要集

日本人の地獄観を決定づけた浄土教史上のエポック・メイキング

『往生要集』巻上。本書が後の浄土教思想史におよぼした影響は大きい。これは鎌倉時代の書写本。(延暦寺蔵)

◉万人を対象とした画期的な救済論

日本浄土教史に、大きな影響力をおよぼしたことで知られる『往生要集』は、寛和元年(985)、天台宗の学僧、源信によって、自らと衆生のために、実質3か月余という短期間で著された。源信はこれにより、西方極楽浄土の優位性を説き、「観想念仏」の中のひとつの行法としての一心称名の念仏を説いた。

源信の念仏に対する考え方は、天台宗の枠組みを越える広い視野を持ち、徹底したもので、きわめて画期的な発想であった。末世において「予の如き頑魯の者を救う」目足となる教えは、往生極楽の教行の外はなく、貴賤、聖俗、上下の隔てなく往生しうる方法論は、ただ、念仏の一門のみであると断じている。

あらゆる仏典のなかから、とくに「往生極楽」に関する重要経典が引用され、道綽・善導・懐感らを中心とした浄土教系の諸氏の注釈を取り入れながら、全体を10の章に分け、さらに10の数を基調として整理、構成されている。一章から三章まではこの世は厭うべき世界であることを様々な地獄を示して説き、浄土往生を勧める方便の章。つづく四章「正修念仏」から九章「往生諸業」までがこの論書の中心をなすメッセージとなる。残る十章には「問答料簡」を設け、これまでの9章から生じるであろう疑問への解答が用意されている。

源信が本書で説いた称名念仏の概念は微妙な差異を生じさせながら、つづく法然、親鸞に受け継がれていく。また、本書の日本人に与えた地獄観は決定的なものので、現在もなお文学、絵画に多大な影響をおよぼしつづけている。

選択集

念仏至上の確信を初めて表明した法然による浄土宗の根本聖典

『選択本願念仏集』

その確信はすでに述べたとおり、唐僧善導への絶対帰依であり、その著作『観経疏』にある「称名念仏は仏の本願にかなう」とする一文によるものであった。

こうした法然の帰信は一僧の私論に拠ったことのみならず、これまで積み上げられた様々な仏教的方法論のことごとくを捨て去り〝選択〟し、阿弥陀一仏の本願によってのみ信仰を決するという劇的なものだった。

本書は、そうした念仏至上主義という大胆な革新的一元論によって構築された論書である。

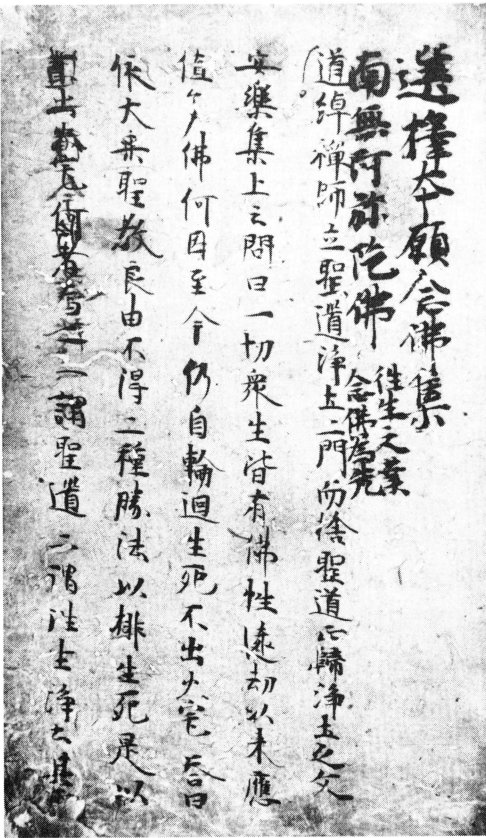
全体の構成は大きく2つの部分からなり、16章からなる。初めの一、二章には善導を中心とした中国浄土教の先人の論書を挙げ、聖道門を捨て、正行である浄土門に帰依することの正当性を強く主張する。つづく三章から十六章までは、『浄土三部経』が引用され、主張する立場を論理的に裏づけようとしている。

本書は、建久9年(1198)法然66歳のとき、外護者九条兼実の懇請により撰述された。

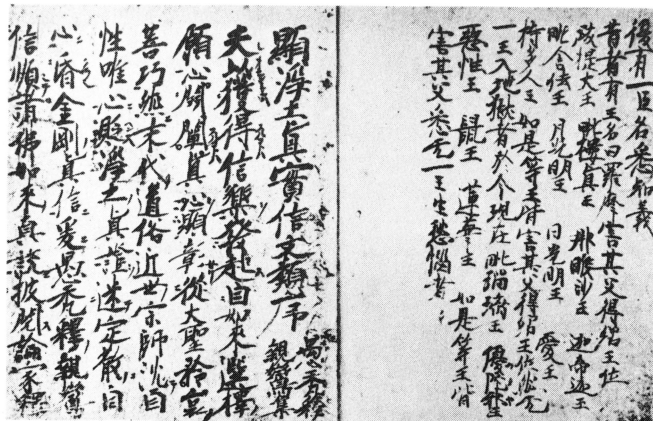
●阿弥陀の本願を確信する〝選択〟

「南無阿弥陀仏　往生之業念仏為先」

これらの14文字は、京都廬山寺に残された『選択集』(浄土真宗では「せんじゃくしゅう」と訓む)の草稿本に見える、法然真筆の決然たる確信の表明である。

⬅『選択本願念仏集』(『選択集』)。写真は鎌倉時代の書写本で、現存する最古のものとして名高い。(廬山寺蔵)

教行信証

専修念仏批判に対して解答された親鸞思想の中核をなす一大集成

『顕浄土真実教行証文類』

⬆『教行信証』顕浄土真実信文類序。写真は〈坂東本〉と呼ばれる、親鸞直筆の草稿本である。(東本願寺蔵)

『教行信証』は浄土真宗立教開宗の聖典である。現在、東本願寺にある親鸞の真蹟本(〈坂東本〉と呼ばれる草稿本)を初めとしたいくつかの写本が存在する。

親鸞は生涯、補訂を続けたために未完。教・行・信・証・真仏土・化身土の全6巻からなり、それぞれが、親鸞の説くオリジナル、「真・化」(の2種の極楽への往生)に照応して、「偽」の邪教にも言及する。初めに総序、おわりに後序がある。また、信巻にも別序が設けられるという変則的な形態がとられている。これは「教行証文類」と表題にもあるとおり、他巻の成立の後に信巻を付加したことによるもので、信巻の重要性をうかがわせるものである。

●浄土真宗の根本聖典

教巻の冒頭に「阿弥陀仏の救いのはたらきとして教行信証がある」とするとおり、内容の中心は教・行・信・証の4巻である。これらの4巻に真仏土・化身土の別巻を加えるかたちで、おびただしい経典を分類しながら「浄土真実」の「教行信証」を明らかにしようと試みたのが本書である。

さらに端的に表現するなら、親鸞が最終的な方法論に到達するにいたるまでの経論釈疏の遍歴を類別・収集して、自らの信仰の正当性を証明するために著された論書であるといえる。本書にはついに、明確な統一感が意識されることはなかったし、仏教学的思弁に満ちた論証は煩瑣に過ぎる感もある。

しかし、その膨大な引証や、時に未整理ともとれる内容にも、二種廻向、二種極楽説といった親鸞の明確な思想体系を読み取ることができるのである。

歎異抄

親鸞の真意を通して厳しく異端を断じた法語集

歎異抄

竊廻愚案粗勘古今歎異先師口傳之真信思有後學相續之疑惑幸不依有緣知識者爭得入易行一門哉全以自見之覺語莫亂他力之宗旨仍故親鸞聖人御物語之趣所留耳底聊注之偏爲散同心行者之不審也云々

歎異抄一通

⬆『歎異抄』。蓮如自筆の書写本。蓮如は本書の奥書きで、〝宿善の機無き〟者以外への閲覧を禁じている。（西本願寺蔵）

◉「真弟」唯円によって著された親鸞の真意

深い内省と、逆説的思考性に満ち、聞き書きという、機を異にした思弁的な不統一感から、多くの誤解を生む要素がある反面、きわめて魅力的な仏書でもある。その撰述者には、いくつかの説があるが、今日では「親鸞上人面授の弟子」といわれた唯円によって著されたことがほぼ確実とされている。

唯円は、19歳のときから、あたかもブッダに従うアーナンダのごとく、親鸞のそば近くにつき従った真弟である。親鸞の死後、唯円は、師の真の「信」を受け継ぐべき者たちに、師の意志とは相容れない確かな違和感を感じたに違いない。『歎異抄』とは親鸞の真意とは異なる解釈や指向性に対する歎きから著された信仰批判である。それは近しく見聞した師の肉声によって信心の本質に立ち返らせようとするものであり、異義を正すだけの批判性をも持ちうるものだった。

全部で18章からなる本書は、前半の10章に唯円が聞き書きした、師親鸞の言行録、後半の8章には師の回想を含めた歎きと憤り、異なった信心に対する厳しい信仰批判を収めている。親鸞の法語は力強く生命力に満ち溢れている。なかでも前半の「悪人正機」、浄土の慈悲や、弟子に関する法語は他の著作にはない独自性を持っていて興味深い。後半の別序からは唯円によって「聖人の仰せに有らざる異義」が明確に指摘され、異端、異安心に対する信仰批判が繰り広げられる。

後世、本願寺の書庫に眠っていた本書に強く啓発されたと伝えられる蓮如は、本書が内包する危険性ゆえに、封印する。世に出たのは明治以降である。

その他の重要書物——①

独自の浄土教思想を決定づけた源信、法然の諸典籍

⬆『一枚起請文』。法然が臨終の2日前に著した絶筆。わずか二百数十字に凝縮された法然の信仰思想の要義。(金戒光明寺蔵)

『観心略要集』

長徳3年(997)、源信によって著された。天台教学の範疇で往生浄土を勧めた、より専修者向けの論書である。その内容には、称名念仏より観想(の念仏)を重要視する傾向があり、未だ定まった方法論の確立をみなかった、源信および日本浄土教史の過渡期を知ることのできる論書である。本書はそのためにしばしば、『往生要集』とは異なった撰者ではないかとも憶測される。

『横川法語』(『法語』、『念仏法語』とも呼ばれる)

漢文で撰述された『往生要集』が、衆民にとって難解なものであったため、そのエッセンスを仮名によってわかりやすく著した、ある種の対機説法集である。

ここで源信は、より進化させたかたちの口称念仏を、往生浄土への「起行」として、こころのもち方である「安心」とともに説いている。

『黒谷上人語燈録』(18巻52章。一部、存命中の編纂も含まれる)

法然滅後数十年を経て、種々に解釈される説を統合、一貫させ、異説の一掃をはかる目的で、了恵道光(1243~1330)が師の法語、遺文、消息等を収録、編纂したもので、『漢語燈録』10巻17章、『和語燈録』5巻25章、『拾遺黒谷上人語燈録』3巻11章からなる。法然語録には、ほかに親鸞集録の『西方指南鈔』等もある。

『一枚起請文』(『一枚起請』、『一枚御消息』、『御誓言』とも呼ぶ)

建暦2年(1212)正月23日、臨終の病床にある法然が、弟子の勢観房源智の懇請により授けたとされる短文。往生浄土の要枢がわずか200字余りの中に簡潔に述べられている。

親鸞、蓮如、一遍の真意を体系的に知るための諸典籍

⬆『三帖和讃』中の「浄土高僧和讃」龍樹菩薩のページ。写真は、永享9年(1437)、本願寺住持存如による書写本。(専光寺蔵)

『愚禿鈔』(全2巻。親鸞撰)

〝愚禿〟とは親鸞自ら、生涯を通じて名のった字である。本書は大きく上・下巻に分けられる。上巻には、あくまでも真宗の立場から教相の判釈(教説の優劣)を論じ、真宗が阿弥陀仏の選択本願に基づく絶対の法門であることを表明する。上巻は「教相」の巻。下巻は「安心」の巻とも呼ぶべきもので、善導の『観経疏』に拠って、自力を捨て、他力に帰すべきことを力説する。親鸞83歳のときの撰述。

『三帖和讃』(親鸞が制作した3種の和讃《日本語による仏教讃歌》の総称)

「浄土和讃」『浄土三部経』をもとに本願の念仏を讃えた116首の和讃で構成。

「浄土高僧和讃」龍樹、世親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空(法然)ら、インド、中国、日本の高僧7人を讃えた全117首の和讃。前書とともに親鸞67歳の撰述。

「正像末和讃」親鸞最晩年の撰述とされ、末法時代の究極的なよりどころとしての願の念仏に対する、懺悔と歓喜とが渾然となった和讃。親鸞は、〝和讃〟を〝やわらげほめ〟と訓み、それぞれには、ふり仮名、訓釈に加えて、清濁、抑揚までがほどこされ、広く衆民を対象としたことがうかがえる。

『末燈鈔』(1巻。全22通)

覚如の次男、従覚によって元弘3年(1333)に編纂された、親鸞の消息集。

『御文』(大谷派では「御文」、本願寺派では「御文章」と呼ぶ)

蓮如が弟子たちに与えた消息体の法語集。真宗の要義を懇切、平易に説く。

『一遍上人語録』(全2巻)

門弟によって筆写伝承された、一遍の言行録。和讃、和歌、消息なども含む。

異流念仏の章

呪術と現世利益を摂取した念仏信仰の異相

文＝本宮眞吾

⬆手印を組み、念仏の秘儀を授ける導師。（『かくし念仏考』高橋梵仙著より）

一切外部の目を入れさせず、秘密裡に継承される念仏の信仰があるという。
神秘化され秘教化したその教えは、既成宗教の弾圧にも屈せず、今なお息づいている。
真宗教団から離れ、独自の方法論を歩む新宗教とともに、異流の在家念仏の実情をさぐってみたい。

『融通念仏縁起』（清涼寺蔵）より。

異端念仏信仰と浄土真宗系新宗教

——弾圧された地下信仰と多様な解釈を生んだ新宗教

◉異端信仰とはなにか

ここでいう異端は、東西両本願寺を中心とする真宗10派の念仏信仰と見解を異にする、きわめてマイナーな信仰の流れという意味である。とくに本願寺教団から見た場合、東北のかくし念仏、秘事法門、カヤカベ教などを信仰するセクトは、すべて異端ということになる。

東北を中心としたかくし念仏や秘事法門の場合は、念仏信仰と密教との習合が見られるが、その信仰のあり方や方法をめぐって、本願寺教団からも、幕府や諸藩からも厳禁されたため、地下に潜らざるをえなかった経緯がある。

ただし、薩摩のかくれ念仏は、薩摩藩の真宗禁制という政策によって地下に潜った真宗組織であり、あくまでも本願寺教団の支配下で隠れて信仰を続けたため、異端とは見ず、正統と見なされる。同じ薩摩のかくれ念仏でも、カヤカベ教のように土俗信仰とすっかり習合したところは、異端視されるわけである。

とはいえ、異端は正統を自認する教団が、それ以外のセクトに対して勝手にレッテルを張ったものであり、張られた方としては、自分の信仰こそがあくまでも正統であるという信念があることは改めて述べるまでもないだろう。

◉既成教団へのアンチテーゼ

仏教には本来、正統も異端もない。だが、宗派が形成されていく過程で、宗祖の精神をどちらが忠実に継承しているかで、正統、異端論争が繰り広げられたのである。

とりわけ、日本の場合は、仏教宗派が、各時代の政治権力と深く結びつき、その認可を得れば、それだけで正統視され、社会もまたそれに追随するという基本的な構図があった。

江戸時代にも正統と異端の争いを生んだ宗派は少なからずあったが、中でも本願寺教団は、その最たるものだった。同教団は、妙好人の信仰を念仏者の理想像となし、逆に教団の教説に批判的な念仏者には異端のレッテルを張り、幕府の力をもって徹底的に弾圧したのである。

近代の動きを見ても、浄土真宗はちょ

⬇かくし念仏大網派の常瑞寺に伝わる親鸞聖人骨灰の真影。如信が、親鸞入滅後、その骨灰を漆に混ぜ、像を塗り上げたといわれる。

つと毛並みが違うとみれば、すぐに異安心だと騒ぎ立て、潰してきた歴史がある。

　もし、教団とは違った新たな動きを起こそうとすれば、かくし念仏のように秘密結社化するか、あるいはまったく別な信仰形態をとるほかはなくなるのである。

　別な信仰形態――すなわち、真宗系新宗教は既成教団からすれば、邪義異端ということになるのであろうが、十把一からげに同一の俎上で論ずるわけにはいかないほど、それぞれ特色があるといえる。

そのなかには、親鸞の教えと、かなりかけ離れているように見えるものもある。また、既成教団の閉塞的な状況に対する鋭いアンチテーゼ的なものもある。

　ともあれ、異端念仏信仰や真宗系の新宗教という存在が、時代の徒花なのか、あるいは時代の必然なのかは、性急に結論づけるわけにはいかない。同時にまた、正統にせよ、異端にせよ、そうした複雑で様々な流れがあるという「現実」を直視することによって、日本における浄土系信仰というものを改めて問い直す契機にもなるのではないだろうか。

⬆法然と親鸞が一緒に描かれた秘事法門八重畑派の本尊仏。阿弥陀如来のお告げによって描かれたと言い伝えられている。（写真＝『かくし念仏考』高橋梵仙著より、170ページも）

異端念仏——❶

かくし念仏〈東北〉

東北各地に伝えられる謎の秘密念仏宗教

◉在家に伝えられた浄土真宗の秘法

かくし念仏とは、東北地方にみられる秘密宗教の一つである。

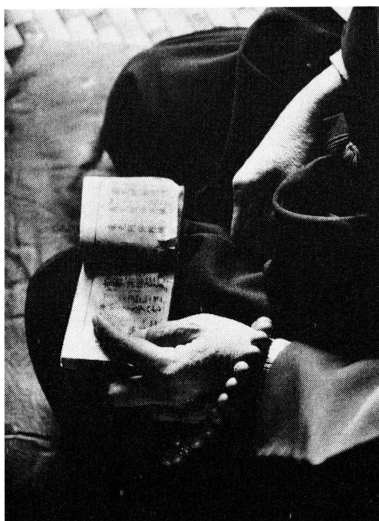
一般には、岩手県を中心に福島県、宮城県、青森県にみられる特異な「かくれ念仏」信仰をかくし念仏といっている。しかし、信者同士では「在家仏教」と称し、「浄土真宗御内法」、また単に「御内法」「御内証」という。

かくし念仏には、八重畑派、渋谷地派、水沢派など多くの流派があるが、いずれも起源を浄土真宗に求める。真宗には本願寺が広める「表法」とは別に、親鸞や蓮如などに淵源するという在家方に伝えられた「内法」があり、この内法が江戸時代に京都の鍵屋宇兵衛という人物によって伝えられたと伝承されている。

しかも、かくし念仏の人々は、本願寺を頂点とする「表法」の側よりもむしろ在家の自分たち「内法」の側に「正法」はあると考える。

本尊としては面白いことに、弘法大師、興教大師(覚鑁)、親鸞聖人が祀られる。勘のいい読者は気づかれたと思うが、この念仏は、密教の影響を多分に受けているのだ。

高橋梵仙の『かくし念仏考』によれば、このかくし念仏は、密教に念仏信仰を結合させた新義真言宗の祖・覚鑁に始まり、後世、真宗の教義が偽託されたものとしている。

もともと真宗の形式は、かくし念仏入門の方便として用いられているのであって、その真実究極の目的は、真言秘密の念仏による即身成仏にあり、そのことはかくし念仏の本家である鍵屋五兵衛の著述にかかわる『鍵屋内裏自問答』に明記されているという。

ところが、真宗教団の勢力を利用しようとして、方便として用いられたはずの親鸞の教義が、いつの間にか少なくとも表面上は親鸞の教えが中心であるかのご

⬆かくし念仏の教典のひとつ『正信偈』。

とき現象を呈するようになったというのである。

高橋の説は、興味深いものであるが、その真偽については研究家の間でも決着を見ていない。

◉極楽往生決定の儀式・お取り上げ

かくし念仏の大半の派では、弘法大師、興教大師、親鸞聖人が尊崇されるが、通常はクロボトケといって親鸞の像だけが表立って祀られている。また、村ごとに知識1人、脇役2人、世話人3人ぐらいがおり、信徒たちを取りまとめている。

彼らは、真宗の教義を信奉しており、弥陀の本願を信じ、称名念仏によって極楽往生を遂げようというのに変わりはない。

したがって、その信心獲得と往生決定のための「お取り上げ」という儀式が、様々な儀式の中でも最も重視されている。その法座には民家の奥座敷が当てられ、その正面に、親鸞あるいは蓮如の真筆と伝えられる「南無阿弥陀仏」の御名号を掛ける。

祭壇には、松の芯芽、鉦、線香、菓子などがおかれ、灯明が捧げられた後、信者になろうとする者を1人ずつ導き入れる。

そして仏前に向かって正座合掌させ、ひたすら「ナマイダ」もしくは、「タスケータマエー」を繰り返させ、最後に一種の恍惚状態に入った信者に、導師が阿弥陀如来に代わってその助けを保証するのである。

信者は、その儀式について家族にさえも語ることは許されず、そのためその全容はいまだ深い霧に包まれている。

☗岩手県水沢市のかくし念仏の勤行。(写真提供＝門屋光昭、172ページも)

異端念仏——②

カヤカベ教〈九州〉

土着の信仰とタブーを伝える秘密結社組織

◉藩から禁制とされた真宗の教義

薩摩藩では、江戸時代の初期から明治維新にかけて、約250年もの間、キリスト教と並んで、真宗は禁制となっていた。

これは、薩摩藩の封建体制にとって、真宗の教義が浸透することによって、農民たちが幕府に対する反抗組織を形成し、農民一揆などを起こす可能性を恐れての措置であったとされる。

領民はそのため、春秋の年2回、村役人のところへ行き、本願寺の門徒ではないことを誓約していたのである。

まるでキリシタンの踏み絵を彷彿とさせるものがある。だが、隠れキリシタンがいたのと同様に、かくれ念仏信仰者も存在した。

そして、信仰が万一、発覚すると、厳しい拷問にあい、その組織を白状させられ、一村が藩吏の手で焼き払われたことさえもあった。

薩摩藩の真宗の禁制下にあって、彼らは過酷きわまる弾圧にもかかわらず、本願寺教団と密接なつながりを保ちながら、その信仰を極秘裡に堅持していたのである。

その点、反本願寺教団の旗幟を鮮明とした東北のかくし念仏系の信仰とは、まったく性格が異なっている。薩摩藩のかくれ念仏信者はあくまでも本願寺教団の従属機構としてとどまったからである。

その流れとは別に、江戸中期に本願寺教団との連絡が絶たれて孤立化し、修験道や神道など土着の信仰と結びつき、独自の信仰形態をとるかくれ念仏信者のセクトが出現した。

大隅国姶良郡の霧島西麓一帯に存在するカヤカベ教がそれである。正式には「牧園・横川連盟霧島講」という。

⬆かくれがま。〝がま〟とは洞窟のことで、この中で秘儀が行われた。(『薩摩のかくれ門徒』星野元貞著より)

◉神道的宗教に改編され現在にいたる

このセクトは、秘密結社組織であるため、長い間、一般的にはその存在が知ら

れることはなかった。それが知られるようになったのは、まったくの偶然からだ。

⬆神鏡や注連縄など、神道色で彩られたカヤカベ教の祭壇。（『カヤカベ』龍谷大学宗教調査班編）

この秘密宗教には、鶏肉を食べないという独特のタブーがある。戦後、給食が実施されるようになったころ、どうしても鶏肉を食べようとしない児童がいるのに教師が気づいた。そして、その原因を調べていくうちに、その家族がカヤカベ教の信者であることがわかったのである。

さて、カヤカベ教の歴史を辿れば、その開祖は、薩摩国伊集院の宮原真託という山伏出身者である。

彼は西本願寺で真宗に帰依したのち、宗教坊を名のって、殉教した。開祖の殉教後も、信徒らは土俗化した真宗の儀礼を夜間ひそかに行ってきた。

当初は修験道系の色彩が濃かったが、幕末のころに霧島神宮の神と感応することができた吉永市蔵なる人物が現れ、神道的な宗教に改編したという。

現在もカヤカベ教は牧園の吉永家を中心に形成されている。同家当主を善知識といい、教主的性格を有し、世襲制である。その下に流れ親、郡親、知識などの幹部がおり、その下に一般信徒がいる。床の間には天孫降臨の掛軸を掲げ、当事者は霧島神道と称している（カヤカベ教というのは通称で、カヤで作られたカベを拝んで念仏を称えるとされたところから、そう呼ばれる）。

だが、そこで行われる「おつとめ」は、「お経」「お和讃」「おかいげ」（領解文）「おつたえ」（お説教）などのタイトルからも明らかなように、一応は真宗の勤式に則ったものである。

とりわけ「おつたえ」と呼ばれる13種類の説教は代々口伝で伝承されたもので、教えの由来、国の起こり、仏法の淵源、真宗の開宗など、親鸞から吉永市蔵にいたる相承や霧島神宮との関係が2時間ほど説話風に語られている。宗教学的にも民俗学的にも、非常に貴重なものである。

秘事法門

暗闇の密儀によって継承される念仏信仰

●本願寺から「異安心」と呼ばれた邪教

親鸞の子・善鸞が、父親から夜中にひそかに授かった真宗の秘儀というのが、秘事法門である。

秘密裡に伝授するためにこの名称があるが、本願寺からは、異安心（異端）とされている。

実をいうと、秘事法門と先に述べたかくし念仏との相違を述べることは難しい。2つの信仰はいろいろと習合しており、厳密に区別しがたいところが多いからである。

ちなみに、高橋梵仙によれば、かくし念仏と秘事法門とはまったく別物であるという。

その理由は、秘事法門は真宗学者のいう真宗の中から生まれた「異義」「異安心」「邪義」であるが、それに比して、かくし念仏は、真言密教を起源とする念仏信仰だからだという。

南北朝時代に越前の如導が不拝秘事を唱えて、それを秘事法門と呼んでから、三河、越前、常陸、下野など、各地に伝わった。

秘事法門を伝えた人々は、本願寺の僧侶たちが説くことは親鸞の本意ではないとし、〝内証〟つまり信仰の奥義はこの法門に秘密裡に伝承されてきたのだと主張した。

外部に対しては徹底的に秘密主義をとり、この教えを信ずるものだけが、秘密の儀礼によって最高奥義に達することができるとされた。

そして、深夜ひそかに密室でその密儀を行ったのである。そこで、「御庫念仏」「庫裡法門」「土蔵秘事」ともいわれるのである。

●土蔵の暗闇の中で行われる秘儀

密儀を行う際は、教主的存在である「善知識」が信者を土蔵の暗闇の中に招き入れ、鍵をかけて、その信者に次のように言い聞かせる。「このたび、以前からの望みどおりに極楽の人となるのである。ただひたすらに『助けたまえ』と称えよ」

その称え方については、「左右の指を組み合わせて、みぞおちに当て、強く押さえ、目を閉じて善知識から目を開けてよいといわれるまでは、開けずに称えよ」という。そして「この秘儀を終えて救われたときには、年を終えて春を迎えたような清々しい気持ちとなり、また妊婦が安産してゆったりとしたような気持ちになる。この一念の時を往生が決定した時刻と定めて、そのあとは命が生き長らえればそのまま念仏を称えよ。それが報恩

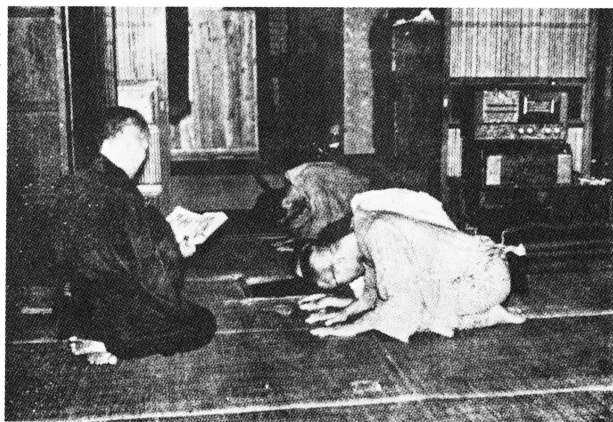
の多念念仏だ」などと救済の秘儀の心構え、重要性を説明するのだ。

信者は、その指導のもと、一心不乱に「助けたまえ」を称え続け、暗闇の中で茫然自失、エクスタシーの状態になった瞬間、さっと明かりが差し出され、「今こそお助けなされたぞ」と善知識の声が闇を破るがごとくに発せられる。もしくは、杓子のようなもので肩がパシッと叩かれる。

ハッと我にかえった信者は、今こそ自分は救われたと感知し、感涙にむせぶ。

そのあとで、初めて「南無阿弥陀仏」の六字の名号を称えることが許されるのである。

江戸時代中期以後、秘事法門はしばしば発覚し、厳しい弾圧を受けた。

歴史的には京都から摂津、河内方面にまで蔓延した「宝暦発覚の秘事」、江戸における「明和発覚の秘事」、京都における「天明・寛政の秘事」の3つが有名である。

⬆秘事法門の秘事。秘事を受ける幼児は、導師の指示で一気に息を吐き、息が耐えられなくなった瞬間に、導師から「お助け」の声がかかり、両側の2人が幼児を伏せる。➡儀式が終わると導師から「蓮如上人御文」を受ける。(『かくし念仏考』より)

真宗長生派（しんしゅうちょうせいは）

プラーナ理論で独自の健康法を開発する

◉霊肉一体の救済をめざす真宗系新宗教

来世の浄土往生はもちろんのこと、現世においても、できるだけ長生きして人生を謳歌しようという発想のもと、プラーナ療法と呼ばれる特殊な健康法を真宗系の教義に組み入れて生まれたユニークな教団が、真宗長生派である。

☗真宗長生派総本山長生寺（横浜市鶴見区生麦）。

開祖は柴田純宏法師で、もともと真宗大谷派に属していたが、昭和24年に「霊肉一体の救済」を掲げて長生教団を組織。その後、昭和28年に真宗長生派として宗教法人となった。

この教団の特色は、なんといってもその独自の健康法にある。

戦前は各種の霊術、民間療法が流行していた。いわく霊感透熱療法、気合術、霊子術、心力波及術、催眠療法、心霊療法、生気療法などであるが、プラーナ療法もそのひとつといえる。プラーナとは、「生力、気、霊気、精気」などという意味のサンスクリット語で、インド哲学では、宇宙万物の本源をなすものであるとされる。

開祖によれば、人間は誰でもそのプラーナを多かれ少なかれ持っているものであるという。そして病気という現象は、このプラーナが欠乏するために起こるものであり、それを治すためにはプラーナを充実させればよいというのが基本的な考え方だ。

つまり、人間は一定量のプラーナを持っているが、その増減によって健康にもなり、不健康にもなるというのである。

開祖はそのプラーナという考え方を主軸に、それを体内で活性化させるために、背骨の歪みを矯正するカイロプラクティック療法や一種の暗示療法である精神療法を加えて、独自の健康法を創出したわけである。

開祖は宗教法人化した翌年に死去したが、その後、妻の阿やを経て、長男の正義が管長職を継いでいる。

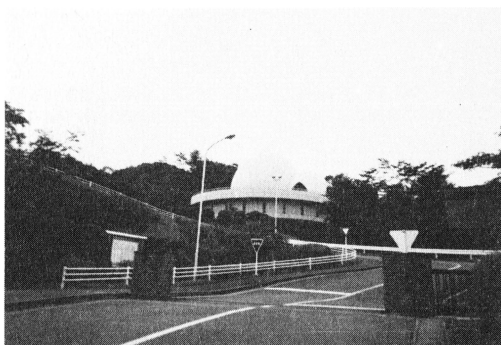
新宗教――②

大法輪台意光妙教会（だいほうりんだいいこうみょうきょうかい）

「本願さん」の名で人々に親しまれた教祖

☗大法輪台意光妙教会本部（福岡県太宰府市）。

◉自ら阿弥陀仏と化して民衆を救済

阿弥陀仏は人を救う仏であることはいうまでもない。ところが、第2次世界大戦の敗戦の報を聞いた瞬間、突然神憑りとなり、あろうことか、自らが阿弥陀仏と化して、人を救う「生き仏」になったのが、「本願さん」こと、大法輪台意光妙教会の江口ヤエ教祖である。

長崎県平戸島で浄土真宗本願寺派の寺院の娘として生まれたヤエは、戦争中の昭和19年に夫と死別、しかも戦争で2人の息子を相次いで失うという不幸のどん底にあったが、それでも戦勝を信じながら、ひたすら阿弥陀仏の本願にすがって暮らしていた。

ところが、敗戦によって一挙に緊張の糸が切れてしまったのである。

もともと霊媒体質であったヤエは、この世の者とは思われないすさまじい剣幕で「われ本願なり、われに還れ！」と絶叫したという。他力信仰から自力信仰の極致へ１８０度転位（トランスファー）してしまった55歳の生き仏「本願さん」の誕生であった。

「本願」とはもちろん、阿弥陀仏が一切衆生を救おうとして発した誓願のことであるが、同時に、その願を具現した人という意味もある。これは信州善光寺の尼僧を「本願」と呼んでいることからも明らかであろう。ヤエ自身のパーソナリティーにも、後者の「本願」が濃厚に反映されていることは間違いない。

ヤエは、日ごろから「(自分は)人の姿をもって現れた如来であるぞ」「本願を慕ってくれば、助けてやるぞ。すがってこい」などと言っていた。そして実際に自分の身体を媒介にして、病気を治す一方で、悩みを抱えた人に対してはしかるべく教示を行ったといわれる。

「弥陀本尊御生体如来」のヤエは、昭和53年に87歳で死去。教団は娘の法寿意が継承している。

新宗教③

仏教真宗（ぶっきょうしんしゅう）

原点をインドに求めた浄土真宗の原理主義

●坐禅、読経を行う自力的真宗系教団

ある僧が、浄土真宗のルーツを訪ねて、昭和11年にインドへ行き、仏跡巡拝中に啓示を受けて設立したのが、この教団である。僧（教祖）の名は余田義雄、浄土真宗本願寺派に属していた。

真宗系の原点回帰といえば、通常、宗祖の親鸞までと相場は決まっている。ところが、余田はその一線を難なく超えて、釈尊の立教の本義へと直結してしまった、一種の過激な原理主義者であった。

本尊は久遠実成の阿弥陀仏だが、所依の経典が古ヨーガスートラや『勝鬘経』といった根本仏教の諸経に終始。身につける正衣も墨染めの衣ではなく、釈尊ゆかりの黄衣である。

他力信仰というよりは、自力的な要素が色濃く、坐禅や経行、読経が修行の主軸となっているなど、禅寺の厳しさを彷彿させる内容となっている。

新宗教④

浄土真宗同朋教団（じょうどしんしゅうどうぼうきょうだん）

指圧療術による健康法が布教の核

●真宗の教義と同朋運動を合体

この教団は、先に紹介した真宗長生派同様、健康法を布教活動の推進力にしている。

ここで行われている健康法は、独自の指圧療術が中心であり、家庭生活の安楽を願うために教祖が編みだしたものとされている。

教祖は、明治33年生まれの西村寿覚道主。もとは真宗大谷派の僧侶であり、昭和16年、独自の健康法を普及するために方今道同朋教会を創設。その後、阿弥陀仏をともに信仰し、同じ道を歩むという同朋運動に深く共鳴する。

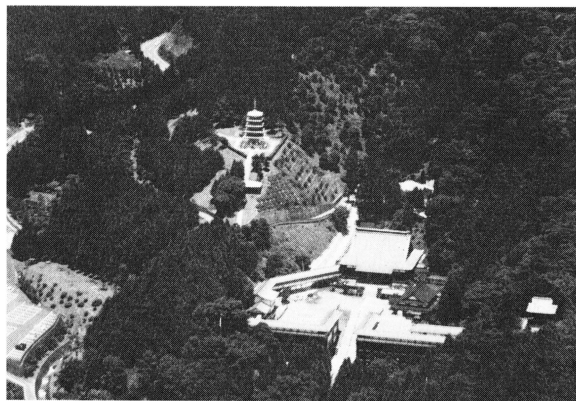
そして、その教えの実践と、健康法の普及を合致させることを決意し、戦後の昭和24年、同教団を設立した。

本尊を南無阿弥陀仏の御名号とし、教典としては、真宗ではお馴染みの『正信偈』『和讃』を用いている。

新宗教――⑤

中山身語正宗（なかやましんごしょうしゅう）

妙好人と修験者の個性を合わせ持つ教祖

◉浄土真宗の影響濃い真言宗系教団

☗中山身語正宗本部（佐賀県三養基郡基山町）。

「さても　さても　かたじけない　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　光明遍照十方世界　念仏衆生　摂取不捨とはとかれたり　なむあみだぶつ……」

この宗派の勤行用の『御座文』である。まるで妙好人が称えるかのような仏讃嘆文ではあるまいか。

それを天啓で授かったという教祖・八坂覚恵(本名・木原松太郎)は、妙好人と修験者を掛け合わせたような独特の個性であった。覚恵は高野山で得度したことから、便宜上、真言宗系に位置づけられているが、浄土真宗の影響が顕著なのである。

明治3年、真宗の家に生まれた覚恵は霊的体質であったようで、幼少時から人に見えないものが見えたりしたという。中空に「……ナムアミダブツヂヒラクゾ」という文字が見えたこともある。

炭焼き、農業、漁業などさまざまな職業に就いたが、42歳の時、妻が死去。絶望のあまり、残された3人の子を道連れに入水自殺をはかろうとした寸前、仏の声を聞き、宗教の世界に目覚める。

荒穂六社大明神に導かれるままに基山山麓で行に入り、翌年の大正元年、弘法大師が枕元に示現、「この度根本大悲の親は、頼む一念身語正と開くぞ、日本の国のすみずみから世界の国のはしばしに至るまで開いて助けて行くぞ」と告げ、覚恵に立教を命じた。

ただちに覚恵は高野山に上って得度、勢力的に布教活動を展開する。信者は滝行、念仏行、巡礼行などを行い、最後に秘儀を伝授されるという。

なお覚恵は昭和17年に死去。その法脈を受け継いだ息子の覚照が、同21年、高野山真言宗から独立し、一宗を設立した。

新宗教――❻

浄土真宗親鸞会（じょうどしんしゅうしんらんかい）

過激な布教活動を展開する原理主義的教団

◉西本願寺と対立する急進的集団

真宗系の新宗教中、最も過激な布教展開を行っているのが、浄土真宗親鸞会である。富山県高岡市を本拠地にして北陸地方はもとより、近畿や中部地方のほか、大都市部にまで勢力を延ばしている。

⬆親鸞会の活動を紹介する、新聞や書籍など。

同会は親鸞の原点に立ち返り、個人の救いを強調する徹底的な原理運動を推進している。そのため、一時期の創価学会の折伏攻勢と対比されることも多い。

それだけに、教学上の理論武装はきわめて進んでいる。信者も熱心に教義を学び、既成の真宗教団の僧侶以上に勉強しているともいわれるほどである。

親鸞会によれば、親鸞の救済論は、現在ただいまはっきり救われることにあるという。そのため同会では「生きている人間を生きている間に絶対の幸福に導くことを使命」としている。ところが、西本願寺は死後の救いを説き、葬式と法事に明け暮れているなどとして、同教団に対して「破邪顕正」の鉄槌を下すのだ。

親鸞会の教祖(会長)は、高森顕徹で、昭和4年に浄土真宗本願寺派の高岡教区氷見組の遠景寺の寺族として生まれた。

その後、龍谷大学で学び、昭和22年に同派で得度した。5年後に徹信会としてスタート、昭和33年に現在名に改称した。

高森会長は本願寺派内部で、改革派の急先鋒として活動を続けていたが、異安心に問われるなどして、埒があかないとみたのか、昭和45年に同派の僧籍を離れ、一段と急進的になった。

親鸞会の活動部隊は主として若い男女である。寸暇を惜しんで、布教活動に励む強烈な使命感をもっていることから、ある種のマインド・コントロールをされているのではないかと見る向きもある。

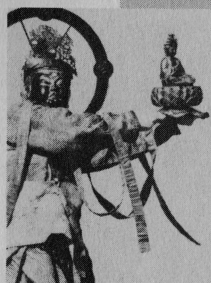
なお、親鸞会はこれまで幾度か浄土真宗本願寺派当局に対して、教義問題を主とした挑戦的な質問状を叩きつけている。

だが、同派当局は親鸞会を「教義解釈がまったく別の宗教団体である」として、基本的に相手にしていない状況である。

衆生の救済から発し、
念仏信仰の息吹を今に伝える

宗派と歴史

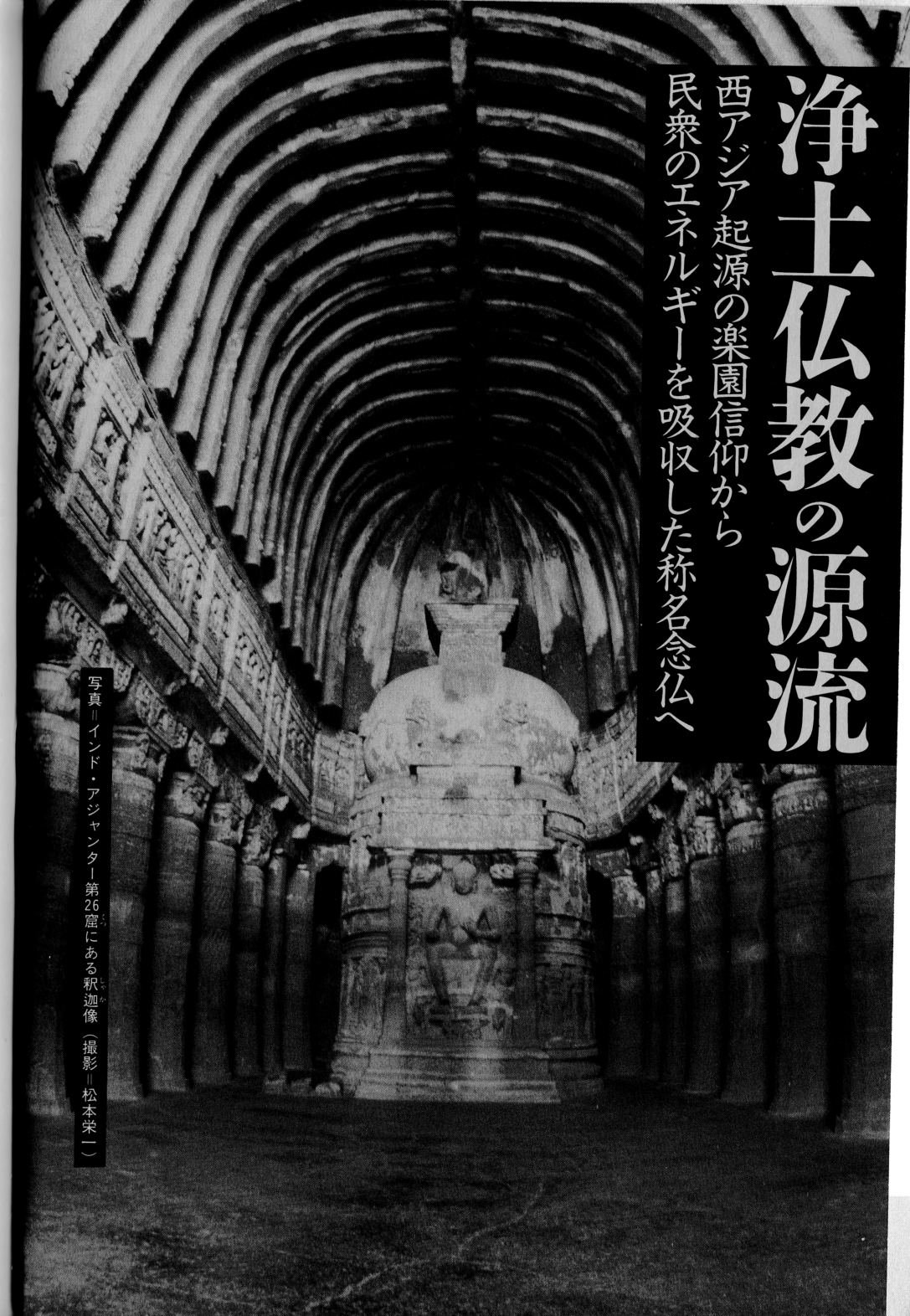
浄土仏教の法脈と
本山寺院を完全ガイド

文＝菊池武夫

浄土仏教の源流

西アジア起源の楽園信仰から民衆のエネルギーを吸収した称名念仏へ

写真＝インド・アジャンター第26窟にある釈迦像（撮影＝松本栄一）

◉ユートピアの誕生

極楽とは、苦もなく、死もなく、黄金の輝きに満ち、見るもの、聞くもの、食べるもののすべてが人に至福を与える楽園だという。人はだれでも阿弥陀仏という仏の意思によって、この楽園に招待され、永遠の生命を生きる——。

このようなユートピア観は、いつごろ、

⬆中国浄土仏教の名残を伝える台湾・高雄の佛光山浄土洞窟。

どのようにして生まれたのだろう。

有力な説の一つは、西アジアに起源があるとするものだ。釈尊の滅後数百年を経た紀元前後ごろ、仏教はガンダーラ地方（パキスタン北部・インド西北部）に広がり、カイバル峠を越えて西アジア（ペルシア）に展開した。そこで生まれた極楽の原イメージは、今のイランあたりのオアシスを理想化したものだという。

極楽の美しいありさまを説く『阿弥陀経』において、清らかな池、ふくよかな香りがただよう林が語られているのも、かわききった大地の中に忽然と緑なすオアシスをイメージしたものと考えれば、なんとなく納得がいく。とすれば、もともとの極楽のイメージは、仏画で表現されたものより、幾何学的で明解な構図をもつイスラム庭園の美しさに近いものであったかもしれない。

あるいは、極楽を描写する経典にしばしば黄金が登場することから、金を聖金属として尊重した古代エジプト文明との関わりを指摘する説もある。

また、西アジアではキリスト教のイコン（聖画）に類似した仏像が多く発掘されており、極楽はエデンの園やパラダイスと共通するイメージをもった楽園として語られるようになったとも考えられる。

そのほか、インド起源説では、ヴィシュヌ神やシヴァ神などの神話に登場する天国が極楽に変容したとする。そのなかで興味ぶかいのは、太陽神ヴィヴァスヴァットの子・ヤマの王国を極楽の原型とする説である。そこでは死者はよみがえり、地上の苦しみから永遠に解放されるのであるが、ヤマは後に中国に伝わると地獄の主宰者・閻魔に転じる。仮に極楽の原型がヤマの王国だとすれば、極楽も地獄も、もとは同じということになる。

しかし、どの説も推測の域を出るものではなく、確かなことはわからない。おそらく、仏教がさまざまな宗教と融合する過程で極楽が誕生し、強烈な楽園のイメージをもって語り伝えられるようになったのであろう。

◉阿弥陀仏の出現

ところで、仏教には、2つの大きな流

れがある。ひとつは中央アジアから中国・チベット・韓国・日本に伝わった北伝仏教、もうひとつはスリランカや東南アジアに伝わった南伝仏教である。北伝仏教は大乗仏教とも呼ばれるが、阿弥陀仏という仏の存在が語られるようになったのは、この大乗仏教においてであった。

阿弥陀仏出現の由来は、『浄土三部経』の一つ『無量寿経』に説かれている。

それは、はるかな過去のこと、錠光如来という仏の後に52の仏が出現し、ついで世自在王仏という仏が世にあったときのことであった。時に法蔵比丘という修行者があり、生きとし生けるものの救済を願って多くの仏につかえ、5劫という永劫の時を修行と思索に費やした後に、48項目の誓い（本願）を立てた。その誓いを実現するために、さらに10劫のあいだ修行し、ついに誓いのすべてを実現して阿弥陀仏という仏になったという。極楽というユートピアは、法蔵比丘が仏に

⬆インド・アジャンター第1窟壁画に描かれた蓮華をもつ菩薩。（撮影＝松本栄一）

⬆『七高僧連坐像』。龍樹、天親(世親)、曇鸞、善導、道綽、源信、圓光大師(法然)を描く。(西本願寺国府別院蔵)

なって築いた仏土(仏の国)であり、阿弥陀仏を信じる者は、仏の誓約のとおりに極楽に導き入れられるのだという。

この『無量寿経』が成立したのは紀元2世紀ごろといわれるが、ここで錠光如来や世自在王仏といった過去の仏のことが語られているように、そのころ、大乗仏教では釈尊以外にも無数の仏が存在すると考えられるようになっていた。直近の過去仏が釈尊であり、未来には弥勒菩薩が仏になって出現する。その間の現在は、西方に阿弥陀仏、東方に阿閦仏、その他の方角にもそれぞれ仏があって人に救済の手をさしのべているという。

この中で、なぜ阿弥陀仏の信仰が突出してきたのかは定かではないが、日没と死のイメージが連続し、死後の永劫を期待する心意が西方の極楽浄土への信仰につながっていったものと思われる。そのため、初期の浄土信仰は極楽の美しさをリアルに実感する瞑想法(観法)を軸に発展した。その主要な経典が16種の観法(十六観)を説く『観無量寿経』であるが、この経典はインドではなく、4~5世紀に中央アジアか中国の西域で編纂されたものと推定されている。

なお、阿弥陀とはアミターユス(無限の寿命=無量寿)もしくはアミターバ(無限の光=無量光)の音写で、もともとは釈尊の尊称の一つだったらしい。

◉中国浄土教と浄土五祖の系譜

浄土教は、やがてシルクロードを経て中国、日本に伝えられた。最初に中国で翻訳された浄土経典は2世紀後半に訳された『般舟三昧経』である。

この経典は、7日7晩、静かな堂にこもって阿弥陀仏を念じよと説く。精神を統一して仏に思念をこらせば、阿弥陀仏が出現し、心身の快楽が得られるという。

この修行法を「常行三昧」という。初期の中国浄土教は、この常行三昧を中心としたものであった。4世紀には慧遠という僧が「白蓮社」という念仏結社を組織したが、その行法も精神統一によって阿弥陀仏を瞑想すること(観想念仏)であって、阿弥陀仏の名を称えることが救済につながるという称名念仏(口称念仏)

⬆今も三昧行が行われる比叡山の常行堂（左）と法華堂（右）。

ではなかった。一般に慧遠の白蓮社の結成をもって中国浄土教の始まりとされるが、観法による念仏は、専門の道場と高度な修行を必要とし、民衆のあいだに広がることはなかったようだ。

称名念仏という方法によって浄土教を民衆に広めることに成功した最初の人は、北魏の僧・曇鸞（467～542）である。曇鸞は5世紀ごろのインドの思想家・世親（天親／ヴァスヴァンドゥ）の『浄土論』を解説した『浄土論註』を著し、称名念仏の意義を説いた。その臨終に際して、曇鸞は西方の夕日に向かって端坐し、多くの民衆が阿弥陀の名を称える声のうちに静かに往生したという。

その立場は、道綽（562～645）によってさらに論理づけられた。道綽は、『安楽集』を著して仏教を聖道門（自力仏教）と浄土門（他力仏教）に分け、浄土門による救いを説いたのである。

こうして浄土教が発展するとともに多くの異説が輩出した。それらを批判し、浄土教の教義体系をまとめあげたのは、道綽の弟子・善導（613～681）である。善導は、『観経疏』『往生礼讃』、ほか多くの著書を著し、中国浄土教を大成した人とされる。日本の法然がもっぱら善導の著書によって浄土宗を開いたように、ようやく7世紀にいたって中国浄土教がひとつの完成をみたのだった。ついで善導の弟子懐感、さらに少康によって中国唐代に浄土教が隆盛した。ちなみに法然は、曇鸞―道綽―善導―懐感―少康とつづく系譜を中国浄土教の正統とした。この5人を「浄土五祖」という。

◉日本浄土教のダイナミックな展開

浄土教が日本に本格的に伝えられたのは飛鳥時代であった。しかし、発展したのは平安時代になってからである。念仏の専門道場は、天台宗第三世・円仁（慈覚大師／794～864）が比叡山に常行三昧堂を建てたことに始まる。常行堂での三昧行は現在も行われているが、この行は7日ないし90日間にわたって口に阿弥陀仏の名を称えながら心に仏を念じ、阿弥陀仏像のまわりを歩きつづけるというもの。そうすると、仏の姿が目の当たりに見えてくるという。そこで期待されているのは、仏に会うという神秘体験であり、仏の名を称えることで救われるというより、仏の姿を念じることに力点を置いた観想（観相）念仏だった。

観想は、阿弥陀仏と極楽浄土を目の当たりに思い浮かべ、その神秘体験のうちに極楽浄土に再生しようと願うものである。そして、浄土を求める気持ちを強めるために、極楽の対極にある地獄の様相

も詳細にイメージ化されてきた。決定的な影響を与えたのは、比叡山横川の僧・源信（942〜1017）が著した『往生要集』である。

『往生要集』は、地獄の様相を描きあげた書として知られるが、その趣旨は書名のとおり、極楽往生の秘訣を示したもの。そして、往生するための行として称名念仏の意義も認めてはいるが、それは平易で行いやすいという消極的な意味であり、やはり阿弥陀仏と極楽浄土を念じる観想念仏を根本とするものであった。

こうした観想念仏は、阿弥陀来迎図などの浄土教美術を大きく発展させた。宇治の平等院鳳凰堂のような美麗な阿弥陀堂が建立されたのも、極楽の姿をこの世で見たいという観想念仏の影響によるものである。おりから平安時代も末期にかかり、末法末世の無常観がさらに浄土への憧れを高めたのであった。

しかし、それは貴族仏教の世界の話であり、庶民のあいだでは称名念仏がきわめてパワフルなものとして成長してきた。

念仏聖の出現——ここで登場するのが平安時代中期の空也（903〜972）である。市聖と呼ばれた空也は寺院という聖域を離れて遊行し、ちまたの人々を踊り念仏のエクスタシーに巻き込んでいった。かれは念仏をきわめてエキサイティングなものに転換したのである。

浄土教といえば、罪の意識と末法という時代認識に裏打ちされた衰退論的な仏教という印象が強い。しかし、それだけでは大きく発展することなどありえない。むしろ民衆のエクスタシーこそが日本の浄土教を発展させた原動力であった。

その証拠に、浄土宗の開祖・法然（1133〜1212）が四国に流された事件のきっかけは、弟子が催した念仏会に参加した後鳥羽上皇の女房（女官）が感激して出家してしまったことであった。

その念仏会は善導の『六時礼讃』に節をつけて歌うというもので、今でいえばロック大会のようなものであったらしい。浄土真宗の開祖・親鸞が流罪赦免後に信濃善光寺に入ったのも、彼の京風の声明念仏が歓迎され、音楽僧として招かれたのではないかという説がある。今日においても、各地に寺院を離れた形で行われる念仏講があり、いつ建てられたとも知れぬ名号石（南無阿弥陀仏と刻んだ石）が全国いたるところに存在することによって、民衆が阿弥陀仏に寄せた信仰とエクスタシーの残光を感じることができる。

ともあれ、そうした民衆のエネルギーに正統の教義を与えたのが、法然であり、そこから日本の浄土教は新たな発展の段階を迎えたのだった。

⬆比叡山大講堂に安置された日本の浄土仏教の始祖たちの像。左より法然、親鸞、良忍、真盛、一遍。

浄土宗

専修念仏の門を開いた法然を祖とし
浄土系諸宗派の源流となった教団

写真＝浄土宗総本山知恩院の法然廟

浄土宗の歴史

法然の意志を継ぎ、念仏教化で全国を制覇

⬅法然。（青龍寺蔵）

◉専修念仏を掲げた法然

浄土宗は、平安時代から鎌倉時代への過渡期にあたる承安5年(1175)、法然房源空によって開かれた。

法然という人は比叡山に伝わる円頓戒という戒律を守りつづけた清僧であり、学問の造詣の深さは「智慧第一の法然房」といわれたほどだった。しかし、その遺言の書である『一枚起請文』で、法然は大意、このように語っている。

「私の念仏は、中国や日本の学僧が講釈する観想の念仏ではない。ただ、念仏を申せばまちがいなく極楽に往生すると思い定めて念仏を申すほかに、特別の理由はない。一文も知らない愚鈍の身になって、ただ一向に念仏しなさい」

ここで法然は、それまでの仏教が価値を置いてきた学問や修行は、むしろ救いを妨げるものだと主張している。法然は、中国の善導が著した『観経疏』の一節によって、そのことを確信したという。

「一心にもっぱら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざる。これを正定の業と名づく。かの仏の願に順ずるがゆえに」

仏の願、すなわち阿弥陀仏の本願とは、阿弥陀仏が修行時代に立てた万物救済の誓いのことで、48項目あることから「四十八願」ともいわれる。その18番目に、南無阿弥陀仏と称えることで救われるという称名念仏の思想がある。従来はそれほど重視される項目ではなかった。

それは、口で称える念仏は下位の補助的な修行法であり、精神統一して阿弥陀仏と極楽浄土を心に念じる観想念仏が浄土教の本流だったからだ。また、浄土教以外に、南都(奈良)の諸宗や天台法華仏教など、複雑な教義と儀礼に彩られた古来の仏教こそが本筋であり、口で南無阿弥陀仏と称えるだけの仏教など、まっとうなものとは考えられなかったのである。

しかし法然は、だからこそ今は称名念仏が救いなのだと逆転の発想をした。世は衰え、今や誰が正統の仏法を行じることができるであろう。自分はすでに、戒・定・慧の三学（戒律遵守と精神統一と学問）の器ではない。仏法を行じようにも

➡『法然上人伝法絵』に描かれた法然とその弟子たち。法然の絵伝では最も初期のものである。（善導寺蔵）

自分の力をもってしては、とうてい悟りに到達できない。

であるならば、そんな人でも念仏さえ称すれば救うと誓って仏となった阿弥陀仏の力を信じる以外に方法はない。法然は自分をいかなる善行もなすことのできない悪人と規定し、今は口に称える念仏が選択されるべきときだと主張して、ただ念仏を称えること、すなわち専修念仏の門を開いたのだった。

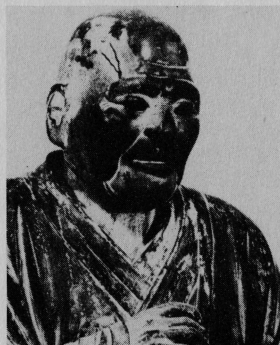
そこから個の内面を見つめ、一種の原罪意識に裏打ちされた深い信仰が生まれたとされる。確かに、そうだったのだろう。が、法然のもとに参集した人の多くは、もうちょっとのんきな人々だったようだ。

信徒の質問に答えた『百四十五箇条問答』には、「酒を飲むのはいけないことでしょうか」といった質問があり、法然は、「世の習いだから仕方あるまい」ときわめて世俗的な返答をしている。こののびやかさが、法然を源流として真宗や時宗などが生まれるなど、さまざまに発展した理由だったと思われる。

◉法然教団の形成と厳しい弾圧

ここで「浄土宗」といわずに「法然教団」と記したのは、法然自身には一宗を立てる意思がなかったからである。その教団は法然が草庵を結んだ吉水（京都市東山区）を中心に形成された自然発生的な同信者の集まりであり、信徒には公家の九条兼実、武士の熊谷直実など、さまざまな立場の人がいた。直弟のほかに、独自の集団をもつ念仏聖たちも自由に出入りし、ゆるやかに結びついた念仏連合をつくっていたようだ。

この連合は既成の仏教秩序をおびやかすものだったため、南都や比叡山からしばしば攻撃され、朝廷に念仏停止の訴えが出された。そして、建永2年（1207）2月には、弟子2名が死罪、法然ほか弟子数名が流罪という処断が下された。これを「建永の法難」という。このときの流罪はその年の暮れに赦免されたが、弾圧はそれ以降も活発で、法然の没後、墓が暴かれるなどの受難がつづいた。

しかし、もともとが民衆のエネルギー

に支えられたゆるやかな連合体である。法然教団を完全に押さえつけることは、朝廷や大寺院の権威をもってしても不可能であった。むしろ弾圧は法然の弟子たちを京都から地方に分散させることによって、専修念仏が地方に拡大する契機をあたえたのである。各地に分散した弟子たちを源流として諸派が生まれ、今日の

⬆鎮西派の祖、弁長。（善導寺蔵）

⬆西山派の祖、証空。（三鈷寺蔵）

浄土系諸宗派のもととなったのである。

　そうした派祖の一人が、越後への流罪の後に関東に下り、浄土真宗の祖となった親鸞である。一方、京都にのこった証空は京都での念仏の中心的なリーダーとなり、西山派諸流の祖となった。

◉証空と西山派諸流の誕生

　善慧房証空（1177～1247）は、法然の主著『選択本願念仏集』の撰述を補佐した高弟であり、学識の深い人であった。源親季の子で久我通親の養子という貴族の出身だったことが、流罪をまぬがれた理由だったらしい。また、師の法然から円頓戒を継いだことから、清廉潔白な人であったことも知られる。

　法然の没後、証空は西山善峰寺北尾の往生院（三鈷寺／京都市西京区）を譲り受け、ここを拠点に念仏をひろめた。そこから証空は「西谷の上人」とか「西山上人」と呼ばれ、その門流は西山派といわれるようになったのである。

　ところが三鈷寺は天台宗の寺であり、証空はそれを天台座主の慈円から譲られている。証空は、教義の根本を徹底した他力信心に置いたが、同時に天台浄土教の常行三昧や観想念仏の修法をとりこみ、再興した人でもあった。白木念仏（混ざりけのない念仏という意味）という名のもとに教義の純粋性を保ちながら、その他の要素を包摂したことで証空の念仏は京都の公家たちにも受け容れやすいものとなり、幅広く支持された。

　そして、京都で念仏の主流を形成した証空の弟子のなかで、4人が新たに門流を開いた。浄音の西谷流、円空の深草流、証入の東山流、道観の嵯峨流の4流である。さらに浄音の弟子の了音が六角流、三鈷寺の示導（証空の孫弟子）が本山流を開き、あわせて西山六流となった。

　このうち発展したのは西谷流と深草流であるが、統合と分裂の変遷を経て、現在は西谷流の流れをくむ西山浄土宗と浄土宗西山禅林寺派、深草流を受け継ぐ浄土宗西山深草派の3派がある。

◉浄土宗の成立と教線の拡大

　建暦2年（1212）1月に法然が没

良忠。（光明寺蔵）

聖冏。（増上寺蔵）

すると、専修念仏の解釈にはさまざまなものが生じた。そのことに危機感をもった聖光房弁長（1162～1238）は、九州の熊本にあって『末代念仏授手印』を著した。師の法然から受け継いだ念仏の教えを示し、手印を押して後世に伝えるという証の書である。証といっても、弟子たちがそれぞれ正統を主張していた

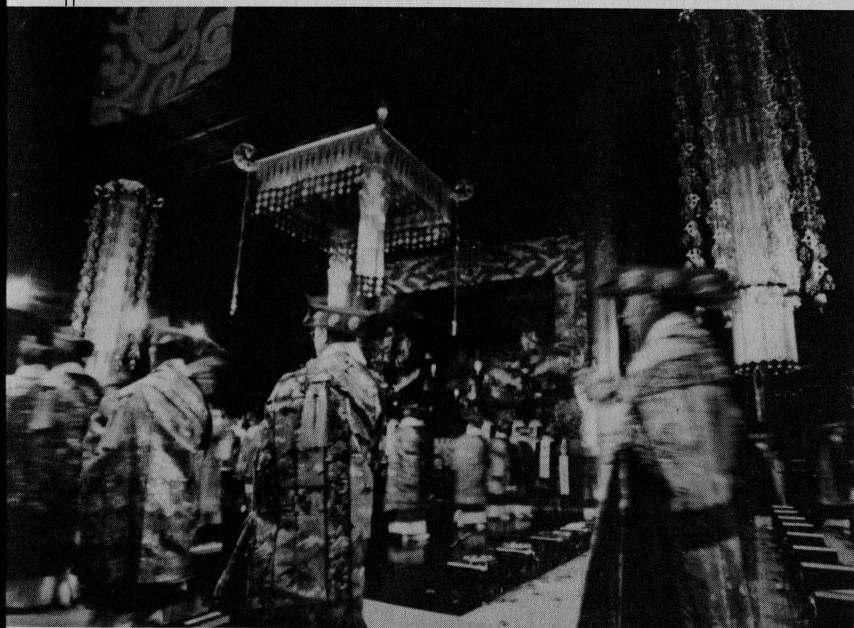
法然教団の発祥の地・吉水草庵跡とされる京都市東山区の安養寺。

時代のことだから何を正統とするかは立場によって異なるが、その後、弁長の門流は大きく成長し、今日の浄土宗につながる流れとなった。弁長の時代に、その念仏集団は北九州一帯から四国に広がり、すでに大きな勢力となっていたようだ。その門流を「鎮西派」という。

しかし、いくら正統性を主張しても九州にとどまっていたら、地方教団のまま歴史のなかに埋没しただろう。鎮西派の全国展開を基礎づけたのは、弁長から法を受け継いだ良忠（1199～1287）である。建長元年（1249）、良忠は関東に転じ、豪族・千葉一族の帰依を受けることに成功して、関東各地に寺院を建立。ついでに鎌倉に入って悟真寺（今の光明寺）を拠点に念仏教化をすすめた。

こうして、幕府の拠点である関東に足がかりをえた鎮西派は、ついで畿内に教線を拡大する。そのエネルギーは、良忠の弟子に6人の俊才がいたことから生まれた。6人がそれぞれに流派を立て、互いに競って関東と畿内の2方面で教線拡張をはかったのである。

関東で念仏教化を進めたのは、良暁の白旗派、性心の藤田派、尊観の名越派の3派。畿内に進んだのは、道光の三条派、然空の一条派、良空の木幡派の3派であった。この6派は互いに正統を主張して対立したが、法然を一祖、弁長を二祖、良忠を三祖とすることだけは一致していた。そして共通の課題が、京都の主流西山派をしのぐことであった。

三条派の道光は、京都に進出するとともに法然の遺文を編集して鎮西派の正統性を宣言し、西山派と対抗した。西山派とは別の流れである勢観房源智（1183～1238）の法系と接近し、連係することにも成功した。

源智の法系の勢力は小さかったけれど、吉水の草庵という浄土宗第一の故地に法然の廟所をつくり、やはり法然の遺跡である加茂の河原屋（百万遍知恩寺）に拠っていた念仏集団である。その価値は、法を受け継いでも法然の遺跡をもたない鎮西派にとってはかりしれないものだっただろう。鎮西6派はそれぞれに京都に進出して、法然ゆかりの寺院と結びつき、しだいに西山派をしのぐ勢力となった。

一方、関東・東海では白旗派、東北・信越方面では名越派、藤田派などがそれぞれ教線を広めたが、拡散した鎮西派の諸集団をまとめたのは、室町時代の白旗派の僧・聖冏（1341〜1420）とその弟子・聖聡（1366〜1440）だった。聖冏は「五重相伝」という伝法の制度をつくり、僧侶の資格を与えるにあたっての統一した規定を定め、聖聡がそれを実施した。この伝法制度の確立によって、浄土宗はようやく独立した教団としての体制をととのえたのである。

江戸時代に入ると、増上寺が徳川将軍家の菩提所となり、浄土宗は安定、寺院の数も大いに増えた。しかし、幕藩体制のもとで発展した浄土宗は、それゆえ明治維新期の廃仏運動と神道復興の衝撃が他の宗派以上に深刻で、本尊には天御中主神が祀られるという事態にも発展する。

こうした危機とともに始まった明治期に、浄土宗からは多くの優れた仏教者が輩出し、仏教学や社会福祉の分野に大きな足跡を残している。なかでも、光明会を主催し、念仏三昧の実践を説いた山崎弁栄や、共生主義を唱え、対個人よりも対社会の仏教の役割を強調した椎尾弁匡などは特筆に値する。

⬆総本山知恩院で毎年4月に行われる法然の忌日法要、御忌会。（撮影＝小澤正朗）

【浄土宗チャート】
法然
親鸞
湛空（嵯峨門徒）
信空（白川門徒）
源智（紫野門徒）
次第に鎮西派へ
行空
幸西
（一念義）
長西
（九品寺流）
隆寛
（長楽寺流）
衰退
聖覚
証空
（西山派）
弁長
（鎮西派）
浄土五流
遊観
示導
（本山流）
道観
（嵯峨流）
証入
（東山流）
立信
（深草流）
浄音
観智
（西谷流）
聖達
了音
（六角流）
一遍
一向
時宗
西山六流
良忠
道光
（三条派）
良空
（木幡派）
然空
（一条派）
良暁
（白旗派）
性心
（藤田派）
尊観
（名越派）
鎮西六派
京都三派
関東三派
真宗
室町時代
浄土宗西山深草派
浄土宗西山禅林寺派
浄土宗西山光明寺派
聖冏
聖聡
戦国時代
慶竺（知恩院へ）
良肇・了暁（飯沼流）
江戸時代
尊照（知恩院）
存応（増上寺）
浄土宗
明治維新
浄土宗西山派
浄土宗西山派
戦後
深草浄土宗
西山曼陀羅寺
浄土宗西山深草派
浄土宗西山禅林寺派
西山浄土宗
黒谷浄土宗
浄土宗本派
浄土宗
浄土宗捨世派

【浄土宗系本山寺院ガイド】

浄土宗総本山

知恩院

法然入滅の地に建つ
浄土宗随一の巨刹

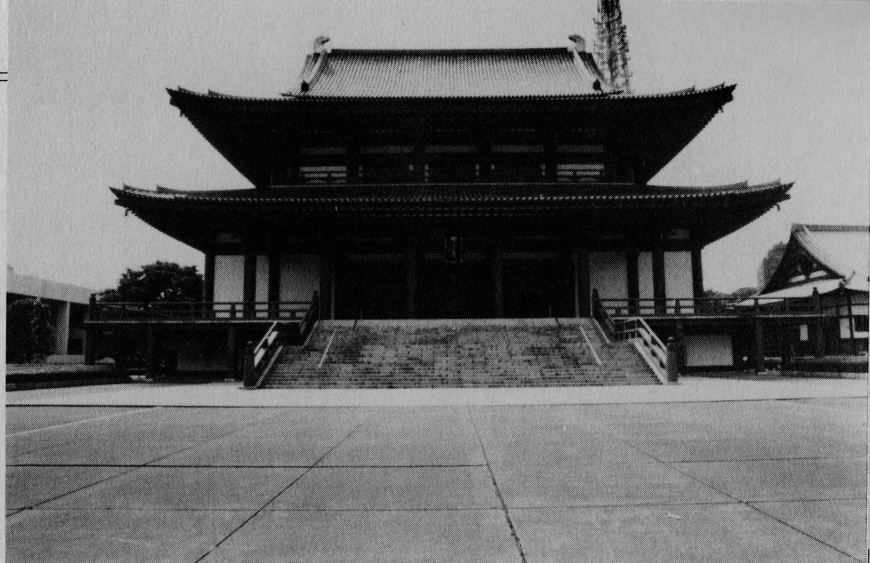
知恩院が建つところは、宗祖・法然が布教の拠点とし、入滅した地でもある浄土宗の故地。建暦2年（1212）の法然の滅後、弟子の源智が法然の遺骨を安置して廟堂をつくり、知恩院大谷と称したことにはじまる。師の法然の忌日に知恩講という法要を営んだことが、その名の由来である。

京都府東山区の華頂山のふもとに広がる境内は広大だ。まず、参詣者を迎えてくれるのが、江戸時代初期に徳川秀忠が建立した三門。高さ約24メートル、間口27メートルで、木造門としては世界最大。

その門を入って石段を上っていくと、法然上人の御影像を安置した本殿（御影堂）がどっしりと構えている。やはり江戸時代初期に建築された重厚な伽藍だ。

その右をさらに上っていくと、法然上人廟堂と勢至堂がある。勢至堂は、法然の幼名「勢至丸」にちなむもの。このあたりは知恩院でもっとも閑静な寺域となっている。

●所在地＝京都市東山区林下町　●山号＝華頂山
●交通＝市バス知恩院前から徒歩8分
●開創＝文暦元年（1234）、源智　●拝観＝境内自由、方丈庭園300円

⬇木造門としては世界最大の三門。

●所在地＝東京都港区芝公園
●交通＝地下鉄都営三田線、御成門駅より徒歩3分
●開創＝明徳4年（1393）、聖聡が真言宗から改宗
●山号＝三縁山　●拝観＝境内自由

浄土宗大本山

増上寺

徳川家の菩提寺として栄えた江戸を代表する大寺院

もとは真言宗の光明寺という寺院だったが、聖聡が浄土宗に改宗し、増上寺と名づけた。天正18年（1590）、徳川家康が江戸入府に際して立ち寄り、菩提所に定めてから発展。20万坪におよぶ寺地の寄進を受けて知恩院とならぶ大寺院になり、東海以東の浄土宗の中心寺院になった。

江戸時代には、現在の芝公園や東京タワーの一帯がすべて増上寺の寺域に属していたが、明治維新後に縮小。しかし、今でも境内は広大で、都心に残る貴重なスペースとしてコンサートや演劇などのイベントに利用されることも多い。

現在の大殿（本堂）は第2次世界大戦の戦災で消失したのち、昭和49年に再建されたもの。どっしりとした大屋根をいただく古風なたたずまいだが、鉄筋コンクリート造りで内部は近代的である。

その大殿の右側には、家康の持仏という黒本尊を安置したお堂（安国殿）があり、後方に徳川家歴代の廟所がある。

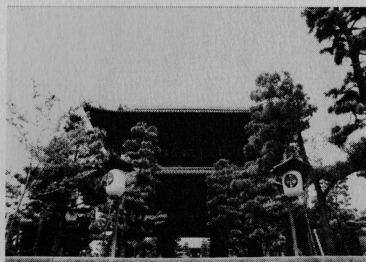
また三門の内側のすぐのところにある大きな松は、アメリカ18代大統領グラント将軍（南北戦争時の北軍指令官）が明治12年に来日したときに植えたものである。

⬆『東海道名所図会』に描かれた増上寺。

浄土宗大本山

金戒光明寺

法然が師から譲り受けた名刹

法然が比叡山西塔の黒谷で念仏修行をしたときの師・叡空がその白川本坊を法然に譲ったことにはじまる寺院で、通称「黒谷」ともいわれるのは、そのため。三門に「浄土真宗最初門」の額が掛かっているが、これは後小松天皇の宸筆。阿弥陀堂の阿弥陀仏像は、恵心僧都源信の最後の作品といわれる。また、寺宝に法然の遺書『一枚起請文』や『山越阿弥陀図』がある。

●所在地＝京都市左京区黒谷町
●交通＝市バス岡崎道下車徒歩５分
●開創＝承安５年（1175）、法然
●山号＝紫雲山　●拝観＝境内自由

浄土宗大本山

知恩寺

百万遍念仏発祥の地

法然が滞在した由緒寺院。知恩寺というより通称の「百万遍」の名で知られているのは、後醍醐天皇のとき、京都ではやった病気を百万遍念仏を修して退散させたという伝承があり、百万遍念仏発祥の地とされるためだ。百万遍念仏とは大きな数珠を大勢で繰りながら念仏を称えるもの。本堂に入ると、天井の周囲にそのとき用いる大念珠（数珠）が掛けられている。

●所在地＝京都市左京区田中門前町
●交通＝市バス百万遍バス停前
●開創＝賀茂神社の神宮寺を源智が改称
●山号＝長徳山　●拝観＝境内自由

浄土宗大本山

清浄華院

皇室ゆかりの由緒ある古刹

もとは清和天皇の勅願で慈覚大師円仁が建立した禁裏内道場。承安５年（１１７５）、法然を師として高倉天皇が受戒したのを契機に十二光院（阿弥陀堂）が増築された。その後、浄土宗第三祖の良忠の門下に受け継がれ、清浄華院と名づけられた。といっても、一般には略して「浄華院」と呼ばれることが多い。その後も皇室と関わりが深く、江戸時代には皇室の葬礼や法要を営んだ。

●所在地＝京都市上京区北ノ辺町
●交通＝市バス府立医大病院下車、徒歩６分
●開創＝貞観２年（860）、円仁
●拝観＝志納

浄土宗大本山

善導寺

浄土宗の源流が生まれた古刹

法然の高弟・弁長が故郷の九州に下って念仏をひろめて開いた寺。弁長は法然の滅後、鎮西派の祖となり、その門下からは多くの名僧が出たことから浄土宗の主流となった。今の浄土宗は鎮西派の系譜に属し、弁長を法然につづく第二祖としている。善導寺は弁長が入滅したところでもある。建暦2年（1212）に宋から伝来した善導大師像を安置してから善導寺といわれるようになった。

●所在地＝福岡県久留米市善導寺町飯田
●交通＝JR久大本線善導寺駅から徒歩10分
●開創＝建久2年（1191）、弁長
●山号＝終南山　●拝観＝境内自由

浄土宗大本山

光明寺

関東布教の拠点となった名刹

鎮西派の祖・弁長の弟子で浄土宗の第三祖とされる良忠が開いた寺。もとは悟真寺といい、蓮華寺という名を経て、光明寺と名づけられた。良忠の門下からは名僧が輩出し、浄土宗の関東布教の拠点となった寺院である。鎌倉の材木座海岸からやや離れたところにあるが、裏山に上れば湘南の海が一望のもと。庭園が美しい寺で、池に蓮の花が咲くところから「蓮寺」としても知られている。

●所在地＝神奈川県鎌倉市材木座
●交通＝鎌倉駅からバス、光明寺下車
●開創＝仁治元年（1240）、良忠
●山号＝天照山　●拝観＝境内自由

浄土宗大本山

善光寺大本願

庶民の阿弥陀信仰のメッカ

長野の善光寺は日本最古の寺院の一つで、庶民による阿弥陀信仰のメッカとして今日まで信仰されてきた。こうした善光寺そのものは超宗派だが、浄土宗の大本願と天台宗の大勧進によって守られてきた。大本願は代々尼僧の上人によって受け継がれているが、その上人が善光寺にお勤めにいくとき、「お数珠ちょうだい」といって、数珠で頭をなでてもらうと、たいへん良いことがおこるそうだ。

●所在地＝長野市元善町
●交通＝JR長野駅、徒歩10分
●開創＝7世紀、本田善光の開山という
●山号＝定額山　●拝観＝境内自由

西山浄土宗総本山

光明寺

法然火葬の地に建つ名寺

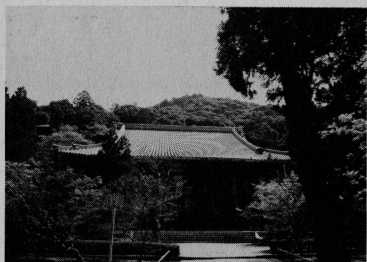
通称は「粟生光明寺」。源氏の武将として知られる熊谷直実が法然を開山に迎えて開いた寺といい、法然の遺骸はここで荼毘に付されたという。法然の高弟で西山派の祖・証空が念仏の根本道場として寺基を整えた。明治になってから浄土宗から西山派として分立し、戦後、さらに3派に分かれて西山浄土宗の総本山になった。閑静な境内は紅葉の名所として有名だ。

●所在地＝京都府長岡京市粟生西条の内
●交通＝阪急京都線長岡天神駅からバス
●開創＝建久９年(1198)、熊谷直実（蓮生）
●山号＝報国山　●拝観＝境内自由

浄土宗西山禅林寺派総本山

禅林寺

見返り阿弥陀で有名な古刹

清和天皇の勅願によって空海の弟子が創建したという古刹。11世紀に永観律師が念仏道場としたことから、一般に「永観堂」と通称される。その後、12世紀の静遍が法然に帰依したことから浄土宗の寺院となり、西山派の祖・証空に譲られた。本堂の阿弥陀如来像は、念仏者を「早く浄土に来なさい」と振り返ってうながす姿を表す独特なもので、「見返り阿弥陀」として有名。

●所在地＝京都市左京区永観堂町
●交通＝市バス永観堂前下車、徒歩５分
●開創＝仁寿３年（853）、真紹
●山号＝聖衆来迎山　●拝観＝400円

浄土宗西山深草派総本山

誓願寺

西山派の大念仏道場

もとは天智天皇の勅願によって奈良に建立された三論宗の寺。21世の蔵俊が法然に帰依し、以後浄土宗となり、西山派の祖・証空門下の深草真宗院の円空立信が受け継いだ。その弟子・道教の時代に大念仏道場となり、一遍が、参詣した和泉式部の霊を救ったという話もある。現在地に移ったのは天正13年（1585）、豊臣秀吉の命によるもの。古典落語の祖・安楽庵策伝ゆかりの寺でもある。

●所在地＝京都市中京区新京極桜之町
●交通＝市バス河原町三条下車すぐ
●開創＝天智４年（665）、恵穏
●拝観＝境内自由

浄土真宗

絶対他力の親鸞の思想を継承する
直系の血脈と各派からなる巨大教団

写真＝宗祖の御影(ごえい)を祀(まつ)る浄土真宗本願寺派の大谷本廟(おおたにほんびょう)（西大谷）。

浄土真宗の歴史

民衆への教化・組織化を軸に時の権力にも対峙する

◉初期真宗教団の成立

建保2年（1214）、親鸞は42歳のとき、常陸（茨城県）に向かった。親鸞は建永2年（1207）の法難で越後に流されたが、その流罪が解かれた後も京都にもどらず、関東に下ったのである。

浄土真宗の歴史は、ここから始まる。筑波山のふもとに住した親鸞のもとに信徒が集まり、初期真宗教団ともいうべきものが形成されたからである。

が、それは一つにまとまった教団ではなかった。親鸞は60歳ぐらいのときに、どういう理由からか、門弟と別れて京都にもどってしまう。残された門弟の間では異説が続出し、それぞれのリーダーや念仏堂を拠点として門徒集団を形成した。

一方、親鸞には血統をひく子孫がいたことが問題をさらに複雑なものにした。娘の覚信尼（1224～1283）をはじめとする子孫を中心としたグループが関東の門弟と対立したのである。

その親鸞の子のうちでも、長男とも次男ともいわれる善鸞（生没年不詳）は、また別な動きを見せている。善鸞は関東の門弟の間で起こった論争を調停するために父・親鸞の意をうけて東下したが、かえって異説に走ったという理由で親鸞から義絶・破門されてしまう。

が、彼は親鸞から夜中に人知れず法を伝授されたといい、「秘事法門」といわれるものの源流となった。秘事法門の特色は教義の根本を秘密にして伝えることにあり、後に真宗の主流となった本願寺によって異安心（誤った考え方）として退けられたが、さまざまな法門を生みながら長く続いた。

このように、初期真宗教団はかなり混乱した状況にあり、今日なお不明な点が多い。

⬆覚信尼。（西本願寺蔵）

➡親鸞。（居多ケ浜見真堂蔵）

◉門徒諸派の源流と変遷

⬆連座像。宗祖親鸞、２代如信、３代覚如が描かれている。（西本願寺蔵）

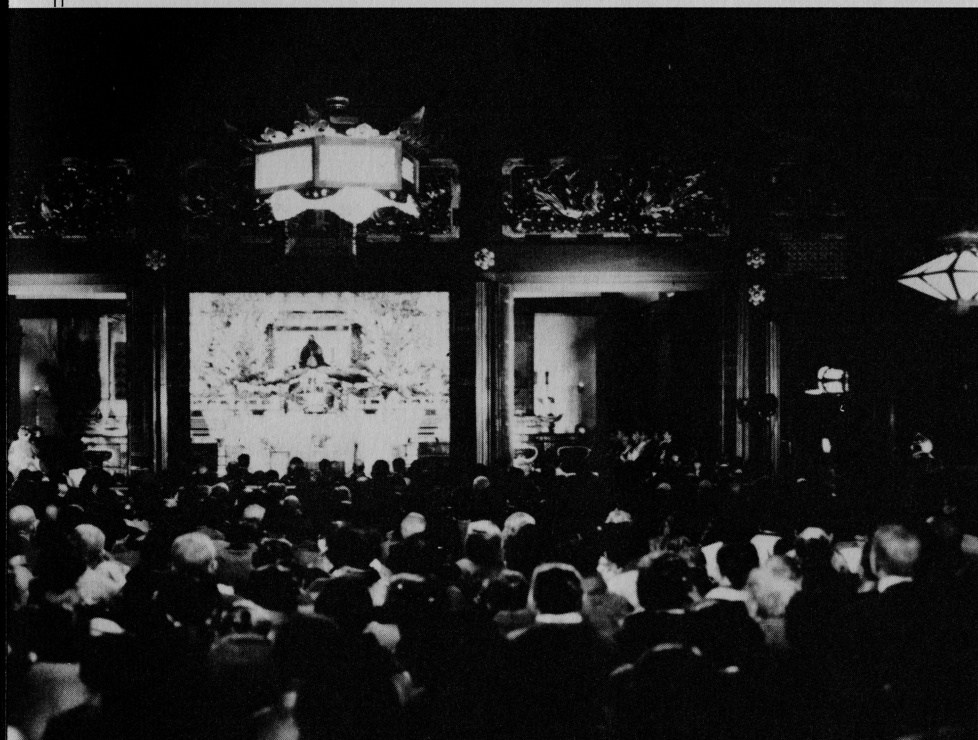
関東時代の親鸞の高弟のうち、それぞれの門徒集団のリーダーとなった代表的な人は真仏（１２０９〜１２５８）、順信（生没年不詳）、性信（１１８７〜１２７５）などである。とくに真仏を中心にした下野高田（栃木県芳賀郡）の如来堂（高田専修寺）を拠点とした高田門徒の教線は東北地方から東海地方に拡大し、初期真宗教団でもっとも大きな勢力となった。

この高田門徒の系譜をひくのが、今日の真宗高田派・真宗仏光寺派・真宗三門徒派・真宗誠照寺派・真宗山元派である。

高田派は現在、三重県津市の専修寺を本山としているが、これは専修寺10世真慧（１４３４〜１５１２）が伊勢に堂宇を開いたことによる。一方、故地の高田専修寺は高田派本寺とされている。

仏光寺派は京都市下京区の仏光寺を本山とする教団であるが、これは7世了源（１２９５〜１３３６）が山科の興正寺を仏光寺と改め、京都布教の拠点としたことにはじまる。その教勢は本願寺をしのぐものだったが、14世経豪（１４５１〜１４９２）が本願寺の蓮如に帰依し、末寺の多くも本願寺に転じた。そのおりに、経豪は興正寺蓮教と改名、彼に従って本願寺派となった末寺とともに本願寺教団のなかで特別の地位を与えられた。このグループの諸寺院が明治になって独立したのが、今日の真宗興正派である。

真宗三門徒派、真宗誠照寺派、真宗山元派の3派は、真宗の系譜に属してはいるが、やや様相が異なる。この3派は善鸞の秘事法門の継承者ともいわれる如導（１２５３〜１３４０）が、越前大町（福井市）に開いた専修寺を拠点とした念仏集団（大町門徒／三門徒）に始まり、３派に分かれて今日にいたる。

また、同じ福井県の武生市にある豪摂寺を本山とする真宗出雲路派は、本願寺三世覚如の高弟・乗専（１２９５〜？）が京都出雲路（京都市上京区）に開いた豪摂寺にはじまるものであり、本願寺の系譜に属するが、真宗山元派の本山・証誠寺と縁が深い。豪摂寺は応仁の乱のころ、証誠寺をたよって京都にのがれ、証誠寺のもとに移転したからである。が、やがて対立し、慶長元年（１５９６）に現

☗宗祖・親鸞聖人の忌日に恩徳を報ずるために行われる報恩講（東本願寺）。東本願寺では11月21～28日、西本願寺や高田派、興正派などは新暦により１月９日～16日に行われる。（撮影＝中田昭）

在地に移転。一時は天台宗に属したが、明治初期に本願寺派の所属となり、同11年（１８７８）に出雲路派として独立。

一方、性信を中心に下総豊田庄（茨城県水海道市）を拠点とした横曽根門徒の系譜を引くのが、現在の真宗木辺派である。木辺派は滋賀県野洲郡の錦織寺を本山とする宗派で、横曽根門徒のうち近江瓜生津（滋賀県八日市市）に布教をすすめた一派が瓜生津門徒（木辺門徒）として独立し誕生した。

◉本願寺の開創と真宗教団の成立

本願寺は、弘長２年（１２６２）に90歳で没した親鸞の遺骨を文永９年（１２７２）、京都東山の大谷に改葬し、ここに廟堂を設けたことにはじまる。今日においても東西の本願寺が親鸞の影像（肖像）を安置した御影堂を伽藍の中心に置いているのは、本願寺が宗祖の廟堂からはじまったという歴史を物語っている。

さて、もともとの親鸞の廟堂があった大谷の地は、親鸞の娘・覚信尼の死別した夫・日野広綱の所有地だった。覚信尼は

⬆東本願寺の祖・教如。（東本願寺蔵）⬆西本願寺の祖・准如。（西本願寺蔵）

ここを関東の門徒に寄付して廟所を共同で管理することとし、その管理責任者として置かれた「留守職」は親鸞の子孫が世襲するという協定を結んで、みずから初代の留守職についた。

そして、留守職は覚信尼の長男・覚恵を経て、その子・覚如（1270〜1351）に受け継がれたのだが、事がスムーズに運んだわけではない。覚信尼には再婚した夫・禅念との間に唯善という子があった。唯善は廟堂の管理権をめぐって争い、親鸞の影像と遺骨を鎌倉に持ち去って大谷の堂舎を破壊した。門徒諸派のうちには唯善と結ぶ勢力もあって、教団を二分する大騒動となった。これを唯善騒動というが、その後、廟所の復興を果たしたのは高田派の顕智をはじめとする関東の門徒であり、覚如は門徒に逆らうことはしないという誓約書（懇望状）を差し出して、ようやく留守職につくことを許されたのだった。しかし、覚如は廟堂を本願寺と改め、一世を親鸞、二世を如信（善鸞の子）、みずからは本願寺三世と定めて、以後の本願寺中心の真宗集団の基礎を固めたのであった。

◉蓮如の時代と教勢の拡大

本願寺が飛躍的に発展したのは、本願寺8世蓮如（1415〜1499）の時代だった。蓮如は、北陸や関東、東北をめぐって直接に教化をしたほか、手紙でわかりやすく教えを説き、関東の門徒諸派の系統に属する寺院や信徒を本願寺に組み入れて真宗の統一をすすめ、その教勢は一挙に拡大した。

が、教勢の拡大は他宗派の反発をまねき、寛正6年（1465）には比叡山の衆徒によって本願寺が破壊されるという事態に発展した。蓮如は、大谷の地を離れて各地の門徒の間を転々とした後、越前吉崎（福井県）に移った。その間にも布教をつづけ、文明10年（1478）に京都山科で本願寺の再興に着手（山科本願寺）、明応5年（1496）には大坂の石山(現在の大阪城付近)に坊舎を建てた。

こうして蓮如によって伸長した真宗の力は戦国大名をもしのぐほどになった。とくに北陸では蓮如の時代に加賀一向一揆といわれる武装蜂起によって領主を倒し、一国を支配するほどの力に成長した。

◉石山合戦と本願寺の分立

蓮如のころから真宗は各地の農民に浸透し、同信者の念仏講を中心に共同体的なつながりをもつようになった。そして戦国大名に対抗して立ち上がり、各地で

一向一揆を起こした。そして、本願寺のもとに結集し、やがて戦国の覇者・織田信長と対立する合戦に発展した。それが元亀元年（１５７０）から11年間にわたって戦われた石山合戦である。

石山本願寺は、蓮如が建てた石山坊舎を10世の証如（１５１６～１５５４）が本寺に改めたものであるが、石山合戦は

⬆石山合戦の陣地図。中央の一揆方を信長軍が包囲している。（大阪城天守閣蔵）

大坂だけで戦われたわけではない。本願寺11世の顕如（１５４３～１５９２）は各地の門徒に蜂起を呼びかけ、信長と対立関係にあった毛利・朝倉・三好などの諸大名と同盟して信長に対抗した。

しかし、天正8年（１５８０）に敗れて顕如は和議を受け入れ、紀州鷺森（和歌山市）に退いた。

その後、本願寺は天正19年（１５９１）に豊臣秀吉から土地の寄進を受けて京都西六条に再建。翌年、顕如の長男・教如（１５５８～１６１４）が本願寺を継いだが、さらに翌年の文禄2年（１５９３）に秀吉の命によって弟の准如（１５７７～１６３０）に代わった。

教如はやむなく隠棲するが、慶長7年（１６０２）に徳川家康から東六条に土地の寄進を受けて別に本願寺をつくった。以後、准如の本願寺を西本願寺、教如の本願寺を東本願寺と通称し、末寺・門徒も東西に分かれて所属することとなった。

◉江戸時代からの真宗

江戸時代の真宗は東西の本願寺を中心とする本末制度によって安定し、学林・学寮といわれる僧侶養成機関も整えられて発展した。また、底抜けに楽天的な妙好人といわれる念仏信者が輩出したのも江戸時代である。

しかし、幕末には難しい対応をせまられ、維新軍に資金を援助するなどして切り抜けた。が、つづく廃仏毀釈と西洋思想の流入も大きなショックだった。

そこで、宗祖・親鸞の精神を復興する運動が起こり、井上円了・清沢満之・島地黙雷・南条文雄などの優れた学者・思想家が出た。

とりわけ、清沢満之門下からは暁烏敏、佐々木月樵、曽我量深などの偉才を輩出、その影響は昭和37年に始まった大谷派の同朋会運動におよぶ。「家の宗教から個人の宗教へ」を旗印にした、この運動は檀家制度の上に成立する既成仏教教団の改革運動の先駆けであった。教学的にはきわめてラディカルなもので、いわゆる「お東紛争」と呼ばれる、前法主と内局との激しい内紛騒動を引き起こす要因になるなど、社会的にも注目を集めた。

【浄土真宗チャート】
親鸞
鎌倉時代
真仏
善性(稲田)
性信―顕性―善明
覚信尼
善鸞
顕智―専空
専海―円善
源海―了海
唯善
覚恵
如信
如道→秘事法門系の流れへ……
関東系門徒
本願寺
室町時代
定専―空仏―順証―定順―定顕
如導
道性
如浄―良泉―浄一
浄如
如覚
了源
慈空
存覚
乗専―善入
慈観
覚如
従覚―善如―綽如―巧如―存如
三門徒
戦国時代
蓮如
光教
経誉
経豪(蓮教)
真慧―真智
一向一揆頻発
蓮如により
多くの門徒が本願寺に
顕如
石山合戦
江戸時代
教如
准如
(東本願寺)
(西本願寺)
天台宗に所属
天台宗に所属
天台宗に所属
天台宗に所属
明治維新
真宗高田派
真宗山元派
真宗誠照寺派
真宗三門徒派
真宗仏光寺派
真宗興正派
真宗木辺派
真宗出雲路派
真宗大谷派
浄土真宗本願寺派
真宗10派
太平洋戦争
真宗北本願寺派
真宗高田派
真宗山元派
真宗誠照寺派
真宗三門徒派
真宗仏光寺派
浄土真宗浄光寺派
真宗興正派
真宗木辺派
真宗出雲路派
真宗長生派
浄土真宗同朋教団
真宗大谷派
真宗東本願寺派
真宗浄興寺派
浄土真宗親鸞会
浄土真宗本願寺派
仏教真宗
仏眼宗

真宗大谷派本山

東本願寺

宗祖・親鸞の血統を保つ巨刹 いわゆる「お東さん」

●所在地＝京都市下京区烏丸通七条上ル
●交通＝JR京都駅より徒歩５分
●開創＝慶長７年（1602）、教如
●拝観＝境内自由

ＪＲ京都駅前の大通り（烏丸通り）に面した大門を入ると、目の前に高さ38メートル、南北76メートルもの巨大なお堂がどっしりと構えている。畳の数にして927、教団が〝世界最大の木造建築〟と自負する御影堂（別名・大師堂とも呼ぶ）で、親鸞聖人の像を安置している。渡り廊下で結ばれた隣りにあるのが、阿弥陀仏を奉安した本堂である。境内に立つと、近くにそびえる京都タワーを「お東さんのロウソク」と呼ぶのもうなずける。

重厚な偉容を誇る現在の伽藍は、明治28年の再建。再建にあたっては、一〇〇〇万におよぶ信徒が一身を抛って協力し、木曽の山奥から巨大な用材を運びこんだのだという。

その名残が、渡り廊下に安置されている毛綱だ。用材の運搬の際、あまりの重さにワラ綱が耐えかねたため、女性信者がこぞって自らの黒髪を供出し、編まれたものである。庶民の上に築かれた真宗教団の信仰の根強さを実感させる。

⬆建造の際、女性の髪の毛を結い込んでつくったという毛綱。

浄土真宗本願寺派
本山

西本願寺

いわゆる「お西さん」桃山文化を伝える伽藍は華麗

東本願寺の西、堀川通りに面しているのが西本願寺。「東」とか「西」とかいうのは通称で、正式には「東」は大谷派本願寺、「西」は本願寺派本願寺という。もともとは同じ本願寺だったが江戸時代が始まるころに分立した。

⬆桃山建築として知られる国宝の唐門。

歴史の項で触れたように、西本願寺は豊臣秀吉の寄進によって現在地に再建された。こちらの境内も広大で、約３００メートル四方。堀川通りに面した山門を入ると、正面に御影堂（大師堂）があり、ここに親鸞の像が安置されている。そして、東本願寺と同じく、本堂（阿弥陀堂）が回廊で結ばれている。

御影堂と本堂は江戸時代の建物で、国の重要文化財。ひときわ大きい御影堂は、高さ29メートル、南北57メートル。単層入母屋造りの重厚な伽藍だ。

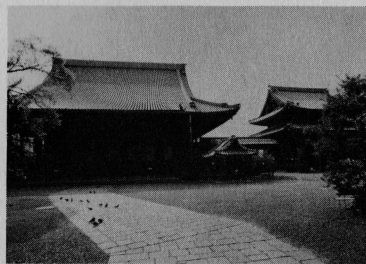
西本願寺には安土桃山時代の伏見城の建物を移築したといわれるものが多い。なかでも国宝の書院は桃山建築を代表するものといわれている。内部の対面所というところは、諸大名と接見する秀吉を大きく見せるためとかで、逆遠近法という手法で襖絵などが描かれている。同じく国宝の能舞台・飛雲閣・唐門など、美しい建造物が目を引く。

●所在地＝京都市下京区堀川通花屋町下ル本願寺門前町
●交通＝ＪＲ京都駅徒歩10分。市バス西本願寺前下車すぐ
●開創＝天正19年（１５９１）、顕如　●山号＝龍谷山　●拝観＝境内自由

真宗興正派本山

興正寺

もとは西本願寺門徒筆頭の名刹

西本願寺の南隣にある。親鸞の関東時代の門徒を源流とする仏光寺派の経豪が15世紀に門徒とともに本願寺に転じ、山科に寺を建て、仏光寺の旧名を復興して興正寺と名づけたことにはじまる。その後、本願寺とともに石山（大阪市）等に移転。京都で本願寺が再建されると同時に現在地に移った。江戸時代には西本願寺に属し、門徒筆頭の地位を保ったが、明治時代に独立した。

●所在地＝京都市下京区醒ヶ井通七条上ル
●交通＝JR京都駅より徒歩５分
●開創＝文明14年（1482）、経豪
●山号＝円頓山　●拝観＝志納

真宗仏光寺派本山

仏光寺

真宗京都布教の拠点となった名刹

親鸞が京都山科に建立し、「興隆正法寺」（興正寺）と名づけた寺院にはじまるという。親鸞の関東時代の門徒を源流とする高田派の京都布教の拠点となり、７世の了源が東山に移して仏光寺と改めた。その勢力は本願寺をしのぎ、京都でもっとも大きな門徒集団として仏光寺派が誕生。その後、豊臣秀吉の大仏殿建立に際して現在地に移転。寺宝として聖徳太子立像（重文）を伝えている。

●所在地＝京都市下京区高倉通仏光寺下ル
●交通＝地下鉄四条駅から徒歩５分
●開創＝建暦２年（1212）、親鸞
●山号＝渋谷山　●拝観＝境内自由

真宗三門徒派本山

専照寺

中野本山とも呼ばれる名刹

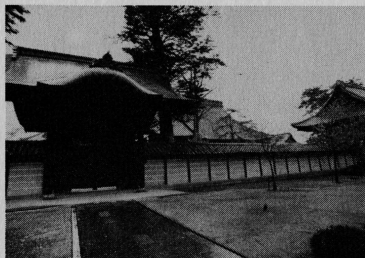
三門徒の名は、北陸地方にはじめて真宗をひろめた如導の大町門徒が三派に分かれたためとも、親鸞の和讃をよく称えたので「讃門徒」と呼ばれたためともいう。如導が越前大町（福井市）に創建した専修寺の法系が、如導の孫・浄一によって別立、越前中野村（福井市）に新たに専照寺を開創した。故地の名をとって中野本山とも呼ばれ、阿弥陀堂は福井市で最も古い建築物として由緒をとどめている。

●所在地＝福井県福井市みのり町
●交通＝JR福井駅より福鉄バス武生行、大和紡下車　●開創＝応永３年（1396）、浄一
●山号＝中野山　●拝観＝境内自由

真宗出雲路派本山

毫摂寺

北国一の名鐘の音ひびく本山

本願寺3世覚如の高弟・乗専が京都に開創したが、応仁の乱を逃れて福井に移転。現在地には慶長8年（1603）に移った。武生市街からやや離れて、万葉の昔から味真野と呼ばれる静かな郊外にあり、1万坪を超す広大な境内に茂る松はみごと。親鸞聖人像をはじめ歴代門主の影像を安置した御影堂は江戸時代中期の建築。やはり江戸時代に建てられた鐘楼の梵鐘は北国随一といわれている。

●所在地＝福井県武生市清水頭町
●交通＝武生新駅から、福鉄バス入谷行き魚見経由池田行20分　●開創＝14世紀、乗専
●山号＝出雲路山　●拝観＝境内自由

真宗山元派本山

証誠寺

横越本山とも呼ばれる真宗の古刹

大町門徒の祖・如導の弟子・道性が至徳2年（1385）に鯖江横越に開いた寺。越前三門徒の一つだが、寺伝によれば、道性は7世。親鸞が越後に流される途上、この地の人々に念仏を教えたことにはじまり、嘉元2年（1304）に後二条天皇から「山元山護念證誠寺」の寺号と扁額を受けて勅願所になったという。本尊の阿弥陀仏は恵心僧都源信の作と伝え、親鸞自作という木像もある。

●所在地＝福井県鯖江市横越町
●交通＝JR北陸本線鯖江駅から福鉄バス河和田行　●開創＝至徳２年（1385）、道性
●山号＝山元山　●拝観＝境内自由

真宗誠照寺派本山

誠照寺

左甚五郎作の龍が迎える名刹

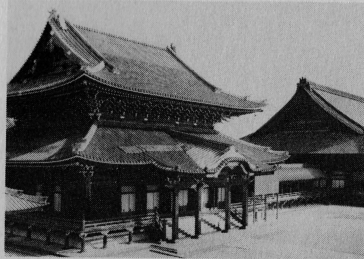
親鸞が越前への配流の途上とどまった念仏道場にはじまるという。親鸞の子・道性を招いて2世にしたというが、実際には大町門徒の祖・如導の弟子・道性がその人で、道性の弟子の如覚が開いたとされる。越前三門徒の一つだ。その後、天皇から誠照寺の寺号を受けて勅願所になったという。山門は「鳥不棲門」と呼ばれるが、これは左甚五郎の手による龍を、鳥が恐れて近寄らないためという。

●所在地＝福井県鯖江市本町
●交通＝福井鉄道西鯖江駅より徒歩５分
●開創＝14世紀末ごろ、如覚
●山号＝上野山　●拝観＝境内自由

真宗高田派本山

専修寺

初期真宗教団の中心寺院

親鸞の関東時代の門弟・真仏のもとに興った高田門徒の直系。その勢力は本願寺をしのぎ、初期真宗教団の中心だった。それだけに、国宝の『三帖和讃』『西方指南抄』、重文の『教行信証』など多くの親鸞真蹟のほか、『親鸞伝絵』などの古文書を伝えている。もとの専修寺は栃木県芳賀郡二宮町にあるが、15世紀の終わりごろ、現在地にあった無量寿院を専修寺と改め、高田派の本山とした。

●所在地＝三重県津市一身田町
●交通＝JR紀勢本線一身田町駅から徒歩５分　●開創＝文明年間（1469〜1487）、真慧
●山号＝高田山　●拝観＝境内自由

真宗木辺派本山

錦織寺

親鸞の『教行信証』ゆかりの名刹

寺伝によれば、慈覚大師円仁が創建した毘沙門天堂に親鸞が関東から帰洛の途上立ち寄り、ここにとどまって『教行信証』を完成したという。それ以来、真宗になったというが、その法系は親鸞の関東時代の門弟・性信を中心に興った横曽根門の系統に属している。錦織寺の名は、暦仁元年（1238）、天女が錦を織る霊夢にちなんで四条天皇が「天神護報錦織之寺」と名づけたという。

●所在地＝滋賀県野洲郡中主町木部
●交通＝JR野洲駅木部循環木部下車
●開創＝天安２年（858）、円仁
●山号＝遍照山　●拝観＝境内自由

真宗東本願寺派本山

東京本願寺

「お東紛争」で大谷派から独立

浅草本願寺とも呼ばれる、大谷派の東京別院が前身。昭和57年、同派から分離独立した。昭和44年、大谷派前門主（当時は法主）の大谷光暢氏が、長男で同別院住職の光紹氏に、大谷派管長職を譲ると発表した「開申事件」をきっかけに、前門主と大谷派内局（宗門当局）との関係が決裂（お東紛争）、その間に光紹氏が一派を立てたことによる。光紹氏は、〝東本願寺派25世法主〟に就任した。

●所在地＝東京都台東区西浅草
●交通＝地下鉄銀座線田原町駅から徒歩５分
●開創＝天正19年（1591）、教如
●拝観＝境内自由

時宗

遊行者・一遍のもとに集まった
踊り念仏集団から始まる宗派

写真＝時宗総本山清浄光寺の一遍像。

時宗の歴史

遊行の集団から教団の組織化へ 独自の念仏信仰を継承

◉遊行と札配りの特異な布教

時宗の開祖・一遍（1239～1289）は、異形の人であった。没後10年ぐらいに編纂された有名な『一遍聖絵』を見ると、肌の色が異様に黒く、かなり日本人ばなれした風貌で描かれている。背も高く、周囲の群衆より頭ひとつぐらい抜きん出ている。まるで仁王か羅漢像のようである。これは人々が一遍に非日常的で超人的なパワーをみとめ、異界の人として崇めたためではないだろうか。

その念仏集団も、きわめて異様なものであった。念仏を称えながら跳ね、踊り、日常の秩序を破壊するカオスのエネルギーに満ちていた。

また、一遍は遊行しながら「南無阿弥陀仏」と書かれた札を配ったが、そのようなことも鎌倉仏教の他の宗祖にはみられない。じつは札配りこそ、踊り念仏以上に一遍の念仏を特徴づけるものなのだ。そこには親鸞の「自然法爾」の絶対他力信心とは違った意味での絶対的な信仰があった。

一遍は親鸞と同じく法然の法系に属している。といっても、親鸞が法然の直弟子だったのに対し、一遍はやや遠い。一遍は浄土宗西山派の祖・証空の弟子の聖達に13歳のときに入門。一時、還俗したが、ふたたび出家し、故郷・伊予（愛媛県）の窪寺で草庵を結んで念仏と思索の日々を送った。そのとき、念仏する人をみんな救いきるまでは自分も仏にならないと誓った阿弥陀仏が仏となっている以上は、すでに救いは実現しているのだと考えた。

ただ、「南無阿弥陀仏」の一声があれば、誰でも救いの中に身をおくことができる。信心があるかどうかといったことは関係ない。信心・不信心にかかわりなく、「南無阿弥陀仏」で救われるのだ。というわけで、一遍は人と「南無阿弥陀仏」の縁を結ぶために札配り（賦算）の旅に出発したのだった。

ところが、札をもらっても、どうも救われた気分になれないという人がいた。

➡一遍。（長楽寺蔵）

いわれてみれば、そのとおりでもあるので自信を失い、紀州（和歌山県）の霊場・熊野権現に参籠したところ、気にせずに札配りをせよという夢告を得た。そして、あらためて札配りの旅に出かけたのである。

一遍の旅は、故郷の四国はもとより、九州から東北におよんだ。踊り念仏をはじめたのは、その遊行の途上、弘安2年（1279）に信濃佐久郡の市庭（長野県佐久市）で念仏会をしたときのことだった。踊り念仏は平安時代の空也が創始したものとされるが、一遍は空也を先達と呼んで尊敬している。

このような一遍は、住まいさえ定めることなく旅に暮らした。そのため、遊行上人と呼ばれる。また、最低限に必要なものだけ所有し、他の物はすべて捨てたために捨聖とも呼ばれた。もちろん教団を組織する意思はまったくなかった。

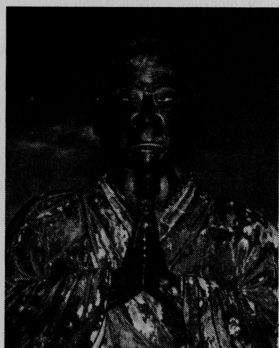
ところが、その特異な念仏聖の集団は、やがて「時衆」と呼ばれて、一時期は浄土宗や真宗の諸派をしのぐ大きな勢力をもつにいたった。

◉一遍の死後、教団の成立へ

時宗は古くは「時衆」といった。日常の念仏を臨終のときの念仏（臨命終時の念仏）と心得、六時（四六時中）に念仏する衆徒（六時念仏衆）の意味である。

⬆一遍・僧尼踊躍念仏図。中央の一遍の周りに念仏踊りを行う僧が集まる。（金蓮寺蔵）

また、念仏しながら諸国を遍歴して歩いたことから「遊行宗」ともいわれた。

しかし、すべての衆徒が遊行したわけではない。遊行時衆とは別に出家せずに念仏をする俗時衆があったのである。そして、遊行時衆には誰でも参加できたわけではなく、20名ほどが厳選されて一遍とともに行脚した。というのは、阿弥陀仏の名号を唯一絶対のものとして寺院ももたなかった時衆は、南無阿弥陀仏を体現する人以外によりどころとするものがなかったからである。とくに一遍は阿弥陀仏そのものであるという観念が生まれ、そこから指導者を絶対とすることが強調された。この指導者を「知識」という。

一遍が正応2年（1289）に没すると、時衆は知識たちに率いられることになったが、そのなかで他阿弥陀仏と号した真教（1237〜1319）という人が、しだいに知識筆頭の地位を得るようになった。真教は、はじめ浄土宗鎮西派の良忠に師事し、一遍に転じたが、その念仏教化のありかたは、一遍とは違っていた。一遍が一か所に長くとどまらなかったのに対し、真教は北陸と関東を中心に特定の地域で教化したのである。

⬆呑海。（清浄光寺）

その結果、念仏道場が建設されるようになった。その数は100以上におよび、それらの道場を拠点に初期の時宗教団が形成されたのである。それとともに道場は寺院に発展していった。甲府の一蓮寺、京都市北区の金蓮寺、同下京区の金光寺などが、その代表的な寺院である。

真教は嘉元2年（1304）に他阿弥陀仏（他阿）の号を弟子の智得にゆずり、相模の当麻道場無量光寺（神奈川県相模原市）に隠棲。文保3年（1319）に83歳で没したが、その後、無量光寺の委譲をめぐる対立が起こり、当麻派と遊行派に分裂する。

◉時宗十二派の系譜

当麻派と遊行派に分かれたのは智得の没後、弟子の呑海（1265〜1327）と智光（1277〜1333）が対立したことによる。呑海は智得から他阿弥陀仏の号をゆずられて遊行教化していたが、智得が没したことで無量光寺に戻ろうとしたところ、無量光寺で智得に仕えていた智光がこれを拒否。智光は智得からゆずられたとして他阿弥陀仏を号した。呑海は相模藤沢に清浄光寺（神奈川県藤沢市／後の時宗総本山遊行寺）を建てて、そこに住した。これによって、無量光寺を本寺とする当麻派と清浄光寺を本寺とする遊行派が生まれたのである。

また、真教を祖とする当麻派・遊行派とは別に10の派が生じ、合わせて時宗十二派といわれる分派が誕生した。その後、主導権をにぎっていったのは遊行派であり、現在まで続くのはわずかで、それも時宗1宗の中に統合されている。その派の系譜を簡単にみておこう。

なお、派祖の名に「仙阿」とか「作阿」

【時宗チャート】

浄土宗鎮西派
一向
一向衆
一向派
天堂派

浄土宗西山派
一遍
王阿
真教
仙阿
聖戒
作阿
浄阿
智得
解阿
智光
呑海

時衆
（市屋派）
（六条派）
（奥谷派）
（解意派）
（遊行派）
（当麻派）
（四条派）
（御影堂派）

室町時代
託阿
国阿
霊山派
国阿派

時宗十二派
（時宗の全盛時代）

念仏講・盆踊りなどの仏教習俗

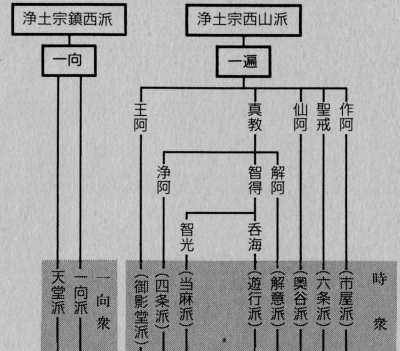
戦国時代
衆徒の多くが蓮如の本願寺へ

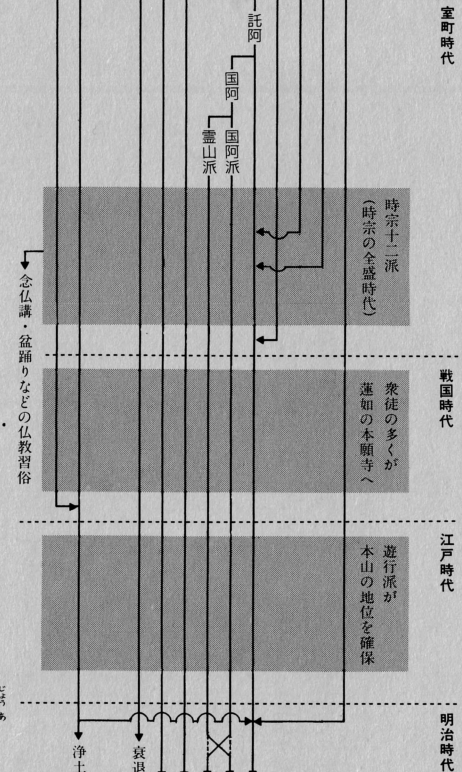
江戸時代
遊行派が本山の地位を確保

明治時代
浄土宗へ
衰退
四条派
当麻派
天台宗へ
国阿派
時宗

とあるのは、それぞれ仙阿弥陀仏、作阿弥陀仏の略称である。人がそのまま阿弥陀仏だという信仰をもつ時宗では、戒名に一字を冠して阿弥陀仏とする習わしが、今でもつづいている。

【奥谷派】一遍の弟子・仙阿（心阿ともいう）を祖とし、愛媛県松山市の宝厳寺を本寺とした。後に遊行派に属す。

【六条派】一遍のいとことも弟ともいう聖戒を祖とし、六条道場歓喜光寺（京都市山科区）を本寺とした。一遍の両親を祖とする派として独自の地位を保持したが、やはり遊行派に帰属。

【市屋派】空也が創建し、一遍も参じた市屋道場の唐橋法印こと作阿が一遍に帰依したことに始まる。この派は長く続いたが、明治になって遊行派に帰属。

【御影堂派】一遍の弟子・王阿を祖とし、京都五条の新善光寺を本寺とした派。一遍の御影とともに後嵯峨天皇の宸影を奉じるところから派名とする。本寺の新善光寺は第二次大戦中の強制疎開で移転を余儀なくされ、現在は滋賀県木之本町の浄信寺に受け継がれている。

【四条派】真教の弟子・浄阿を祖とし、四条道場金蓮寺（京都市北区）を本寺とした派。公家や武家の帰依を受けて大きな勢力をもった。

【解意派】真教の弟子・解阿を祖とし、茨城県海老島の新善光寺を本寺とした派。後に遊行派に帰属。

【霊山派】遊行派7世託阿の弟子・国阿を祖とし、京都市東山区の霊山正法寺を本寺としていたが、国阿派と本末争いの末、同寺は国阿派大本山になった。

【国阿派】霊山派と同じく国阿を祖とし、

国阿が京都東山に開いた雙林寺を本寺としたが、雙林寺はのちに天台宗に転じた。

【一向派・天童派】 この2派は、一遍の直系の系統ではない。一遍と同じ年に生まれた一向俊聖(1239〜1287)という念仏聖によって開かれた宗派である。俊聖は浄土宗の良忠に学んで名を一向と称し、諸国行脚の念仏教化の旅に出た。その生き方は、札配りこそしなかったが、一遍とよく似ており、文永11年(1274)に九州・宇佐八幡宮に詣でて、一遍より早く踊り念仏をはじめた。そして、彼の衆徒は一向衆とよばれ、一遍の時衆と並ぶ勢力となった。

この俊聖が再興した滋賀県米原町の番場の蓮華寺を本寺としたのが一向派であるが、昭和17年に浄土宗に転じた。また、俊聖の入寂地ともいう山形県天童市の仏向寺を本寺としたのが天童派である。

◉時宗の盛衰

時宗の最盛期は南北朝から室町時代中期にかけてである。各派はそれぞれに勢力を競い、皇族・貴族や豪族と結びついて和歌や立花(生け花)の発展に貢献して中世の「阿弥」文化をつくりあげた。

しかし、戦国時代になると、時宗を支持した大名にも滅亡するものがあり、武士の衆徒は禅宗、庶民の多くは真宗や浄土宗、日蓮宗などに転じて急速に教勢が衰えた。遊行派の本山・清浄光寺を外護した北条氏も滅びたが、遊行派は佐竹氏の援護で慶長年間に再建され、江戸時代には徳川家の保護を受けて発展した。しかし、時宗全体としては、今日にいたるまで往事の隆盛を取り戻すことはなかった。

⬆清浄光寺にて念仏札を配る遊行上人。

⬆清浄光寺開山忌にて念仏踊りを行う信者たち。

【時宗本山寺院ガイド】

時宗総本山 清浄光寺

宿場町に栄えた遊行の本拠地

一般に「遊行寺」と呼ばれる。時宗の第四祖・呑海（遊行派の祖）が正中2年（1325）に北条氏から極楽寺という廃寺跡の寄進を受けて創建したことにはじまる。以来、北条氏をはじめ、室町時代から戦国時代にかけて諸大名の帰依を受け、江戸時代には徳川家の外護を受けて発展した。所在地の藤沢は東海道の宿場町であり、かつて東海道を旅する人は必ず立ち寄って参拝したという。

広大な境内の入口に立つ山門（惣門）は大きな冠木門で、日本三黒門の一つといわれる。ここから上る石段は阿弥陀仏の四十八願にちなんで48段ある。その石段を上って正面の大きな本堂の右を行ったところにある墓域には、浄瑠璃で有名な小栗判官満重と照手姫の墓がある。境内にそびえる樹齢百年の大イチョウもみごとだ。また、寺宝として「絹本著色一向上人像」「後醍醐天皇御像」などが伝わり、国の重要文化財に指定されている。

●所在地＝神奈川県藤沢市西富
●交通＝JR藤沢駅よりバス、戸塚行にて藤沢橋下車
●開創＝正中2年（1325）、呑海　●山号＝藤沢山　●拝観＝境内自由

➡歴代遊行上人の墓。

融通念佛宗

集団念仏を体系づけた良忍を祖とする大衆的な宗派

◎融通念佛宗の歴史

◎融通念佛宗本山寺院ガイド
融通念佛宗総本山大念佛寺

写真＝大念佛寺の練供養（写真提供＝大念佛寺）

融通念佛宗の歴史

勧進聖たちによって伝えられた良忍の教え

◉集団念仏の源流

融通念仏は別名「大念仏」ともいい、大勢の人が集団で念仏を称えるのが特色である。これは融通念佛宗の開祖とされる良忍（1073～1132）が永久5年（1117）に阿弥陀仏の霊告を受け、「一人がすべての人（一切人）であり、一切の人が一人である。一行は一切の行であり、一切の行は一行である」と告げられたことに始まるという。つまり念仏を称える人だけを救うのではなく、一人の念仏は全部の人の念仏、全部の人の念仏が一人の念仏と融合しあって救いがもたらされるというのである。

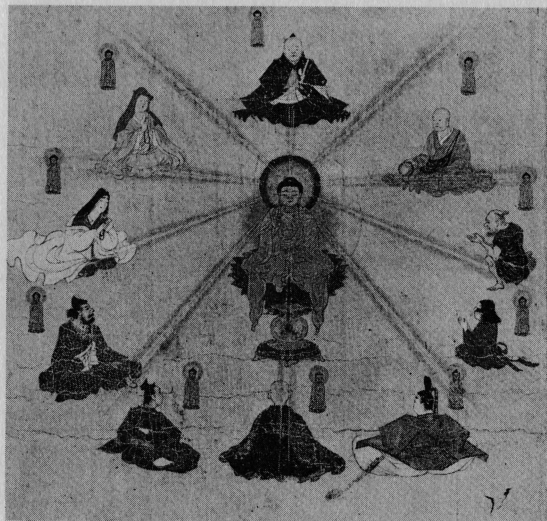
といっても、集団での念仏は、良忍が最初というわけではない。良忍は比叡山常行堂の堂僧であり、その後は念仏聖たちが集まった大原来迎院で念仏の日を送った。常行堂の堂僧とは、念仏に節をつけてうたう声明念仏の合唱僧のことである。それに「一即多・多即一」という天台円融思想を導入して、密教的宇宙観のもとに集団念仏を義務づけたのが良忍であった。

良忍は音楽的才能に恵まれ、大原に隠棲してから比叡山の声明を大成して、魚山流声明の祖となっている。したがって、その融通念仏の具体的な姿は、大勢が集まって念仏をうたう音楽法要であり、大きな数珠を大勢で繰りながら念仏する百万遍念仏ともなり、踊り念仏ともなって、理論的な教義を説くよりはるかに力強く念仏を大衆に浸透させた。そのため、寺院の造営費を募集する勧進活動などで、宗派を超えて大念仏会が盛んに催されるようになり、逆に良忍の系統は埋没してしまった。

◉融通念仏の再興

再び良忍の融通念仏が歴史上に浮上してくるのは、14世紀になってからである。それを示すのが『融通念仏縁起絵巻』の成立である。

この『絵巻』はいろいろな霊験とともに良忍の生涯を描いたもので、正和3年（1314）に初めて作成され、勧進聖たちが写本して各地に伝えた。その代表的人物が良鎮で、42年間にわたって全国を歩き、『絵巻』を絵解きしながら人々を融通念仏門に加入させていった。

➡良忍。（大念佛寺蔵）

⬆『融通念仏縁起』より、光明遍照十方世界。中央の阿弥陀から功徳の光明が人々に放射される。（清涼寺蔵）

融通念仏中興の祖とされる法明（1279～1349）が出たのも、ほぼ同じ時期である。法明は高野山や比叡山で修行したのち、元亨元年（1321）に石清水八幡宮で霊告を受け、良忍以降の途絶えていた法脈を継承したという。

法明は生地の河内地方を中心に活動し、村落のムラ社会で形成され始めていた講を組織して融通念仏門に組み入れていった。そして「六別時」と呼ばれる6集団が生まれて、今日の融通念佛宗総本山・大念佛寺も再興された。

◉河内の融通念仏と大念佛寺

法明によって融通念仏の門に入った集団は、それぞれ「別時」と呼ばれた。別時とは別時念仏の略で、もともとは正式の法要とは別に行う臨時の念仏会をさす。

河内の六別時はそれぞれに道場を持って融通念仏会を催したが、道場といっても、決まった堂舎があるわけではなかった。講のメンバーがくじ引きで講元を決め、その家を道場とするものだった。

良忍が開いたという融通念仏の本山・大念佛寺も、この時期には一定の場所に立つ寺院ではなかった。融通念仏の門主たる大念佛寺上人も六別時のなかからくじで選出され、当選した別時の道場を大念佛寺としたのである。

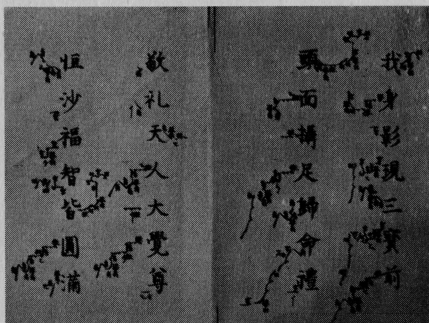
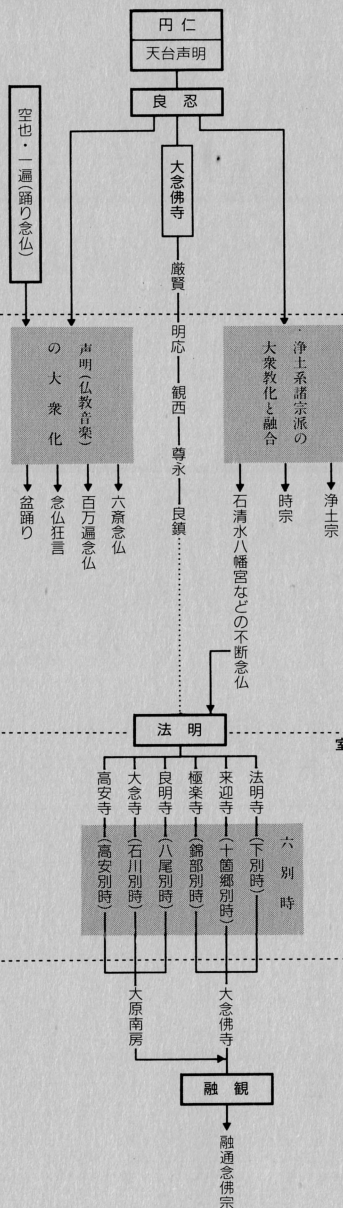
その方法は、まず各別時から代表1人を選び、それぞれの名を記した札のほかに白札を1枚加えた7枚の中から1枚を選ぶ。そこに名が書かれている人が次の上人というわけである。もし白札が出た場合はだれも適任者がいなかったというわけで、各別時で代表を選びなおし、改めて同じ方法で選出した。なかなか念の入った民主的な方法である。

しかし、流動的だった道場もしだいに定着し、江戸時代に入ると寺院化する。大念佛寺は、元和元年(1615)に、現在地に寺地の寄進を受けて建立された。

ところが、各別時の道場が寺院として定着するとともに紛争も発生した。江戸時代初期に大念佛寺と大原南坊という寺院の間で、どちらを本寺とするかという争いが起こり、大原南坊と同盟した別時衆によって、大念佛寺の宝物が奪い取られるなどの紛争が発生したのである。

この争いは幕府の裁定にもちこまれ、寛文元年（1661）に大念佛寺が勝訴するが、事件の再発を防止する意味もあって、このころから本末制度が整えられるようになった。寛文6年には大念佛寺

【融通念佛宗チャート】

円仁
天台声明
良忍
空也・一遍（踊り念仏）
大念佛寺
厳賢—明応—観西—尊永—良鎮
声明（仏教音楽）の大衆化
浄土系諸宗派の大衆教化と融合
鎌倉時代
六斎念仏
百万遍念仏
念仏狂言
盆踊り
浄土宗
時宗
石清水八幡宮などの不断念仏
法明
室町・戦国時代
法明寺—（下別時）
来迎寺—（十箇郷別時）
極楽寺—（錦部別時）
良明寺—（八尾別時）
大念寺—（石川別時）
高安寺—（高安別時）
六別時
江戸時代
大原南房
大念佛寺
融観
融通念佛宗

⬆『良忍上人所伝』 魚山流融通念佛宗声明譜。声明の節まわしを書きとめたもの。（大念佛寺蔵）

の本堂が完成し、延宝5年（1677）には畿内一帯から四国に散在する寺院を末寺として、その由緒とともにリストアップした『大念佛寺歴代記録』（末寺帳）を大坂奉行所にさしだしている。

◉融通念佛宗の独立

こうして本末制度を整え、徐々に宗派の形をとりつつあった融通念仏宗が、独立して公認されたのは、元禄元年（1688）のことだった。大念佛寺46世大通融観（1649〜1716）が幕府に一宗としての独立を申請し、この年に認められたのである。融観は『融通円門章』を著して教義を整え、『檀林清規』を定めて宗制を確立したのだった。

こうした歴史を持つ融通念佛宗では、開祖・良忍に続き、法明を中興の祖、融観を再興の祖とし、三祖として奉じている。また、開祖・良忍が感得したという本尊「十一尊天得如来」を寺から持ち出し、信徒の家を回る「御回在」という独特な儀式を行う伝統があるのも、その巡教の歴史を反映したものといえよう。

融通念佛宗本山寺院ガイド

総本山
大念佛寺

江戸の名残をとどめる名刹
山門・鐘楼に

大治2年（1127）に鳥羽上皇の勅願によって融通念仏の祖・良忍が開いたという。本尊は良忍が霊告によって感得したという十一尊天得如来。しかし、開祖・良忍以降の歴史は明らかではない。元亨元年（1321）に法明が再興したが、大坂夏の陣で堂宇が焼失。その後、江戸時代になって大通融観が復興した。その間は、特定の伽藍はなく、歴代の上人の念仏堂を「大念佛寺」と称する「引寺号」という制度をとった。大通の時代に宗派としての体裁が整い、幕府の援助を受けて広大な寺域を持つにいたったが、明治31年（1898）に火災にあい、現在の伽藍の大部分は昭和12年に再建されたもの。ただし、山門・鐘楼などは江戸時代の建築だ。

行事としては阿弥陀仏の来迎の様子を現すために面をつけて行進する「二十五菩薩練供養」や信徒たちが大きな数珠を繰りながら念仏する「百万遍大数珠繰り」が有名である。

●所在地＝大阪市平野区平野上町1−7−26
●交通＝JR関西本線平野駅より徒歩5分
●開創＝大治2年（1127）、良忍
●山号＝大源山
●拝観＝境内自由

⬆御回在。本尊を持ち出して信徒の家を回る独特の儀式。（写真＝大念佛寺）

◉浄土教を知るブックガイド◉

◉浄土教系の宗祖とその著作を研究したい方に

『良忍上人の研究』 融通念佛宗教学研究所編 百華苑
『法然全集』 全3巻 大橋俊雄編訳 春秋社
『法然』(日本の仏典3) 石上善應編 筑摩書房
『法然の衝撃―日本仏教のラディカル―』 阿満利麿 人文書院
『定本親鸞聖人全集』 全9巻 同刊行会編 法藏館
『親鸞全集』 全4巻・別巻1 石田瑞麿訳 春秋社
『教行信証』 金子大榮校訂 岩波文庫
『親鸞―その生涯とこころ―』 菊村紀彦 社会思想社教養文庫
『増補・最後の親鸞』 吉本隆明 春秋社
『親鸞の核心を探る』 佐藤正英他著 青土社
『歎異抄全講読』 安良岡康作 大蔵出版
『蓮如』 森龍吉 講談社現代新書
『一遍上人語録』 大橋俊雄校注 岩波文庫

◉浄土教系の思想や教団の歴史をより深く知りたい方に

『阿弥陀如来』 望月信成 学生社
『浄土仏教の思想』 全15巻(刊行中) 梶山雄一・長尾雅人他編 講談社
『浄土三部経』 全2冊 中村元・早島鏡正・紀野一義訳註 岩波文庫
『浄土教』(日本の仏教3) 太田傳太郎・中村元他編 新潮社
『浄土教全書』 全42巻 同刊行会編 山喜房佛書林
『浄土系思想論』 鈴木大拙 法藏館
『浄土教思想の研究』 藤吉慈海 平楽寺書店
『浄土教教理史』 石田充之 平楽寺書店
『龍樹と曇鸞―浄土論註研究序説―』 西山邦彦 法藏館
『龍樹論集』(大乗仏典・第14巻) 長尾雅人・梶山雄一監修 中央公論社
『世親論集』(大乗仏典・第15巻) 長尾雅人・梶山雄一監修 中央公論社
『源信―往生要集―』(原典・日本仏教の思想4) 石田瑞麿 岩波書店
『中世真宗思想の研究』 重松明久 吉川弘文館
『法然浄土教思想論攷』 藤本浄彦 平楽寺書店
『親鸞・真宗思想史研究』 重松明久 法藏館
『親鸞教学の基礎的研究』 全3巻 石田充之 永田文昌堂
『近世浄土宗の信仰と教化』 長谷川匡俊 北辰堂
『近代真宗史の研究』 日野賢隆編 永田文昌堂
『佛光寺の歴史と信仰』 千葉乗隆他監修 思文閣出版
『念仏の極意』 木村賢隆 白馬社
『現代の浄土教』 藤吉慈海 大東出版社
『定本時宗宗典』 同刊行会編 山喜房佛書林
『本願寺史料集成』 全20巻(刊行中) 宮崎圓遵・千葉乗隆他編 同朋舎出版

◉異流系念仏信仰、妙好人、真宗系民俗信仰を知りたい方に

『かくし念仏考』 第1・第2 高橋梵仙 日本学術振興会
『隠し念仏』 門屋光昭 東京堂出版
『殉教と民衆―隠れ念仏考―』 光村竜治 同朋舎出版
『カヤカベ―隠れ念仏―』 龍谷大学宗教調査班 法藏館
『薩摩のかくれ門徒』 星野元貞 著作社
『妙好人とかくれ念仏』 小栗純子 講談社現代新書
『妙好人論集』 柳宗悦 寿岳文章編 岩波文庫
『新撰・妙好人列伝』 藤秀璻 法藏館
『妙好人伝基礎研究』 朝枝善照 永田文昌堂
『遊行聖―庶民の仏教史話―』 大橋俊雄 大蔵出版
『真宗信仰と民俗信仰』 金児暁嗣 永田文昌堂
『ポストモダンの親鸞』 木村英昭・金児暁嗣・佐々木正典 同朋舎出版

◉浄土宗系や真宗系の近代の思想家について研究したい方に

『弁栄聖者(山崎弁栄)光明大系』 全11冊 光明会本部
『赤松連城〈資料〉』 全3巻 二葉憲香監修 西本願寺出版社
『清沢満之全集』 全8巻 暁烏敏・西村見暁編 法藏館
『暁烏敏全集』 全27巻・別巻1 涼風学舎
『曾我量深選集』 全12巻 同刊行会編 彌生書房
『金子大榮著作集』 全12巻・別巻4 寺田正勝他編 春秋社
『安田理深選集』 全15巻・別巻4 同編集委員会編 文栄堂書店

◉取材協力・写真提供

総本山知恩院
西本願寺
東本願寺
総本山清浄光寺
総本山大念佛寺
総本山誓願寺
総本山禅林寺
総本山東大寺
大本山光明寺
大本山金戒光明寺
大本山善導寺
大本山増上寺
大本山知恩寺
大本山永源寺
本山錦織寺
本山専修寺
阿彌陀寺
安楽寺
歓喜光寺
願慶寺
元興寺
願正寺
行徳寺
金蓮寺
空也堂極楽院
光触寺
光徳寺
三鈷寺
浄顕寺
聖衆来迎寺
浄真寺
青龍寺
清涼寺
當麻寺奥院
長善寺
中山身語正宗
平等院
法恩寺
法蔵寺
本法寺
万福寺
六波羅蜜寺
朝日新聞社
飛鳥園
大阪城天守閣
神奈川県立博物館
北野天満宮
京都国立博物館
講談社
甲南学園
高野山文化財保存会
金刀比羅宮
著作社
東京国立博物館
奈良国立博物館
日本民芸館
芳賀ライブラリー
藤田美術館
龍谷大学
門屋光昭
金子桂三
定方晟
萩原秀三郎
星野元貞
松本栄一
丸野勝
ほか(順不同)

Books Esoterica 第7号

浄土の本 極楽の彼岸へ誘う阿弥陀如来の秘力

一九九三年八月一五日 第一刷発行 二〇〇六年六月一五日 第一一刷発行

編集スタッフ——少年社(本田不二雄・佐々木勝・池本由紀恵)・福士斉・河野拓朗・吉田邦博
図版——河江文比呂
デザイン——堀立明・高山明美・高山靜美
企画協力——遊星塾・土田亨

編集長——増田秀光
発行人——大沢広彰
印刷所——大日本印刷株式会社
発行所——株式会社学習研究社
〒一四五—八五〇二 東京都大田区上池台四—四〇—五

◉この本についてのご質問・ご要望は、次のところへお願いします。
〈文書〉〒一四六—八五〇二 東京都大田区仲池上一—一七—一五 学研・お客様センター
〈電話〉[内容について]〇三(五四四七)二三一一編集部直通
esoterica@gakken.co.jp
[在庫・不良品について]〇三(五四九六)〇六三七出版営業部
[その他]〇三(三七二六)八一二四学研・お客様センター